

第1章 調査に至る経過

第1節 調査に至る経緯

大塩向山遺跡は越前市（旧 武生市）南部の大塩町に、山腰遺跡は同じく大塩町から今宿町にかけて位置する。大塩向山遺跡は大塩町集落の北側にある通称「向山」尾根東側を中心に展開する。また山腰遺跡は「向山」東側の水田、つまり東側山麓に接した沖積地に広がる。武生市南部の王子保地区はこれまで古代須恵器生産の中心として認識され、平野部の集落遺跡などについては発掘調査されることも少なく、それらが注目されることもほとんどなかった。さらに丘陵や山間部については古墳群など確認されていなく、古代以前については不明点が多い。また山城については伝承などが残されているほかは、縄張図などが作成されて検討がなされているものもない。つまり遺跡の存在は大まかに知られてはいるものの、具体的な内容は不明のものが多く、中世の山城の状況に代表されるように、個々の詳細も不明である。埋蔵文化財保護の立場からは、個々の開発に際して綿密な現地の踏査が必要となってくる。このようななかで分布調査と、その結果、開発対象面積全域において試掘調査の機会が与えられた今回の調査意義は大きい。

この越前市（旧 武生市）南部で計画されたのが、北陸農政局と県企業局が共同して日野川水系の水を利用した総合開発計画である。その事業概要とこれに関する一連の試掘調査は、16年度に刊行した『福井県埋蔵文化財調査報告 第87集 大塩向山遺跡・山腰遺跡 一 国営日野川農業用水利事業に伴う発掘調査一』で述べてきたのでここでは省略する。前回の報告はこの事業の中で、農林水産省北陸農政局の国営事業に伴った発掘調査に関するもので、今回の報告は同事業に関連して福井県企業局の日野川地区水道用水供給事業に伴った発掘調査に関するものである。発掘調査に至るまでの分布調査・試掘調査については先の報告書で国営事業分について述べたことは触れたが、ここでは国営事業分も含めた全体を概観しつつ、企業局分を中心にその概要を述べておく。

赤澤が担当する前の試掘調査の計画では、遺跡内容に山城を想定したものであって、調査区は尾根筋を中心に計画されていた。これは試掘前に（仮称）王子保山城跡と呼称していたことから言える。しかし対象となった尾根の反対側には、北陸有数の須恵器生産地である王子保窯群があり、7基の発掘調査が行われ、その他にも相当数の窯があることが想定されている。ただし、日野川に面した事業予定地では全く須恵器窯跡は確認されていないが、手ごろな斜面とその全面に平坦地がある部分（試掘調査の



第1図 2001（平成13）年大塩向山遺跡試掘調査状況写真（左）C地区（右）E地区



(左)(右)ともにG地区

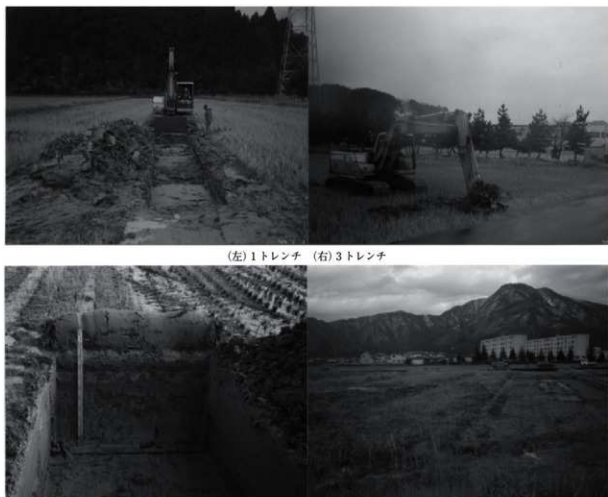


(左)M地区 (右)G地区



第2図 2001(平成13)年大塩向山遺跡試掘調査状況写真 (左)(右)ともにN地区

E地区・G地区・L地区・N地区など)もあることから、同様な状況になりつつある可能性はあったため、斜面と平坦地にも試掘坑を入れて遺漏のないような内容に変更した。調査対象範囲は小さな尾根と山麓部の平坦地のいくつかに分かれることから、試掘調査が必要なものと判断した地区から地形ごとに区切ってアルファベット順に番号を付け、A地区からO地区までの16地区に区分して掘削を行った(その後、工事計画の変更により山麓部に位置するO地区の上となる南側尾根筋も試掘調査を行い、調査の対象となったためP地区とした)。したがって試掘対象地ごとに順番を付け、そのまま本調査時点での呼



(左)1トレンチ (右)3トレンチ

第3図 2001(平成13)年山腰遺跡試掘調査状況写真 (左)7トレンチ (右)調査地

称とした。そして遺物整理で混同しないためそれをそのまま使用したため、順番となっていないことを断っておく。ちなみにP地区はその後の設計内容の変更で調査範囲が確定したため、試掘調査段階では対象となっていない。

試掘調査は2001(平成13)年4月から開始したが、地権者との交渉から5月で一度中断した。中断した試掘調査は11月から再開した。以下に試掘調査の対象とした地区の地形と面積の概要と、想定した遺跡の性格などについて一覧表を作成した。ここでの面積は対象とした地区の大きさを比較するために、実際にトレンチを入れた際に、概算しその後図上で簡易的に行った計測値で、あくまで目安である。

調査が進行すると、少なくとも工事の対象となった範囲には山城は存在せず、範囲外で確認された堀切も小規模で限定されたものであることから、山城では遺跡内容にふさわしくないと判断したため、先に報告した国営事業の報告書から大塚向山遺跡と変更した。以下、4月から開始して、夏場の休止期間を挟んで12月に終了した長期間の試掘調査について簡単な調査日誌を加える。

武生市大塚町（仮称）王子保山試掘調査日誌

- 2001年04月04日 器材の搬入と作業員へ注意事項の伝達を行い、試掘調査を開始する。A地区の雑木や流木を撤去し、トレンチを4本設定したが、遺構、遺物とも確認できなかった。順次、B・C・D地区と遺跡が存在する可能性のある地点を選んで試掘坑を設定し掘削する。
- 2001年04月06日 C地区の斜面上平坦面に、1・2・3トレンチから須恵器が出土し（第1図1）、想定外のため、試掘調査地の見直しを考える。
- 2001年04月10日 E・F地区の掘削を開始し、E地区では須恵器と縄文土器が出土した（第1図2）。
- 2001年04月13～18日 G地区の雑木や流木を撤去し、トレンチを設定した（第2図1）。ほとんどのトレンチで須恵器が出土し、5・7トレンチからは遺構を検出した。
- 2001年04月19日 J・H地区の雑木や流木を撤去し、トレンチを7本設定した。摩滅した遺物が少量出土したが、遺構は確認できなかった。J地区は尾根の上のC地区から、H地区は横のG地区からの流れ込みと判断した。
- 2001年04月24日 C地区のトレンチ内を清掃し、遺構検出状況の写真を撮る。
- 2001年04月26日 I地区の雑木や流木を撤去し、掘削を開始し、須恵器が出土し、遺構を検出した。
- 2001年04月27日 G地区では他の地区より多く遺物が出土し、須恵器窯跡が存在している可能性も高く、深堀を行うなど重点的に掘削を行う（写真③）。斜面の落ち葉を除去し、全体的に遺物の散布状況を確認する。
- 2001年05月18日 窯跡の明確な存在を確認できない。G地区の全景写真を撮影した（第2図2）。
- 2001年05月21日 G地区における深掘作業を行ったトレンチの一部埋め戻しを行う。
- 地権者の承諾を得られたAからH地区までの試掘調査をほぼ終え、前半での作業を中断する。
- 2001年11月08日 試掘調査を再開する。テント設置地の樹木を伐採し、テントを設定する。
- 2001年11月13日 K（第2図3）・L・M地区から開始する。K・M地区では遺構・遺物ともに確認されなかったが、L地区からは須恵器が出土し、遺構を検出した（第2図4）。
- 2001年11月19日 N地区の雑木や流木を撤去し、トレンチを設定し、順次掘削を行う。山麓のトレンチを中心に須恵器が多数出土し、一部では炭化物も多く確認できた（第2図5）。平坦面と尾根斜面からも少量ながら須恵器が確認できた。22日に立木にさえぎられながら、全体の写真を撮影する（第2図6）。
- 2001年11月29日 O地区の雑木や流木を撤去し、トレンチを設定した。須恵器の出土は数点にとどまるが、林道の断面に窯体らしきものの一部を確認したことから、水田部分に埋め込まれている可能性が高いと判断する。
- 2001年12月13日 山腰遺跡（水田部分）の試掘調査を開始する。先の試掘（国営日野川関連）で発掘調査が必要となった武生松下（現在の武生オリジナルプロダクション）に隣接する水田には遺跡が広がることは必死と考え、長大なトレンチを掘削するが（試掘坑No1）、遺構・遺物は全く確認されず、当初の計画に従いグリッドでの掘削に変更する（第3図1・2）。
- 2001年12月14日 13～32グリッドを掘削する。13～22・24～26・28～30・32グリッドからは、須恵器、遺構、包含層等が確認できた。
- 2001年12月17日 33～51グリッドを掘削する。33～39・42・46・49からは、須恵器、遺構、包含層等が確認された。
- 2001年12月19日 調査の対象となる部分の内容をさらに把握するため、52～67グリッドを掘削する。52～56（第3図3）・62・64・66グリッドからは、須恵器、遺構、包含層等が確認できた。掘削したグリッドの埋め戻しを確認して（第3図4）、器材の撤収を行い、すべての試掘調査を終了する。

第1表 大塩向山遺跡試掘調査時の各地区概要一覧表

事業	地区	対象地区の地形概要	対象地のおよその面積	想定内容	調査の有無
福井県企業局	A	北へ開く谷の西斜面	約1,200㎡	竪跡	無
	B	北へ伸びる尾根の先端	約800㎡	曲輪・祭祀	無
	C	北東へ伸びる尾根の先端と広い平坦地の尾根	約7,000㎡	曲輪・祭祀	有
国営北陸農政局	D	北東向きの緩斜面	約600㎡	竪跡	無
	E	北に伸びる舌状の平坦地と緩斜面	約800㎡	竪跡	有
	F	北東へ伸びる尾根の先端と広い平坦地の尾根	約2,500㎡	曲輪・祭祀	無
福井県企業局	G	東向きの緩斜面と沖積地に接した広い平坦地	約3,500㎡	竪跡・工房跡	有
	H	東へ開く谷の東斜面	約2,000㎡	竪跡	無
	I	南に伸びる尾根の先端とやや広い平坦地	約1,800㎡	曲輪・祭祀	有
	J	東向きの緩斜面	約1,500㎡	竪跡	無
	K	東へ開く谷の北斜面	約1,200㎡	竪跡	無
	L	東へ開く谷に面した小さな舌状の平坦面	約1,000㎡	竪跡	有
	M	東へ開く谷の山麓部	約1,500㎡	竪跡	無
	N	東へ開く谷に面した緩斜面と広い平坦面	約6,500㎡	竪跡・工房跡	有
	O	東へ開く谷入口の山麓部	約2,400㎡	竪跡	有

*P地区はその後の設計の変更で調査範囲が確定したため、試掘調査の対象とはなっていない。

以下、企業局事業対象部分について、2回にわかれて煩雑ではあるが、それぞれの試掘調査回答を所載しておく。

平成13年度日野川地区水道用水供給事業に伴う

埋蔵文化財試掘調査結果について その1（回答）

（中略）

- 試掘調査依頼面積 (仮称) 王子保山城跡の山林部分の約80,000㎡
今回の回答は上記の面積のうち約50,000㎡のみ、残る南側の約30,000㎡と山腰遺跡にかかる水田部分の約30,000㎡は未着手
- 本格調査必要面積 (仮称) 王子保山城跡の山林部分のうち試掘調査が終了した約50,000㎡について、合計約6,500㎡
(内訳はC地区約2,000㎡、G・H地区の約3,000㎡、I地区の約1,500㎡)
- 立会い調査必要遺跡数および面積 0㎡

《調査の概要》

試掘調査の対象になったのは昨年の分布調査で、中世の山城の存在が指摘された武生市王子保地区の大塩町字向山を中心とする標高100m前後の丘陵状の尾根である。今回の試掘調査に着手した時点で、対象区内の山麓部で須恵器片を採集した。試掘対象地はこの丘陵の東側の尾根と谷間であるが、西側には本県でも有数の須恵器（古代の焼き物）生産地である王子保窯跡群が確認されている。王子保窯跡群は数回にわたって武生市教育委員会に

よって発掘調査が実施されて、古代越前の中心である国府を中心に製品を供給したことが判明し、また寺院の屋根にのせた鴟尾などの貴重なものも生産していたことでも有名である。このため尾根の部分とともに、山麓部も試掘調査の対象とした。対象地が尾根などによって地形上いくつかに分かれることから、想定される遺跡の性格からもいくつかの調査区に分けて実施して、それぞれの地区の呼称も調査に着手した順番につけた。

調査の方法はそれぞれの調査区で想定される遺跡の性格から、トレンチを設定して掘削した。

〔各調査地区の状況〕

ここではこれまでに終了、または調査中の各調査区の状況を説明する。ちなみに図上に落としたトレンチの一部は、今回の中間報告にさいして大まかな位置として記入したものである。さらに正確なトレンチの配置図は今回の調査が終了後に、作成の予定である。

A地区 北へ開く谷間の緩斜面で、須恵器窯の可能性を想定して、トレンチを長短合わせて4本設定した。いずれのトレンチからも遺物は出土していない。掘削したトレンチの土層の観察からも遺跡の存在する可能性は低いものと考えられる。

B地区 北へのびる尾根の先端を中心とする部分である。分布調査で山城の曲輪などの可能性が指摘されていた。指摘された部分にトレンチを2本設定した。いずれのトレンチからも遺物は出土していない。掘削したトレンチの土層の観察からも遺跡の存在する可能性は低いものと考えられる。

C地区 北東にのびる尾根で、広い平坦地がいくつかある。山城の曲輪である可能性が最も高いとされた地区。平坦地を中心として合計11本のトレンチを設定した。最も広い平坦地を中心として須恵器が出土し、土坑や柱穴とおぼしき落ち込みが確認された。日野山、もしくは白山に関連する信仰の遺跡であろうか。本調査の必要な範囲は約2,000㎡と想定される。

D地区 北東を向いた緩斜面で、須恵器窯の可能性を想定して、トレンチを4本設定した。いずれのトレンチからも遺物は出土していない。掘削したトレンチの土層の観察からも遺跡の存在する可能性は低いものと考えられる。

E地区 北にのびる舌状の平坦地で、隣接するD地区と同様に須恵器窯の可能性が最も高いものとして、トレンチを7本設定した。平坦地のトレンチで柱穴などが確認され、細片ではあるが須恵器・土師器などが出土した。また縄文土器らしき細片もある。須恵器窯跡が想定される状況はなかった。

F地区 北東へのびる尾根の先端と平坦地で、山城の曲輪である可能性を想定して、4本のトレンチを設定した。いずれのトレンチからも遺物は出土していない。掘削したトレンチの土層の観察からも遺跡の存在する可能性は低いものと考えられる。

G地区 今回の調査対象地で最も広い平坦地と隣接する東向きの斜面である。最終的に27本のトレンチを設定した。山麓部で2ヶ所の須恵器が集中して出土し、直径1mの土坑や炭化物を充填したピットなど遺構・遺物ともに確認されている。出土遺物と地形から斜面には少なくとも2基の須恵器窯跡があるものと想定されるが、窯跡そのものは現在のところ未確認である。また平坦部は窯で焼くための須恵器の工房跡があるものと想定される。今回の試掘調査で遺構・遺物ともにもっとも多く確認された地区である。本調査の必要な範囲は約3,000㎡と想定される。

H地区 東向きに開口する谷と入り口付近の両側の斜面で、G地区の北に隣接する。微かながら少量の遺物が確認されている。現在のところ遺構・遺物の出土は確認されていないものの、隣接するG地区の遺跡が広がっている可能性もあり、一部が本調査の必要性がある（調査必要面積はG地区に含めて計算）。

I地区 南方にのびる尾根のやや広い平坦部を中心とする部分で、G地区の西側に隣接する。少量ではあるが、

須恵器が出土し、柱穴などの遺構も確認されている。先に尾根の平坦地で遺構・遺物ともに確認されたC地区からわずかに下った尾根続きで、同様の信仰に関連する遺跡であろう。約1,500㎡が本調査の必要がある。

J地区 H地区の北側のやや小さな緩斜面である。6本のトレンチを設定した。土器が2片出土したものの摩滅が著しいことから、斜面の直上にあるC地区からの転落したものと考えられる。掘削したトレンチの土層の観察からも遺跡の存在する可能性は低いものと考えられる。

《現在のところ事業の実施にさいして本格調査が必要な範囲》

本格調査が必要な面積は、合計約6,500㎡である。その内訳はC地区の約2,000㎡、G地区とH地区の一部の約3,000㎡、I地区の約1,500㎡である。

また当初から予定されている水田部分とG地区より南側の谷と斜面については、まったく試掘調査を実施していない。(以上、試掘回答から抜粋。一部改変ならびに省略。)

その後、5月で一度中断した試掘調査は11月に入って再開した。大塩向山遺跡では南側の谷筋と対象地の南端の尾根が残されていた。また山腰遺跡はすべてについてである。以下、企業局事業対象部分最後の試掘調査回答を掲載しておく。

平成13年度日野川地区水道用水供給事業に伴う 埋蔵文化財試掘調査結果について その2 (回答)

(中略)

1. 試掘調査依頼面積 (仮称) 王子保山城跡の山林部分の約80,000㎡のうち先に(その1)で回答した約50,000㎡を除いた、残る南側の約30,000㎡について
2. 本格調査必要面積 (仮称) 王子保山城跡の山林部分のうち、先の回答で除外して今回の対象とした約30,000㎡について合計約6,100㎡
(内訳はL地区約600㎡、N地区の約3,000㎡、O地区の約2,500㎡)
山腰遺跡にかかる約30,000㎡のうち、調査対象範囲の中央部分約2,800㎡

《調査の概要》

今回の試掘調査の対象になったのは、今年度4月から6月まで実施した山林の南側で、当初段階で地権者の承諾を得ることができないで中断していた山林部分と、水田部分の山腰遺跡である。先の調査結果から対象となった山林では古代の須恵器窯跡の存在が想定されたので、同様に山麓部と周辺の平坦部を中心に試掘調査を実施した。調査地区の呼称は掘削を開始した順番にアルファベット順とした。11月8日から器材の搬入を再開して、12月下旬に水田部分の山腰遺跡を重機による調査を行い、山林部分とともに20日に器材の撤収を行い終了した。

《王子保山城跡各調査区の状況》

《各調査地区の状況》

D～F地区(国営事業部分)とG～J地区(企業局事業部分)の7地区は、その1で回答した範囲であるためここでは除外する。

K地区 谷間の北向きの緩斜面で、地形から須恵器窯の可能性を想定して、トレンチを長短合わせて4本設定した。いずれのトレンチからも遺物は出土していない。掘削したトレンチの土層の観察からも遺跡の存在する可能性は低いものと考えられる。

L地区 南に伸びる尾根の先端を中心とする平坦な部分にトレンチを2本設定した。平坦部に設定したトレンチから遺物(須恵器)が出土し、直径30cm程度の柱穴らしき落ち込みが2箇所確認されている。小規模ながらも遺跡があるものと考えられる。本調査の必要な範囲は約600㎡と想定される。

M地区 南に伸びる尾根の西向きの緩斜面で、春に実施した試掘調査では遺跡と想定されたI地区はこの尾根の頂部となる。この緩斜面に1本のトレンチを設定した。遺物は出土せず、掘削したトレンチの土層の観察からも遺跡の存在する可能性は低いものと想定される。

N地区 今回の調査対象地で最も広い平坦面と隣接する東向きの緩斜面である。59本のトレンチを掘削した。山麓部と尾根境の緩斜面を中心に須恵器が集中して出土した。平坦面でも直径30～50cm前後のビツなどともに確認されている。先に回答したG地区と同じような地形であり、遺物の出土状況や地形から斜面には少なくとも1基前後の須恵器窯跡があるものと想定されるが、窯跡そのものは未確認である。また平坦部は窯で焼くための須恵器の工房跡があるものと想定される。今回の試掘調査で遺構・遺物とともにもっとも多く確認された地区である。本調査の必要な範囲は約3,000㎡と想定される。

O地区 東向きに開口する谷の入口付近の斜面である。僅かながら少量の遺物が確認されている。また谷の奥に伸びる山道で切られた斜面断面に須恵器窯跡の断面(?)が検出された。窯の本体でも上の部分と想定され、遺物の残されている可能性のある灰原は北に隣接する水田部分に埋め込まれているか、すでに消失したものと考えられる。本調査の必要な範囲は山林部分の約1,100㎡と、窯の灰原が過去の水田造成に伴い埋め込まれていると推定される水田部分の約1,400㎡との、合計した約2,500㎡と推定される。

《山腰遺跡の状況》

山腰遺跡は昨年度に、国営日野川用水農業水利事業のパイプライン敷設に伴い、今回の対象地北側にあたる武生松下電器(現 T・P・O)の敷地に隣接する道路部分を試掘調査して、遺構・遺物とともに検出されている。調査対象地はこれに隣接するため、当然遺跡は今回の対象地にも広がっているものと想定された。そのため今回の試掘調査対象となる範囲の松下電器に隣接する北側から開始した。調査は重機掘削を主に、一部人力掘削を行った。ところがこのトレンチ(試掘坑No1)では耕作土からは遺物は出土せず、遺物包含層も遺構も検出されなかった。そこで改めて当初に計画したグリッド調査(橋掘り)に変更した。対象地の北側の試掘坑No2の盛土から須恵器が1・2片出土したものの、隣接する試掘坑No3ではまったく出土せず、同じく試掘坑No4でも盛土から須恵器が1点出土したに過ぎない。明確な遺物包含層も遺構も検出されなかった。おそらく先に述べた昨年度に国営の事業予定地で確認された範囲が遺跡の縁辺部に当たるものと考えられる。その後、試掘坑を逐次南側に設定して掘削した。その結果、試掘坑No52・53を北端とし、試掘坑No33～37を南端とする範囲で包含層、または遺構とともに大量の須恵器が出土した。最終的に67ヶ所のグリッド(1ヶ所はトレンチ)の試掘坑、合計654㎡を調査した。

(以上、試掘回答から抜粋。一部改変ならびに省略。)

以上のように大塩向山遺跡はA地区からO地区までの合計15地区に分けて試掘調査を行い、そのなかのC・E・G・I・L・N・Oの7地区についての本調査が必要となり、A・B・D・F・H・J・K・Mの8地区では調査の対象となる遺跡とはならなかった。ちなみに本調査となったP地区については、この試掘調査時には事業対象地として含まれておらず、本調査に着手してから範囲も確定したため、P地区については触れていない。

水田部分の山腰遺跡では地権者の承諾がそろう、大塩向山遺跡の作業が終わりとなった12月に重機と人力を合わせて実施した。その結果、試掘調査対象地の多くで、遺構・遺物が確認されたが、発掘調査に必要な範囲は施設が盛土中で納まる「天日乾燥床」施設部分を除き、その北側で地山を大きく掘り下げる「沈殿槽」の施工される予定が対象となることが想定されていた。そのため遺跡範囲の大略がわか

った段階で、さらにその範囲を絞り込むため、それまでに実施した試掘坑の間を埋めるように追加した(試掘坑No52から56)。発掘調査が必要な範囲は今回の事業対象地のほぼ真ん中の約21,300㎡で、さらにその中ほどの約13,700㎡が遺構の密度が高く、遺物の出土も多い中核部分と想定された。しかし今回の事業に際しては、遺跡の北側縁辺部を中心とする約3,000㎡ほどに絞り込むことができた。

ちなみに国営事業地と今回報告する企業局事業地とは同じ山腰遺跡として報告したが、両者はまったく同一の遺跡であるとは考えられないことも、今回の試掘調査の結果、さらに本調査の結果として想定される。この問題については、両者で確認された須恵器などの時期と、検出された遺構の分布状況などを検討した最後のまとめで検討するとして、ここでは両者とも同じ山腰遺跡として扱っておきたい。

以上、煩雑になったので大塚向山遺跡と山腰遺跡の試掘調査の概要を次に一覧表とした。試掘調査に当たっては、地権者の承諾が得られた地区の遺跡の存在する可能性の高い地点から着手したため、順番が前後まちまちになっている。また本調査もこの呼称を踏襲したために統一がとれていないことを、ここで断っておきたい。

第2表 大塚向山遺跡各地区試掘調査のトレンチ概要一覧表(第1図参照)

地区	対象地の立地など	試掘トレンチの大きさや数量	試掘内容の概要	試掘面積
A	山麓部の緩斜面	18m×1m、8m×1m、5m×1mのトレンチを合計3本。	深いところで80cm、浅いところで20cm、平均50cm前後の深さまで掘削した。遺構・遺物ともになし。本調査なし。	31㎡
B	北東に伸びる尾根先端	10m×0.5mを1本と5m×0.5mを2本の合計3本。	掘削深度は10から20cm程度まで掘削。遺構・遺物ともになし。本調査なし。	10㎡
C	東の平野側に突き出た尾根	長さ4mから17mの長短で幅1mのトレンチを合計11本。	掘削深度は10から20cm程度まで掘削。土埃らしき落ち込みと須恵器片が出土。約2,000㎡が本調査対象。	175㎡
D	北東に伸びる尾根東側先端の平坦部。E地区に隣接	長さ10mで幅1mのトレンチを2本、長さ5mで幅0.5mのトレンチを2本の合計4本。	E地区とした範囲で、小さいがピットなどの遺構とともに、細片ではあるが須恵器・土師器などが出土したが、D地区とした範囲にはそれらが及んでいなかった。	25㎡
E	北東に伸びる尾根北川先端部。D地区に隣接	掘削早々に須恵器とともに縄文土器や騎士器が出土。長短あわせて7本のトレンチ。		38㎡
F	南東に伸びる尾根	9mから3mのトレンチ4本	遺構・遺物ともになし。本調査なし。	26㎡
G	沖積地に面した平坦面とその背後の斜面	長さ10mから18mで幅1mのトレンチを12本、長さ5mから8mで幅0.5mのトレンチを10本の合計22本。	斜面では土器が全く出土しないので、平坦面のみで須恵器が大量に出土。H地区の一部を含めて、約3,000㎡が本調査の対象。	180㎡
H	G地区に隣接する小さな谷	10m×0.5mを3本と、5m×1mを4本の合計7本。	僅かながら須恵器が出土。G地区からの流れ込みか？一部をG地区を含めて、本調査の対象。	35㎡
I	G地区背後の尾根	長さ35mと10m、幅1mのトレンチを合計4本。	ピットと少量の須恵器が出土。約1,500㎡が本調査の対象。	65㎡
J	C地区直下の急斜面の谷。	長さ7m、幅1mのトレンチを6本。	摩滅した須恵器片が2・3片出土。C地区から転落したと思われる。本調査なし。	42㎡

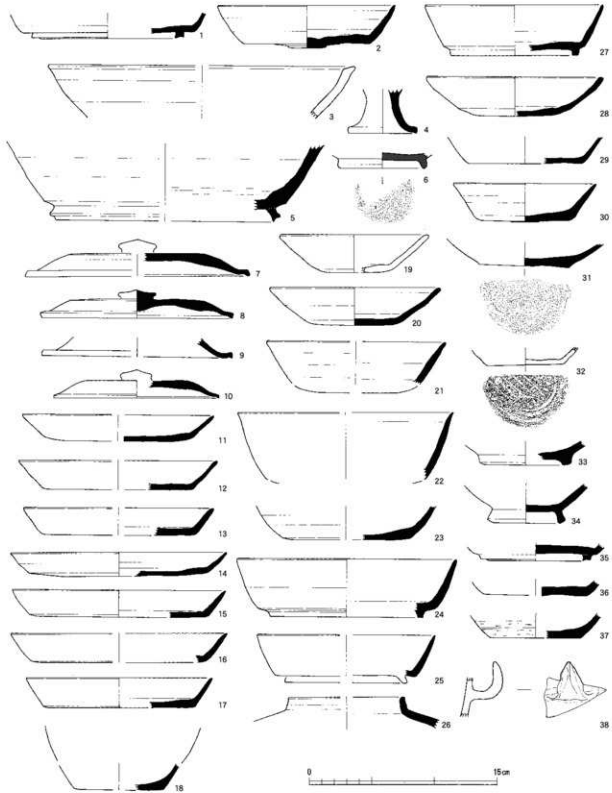
地区	対象地の立地など	試掘トレンチの大きさと数量	試掘内容の概要	試掘面積
K	N地区の尾根と谷を挟んだ南側の緩斜面。	長さ4mから15mで幅1mのトレンチを5本。	遺構・遺物ともになし。本調査なし。	38㎡
L	I地区に並ぶ谷奥尾根山麓部の平坦面。	長さ7mから12mで幅1mのトレンチを3本。	ピットと少量の須恵器・土師器が出土。約600㎡が本調査の対象。	23㎡
M	N地区とは谷を挟んだ反対側の1地区の山麓部。	長さ5mから15m、幅1mから3mのトレンチを4本。	遺構・遺物ともになし。本調査なし。	85㎡
N	IとO地区に挟まれた谷奥山麓部の尾根緩斜面と平坦部。	長さ2mから13m、幅0.5mから6mの大きささまざまなトレンチを59本。	緩斜面では遺構・遺物は出土せず、平坦面でピットなどとともに須恵器がやや大量に出土。約3,000㎡が本調査の対象。	680㎡
O	G地区と谷を挟んだ反対側の山麓部緩斜面。	長さ4mから30m、幅1m前後のトレンチを17本。	平坦面で僅かながらの須恵器が出土。既に切られた尾根の断面に窯体と思しきものが一部残存。斜面部分約1,100㎡と水田部分の約1,400㎡を合わせた約2,500㎡が本調査の対象。	205㎡
P	O地区の上の尾根平坦面。	その後の設計で変更となり、本調査中に確認。	ピットと少量の須恵器が出土。	追加で試掘
大塚向山遺跡分小計	企業庁範囲で尾根部分4箇所、斜面・谷部分6箇所、平坦部3箇所。	大小140箇所・本前後のトレンチ・グリットを掘削。	尾根部分の3箇所、斜面・谷部分の1箇所、平坦部は3箇所のすべての、全体で7箇所が本調査の対象。	約1,600㎡ (P地区と国営事業分は含まない)
山腰遺跡	大塚向山遺跡G地区の東側に隣接する沖積地水田部分。	85m×2mのトレンチ1本と、4m×2m・2m×2mのグリット66個の合計67箇所を掘削。	調査対象の北側と南側では遺構・遺物ともに検出されない。協議の結果、北側の約2,800㎡が本調査の対象。	654㎡
大塚向山遺跡と山腰遺跡の合計		全体で200箇所以上のトレンチ・グリット		約2,254㎡

このような、長期間にわたる試掘調査の結果、本調査は平成14年度当初から実施することとなった。ここでは試掘調査で出土した遺物について、細片でも全体の傾向を捕まえるために図化したので、これらをもとに、ここの内容とあわせて説明していく。また細片が多いため、径や器種の判断において異なる見解のものもあることを断っておく。なお遺物の出土していない地区・トレンチについては一括して記載した。

大塚向山遺跡

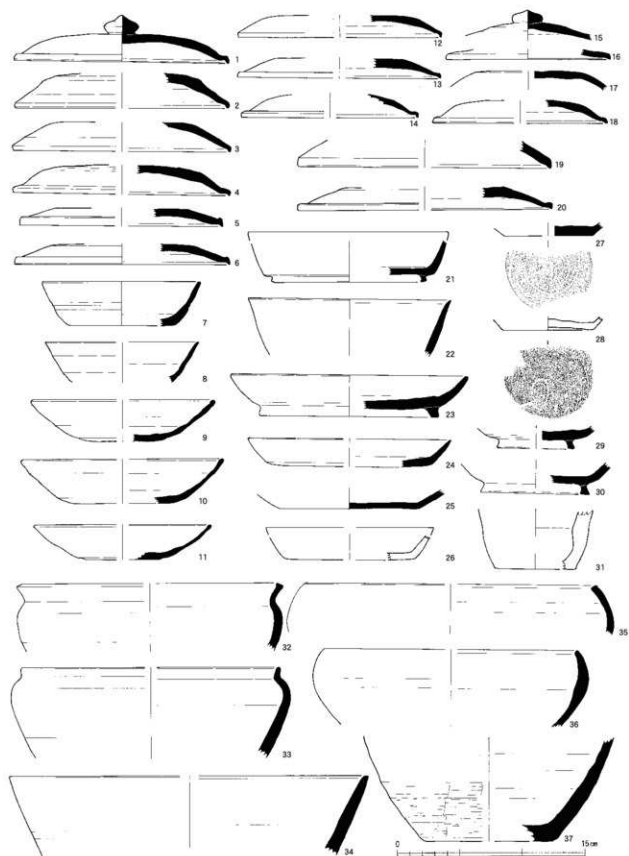
C地区 対象地が尾根の上であることもあって、遺物量は少なかった。須恵器が細片で出土し、焼土坑らしき遺構も確認された。高台杯1点(第5図5)を図化した。

E地区 対象地はすでに報告した北陸農政局事業地であるが、他の地区との比較もあって説明する。

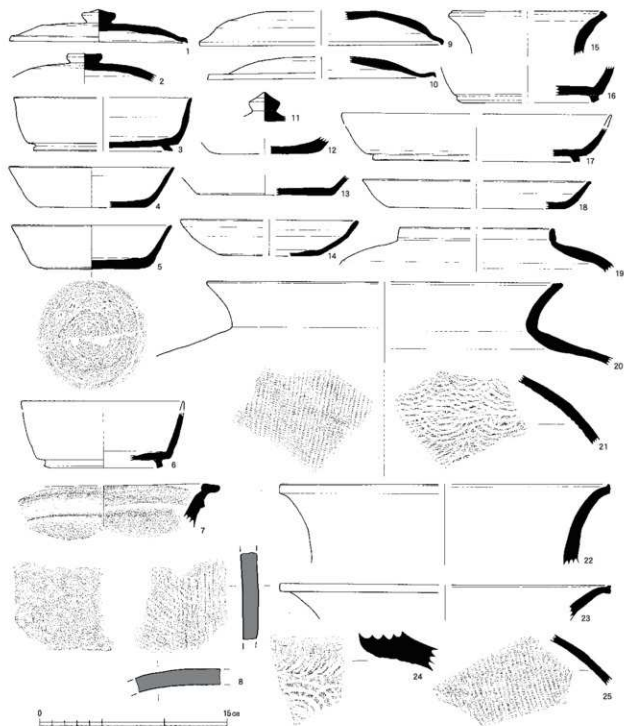


第5図 大塚向山道跡（C・E・G・I地区）試掘調査による出土遺物実測図（縮尺1/3）

出土した遺物は細片の須恵器が僅かと、土師器である。また縄文土器と思しき破片もあった。ここでは試掘調査時に出土した無台杯2点（第5図2・4）、高台杯1点（第5図1）、土師器高台（第5図3）の4点を図化した。



第6図 大塩向山遺跡（N地区）試掘調査による出土遺物実測図（縮尺1/3）



第7図 山麓遺跡試掘調査による出土遺物実測図(縮尺1/3)

G地区 対象地の平坦地から斜面へ変換する山麓部を中心に大量の須恵器が出土した。地表面の腐葉土を除去中に出土するものも多数あった。そのほとんどが須恵器で、杯蓋が4点(第5図10~13)、無台坏、もしくは皿が13点(第5図8・14~20・23~26・35)、高台坏が3点(第5図27・28・34)、堦高台部が2点(第5図32・33)と供膳具がほとんどである。その他には短頸壺(第5図29)や壺底部(第5図21)に加え、大型の鉢もしくは盤の底部(第5図9)、器種不明の脚台(第5図7)、底部糸切りの鉢?(第5図30)などもある。土師器は少なく、無台坏の2点(第5図22・31)と甗の把手片(第5図

37) などである。大型の鉢の口縁らしき破片（第5図6）は生焼けの須恵器の可能性もある

さらに北側に隣接する谷筋はH地区とし、試掘調査で対応したが、第4トレンチから無台坏1点（第5図38）が出土している。G地区の平坦地からの転落したものであろう。

I地区 対象地が尾根の上であることもあって、少なかったが、須恵器の細片が若干出土した。この段階で図化できた遺物はない。

L地区 対象地の平坦面を中心に須恵器の細片が若干と、中世のカワラケが数片出土した。この段階で図化できた遺物はない。

N地区 対象地の平坦地から斜面へ変換する山麓部を中心に大量の須恵器が出土した。須恵器窯跡が存在する可能性が最も高いと考え、多数のトレンチを設定した地区で、この段階で出土した土器も多く、図化できたものも須恵器33点、土師器3点の合計37点ある。杯蓋15点（第6図1～6・12～20）、高台坏3点（第6図24～26）、無台坏もしくは皿6点（第7図7～11・24）、坩高台部2点（第6図29・30）が多いが、試掘段階から注目されたのは鉢、特に内傾した口縁の鉄鉢タイプが確認されたことである（第6図35・36）。底部を丁寧にケズルものは、径から小型の鉢のものであろう（第6図27）。土師器は坏が2点（第6図26・28）と器壁が厚い器種不明のもの1点（第6図31）の3点である。

O地区 対象地の斜面でごく少量の須恵器の細片が出土した。この段階で図化できた遺物はない。

山腰遺跡

山腰遺跡は表土（水田耕作土）直下で地山となり、明らかに包含層と特定できるものはなく、すぐに遺構のプランが確認された。幾つかの遺構は予算の積算上の必要から掘削したが、遺物の出土は少なかった。よって本調査で得られた土器と比較すると少ないものの、25点が図化できた。瓦の1点（第7図8）を除いて、すべて須恵器であるのが特徴である。杯蓋が5点（第7図12・9～11）、高台坏が4点（第7図3・6・16・17）、無台坏もしくは皿が6点（第7図4・5・12～14・18）に加えて、壺が2点（第7図7・15）と甕の口縁4点（第7図7・20・22・23）、胴部片3点（第7図21・24・25）と大型のものが目立つ。

以上、大塚向山遺跡・山腰遺跡と試掘調査で得られた遺物について概観したが、個々の遺物については、まとめて作成した観察表にまとめた。（赤澤）

第3表 山腰遺跡試掘坑一覽表（第1図参照）

試掘坑No	試掘坑の大きさ	面積	出土遺物	遺構・包含層	調査の有無	遺跡の内容	遺物	
							須恵器	土師器
1	85m×2m	170㎡	無し	無し	調査対象外	まとめ参照	無台坏3・蓋1その他2	不明1
2	4m×2m	8㎡	有り	無し			埴1	無し
3	4m×2m	8㎡	無し	無し				
4	4m×2m	8㎡	有り	無し			栗刷部1	無し
5	4m×2m	8㎡	無し	無し				
6	4m×2m	8㎡	無し	無し		遺跡縁辺部		
7	4m×2m	8㎡	無し	無し				
8	4m×2m	8㎡	無し	無し		遺跡中核部		
9	4m×2m	8㎡	無し	無し				
10	4m×2m	8㎡	有り	無し			壺? 胴部2・無台坏1	無し
11	4m×2m	8㎡	無し	無し		遺跡縁辺部		
12	4m×2m	8㎡	無し	無し				
13	4m×2m	8㎡	有り	無し		遺跡中核部	不明1	無し
14	4m×2m	8㎡	無し	包含層?				
15	4m×2m	8㎡	有り	無し			栗刷部2・無台坏2	無し
16	4m×2m	8㎡	有り	無し			高台坏1	無し
17	4m×2m	8㎡	有り	包含層・遺構			栗刷部1	無し
18	4m×2m	8㎡	無し	無し				

第1節 調査に至る経緯

試掘坑No	試掘坑の大きさ	面積	出土 遺物	遺構・ 包含層	調査の 有 無	遺跡の内容	遺 物		
							須 恵 器	土師器	
19	4 m×2 m	8㎡	有り	無し	発掘調査対象範囲外 (敷地内盛土の下に残る)	遺跡中核部	高台坪2・無台坪4・甕2・壺口縁2 ・その他8片	無	
20	4 m×2 m	8㎡	有り	無し			甕胴部4・高台坪4・無台坪2・蓋4 ・その他4	無	
21	4 m×2 m	8㎡	無し	包含層?			壺口縁1・胴部1・無台坪底部1	無	
22	4 m×2 m	8㎡	有り	包含層			甕胴部2・高台坪3・無台坪2・壺口 縁1・その他3	無	
23	4 m×2 m	8㎡	有り	包含層					
24	4 m×2 m	8㎡	無し	包含層?					
25	4 m×2 m	8㎡	有り	包含層			坪2・甕胴部2	無	
26	4 m×2 m	8㎡	無し	包含層?					
27	4 m×2 m	8㎡	無し	無し					
28	4 m×2 m	8㎡	有り	包含層?			高台坪2・無台坪1・壺口縁1・不明 大型器種1	無	
29	4 m×2 m	8㎡	有り	包含層?			甕高台1・無台坪底部1	無	
30	4 m×2 m	8㎡	有り	包含層			甕胴部2(1点は焼損じか)・杯蓋1 ・その他1	無	
31	4 m×2 m	8㎡	無し	無し					
32	4 m×2 m	8㎡	有り	遺構(柱穴)			甕胴部1・杯蓋1・その他小片6	甕胴部3	
33	4 m×2 m	8㎡	有り	包含層			坏類破片4	無	
34	4 m×2 m	8㎡	有り	炭 層 (包含層)			壺口縁1・胴部4・甕胴部1・その他 1	無	
35	4 m×2 m	8㎡	有り	遺構(柱穴)			杯蓋?1	無	
36	4 m×2 m	8㎡	無し	遺構(木枕)					
37	4 m×2 m	8㎡	有り	包含層			壺口縁2・胴部8・無台坪3	無	
38	4 m×2 m	8㎡	無し	包含層?					
39	4 m×2 m	8㎡	無し	包含層?					
40	4 m×2 m	8㎡	無し	無し					
41	4 m×2 m	8㎡	無し	無し					
42	4 m×2 m	8㎡	無し	無し					
43	4 m×2 m	8㎡	無し	無し					
44	4 m×2 m	8㎡	無し	無し					
45	4 m×2 m	8㎡	無し	無し					
46	4 m×2 m	8㎡	無し	遺構(柱穴)					
47	4 m×2 m	8㎡	無し	無し					
48	4 m×2 m	8㎡	有り	無し			無台坪5・その他2	不明1	
49	4 m×2 m	8㎡	有り	無し			高台坪底部1	無	
50	4 m×2 m	8㎡	無し	無し					
51	4 m×2 m	8㎡	無し	無し					
52	2 m×2 m	4㎡	有り	無し			遺跡中核部	甕胴部1	不明1
53	2 m×2 m	4㎡	有り	無し				坏類破片8	無
54	2 m×2 m	4㎡	有り	無し				高台坪1・無台坪2・蓋2・不明2	無
55	2 m×2 m	4㎡	有り	包含層				甕胴部3	無
56	2 m×2 m	4㎡	有り	遺構・包含層	瓦1・高台坪2・無台坪3・蓋2	不明1			
57	4 m×2 m	8㎡	無し	無し					
58	4 m×2 m	8㎡	無し	無し					
59	4 m×2 m	8㎡	無し	無し					
60	4 m×2 m	8㎡	無し	無し					
61	4 m×2 m	8㎡	無し	無し					
62	2 m×2 m	4㎡	有り	無し	調査対象外	甕胴部1	無		
63	2 m×2 m	4㎡	無し	無し		無台坪?1	無		
64	2 m×2 m	4㎡	有り	無し		高台坪1	無		
65	2 m×2 m	4㎡	無し	無し					
66	2 m×2 m	4㎡	有り	無し					
67	2 m×2 m	4㎡	無し	無し					
試掘合計面積		654㎡							

第1章 調査に至る経過

第4表 大塚山遺跡・山腰遺跡試掘調査土器出土遺物観察表

図録番号	写真図番	種類	器種	部位	残存率	調査・目録・文様など	口径	底径	器高	色調	胎土	備考	
5	27	36	⑦	煎茶器	高台坏	1.4	外⑤ 内⑤	⑬3.9	⑬0.0	4.5	外)灰色 内)オリーブ灰色	① G地区	
5	2	26	⑦	煎茶器	無台坏	1.6	外⑤ 内⑤	⑬3.9	⑬0.0	3.0	灰色	① N地区	
5	1	36	⑦	煎茶器	高台坏	底部	外)不明 内⑤	-	⑬0.5	⑬2.1	灰色	③ N地区	
5	6	36	⑦	煎茶器	高台坏	底部	外⑤ 内⑤	-	⑬6.4	⑬1.3	灰白色	① N地区	
5	30	35	⑦	煎茶器	無台坏	1.2	外⑤ 内⑤	⑬1.2	⑬7.0	3.1	灰白色	③ N地区	
5	21	35	⑦	煎茶器	無台坏	口縁部	1.8	外⑤ 内⑤	⑬4.0	-	⑬3.3	灰黄色	① G地区
5	16	35	⑦	煎茶器	皿	1.8	外⑤ 内⑤	⑬7.0	-	⑬2.3	灰黄色	① G地区	
5	7	35	⑦	煎茶器	蓋	つまみ欠失	1.8	外⑤⑥ 内⑤⑥	⑬7.6	-	⑬1.8	黄灰色	① G地区
5	26	35	⑦	煎茶器	短脚壶	口縁部 底部	1.6	外⑤ 内⑤	⑬9.0	-	⑬2.5	黄灰色	① G地区
5	8	35	⑦	煎茶器	蓋	1.4	外⑤⑥ 内⑤⑥	⑬5.0	-	2.2	灰色	① G地区 赤み大	
5	17	35	⑦	煎茶器	皿	1/2	外⑤ 内⑤	⑬4.6	⑬2.0	2.4	灰色	① G地区	
5	36	35	⑦	煎茶器	無台坏	底部	外⑤ 内⑤	-	⑬8.8	⑬1.3	灰色	① G地区	
5	19	35	⑦	土師器	無台坏	1.8	外⑤不明 内)不明	⑬1.6	⑬6.0	3.0	黄褐色	① G地区	
5	32	35	⑦	土師器	無台坏	底部	外⑤⑥スノコ状底縁 内)不明	-	⑬6.0	⑬1.3	に、い、橙	① G地区	
5	24	35	⑦	煎茶器	高台坏	1.6	外⑤ 内⑤	⑬2.0	-	4.3	灰色	① G地区	
5	33	35	⑦	煎茶器	碗	底部	外⑤ 内⑤	-	⑬7.2	⑬1.9	灰黄色	① G地区	
5	14	35	⑦	煎茶器	皿	1.6	外⑤(工具痕 内⑤	⑬7.0	⑬4.0	1.9	灰白色	① G地区	
5	31	35	⑦	煎茶器	無台坏	底部	外⑤⑥ 内⑤	-	⑬7.0	⑬1.9	黄灰色	② G地区	
5	37	35	⑦	煎茶器	鉢	底部	外⑤ 内⑤	-	⑬7.0	⑬2.7	灰色	③ G地区	
5	34	35	⑦	煎茶器	碗	底縁	外⑤ 内⑤	-	5.2	⑬3.2	灰色	② G地区	
5	28	35	⑦	土師器	把手	-	-	-	-	-	灰白色	① G地区	
5	15	35	⑦	煎茶器	皿	1.8	外⑤ 内⑤	⑬6.8	⑬4.0	2.2	外)灰オリーブ色 内)灰色	② G地区	
5	10	35	⑦	煎茶器	蓋	1.8	外⑤⑥ 内⑤⑥	⑬3.0	-	⑬1.4	外)灰色 内)オリーブ灰色	① G地区	
5	25	35	⑦	煎茶器	高台坏	1.6	外⑤ 内⑤	⑬4.0	-	⑬3.3	灰色	① G地区	
5	28	35	⑦	煎茶器	無台坏	1.6	外⑤(スノコ状底縁 内⑤	⑬3.8	⑬7.0	3.1	灰白色	③ G地区	
5	13	35	⑦	煎茶器	皿	1.8	外⑤ 内⑤	⑬5.0	⑬2.2	2.1	灰白色	① G地区	
5	9	35	⑦	煎茶器	蓋	口縁部	1.8	外⑤ 内⑤	⑬5.0	-	⑬1.5	灰色	③ 赤み大
5	20	36	⑦	煎茶器	無台坏	1.3	外⑤⑥(スノコ状底縁 内⑤⑥	⑬2.2	6.0	⑬0.0	オリーブ灰色	① G地区	
5	22	35	⑦	煎茶器	高台坏?	口縁部	1.4	外⑤ 内⑤	⑬7.0	-	⑬5.3	灰黄色	③ G地区
5	18	35	⑦	煎茶器	壺?	底部	外⑤ 内⑤	-	⑬7.0	⑬2.1	外)灰色 内)灰黄色	① G地区	
5	3	35	⑦	土師器	浅鉢	口縁部	1/2	外)不明 内⑤	⑬4.0	-	⑬4.1	橙色	② G地区
5	23	35	⑦	煎茶器	無台坏	底部	外⑤ 内⑤	-	⑬0.0	⑬2.7	灰黄色	① G地区	
5	12	35	⑦	煎茶器	皿	?	外⑤ 内⑤	⑬5.6	⑬2.0	2.3	灰色	① G地区	
5	11	35	⑦	煎茶器	皿	1.8	外⑤(スノコ状底縁 内⑤	⑬5.1	⑬1.0	2.1	灰黄色	① G地区	
5	5	35	⑦	煎茶器	鉢	底部	外⑤ 内⑤	-	⑬7.0	⑬6.1	灰色	① G地区	
5	35	35	⑦	煎茶器	高台坏	底部	外⑤ 内⑤	-	⑬8.6	⑬1.4	灰色	③ G地区	
5	4	35	⑦	煎茶器	高坏	脚部	外⑤ 内⑤	-	⑬5.4	⑬3.5	灰色	① G地区	
5	29	36	⑦	煎茶器	無台坏	底部	外⑤ 内⑤	-	⑬9.0	⑬2.1	灰白色	③ 耳地区	
6	7	35	⑦	煎茶器	無台坏	1.3	外⑤ 内⑤	⑬2.4	⑬8.6	3.5	浅褐色	① N地区	
6	17	35	⑦	煎茶器	蓋	天部部	外⑤⑥ 内⑤⑥	-	⑬9.0	⑬1.5	灰白色	① N地区	
6	25	35	⑦	煎茶器	皿	底部	外⑤ 内⑤	-	⑬1.0	⑬1.6	灰色	① N地区	
6	14	35	⑦	煎茶器	蓋	口縁部	1.6	外⑤⑥ 内⑤⑥	⑬4.0	-	⑬1.8	灰黄色	① N地区
6	4	35	⑦	煎茶器	蓋	つまみ欠失	1.8	外⑤⑥ 内⑤⑥	⑬7.0	-	⑬3.3	灰色	① N地区
6	5	35	⑦	煎茶器	蓋	口縁部	1.8	外⑤⑥ 内⑤⑥	⑬6.0	-	⑬1.4	灰黄色	① N地区
6	3	35	⑦	煎茶器	蓋	口縁部	1.8	外⑤⑥ 内⑤⑥	⑬7.0	-	⑬2.6	灰オリーブ色	① N地区
6	18	35	⑦	煎茶器	蓋	口縁部	?	外⑤⑥ 内⑤⑥	⑬3.6	-	⑬1.8	灰色	① N地区
6	15	35	⑦	煎茶器	蓋	天部部	外⑤ 内⑤	-	-	⑬2.4	黄灰色	① N地区	
6	30	35	⑦	煎茶器	高台坏	底部	外⑤ 内⑤	-	⑬8.4	⑬3.6	外)灰色 内)灰オリーブ色	① N地区	
6	22	36	⑦	煎茶器	碗	口縁部	1/2	外⑤ 内⑤	⑬6.0	-	⑬4.5	灰色	① N地区
6	6	35	⑦	煎茶器	蓋	つまみ欠失	1.6	外⑤ 内⑤	⑬6.8	-	⑬1.6	灰黄色	① N地区
6	20	35	⑦	煎茶器	口縁部	1/2	外⑤ 内⑤	⑬0.0	-	⑬1.8	灰白色	③ N地区	
6	12	35	⑦	煎茶器	蓋	口縁部	1/2	外)不明 内⑤	⑬6.0	-	⑬1.8	外)に、い、黄色 内)灰黄色	① N地区
6	21	35	⑦	煎茶器	高台坏	口縁部欠失	外⑤ 内⑤	-	⑬2.2	⑬3.3	灰黄色	① N地区	
6	13	35	⑦	煎茶器	蓋	つまみ欠失	1/2	外⑤⑥ 内⑤⑥	⑬6.0	-	⑬1.6	外)灰色 内)黄灰色	① N地区
6	29	35	⑦	煎茶器	碗	底部	外⑤ 内⑤	-	⑬6.0	⑬1.9	灰黄色	① N地区	
6	27	35	⑦	煎茶器	鉢?	底部	外⑤ 内⑤	-	⑬7.0	⑬1.1	灰オリーブ色	① N地区	
6	23	35	⑦	煎茶器	高台坏	1/2	外⑤ 内⑤	⑬8.6	⑬4.0	3.3	外)灰色 内)灰オリーブ色	① N地区	

第1節 調査に至る経緯

図面番号	写真図番	種類	部材	部材	残存率	調査・目録・文様など	口縁	底径	器高	色調	胎土	備考		
6	28	35	①	土師部 鉢?	底部		外⑤ 内④	-	(7.2)	[1.1]	外⑤に白褐色 内④に白褐色	①	N地区	
6	26	25	②	土師部 皿	底部		外⑤ 内④	-	(10.0)	[2.0]	外⑤に黄褐色	①	N地区	
6	19	25	③	須恵部 蓋	口縁部	1.8	外⑤ 内④		(19.8)	-	[2.1]	外⑤黄褐色 内④黄褐色	③	N地区
6	1	35	③	須恵部 蓋		1.6	外⑤ 内④		(17.0)	-	3.7	灰白色	③	N地区 須恵部 継ぎ目 釜み大
6	16	35	③	須恵部 蓋	口縁部	1.6	外⑤ 内④		(13.0)	-	[6.8]	灰色	①	N地区 釜み大
6	24	35	③	須恵部 皿		1.6	外⑤ 内④		-	(13.2)	[2.3]	灰白色	③	N地区
6	8	25	③	須恵部 埴	口縁部	1.6	外⑤ 内④		(12.0)	-	[3.1]	灰色	①	N地区
6	2	25	③	須恵部 蓋	つまみ欠	1/12	外⑤ 内④		(16.6)	-	[2.8]	灰オリーブ色	①	N地区
6	11	35	③	須恵部 無台杯		1/12	外⑤ 内④		(13.6)	(5.7)	[2.8]	灰色	①	N地区 内外に漆?
6	9	35	③	須恵部 無台杯		?	外⑤(工具痕?) 内④		(14.4)	(7.0)	[3.3]	オリーブ灰色	①	N地区
6	10	35	③	須恵部 無台杯		1/12	外⑤? 内⑤?		(15.6)	(7.6)	[3.5]	外⑤オリーブ色 内⑤灰白色	①	N地区
6	31	25	③	越前焼 壺	底部		外⑤ 内④		-	(6.4)	[2.1]	に白黄褐色	①	N地区
6	37	35	④	須恵部 鉢	底部		外⑤④ 内④		-	(9.8)	[6.3]	外⑤に白褐色 内④に白褐色	①	N地区
6	34	35	④	須恵部 鉢	口縁部		外⑤ 内④		(29.8)	-	[6.3]	灰黄色	①	N地区
6	33	35	④	須恵部 鉢	口縁部 胴部	1/12	外⑤ 内④		(20.2)	-	[7.2]	灰白色	②	N地区
6	32	35	④	須恵部 鉢	口縁部 胴部	1/12	外⑤ 内④		(20.0)	-	[5.4]	灰色	①	N地区
6	36	35	④	須恵部 鉢	口縁部 胴部	1/12	外⑤ 内④		(20.0)	-	[6.0]	外⑤黄褐色 内④灰色	①	N地区
6	35	35	④	須恵部 鉢	口縁部	1/12	外⑤ 内④		(23.0)	-	[3.9]	外⑤黄褐色 内④に白黄褐色	①	山越
7	12	36	①	須恵部 無台杯	底部		外⑤ 内④		-	(8.0)	[1.3]	灰色	①	山越出土
7	14	36	①	須恵部 無台杯		1.8	外⑤ 内④		(13.4)	(8.0)	2.8	灰色	①	山越出土
7	9	36	①	須恵部 蓋	つまみ欠	2.3	外⑤④ 内④		(19.0)	-	[2.7]	灰色	①	山越出土
7	10	36	①	須恵部 蓋	つまみ欠	?	外⑤④ 内④		(18.0)	-	[1.7]	灰色	①	山越出土
7	1	36	①	須恵部 蓋		?	外⑤④ 内④		(14.0)	-	2.5	灰色	①	山越出土
7	11	36	①	須恵部 蓋	つまみ		外⑤ 内④		-	-	[2.4]	灰色	①	山越出土
7	2	36	①	須恵部 蓋	天寿部		外⑤④ 内④		-	-	[2.3]	灰色	①	山越出土
7	18	36	①	須恵部 皿		1.6	外⑤④ 内④		(17.8)	(14.2)	2.2	明黄灰色	①	山越出土
7	13	36	①	須恵部 無台杯	底部		外⑤ 内④		-	(10.8)	[1.6]	灰色	①	山越出土
7	5	36	①	須恵部 無台杯		?	外⑤ 内④		(12.5)	8.8	4.5	灰色	②③	山越出土
7	3	36	①	須恵部 高台杯		1/12	外⑤ 内④		(14.0)	(10.8)	4.2	外⑤灰色 内④灰白色	①	山越出土
7	17	36	①	須恵部 高台杯	口縁欠		外⑤ 内④		-	(15.4)	[2.7]	灰白色	①	山越出土
7	16	36	①	須恵部 高台杯	底部		外⑤ 内④		-	(10.2)	[2.9]	外⑤黄褐色 内④明黄褐色	①	山越出土
7	19	36	②	須恵部 短頸壺	口縁部 胴部	1/12	外⑤ 内④		(10.0)	-	[3.4]	灰白色	②	山越出土
7	22	36	②	須恵部 壺	口縁部	1.8	外⑤ 内④		(25.8)	-	[6.2]	外⑤灰色 内④オリーブ灰色	②	山越出土
7	23	36	②	須恵部 壺	口縁部	1/12	外⑤ 内④		(25.8)	-	[2.8]	灰色	①	山越出土
7	15	36	②	須恵部 壺	口縁部	1.8	外⑤ 内④		(11.6)	-	[3.5]	外⑤黄褐色 内④灰色	①	山越出土
7	4	35	①	須恵部 無台杯		1.6	外⑤④ 内④不明		(12.8)	(6.4)	3.2	灰白色	②	山越出土
7	21	36	②	須恵部 壺	胴部		外⑤④ 内④		-	-	[5.3]	灰白色	①	山越出土
7	25	36	②	須恵部 壺	胴部		外⑤④ 内④		-	-	[4.0]	灰色	②	山越出土
7	20	36	②	須恵部 壺	口縁部 胴部	1.6	外⑤(胴部⑤) 内⑤(胴部⑤)	体部⑤ 体部⑤	(27.6)	-	[6.4]	外⑤灰白色 内⑤灰色	②	山越出土
7	24	36	②	須恵部 壺	胴部		外⑤(胴部⑤) 内⑤(胴部⑤)	体部⑤ 体部⑤	-	-	[3.0]	灰白色	②	山越出土
7	7	36	②	須恵部 壺	口縁部	?	外⑤(口縁欠) 内⑤		-	-	[3.4]	外⑤オリーブ灰色 内⑤灰色	②	山越出土
6	3	36	①	須恵部 高台杯	口縁欠		外⑤ 内④		-	(9.4)	[4.3]	灰色	②	山越出土

第2節 調査の経過

1 各年度の調査概要

試掘調査を終了し、本調査に着手した段階でも、調査区のごく近くに須恵器の窯跡が存在するものと仮定してN地区やO地区・G地区の表土掘削を最優先としたかった。しかし、農政局の流木の撤去や工事工程との関係で企業局の計画に従い、各年度の調査内容を次のようにした。調査区はこれまで述べてきたように国営農政局（大塩向山遺跡E地区・山腰遺跡部分）で2ヶ所、企業局（大塩向山遺跡C・G・I・L・N・O・P地区・山腰遺跡水田部分）で8ヶ所となり、すべて合わせて10ヶ所にもなりE地区のように事務所からかなり離れた地区もあり、また工事工程のすりあわせから次のように調査期間を設定し、調査の終了後逐次企業局に引き渡した。

14年度の概要 L・N地区とC地区の調査完了とGH地区の現況測量終了後の表土掘削まで。また北陸農政局事業予定地の大塩向山遺跡E地区と山腰遺跡の調査完了。

15年度の概要 前年度から調査に着手したGH地区とI地区・O地区の調査完了と山腰遺跡（企業局事業分）の表土掘削。

16年度の概要 前年度から調査に着手した山腰遺跡の遺構詳細掘削を行い調査完了。

2 14年度の発掘調査の経過

発掘調査は4月早々から工事の工程で先行して造成にかかるL・N地区から開始の予定であったが、伐採した流木の撤去が行われておらず、これらの作業が終了しているC地区から開始した。その後すぐに調査区内だけは流木の撤去がほぼ終了したため、残りの流木撤出作業と並行するが、開始したばかりであるが一旦着手したC地区の調査を中断し、森林組合と両者で安全を確認したL・N地区の調査に着手した。

大塩向山遺跡

- 4月8日（月） 事務所となるプレハブ、ユニットハウス、トイレの設置。またセンターから器材搬入などの搬入。L・N地区については森林組合が流木の運び出し先行する作業を優先する。
- 4月9日（火） 作業員が集合して、C地区へ登る通路の確保とC地区に残された枝や地表面の草刈作業開始。
- 4月12日（金） C地区のグリット杭打ち。順次N・L地区への作業通路の確保と残された枝や地表面の草刈作業に着手。N地区は試掘坑排土の除去作業に予想以上に時間がかかる（第8図1）。
- 4月18日（木） C地区の現況（掘削前）状況の写真撮影。終了後、ただちに表土掘削の開始。



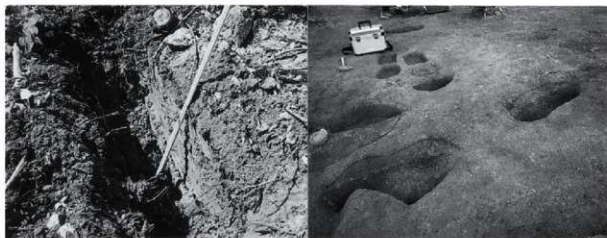
第8図 大塩向山遺跡 発掘調査状況写真（左）N地区（右）L地区



(左)(右)ともにN地区



(左)(右)ともにN地区



第9図 大塚向山遺跡 発掘調査状況写真 (左) L・N地区間の谷 (右) I地区

- 4月19日(金) L地区の現況(掘削前)状況の写真撮影。終了後、ただちにグリッド杭打ちと現況の地形図測量。
 5月2日(木) N地区の現況(掘削前)測量の航空写真撮影をヘリコプターで行う。
 5月9日(木) N地区の現況(掘削前)状況の写真撮影。森林組合の木材搬出が開始され、作業員の安全確認。
 5月13日(月) L・N地区ともに表土の掘削を開始。L地区で出土する遺物は小片がほとんどである。遺物は順次、平板にて取上げ(第8図2)。N地区については調査区内の表土の掘削を行いながら、あくまで須恵器窯跡が隠れているものとして傾斜変換点である斜面裾を中心に掘削し、疑わ

- しい地点には深めのトレンチを設定して掘削する（第9図1）。斜面裾の周辺を中心に大きめの破片の須恵器が出土するが、窯跡の存在を示す窯壁片や須恵器の融着品の出土はなく、窯跡がこの調査区にはない可能性が次第に高くなりつつある。
- 5月23日（木） 鯖江市吉川小学校の6年生約70名が引率の先生とともに、遺跡での体験発掘を行う。
- 6月14日（金） N地区の斜面裾で出土する須恵器について適宜出土状況の写真を撮影しながら、平板にて取り上げながら掘削を進める（第9図2）。このころから雨の日が多くなる気配があり、斜面での作業が多くなってきたN地区を中止し、足場の悪い日はN地区の次に調査を予定しているGH地区の流木や試掘調査時の排土の除去を行う。
- 6月24日（月） L地区の遺構精査を開始し、順次検出された遺構の掘削を開始する。小さな直径20・30cm前後のピットが数基でいづか。出土する遺物には、須恵器片もあるが、中世の土師質土器（カワラケ）の大きめの破片が目立つ。
- 6月27日（木） L地区の調査区全体に設定した土層観察用の土手（セクションベルト）の実測を行い、順次除く。
- 7月3日（水） L地区の終了測量の航空写真撮影をラジコンヘリで行う。
- 7月5日（金） L地区の補足測量や遺構の断割りなどが終了し、完全に終了し、作業のすべてをN地区に移す。
- 7月10日（木） N地区 斜面裾周辺でピットがいくつか検出されるが、明確な建物とはならないようである。武生第二中学校の生徒2名が職場体験学習に来るが、台風のため、出土した土器の洗いをを行う。
- 7月18日（木） N地区 台風で中断した現場を再開。雨で流れた斜面に須恵器片の露出するところが目立つ。
- 7月22日（月） N地区 梅雨明けしたもようで、山麓部に顕著な遺構が見当たらないため、斜面部分の掘削を作業の中心とし、排土用にベルトコンベヤーを斜面に設定する。（第9図3）
- 8月1日（木） N地区 完全に地山まで達した斜面部分は掘削を終了し、順次ベルトコンベヤーを移して掘削範囲を変更する。この前後から連日暑い日が続き、休憩時間をこまめに入れて作業員の健康管理を行う。8月12～16日 お盆休み
- 8月28日（水） N地区 谷奥の平坦地を掘削するが、これまでとは状況が異なり土器の出土が極端に少ない。
- 9月3日（火） N地区の山麓部はこの時点で人力掘削に限界があると判断して、平坦面の掘削前に重機を入れて地山の断割りを行う（第9図4）。須恵器窯跡の有無について最終確認とする。
- 一工事に着手したあとの、切土工事などのさいにも注意して見ていたが、窯などがあるような形跡は全くない—
- 9月10日（火） N地区 焙烙？出土。平坦部の表土掘削を開始。
- 9月18日（水） N地区 山麓部の断割りが終了して、N地区には須恵器窯跡が存在しないと判断した。またN地区とL地区・I地区の間の谷筋低地部について念のため、重機で深堀を行い、遺物などが全く出土しないことを確認。
- 9月25日（水） N地区の作業に一区切りが着いたため、C地区の作業を再開する。流木の撤去などから開始して、現況写真撮影。LとN地区の間の谷底に重機で試掘坑を掘削し、遺物などがいないことを確認する（第9図5）
- 10月2日（木） N地区平坦部の表土掘削。C地区で完形に近い須恵器がかたまつて出土し出土状況の写真撮影
- 10月4日（金） N地区 平坦面の以降精査と残した土層セクション図の作成と終了したものの取り外し。
- 10月16日（水） 急遽E地区（国営農政局事業分）の作業に着手できることとなったため、C地区の作業を中止し、N地区の遺物取り上げと平行してGH・I地区の流木撤去などの作業と振り分ける。

- 10月24日(木) N地区は平坦面で検出された遺構の掘削。G地区は流木の撤去。
- 11月8日(木) N地区の平坦面の土坑から須恵器がまとまって出土。
- 11月11日(月) N地区の山頂部の掘削終了。若干の須恵器片が出土したが、平坦面は山作業の器材置き場に使用していたものらしい(当時の作業に従事していた作業員さんの記憶による)。
- 11月20日(水) N地区の器材撤去。終了状況の終了測量の航空写真撮影を実機ヘリコプターで行う。その前に周辺の尾根からN地区の終了状況の写真撮影を行う。このあとはG地区の流木の撤去と試掘調査時の排土の除去とが作業の中心。
- 12月20日 GH・I地区の現況(掘削前)測量のため航空写真撮影をヘリコプターで行う。その前に周辺の尾根からG地区の現況状況の写真撮影を行う。
- 12月25日(水) 器材の片付けとプレハブの清掃を行い、年内の作業を終了。

冬季の中断

- 2月20日(木) 現場作業再開。C地区の作業と平行して、O地区の流木撤去、試掘調査時の排土の除去。G地区と山腰遺跡の間の排水路の清掃作業。
- 2月28日(金) C地区の表土掘削。尾根の先端部で焼土坑が検出され、その周辺で須恵器片が出土(第9図6)。
- 3月6日(木) I地区の現況状況の写真撮影のち、作業の中心をI地区に移す。C地区の焼土坑・ピットなどの掘削を終了し、この地区での作業が終了する。
- 3月14日(金) C地区の終了測量の航空写真撮影を実機ヘリコプターで行う。
- 3月25日(火) I地区の表土掘削も大略終了し、器材の片付けとプレハブの清掃を行い、年度内の作業を終了。

3 15年度の発掘調査の経過

調査の再開は昨年度に引き続きI地区の表土掘削から開始した。I地区背後に連続するC地区の造成工事に際して、I地区の一部も工事範囲に近くなることから早めに引き渡してもほしいとの要望が企業局側から出された。

- 4月7日(月) 15年度の作業はI地区の表土掘削から再開する。早々に焼土坑が確認される。
- 4月22日(火) I地区の表土掘削がほぼ終了して、遺構精査とともに、検出された遺構の掘削も始める(第10図1)。
- 5月1日(木) I地区と平行してG地区の作業も再開する(第10図2)。このころから好天候が続いて土が乾燥しすぎ、遺構検出作業が困難となり、プレハブから水道水をI地区の山の上までポンプアップする。
- 5月19日(月) I地区では細片だが縄文土器や石器などが出土していることから、土層セクションに沿って遺構検出を深めにする。O地区の流木の撤去、試掘調査時の排土の除去などを行う(第11図1)。
- 5月23日(金) I地区の作業がほぼ終了したため、作業の中心をO地区に移す。
- 5月27日(水) I地区の終了測量の航空写真撮影を行う。O地区の山頂部分からI地区の全景写真の撮影。
- 5月28日(木) I地区の部分写真と個別遺構の写真撮影。終了した焼土坑の断割りを行い、I地区での作業を終了。G地区の表土掘削とともに斜面部分の断割り作業を中心に行う。N地区より須恵器の出土が多い。
- 6月3日(火) G地区の平板での遺物取り上げを順次開始し、鉄鉢型須恵器などあり。融着品や窯壁部分の出土はまったくない。平坦面ではピットは幾つか検出され、確認面直上で須恵器が集中して出土。
- 6月26日(木) G地区の北側、試掘調査時にH地区とした部分の谷筋を中心に掘削するが、平坦面より遺物の出土も少なく、窯などもあるような状況は考えられなかった。

- 7月2日(水) 工事用道路の施工の関係でO地区を早めに引き渡してほしいとの要望が事業者側から出される。G地区は斜面での窟跡確認の断割り作業を中心とし、O地区の作業と平行する。試掘調査ができなかった尾根頂部の確認を行い、細片ではあるが須恵器片が出土し、C・I地区と同様な祭祀関連の遺構があると想定される。O地区とはやや離れ、想定される遺構の内容も異なることから、P地区と呼称することとする(第11図2)。
- 7月15日(火) OとG地区脇の排水路に土砂や下草が溜まり、除去する。
- 7月22日(火) 山腰遺跡の重機による表土掘削のみを先行して着手。
- 7月29日(火) O地区の土層観察用のセクション図を作成し、順次取り除く。須恵器片がまばらに出土する。
- 8月6日(水) 先に確認したP地区を着手するため、作業用の登る道を作り始める。O地区では石礫が出土。
- 8月9日から17日の間はお盆休み。
- 8月28日(木) P地区の表土掘削に着手するが、雨などで足場の悪い日は安全を期して、山腰遺跡の残された表土掘削の作業とする。山腰遺跡では排土の置き場に余裕がないため、遺構のある範囲を確定することも兼ねて、遺構の検出作業を実施。
- 9月8日(月) P地区の表土掘削、遺構検出作業がほぼ終わり、焼土坑が4基ほど確認される。順次掘削して図面などの作成を行う。O地区は確認された落ち込みなどの掘削と、疑わしき部分の断割りを行い、須恵器窟跡がないことを確認する(第11図3)。
- 9月12日(金) O・P地区ともに掘削が完掘して終了測量の実施を待つ。作業の中心をG地区と山腰遺跡に移す。
- 9月22日(月) 山腰遺跡北東側(全体の1/4)の表土掘削、遺構検出作業が終了。遺物は出土するが摩滅しているものが多く、遺跡範囲の縁辺部であることが想定された。
- 10月8日(水) O・P地区の終了測量の航空写真撮影を実機ヘリコプターで行う。山腰遺跡の北側半分の表土掘削、遺構検出作業が終了。耕地整理のさいに生じたと考えられる浅いカクランが大きく広がる。
- 10月9日(木) O・P地区の焼土坑の壁・床などの断割り・図面などを作成して、この両地区の作業を終了する。
- 10月16日(木) G地区土層観察用のセクション図を作成し、順次取り除きながら、確認された遺構の位置を平板に落としつつ、遺物の取り上げを行う。
- 10月24日(金) 検出される遺構はビットがほとんどで、順次掘り上げる。一部で須恵器が重なって出土する。



第10図 大塚向山遺跡 発掘調査状況写真 (左)I地区 (右)G地区



(左) O・P地区 (右) P地区



(左) O地区 (右) 山腰遺跡



第11図 大塩向山遺跡・山腰遺跡 発掘調査状況写真 (左) I地区 (右) G地区

10月29日(木) 王子保小学校の6年生約60名が、山腰遺跡の包含層の掘削を行い現場体験する(第11図4)。G地区では順次掘削しているビットから灰軸の小壺が出土する。G地区の終了を先行させるため作業の中心を山腰遺跡から、G地区に移す(第11図5)。

11月13日(木) G地区平坦面の縁辺部で竪穴住居が2基確認される。2基とも南側の壁にかまどが検出される。

- 11月17日（月） G地区の終了測定の航空写真撮影を実機ヘリコプターで行う。主な遺構の図面などを作成する。
- 11月20日（木） G地区の図面、断割なども終わり、大塩向山遺跡の作業はすべて終了する。
- 11月27日（木） 山腰遺跡の遺構検出作業もほぼ終了し、5条の溝が主な遺構との想定となる。うち2条の溝（SD1・SD2）の掘削を中心に行い、主要な遺物は平板で取り上げる。
- 12月11日（木） D2よりSD3が古いことを覆土切り合いで確認する。
- 12月17日（水） 器材の片付けとプレハブの清掃を行い、年内の作業を終了。

冬季の中断

- 3月1日（月） 作業再開。調査区の周辺に排水用の溝の掘り直し。
- 3月8日（月） 週末の雪で、本格的な作業の再開は週末となる。
- 3月15日（月） 溝に残されたセクションの実測などを行い、順次ベルトの撤去を行う。地山は粘質土が均一に堆積したのではなく、各所で地山の粘質土内に堆積している礫層が遺構面に現れており、溝の覆土の礫との区別が困難である。随時断割りなどを行い、地山面の確定作業も行う（第11図6）。
- 3月29日（月） 北側に集水溝を掘り、排水ポンプの設置などの現場保全作業をもって、15年度の作業を終了する。

4 16年度の発掘調査の経過

16年度の現地調査は山腰遺跡のみである。

- 4月6日（火） 昨年度に掘り残された包含層の掘削から再開する。
- 4月15日（木） SD2の完掘を優先とするが、北（遺跡の縁辺部）になるに従い、溝の立ち上り、プランが不明確になったため、断割りのトレンチで確認しながら作業を行う（第12図1）。
- 5月24日（月） SD2の遺物出土状況の写真撮影、中ほどに大きな落ち込みが確認される。
- 6月7日（月） SD1が大きく曲がる部分で大量の須恵器が出土し、墨書土器や特異な器形の須恵器の存在が目立つ。終了測量の日程が差し迫る。
- 6月9日（木） SD2の東側でピットの集中部分が確認され、掘立柱建物1棟が復元される（第12図2）。
- 6月18日（金） 山腰遺跡の終了測定の航空写真撮影を実機ヘリコプターで行う。
- 6月25日（金） 出土遺物・作成図面などの成果品と器材などを搬出し、13年度の試掘調査に始まった大塩向山遺跡・山腰遺跡の現地調査をすべて終了する。（赤澤）



第12図 山腰遺跡 発掘調査状況写真（左）G地区（右）山腰遺跡

第2章 遺跡周辺の地理的・歴史的環境

第1節 はじめに — 「王子保」・「大塩」の呼称と日野山 —

大塩向山遺跡・山腰遺跡がある越前市（旧武生市）南部は、王子保地区、または単に王子保と呼ばれているが、現行の地名としては残されていない。現在では「王子保」の呼称は王子保地区の中心にある今宿町を中心とした武生市南部の日野川流域一帯を呼称している。現行の行政地名では表記が異なる「大塩」がその一部の大字使われ、「王子保」はこの地区にある小学校名に使われている。「王子保」とは、太古の時代にこの地に皇室につながる「王子」がいたことからよるとの伝承があるが、その由来についてはわからない。

発掘調査を行った大塩向山遺跡と山腰遺跡の南側（平成15・16年度発掘調査範囲）が大字「大塩」、山腰遺跡の北東方向に大字「今宿」がある。ちなみに今宿には近世の北陸道が南北に走り、中世以前も敦賀から北上する幹線道路はこの付近を通過していた可能性が高い。大塩が初めて記録に現れてくるのが、建保2（1214）年と推定される「武者所経保申状」（醍醐寺文書）に「大塩保地頭法橋」である。その後、元弘3（1333）年12月付の八幡宮神主清原泰景愁状（八幡神社文書）に「当保」として大塩のことをさして記録されている。慶長11（1606）年の越前国絵図で「大塩保」は、石高3589.745とされ、その石高から今宿・国兼・温谷（現大塩）・印内（現小松）・中（現森久）・瓜生野の地域と考えられる。いつから「大塩」が「王子保」へ変化したかは詳細には不明であるが、江戸時代の地誌である『越前国名蹟考』によると「往古は王子保、元暦二（1185）年以来大塩保と号す」とあるが、古代に「王子保」とされた記録は定かではない。逆に「大塩」が「王子保」へと戻ったのは明治二十二（1889）年の町村制実施の際に王子保村として成立した時点である。

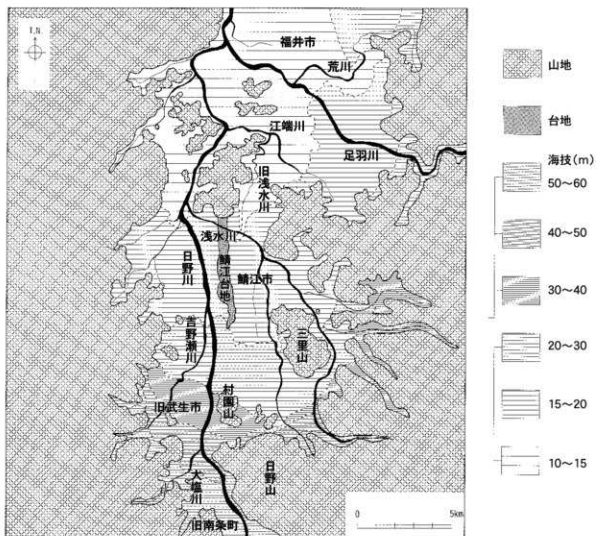
古代においてどの郡郷に含まれていたかは不明であるが、一説には中世の資料に国兼が「徒都部郷」に属していたとあるので、「和名抄」の「敦賀郡徒者（しとむべ）郷」に属していた可能性が高い。中世においては大塩保の中心は国兼にあったと考えられ、その南の山麓部（桜井峰187mの北麓）には（大塩）八幡宮が鎮座する。祭神は帯中日子天皇・品陀和気天皇・息長帯日売尊である。寛正5（1464）年八月の当社縁起によれば、仁和三（887）年に府中南の大谷口泉嶋に配流された紀中納言友仲が、岩清水の明神を勧請して赦免されたので、寛平三（891）年に桜井峰に岩清水八幡を勧請したので起こりとされている。治承二（1183）年には木曾義仲の本陣になったとあるが、拝殿すぐ後ろの大きな堀切はこのことを物語るものであろうか。

日野山は越前市南部にある標高794.8mの、コニーデ型の山容で、旧来は南条郡と今立郡にまたがる。近世の地誌類では小健山（御嶽山）、難ヶ岳（日永岳）などと記録されている。『日本紀略』醍醐天皇延喜十（910）年9月5日の条に、越前国日野明神に従五位下を授けるとある。古くは平安時代の「紫式部集」に、下つては江戸時代の松尾芭蕉の「奥の細道」にもその名前は現れる。山頂には日野三所（三社）権現が鎮座し、中の宮の本社と北社・南社に分かれていた。明治維新後の廃仏毀釈によってそれぞれの下宮を本社として日野神社と改称し、中・南の二社は西側山麓部の中平吹村の、北の一社は北側山麓部の荒谷村と中平吹村両村の管轄とし、祭礼の時などは南条・今立両郡隔年ごとに行った。中平吹の現日野神社は継体・安閑・宣化三天皇を、荒谷の現日野神社は百日諾尊・天照皇大神・八心思兼神・迦具土神・継体天皇を祀る。日野神社は日野山を中心に各地に残されているが、その中心が日野山であることは説明するまでもない。日野山は別名「越前富士」と呼ばれるが、この別称は国府があったと考え

られる旧武生市街地からの眺めから納得されるものである。また標高は800mにも満たない低い山であるが、近接してこれより高い山もなく、南越盆地の各所からすぐわかる山容である。地元では遠足など子供のころには必ず登るなど、誰もがその名前と位置などは知っている身近な存在である。山麓には古代末の仏像が越前においても集中するところで、日野山のごく近い場所でも、西谷町一ノ宮神社の木造薬師如来坐像（10世紀後半か）、荒谷町観音堂の木造聖観音菩薩立像（平安時代末か）、中平吹町十五社の木造阿弥陀如来坐像（平安時代末？）・木造大日如来坐像（平安時代末？）など数体が上げられ、さらにその北東山麓部の味真野地区まで含めるとかなりの仏像の存在が多く上げられよう。また山頂から約500m北へ降った北尾根の中腹には、荒谷庵寺と呼んでいる山岳寺院跡があって、中世以降の開山塔として伝えられる石造物が数個体残され、市の指定となっている。この周辺で墨書のある須恵器が表採されたとのことで、このあたりに古代の祭祀関連遺跡があった可能性も高い。このように日野山周辺には平安時代まで遡る仏像が顕著であることが認められる。

第2節 地理的環境

越前市は大局的には福井平野の南部に位置するとされるが、鯖江市と越前市を中心とする平野部は南越盆地、または鯖武（武鯖）盆地とも呼称されている。広義の「福井平野」は、竹田川・九頭竜川・



第13図 福井平野南部・南越盆地（越前市・鯖江市周辺）地形概要図（縮尺1/200,000）

足羽川・日野川を主とする河川の沖積によって形成された沖積平野の総称である。よって、ここではより限定された意味を示す南越盆地の呼称を用いる（第13・14図）。

南越盆地の中央を南北に流れるのが日野川である。日野川は、福井市西部で九頭竜川に合流する総延長約72km、流域面積約1,300km²の中級河川で、その源流の岐阜県境にある今庄町夜叉ヶ池が著名である。ちなみに源流からやや下流付近に、本事業の起点とも言える榎谷ダムが造られている。日野川が南越前町（旧今庄町・南条町）の谷間を抜けて、扇状地・沖積地を形成するのが南越盆地である。南越盆地は日野川を挟んで東側が越美山地の一部の越前中央山地、西側が丹生山地の海拔1,000m以下の山々に囲まれている。王子保地区は南越盆地南端の、越美山地西側の日野山の山麓に位置し、日野川が沖積地へ流れ込む平野の南の入り口を中心とする地区である。日野川左岸山麓部の日野山を望む標高約100～160mの丘陵地に大塩向山遺跡が、山腰遺跡はその沖積地に位置することになる。その南は谷間を日野川が流れる南条山地（南条山地を個別に区分する呼称は一定していないが、丹生山地の南限を吉野瀬川とする指摘もあるので、その南と日野山以南を南条山地と呼ぶことも可能である。つまり南越盆地と敦賀平野の間にある木ノ芽山嶺の北側を南条山地と呼ぶことができる）を挟んで、越前の入口である敦賀、もしくは滋賀県（近江北部）に接する。

南越盆地は全体が沈降盆地であるとされているが、越前市はその盆地の南半分を占め、その地形は意外と複雑であり、ここでもう少し周辺の地形を現在の状況から概観してみる（第14図）。越前市は日野川を挟んで東西に分かれるが、その状況はかなり変わる。日野山麓の西側に沿って流れきた日野川は、南



第14図 南越盆地（越前市・鯖江市周辺）主要な河川・山地概念図（縮尺1/60,000）

から順番に西側から流れ込む清水谷川・大塩谷川・春日野川と合流する地点で、流れをやや北へ変える。

この結果、左岸が段丘状になる（現在でも市役所とJR武生駅の間にある1～2mほどの高低差が確認できる）。つまり日野川左岸の市街地は、段丘面に形成された町並みであると想定され、このことは日野川・春日野川などを利用した用水路が市街地を南北に流されていることからもうかがえる（日本地誌）。この状況はさらに西側の盆地西部でも同様である。丹生山地から流れ出した吉野瀬川は盆地に入ると沖積面を形成するが、その直前に山麓部を開析するように、海拔40m前後に段丘をつくる。この段丘上には古代を中心とする遺跡が展開する。一方、日野川右岸脇には村国山があり、北側に僅かに段丘状の崖線を形成するが明確ではない、むしろその東側と岩内山・新宮山との間に沖積地が広がる。さらにその東側では、越前中央山地と三里山に囲まれて、沖積面が形成されるが、南側の日野山山麓では文室川と鞍谷川による味真野扇状地が広がり、海拔30m付近で扇端となる。このように4つに区分された地形も、鯖江市内に入ると、その中央鯖江台地などで区分され、海拔20mから10mの沖積面となり、単純な地形へと変化する。つまり福井平野南部の南越盆地の南側は、詳細に見ると扇状地、河岸段丘、沖積地などの地形に区分することができ、この立地がこのあと述べる歴史的な環境にも大きく影響を与えているものと考えられる。

地質的な概要は、特に専門の見地から行われたことはない。刊行された文献などによると、遺跡周辺の日野山と妙法寺山は石英粗面岩、また盆地西部の丹生山地山麓部には花崗岩が見られ、これらの風化した粘土を利用して窯業が盛んになったとされる。特に南越盆地の南に接する敦賀では花崗岩の石材が豊富なことから良質の石灰石が産出してセメント産業が盛んであることが指摘できるのみである。

第3節 歴史的環境

武生市、特にその南部の王子保地区は古代以降の遺跡が顕著とするよりも、古代以前の遺跡はほとんど確認されていない。平成以降になって区画整理などの事業に伴い各所で発掘調査が行われるようになって、古代以前の遺跡も次第にわかりつつある。

現在のところ福井県では旧石器時代の遺跡は極端に少なく、特に福井平野周辺では確認されているものがさらに少なく、南越盆地では確実な遺物は採集されていない。

縄文時代になると、日野山麓の上半吹遺跡（第15図57）が北陸自動車道の工事に伴い発掘調査され、住居などは確認されていないが、縄文時代中期の土器と石器がまとまって出土している。盆地西部の愛宕山古墳群の調査で後期の竪穴住居が1棟発掘された。丹生郷遺跡（第15図7）でも土器や石器が出土しているが、細片のため時期などは明確にされていない。縄文時代晩期になると北府遺跡（第15図6）で壺棺などが数個体出土している。これらの事例から縄文時代の遺跡は盆地山麓部（上半吹遺跡・丹生郷遺跡・高森遺跡・愛宕山古墳群）か、扇状地（杉町遺跡？・北府遺跡）で確認されているのみで、数も少なく沖積地で確認された事例はない。

弥生時代でも中期については遺跡数も限られている。新町遺跡（第15図10）で若干の土器が出土し、旧今立町の横枕遺跡では中期末の扇溝を持つ建物が数棟検出されているが、まだ調査例は少ない。最近、発掘調査が終了した瓜生助遺跡で比較的大規模な集落と墓域が確認されたばかりである。後期になると、先の瓜生助遺跡では数棟の竪穴住居が確認され、国府遺跡（第15図12）でも平地式住居が確認されている。また村国遺跡（第15図78）でもこの時期の竪穴住居が数棟検出されている。この他に丹生郷遺跡（第15図7）など確認される遺跡も多くなる。しかし古墳時代前期は集落、古墳ともに発掘調査が行われているものがなく、古墳時代前期へ続く遺跡の状況は明確ではない。特に弥生時代後期から古墳時代前期



第15図 武生市南部の主要な遺跡分布図（縮尺1/50,000）

の墳墓の調査例は少なく、分布調査においても石室が露出しないものは明確ではない。

ここでは前方後円墳を中心とする周辺の古墳群の概要について若干触れる程度にしておく。盆地西部の愛宕山古墳群は2基の前方後円墳を含む78基が確認されているが、山麓部にも天井石が陥没した横穴式石室が認められ、基数はさらに増えるものと考えられる。このなかで里山西支群1・2号墳が、昭和61年に発掘調査され、2基とも木棺直葬の方墳で、5世紀末から6世紀中葉の須恵器と鉄器が出土している。愛宕山の南にある独立丘陵にも、全長52mの前方後円墳を含む船山古墳群（第15図3）があるが、数基程度と少ない。さらに南に下った独立丘陵に埴輪を持つ前方後円墳と方墳1基の岡本山古墳群と、直径50m前後とされる円墳を最高所にして、横穴式石室が確認されている茶白山古墳群などがある。茶白山古墳群については後ほど触れる。村国山古墳群（第15図71）では埴輪を持つ古墳が知られているが、

第5表 遺跡周辺の主要な遺跡一覧表（番号は第15図のものと同じ）

No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代
1	大塚向山遺跡	縄文・古代	2	山腰遺跡	古代	3	船岡山古墳群	古墳
4	下大田遺跡	古墳	5	平出遺跡	古代	6	北府遺跡	縄文・弥生
7	丹生郷遺跡	縄文・古代	8	高森遺跡	縄文・古代	9	大虫庵寺	古代
10	新町遺跡	弥生・古代	11	深草庵寺・金剛院	古代・中世	12	国府遺跡	古代～近世
13	新善光寺城跡	中近世	14	府中城跡	古代～近世	15	龍門寺城跡	中世
16	高瀬二丁目遺跡	古代	17	岡本山古墳群	古墳	18	茶臼山古墳群	古墳～中世
19	東千福遺跡	古代	20	千福城跡	中世	21	大虫城跡	中世
22	竜神山城跡	中世	23	広瀬片山堂跡	古代	24	正義館跡	中世
25	広瀬堂跡	古代	26	瀬ノ上堂跡群	古代	27	向山遺跡	古代?
28	末ノ山堂跡群	古代	29	妙法寺山城跡	中世	30	小泉館跡	中世
31	徳神遺跡	古代・中世	32	妙法寺遺跡	古代	33	妙法寺台遺跡	古代?
34	塚原四段田遺跡	古代?	35	佐々生遺跡	古代	36	白崎堂跡群	古代
37	白崎山城跡	中世	38	上南郷遺跡		39	八幡遺跡	古代
40	城屋遺跡	古代	41	王子保堂跡群	古代	42	野中堂跡群	古代
43	四郎丸上天狗堂遺跡	中近世	44	四郎丸石田遺跡	中近世	45	今宿遺跡	古代
46	亀ノ谷遺跡	古代?	47	寺ノ山遺跡	古代?	48	頼手遺跡	古代?
49	国象遺跡	古代?	50	度々遺跡	古代・中世	51	矢谷山城跡	中世
52	藤本北遺跡	古代・中世	53	清水遺跡	古代・中世	54	藤本東谷遺跡	古代・中世
55	藤本遺跡	古代・中世	56	東大道遺跡	古代	57	上平吹遺跡	縄文・古代
58	黒山城跡	中世	59	日野山山頂遺跡	古代(蘇塚)	60	荒谷大跡	古代・中世
61	光麻坊館跡	中世	62	平吹山城跡	中世	63	松ノ鼻城跡	中世
64	戸田氏館跡	中世	65	西谷古墳群	古墳	66	西谷亀ノ子遺跡	古墳?
67	新宮山古墳群	古墳	68	岩内山古墳群	弥生・古墳	69	大塚木ノ下遺跡	古墳・古代
70	葛岡大塚遺跡	弥生・古代	71	村国山古墳群・城跡	古墳・中世	72	大塚古墳群・館跡	古墳・中世
73	大塚山城跡	中世	74	帆山城跡	中世	75	村国城跡	中世
76	光善寺城跡	中世	77	眞柄館跡	中世	78	村国遺跡	弥生・古代

古墳全体の分布状況や総数などは確認されていない。

沖積地に独立丘陵状にある岩内山古墳群（第15図68）が、昭和46から49年にわたって発掘調査が行われている。全体で全長45mの前方後円墳1基を含む50基あまりが知られているが、調査されたのはいずれも墳丘が明瞭ではないもので、出土土器から古墳出現期の墳丘墓である。ちなみに飛禽文鏡1面が出土している。

横穴式石室が造られるような後期になると確認されている古墳の数も多くなり、古代の武生に繋がる状況が伺えそうになってくる。下大田遺跡（第15図4）では6世紀末から7世紀の土坑などが、丹生郷遺跡（第15図7）でも同時期の遺物が出土しているとのことである。特に近年、発掘調査が行われた茶

白山古墳群（第15図18）は、6世紀末から7世紀初頭の横穴式石室を持つ古墳5基と横穴墓2基に近接して、7世紀初頭の須恵器窯跡2基が存在するなど、その密集には注目される。さらに同じ丘陵の北西端にある直系20mていどの円墳が昭和25年に慶応大学によって発掘調査されているが、周辺で小石室14基が確認されたとのことである。また後に述べる葛岡大屋遺跡（第15図70）では、この時期の土器が確認され、古墳時代も後期以降からは集落の存在が明らかになりつつある。

古代以降の遺跡は各所で確認されている。国府があったとされる旧武生市であるが、国府そのものの位置について、明確な遺構・遺物は発掘調査でも確認されていない。推定地として旧武生市街地である可能性が高いとされており、これ以外の可能性については低いと考えられる状況である。市街地では国府関連遺跡の調査として、「足羽」「国大寺」などの墨書土器が出土した府中城跡（第15図14）D地点など幾つかが調査されているが、調査面積が小さいうえに、中世・近世などの後世によって破壊されており、古代の遺構は不明で、遺跡の広がり、その性格とともに不明である。これまで市街地で遺跡の存在が明らかでなかった市街地南部で、平成16・17年に平安時代の掘立柱建物数が数棟確認され、高瀬2丁目遺跡（第15図16）と呼称されている。市街地西部の吉野瀬川の段丘上にある高森遺跡（第15図8）では整然と並ぶ掘立柱建物が約40棟、堅穴・平地式住居が9棟など発掘された。丹生郡衙に比定されるが、出土している土器は古代全期間にわたり、律令国家衰亡したのちも、集落としては継続している。その北に接する丹生郷遺跡（第15図7）では「郷長」の墨書土器が出土している。古代寺院は三箇所が確認されている。塔心礎が残る大虫庵寺（第15図9）は高森遺跡の南側にある。のちに述べる2つの古代寺院とは異なり、7世紀後半に創建され奈良時代後半の8世紀終わりごろまで存続した可能性から、国分寺に転用された可能性が指摘されているが、その後の圃場整備などでかなり削平されて、小規模ながら3回ほど行われた発掘調査でも明確な寺院遺構は検出されていない、伽藍配置などは不明である。市街地の中ほどにある深草庵寺（第15図11）は、中宮寺・平隆寺の系譜を引く最古型式の軒丸瓦の存在から福井市の篠尾庵寺と並んで北陸でも最も古い時期に創建されたと考えられる。味真野地区の野々宮庵寺は深草庵寺の直後に創建されたが、奈良時代中期から後期には基壇を掘り込んで、須恵器の大甕がすえられていることから比較的短期間に廃絶した可能性も考えられる。先の2つの庵寺とは異なり、川原式複弁八葉蓮華文軒丸瓦や山田寺式単弁八葉蓮華文軒丸瓦などの畿内色の強い瓦が用いられていることが特徴である。しかし戦国時代末の天正3（1575）年に、織田信長配下の佐々成政によって築城された小丸城によって破壊された部分が大いようである。

古代の集落は区画整理事業に伴い市街地周辺部各地で調査されている。市街地の北でも芝原遺跡・北府遺跡・平出遺跡などがあるが、平出遺跡（第15図5）では瓦・緑釉陶器・灰釉陶器などが出土しているが、道路部分の細長い調査区でもあり、企画性のある建物は確認されず、国府周辺の通常集落と考えられている。その北にある芝原遺跡でも確認されているが、遺構などの密度は低いようである。愛宕山古墳群では古墳の周辺で窠付の古代の堅穴住居が検出され、円面視などが出土している。新町遺跡（第15図10）でも掘立柱建物が2基確認されているが、西側の高森・丹生郷遺跡などと比較すると、その密度は低い。市街地と日野川を挟んだ東側には独立丘陵の村国山があるが、その北側では区画整理事業などに伴う村国遺跡（第15図78）の発掘調査では緑釉陶器・灰釉陶器などとともに、「佐味」など多数の墨書土器が出土しており、越前の古代の豪族である佐味氏に関連する集落であろう。村国山と岩内山の間に良好な沖積地が広がり、葛岡大屋遺跡（第15図70）については先の述べた。このように日野川右岸の村国山周辺には、村国遺跡・葛岡大屋遺跡・大屋木ノ下遺跡など弥生時代以降、特に古墳時代後期

から古代には注目される内容ながら、まだ十分に評価されていない遺跡がある。

これまで触れてきた旧武生市街地、市街地西部の大虫・広瀬地区、そして日野川右岸の村国山周辺部と比較すると市街地南部での沖積地の状況はまだ不明な点が多い。王子保地区ではないが、王子保地区の北に隣接する徳神遺跡（第15図31）で古代末から中世初頭の火葬施設、ならびに墓地在り、東千福遺跡（第15図19）では古墳時代終末から平安時代にかけての遺構が確認され「寺」の墨書土器が出土しているとのことである。また本事業に関連して妙法寺遺跡（第15図32）で行われた立会い調査で古代の土器が採集され、また今宿遺跡（第15図45）・繩手遺跡（第15図48）・国兼遺跡（第15図49）でも試掘調査で細片ながら若干の須恵器が出土し、周辺に集落の存在が想定される（この2つの遺跡については先に行った北陸農政局事業の報告書で述べた）。このほか、すでに縄文時代で触れた上平吹遺跡（第15図57）でも、小量ながら9・10世紀の須恵器が出土している。また南越前町（旧南条町）ではあるが、脇本北遺跡（第15図52）でも古代の集落の調査が行われているが、調査区の幅も狭く、建物などは復元できていない。この周辺の清水遺跡・脇本東谷遺跡・東大道遺跡（第15図53・54・56）では本事業に関連した県営事業で立ち会い調査を行ったが、地表面に近い部分に限られたためか、遺構・遺物ともに顕著なものは確認されていない。このように断片的には資料は増えてきたが、集落の構造や変遷がわかるような発掘調査は少ない。とくに今回報告する山腰遺跡と比較できるほどの資料が無いのが現状である。大塚向山遺跡の西側山麓部に王子保窯跡群が展開することは調査に至る経緯でも触れてきた。しかし王子保窯跡群でもC地点以外の窯跡群については発掘調査されたものはなく、またこの窯の所在と時期を決めるような詳細な分布調査も実施されていなく、北陸最大規模を誇ると思われる武生南部窯跡群の全体像はまだ十分につかめていない。丹生窯跡群も含めた概要は田中照久氏がまとめられているものの、20年以上前のものである。王子保窯跡群とともに、ここ10数年内に行われた丹生窯跡群の調査成果（小泊・舟場・八田新保・鉢伏・佐々生などの各窯跡）などの成果を踏まえた生産遺跡での須恵器の編年作業を検討しなくてはならない時期にきていることを、ここで指摘するに留めておく。

以上、古代まで王子保地区を中心に南越盆地南部の遺跡を概観してきたが、ここで現在までにわかっていることから、王子保地区を中心とする越前市街地の南、そしてその南の南越前町（旧南条町・旧今庄町）では古墳が1基も確認されていない。現段階では全く無いとはいえないが、現在でも確認されていないのは、これらの地区が古代以降になって開発が進んでいったことを物語るもので、その中核のひとつが大塚向山遺跡・山腰遺跡であった可能性がある。

中世以降については、ほぼ現在の集落域と重なることが考えられるが、近辺では旧北陸道沿いの四郎丸上天狗堂遺跡（第15図43）と四郎丸石田遺跡（第15図44）で中近世のカワラケを多数表採しているが、街道に伴う施設の可能性がある。（赤澤）

参考文献

武生市埋蔵文化財調査報告1～24 武生（越前）市教育委員会

武生市史

福井県の地名 平凡社

角川日本地名大辞典 福井県の地名 角川書店

福井県『福井県史』資料編13 考古 昭和61年

たけふの文化財 平成11年3月 武生市

越前国府周辺の平安仏像 越前文化の会 昭和54年4月18日

第3章 大塩向山遺跡・山腰遺跡の調査

第1節 大塩向山遺跡・山腰遺跡の概要

前回の大塩向山遺跡（E地区）・山腰遺跡の報告書では、紙面の都合上もあって調査に至る経緯は述べたものの、両遺跡ともに全体の概要は説明しなかった。ここでは前回と一部重複するところもあるが、周辺も合わせた遺跡の立地する地形について、越前市教育委員会から得た情報などを総合して概要を説明しておく。

大塩向山遺跡の位置する尾根について特に固有の名称が広く伝えられてはいるが、今回の調査にあたって地元の方に聞いたところ、調査の中心となったあたりを漠然と「向山」と呼んでいることであり、小字図（武生市史所収）でも確認した。調査の結果、遺跡の内容からも、名称を大字「大塩」にある「向山」の遺跡とするのが妥当と考え、（仮）王子保山城跡を変更して、新たに正式な名称としたことは先の報告書で述べた。

字「向山」のある尾根は、広義の福井平野（狭義の南越盆地）と日本海の間にある丹生山地の南東部、または美濃との国境となる越美山地の北、もしくは逆に福井平野南端に突き出た尾根の一部に位置すると言える。西から延びる尾根が、一度くびれて平野部に「逆L字」状に突き出た尾根の屈曲する部分からさらに北側に伸びる。尾根は次第に標高を減じながら平野に埋没する。遺跡の確認された範囲は尾根が屈曲する部分を中心とした北側で、海拔161mの頂上から北へ伸びる主尾根の東に張り出した小さな尾根筋とその山麓部である。このL字に屈曲する部分が向山と呼称される部分で、さらに北に伸びる尾根については、西側を中心に「雁道谷山」「城谷山」との小字がつけられている。また平野とは反対側（大塩向山遺跡の西側）については「八幡山」「秋葉山」の小字がつけられている。ちなみに「向山」の小字の意味であるが、何に対しての向山であるか気になるところで、沖積地を挟んだ南側の尾根の先端に「向山口」の小字が存在することに注目されるものの、現段階では不明である（第16図）。

大塩向山遺跡は通称「向山」の東側斜面のみに立地し、西側斜面山麓部にはこれまでの認識のように王子保窟跡群のみが展開し、尾根筋には大塩向山遺跡と同様な性格の遺跡は広がっていないと考えている。しかし開発の対象となっていないので試掘調査などや詳細な現地踏査は行ってないため、それは確定ではない。この遺跡の性格が日野山を望むことに意味があるのであれば、西側の尾根筋に同様な性格の遺跡は広がらない。大塩向山遺跡が確認された経緯からも、現段階ではその証明は非常に困難なものといえよう。

武生市史に添付されている小字図によれば、小字「向山」は大塩向山遺跡とした部分の南側尾根（P地区がその先端になる）を中心に置かれている。小字「向山」の北側の尾根（C地区がその先端になる）には固有の小字が置かれていない。これらの尾根に挟まれた谷には「下山狐谷」と記載されており、東側に向かって開口し、その谷奥は西へ約300m弱伸びる。大塩向山遺跡の地形はこの谷を挟んで南北に二分することができる。谷の北側に伸びる尾根は、谷に沿って東に伸びているがその先端は二股に分かれるが、北東に伸びる尾根の先端にC地区が、南に伸びる尾根の先端にI地区が広がる。谷の南側に伸びる尾根の先端にはP地区があるが、先端からかなり手前で尾根が分かれて、南へ僅かに伸びる。調査対象範囲外のため、遺構・遺物などは未確認である。しかしその山麓部には「小白山神社」があって、無視できないと考えられる。先の谷は中ほどで分かれて、南西へ100mほど伸びて二股になる。この二股に挟まれた尾根がN地区とした、平坦面とその斜面である。

調査区の詳細な内容などはそれぞれの調査区の実事記載で述べるとして、まず各地区の立地と周辺の調査区の関係について、日野山との関係を踏まえて北から簡単に述べておく。

E地区 本調査区は先に報告した農政局事業地で、今回の報告には含まれていない。本道跡で最も北に位置することを述べておく。次のC地区の尾根先端を降りきった谷を挟んで反対側の平坦面である。

C地区 あとで説明するI地区から一段北へ登った尾根続きで、のちに説明するP地区と同様に本道跡では東の日野山側（沖積地）に尾根の先端が大きく突き出でる。発掘面積は1,597㎡である。



第16図 大塚向山道跡・山腰道跡周辺の小字概念図 (縮尺1/5,000)

G地区 本地区はその立地・遺構の密度・出土遺物の量、またはその内容からも、大塩向山遺跡の中核的な位置を占めるであろう。北にはC地区の尾根が、背後に連なる西にはI地区の尾根に接する。また視界一杯に仰ぎ見る位置に日野山があるが、その間の全面には山腰遺跡が広がっている。今回の調査区とは直接には接していないものの、試掘調査の結果からも直接に関係する位置といえる。発掘面積は3,006㎡である。

I地区 I地区は先にも触れたようにG地区の背後の尾根である。尾根は東西に伸びて、P地区のある尾根とは谷を挟んで直交する。尾根の側面がG地区となり、日野山の正面となる。平坦面から約30m登った尾根の平坦地を中心とする。尾根の側面、G地区に続く斜面と、L地区に続く斜面の傾斜はいずれも急勾配で、真直ぐに登ることは困難である。南側の尾根の先端が、尾根側面よりもかなりゆるい傾斜であることはG地区の説明でも述べてきた。表土の掘削は尾根の頂部から開始し、先行するトレンチで遺物・遺構の有無を確認しながら、表土掘削の範囲を広げた。調査面積は1,560㎡である。

L地区 L地区は先端にC地区が位置する尾根のなかほどで、小さな尾根が南に伸びて谷に面した山麓部の平坦地を中心とする。遺構・遺物ともに少ない。発掘面積は663㎡である。

N地区 平野部から見えにくい部分に平坦地が広がる調査区で、山麓部を中心に須恵器が出土している。また平坦地背後の斜面とその尾根の先端部も調査した。平坦面でも最も平野部からは見えにくい谷筋の段丘縁で掘立柱建物が1棟検出されている。発掘面積は3,697㎡である。

O地区 G地区と谷を挟んだ入口で、山腰遺跡に面している。遺構・遺物とも少なく、結果的に性格が不明瞭な調査区としかいえない。発掘面積は1,597㎡である。

P地区 P地区は当初は試掘対象の範囲には含まれていなかったが、その後の事業内容の変更に伴い追加された調査区である。C・I地区の事例から日野山を望む位置に尾根が突き出ることから、焼土坑などがある可能性が高いものと判断され、本調査中に確認のトレンチを掘削した。その結果、須恵器片と土坑を検出したため、O地区の延長として発掘調査を行ったが、立地も山麓部(O地区)と尾根頂部(P地区)と大きく異なり、両者の距離もやや離れていることから、この報告にさいして新たに別地区として扱った。発掘面積は401㎡である。

山腰遺跡 山腰遺跡は大塩向山遺跡の東側沖積地に隣接し、過去の分布調査で遺物が採集されていて、表採品も須恵器に限られることから、古代の遺跡として大まかな範囲は把握していた。今回の企業局事業関連の試掘調査において、その範囲はほぼ近いものと考えられる。5条の溝と溝に挟まれた位置で掘立柱建物を1棟検出した。今回の報告する範囲だけを概観すると、調査区の北になるに従い、溝からの遺物も少なくなり、試掘調査の結果からも、遺跡の北端と考えられる状況である。既に報告した北陸農政局事業地の調査区との関係については、山腰遺跡の記載の中で触れていきたい。発掘面積は3,480㎡である。また遺物の出土量も大塩向山遺跡全体と比較しても倍近いものがある。

大塩向山遺跡・山腰遺跡全体の関係について 確認された大塩向山遺跡の調査区を分類してみると、焼土坑などが検出され、火を使った祭祀行為を行った尾根(C・I・P地区)と、その祭祀行為をささげる、もしくは関連する施設などがあったと想定される平坦地(G・N地区)、その縁辺部(E・L・O地区)の3タイプに分けられ、さらにその下の沖積地にある山腰遺跡で構成されている。

大塩向山遺跡として確認された地点の北端は先に報告した大塩向山遺跡E地区である。E地区の立地は尾根の先端ではなく谷間の平坦地で、検出された遺構、出土遺物ともにほかの平坦地と比較しても多くはなく、遺跡全体の性格を規定するものではない。これより北側は今回の開発行為の対象範囲から外

れていたため、試掘調査はもちろん、分布調査も実施していない段階では確定できないことは言えないが、今回の調査内容の遺跡の性格からは範囲外と推定される。それはC・E地区より北側には平野側、日野川もしくは日野山の方に大きく突出した尾根がなく、主尾根そのものが西に大きく曲がって日野山から遠くなることなど、遺跡の範囲がE地区絡南側に限られるのは、尾根全体の地形・立地によるものと考えられる。つまり日野山に突き出した尾根でも、さらに日野山を望める位置で、焼土坑が検出されていることから、このような尾根がある「向山」の尾根に遺跡が限られて存在することが、この遺跡の特徴であり、山麓部の平坦面についても、このような尾根があって初めて存在する可能性が高いと考えられる。

丘陵部にある大塩向山遺跡は8箇所の調査区が点在する。その中心になるのがG地区であろう。G地区は大塩向山遺跡のなかでも、日野山を正面に仰ぎ見る平坦地に、多数のピットと土坑、そして竪穴住居が2棟確認され、いずれの調査区よりも遺構の密度が高い。また出土した遺物には灰釉の水注が出土し、図化できた須恵器も多いように遺物の出土量も多い。G地区から仰ぎ見る日野山との間の隣接する沖積地には山腰遺跡が広がっている。今回、発掘調査した山腰遺跡は遺跡のなかでも北端にあたる部分で、中心部分ではないのは確認できた建物も1棟で、遺構のメインは6条の溝である。その中心は試掘調査のデーターでも、遺跡の範囲と想定した部分の中央、つまりG地区に隣接する水田部分と考えられる。山腰遺跡と大塩向山遺跡が密接に関連するものと考えると、試掘データーからだけではあるが、G地区がやはり大塩向山遺跡の中核的な位置をしめると考えるのは妥当であろう。G地区の平坦面から約30m弱ほど登った西側の標高90m前後の尾根にあるのがI地区である。I地区から15mほど登り、尾根が枝分かれしているやや大きな尾根の先端、標高106m付近を中心にあるのがC地区である。さらにC地区とは南西から北東へ降る谷を挟んだ尾根の先端から降った、沖積地に近い山麓部にあるのがE地区である。本遺跡の中心と考えているG地区の南には東側の沖積地（山腰遺跡の範囲）からやや大きな谷が西へ入り込む。G地区とはこの谷を挟んだ山麓部に貼り付くようにO地区がある。O地区から20から

第6表 本調査の対象となった大塩向山遺跡・山腰遺跡各調査区の概要

地区名	地形の概要・立地	標高（山腰遺跡とのおよその比高差）
大塩向山 遺 跡	C地区	日野山を望む尾根の先端 標高101～108m（45～52m）
	E地区	平野に面した山麓部平坦面 平坦面標高60～62m・緩斜面標高62～71m （平坦面で4～6m・緩斜面で6～15m）
	G地区	平野に面した山麓部平坦面 平坦面標高61～63m・緩斜面標高63～74m （平坦面で5～7m・緩斜面で7～18m）
	I地区	日野山を望む尾根の先端 標高89～96m（33～40m）
	L地区	平野からは見えない谷間の平坦面 平坦面標高73～74m・緩斜面標高74～82m （平坦面で17～18m・緩斜面で18～26m）
	N地区	平野からは見えない谷間の平坦面と、その西 側背後の緩斜面 平坦面標高68～71m・緩斜面標高71～103m （平坦面で12～15m・緩斜面で15～47m）
	O地区	平野に隣接した山麓部緩斜面 標高63～81m（7から25m）
P地区	日野山を望む尾根の先端近く 標高103～105m（47～49m）	
山腰遺跡	市道部分	既報告部分（北陸農政局事業地） 55から56m（－）
	水田部分	今回の報告部分（県企業局事業地） 56m前後（－）

40mほど登った東西に伸びる尾根にP地区がある。G地区とO地区の間に広がる谷を入った正面にN地区の平坦面が広がる。この谷はN地区の平坦面東端で南北に分かれ、さらに西へ入り込むが、南へ入り込んだ谷は、O地区とP地区がある尾根に挟まれて終わる。北へ入り込んだ谷はN地区の平坦面を回りこんだ、西側で終わりとなるが、谷を挟んだ北側の山麓部平坦面にL地区がある。N地区とL地区の間にあるこの谷は、真夏の日でも湧水が途切れる様子はない。大塩向山遺跡でも水量が豊富な谷で、他の要因もあろうが、この水が本遺跡の中心となるG・N地区を支えた可能性が高い。(造成する工事の施工に際しても、工事関係者はこの谷に排水管などを埋設するなどして、排水作業に対応していたことから納得できる。)

以下、これより詳細なこの調査区についてはそれぞれの項において行うが、ここでは先に報告した北陸農政局事業関連の大塩向山遺跡E地区と山腰遺跡について、今回の調査区との位置関係なども踏まえて概要を説明する。

大塩向山遺跡E地区(北陸農政局関連)(2005年に報告) 大塩向山遺跡で最も北に位置するのがE地区である。E地区は尾根が東側の平野部にわずかに伸びる山麓部が舌状に張り出した標高約60mから63mの平坦面である。平面形は三角形を呈し、その頂部を北に向ける。大きさは南北約20m、三角形の底辺にあたる東西が約20m強で、200㎡程度である。高低差は3mもない。検出された遺構は小さな土坑とピットが数基でいど、遺物の出土量もほかの調査区と比較するほど多くはないが、煮沸具である青野型の土師器甕が出土している。平坦部背後の尾根につながるF地区では遺構・遺物は検出されていない。この平坦面の西と東は1から2mほど下がるが、特に東側が本来の形状を保っていたかは定かではない。隣接する武生松下電器(現在は「TOP(タケフ・オリジナル・プロダクション)」)の敷地が造成されるさいに、こちらの尾根も削平された可能性があるとの指摘もなされた。南東の谷を挟んだ尾根の斜面が敷地に併行して直線的な斜面をなしていることから可能性は大いにある。さらに武生松下の敷地が造成される以前の小字図では、E地区の平坦面が今回調査した時点の地形図よりも、若干大きく表現されているようにも見える(小字図の縮尺が1/10,000で、細部までは観察できない)。さらにこの小字図では東側から水路がこの山麓部に流れ込んでいる状況も見え、工場の敷地が低地部であったために尾根の一部を削平したことが想定できる。ただし、C地区の尾根を大幅に越えるような張り出しではない。よってE地区は大塩向山遺跡の縁辺部となり、遺構・遺物も少ないのも、遺跡の中心部分ではないと考えられる理由によるものであろう。

山腰遺跡(北陸農政局関連・武生松下電器敷地南側に接した市道部分)(2005年に報告) 今回報告する山腰遺跡の調査区とは直接には接することなく、東西に長い台形の水田とその東に接する農道を挟んで、約50m離れた北東に位置する。試掘調査の段階では、両地区の間に空白の部分があることは全く予想しなかったため、遺構密度を把握することを目的として50m以上の長いトレンチとこまめにグリットを設定したが、包含層・遺構ともに確認されず、遺物も耕作土から摩滅したものが若干出土するのみで、本調査の必要性はまったくなかった。またこの水田部分と武生松下電器敷地との間にある市道部分も試掘しているが、道路舗装面の直下は黄褐色の山土、つまり地山が確認された。つまり両調査区はこの水田部分を会しては直接には繋がらない事が判明した。ここでは事実のみを確認して、今回報告する地区(福井県企業局事業地)と既に報告した地区(国営事業=北陸農政局事業地)がどのような関係にあるかは、遺跡全体の評価とも関連するので、報告のまとめで触れるとする。(赤澤)

第2節 大塩山遺跡・山腰遺跡の出土遺物の概要

今回の報告に際して図化した土器は大塩山遺跡で587点、山腰遺跡で927点と総数1504点の膨大な点数となった。しかしL地区で中世のカワラケ、N地区で近世のカワラケと焙烙、山腰遺跡で中世陶磁器など、その他の調査区でも含めて縄文土器と石器も出土しているが、全体にそれらが占める割合は非常に少ないものである。ここでは各調査区の説明を行う前提として、大塩山遺跡・山腰遺跡から出土した大多数を占める須恵器について大まかな分類を行い、個々の記述については簡略していきたい。

今回報告する古代の土器の95%は須恵器で、一部には須恵器の器形でありながら、いわゆる「生焼け」と判断されるものもあったが、ここでは胎土に砂粒を含み赤褐色の色調のものについて土師器とし、それ以外の焼成不良のものについても須恵器として扱った。従来、遺跡で出土する土師器(甕)は被熱などを受けて脆くなり、図化に必要なまでに復元できることも少ない。そのことを考慮しても、土師器そのものの破片の絶対量が少なく、図化できた土師器の煮沸具が少ない。当初、須恵器との比率を重量で明示するなど客観的なデータの作成も試みたができなかった。整理の各段階で見えてきた感触では、重量、もしくは破片数でも5%を超えない見通しである。このため、須恵器の図化に際しては口径などが1/6以上残されたものを中心に、鉢や灯明皿の用途に推定した坏など特殊な器形と、土師器、特に地域色を示すと考えている甕についても極力図化することに努めた。以下、ここでは各地区出土の土器について大略の器種分類を行い、土器の時期や意義などについては、最後にまとめることとする。

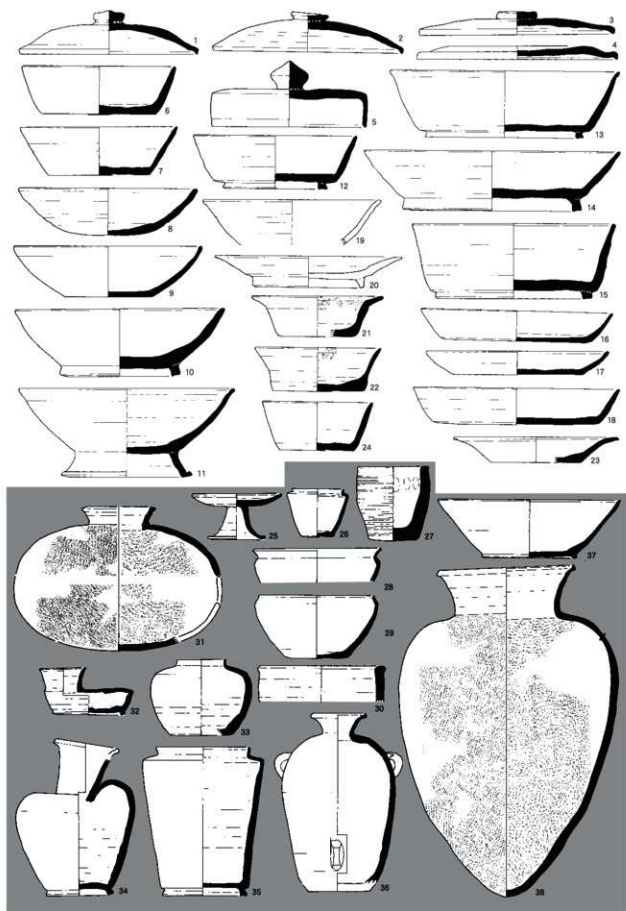
須恵器 供膳具の坏類と蓋が点数の多くを占めるがそれらに加えて、仏具と思しきものも多い。須恵器の坏類などは窯跡出土の資料を基準にして、法量等を加味しながら分類するべきであるが、本県の場合、発掘された窯跡資料が少なく、その編年が十分になされていない。本遺跡と尾根を挟んだ西側には北陸有数の規模とされる王子保窯跡群の存在が知られているが、発掘調査されたのは本遺跡が盛行する8世紀後半から9世紀のもではなく、一部は重なるもの前段階までのものに止まっている。両遺跡では8世紀後半から9世紀を中心に、その前後の時期のものも散見され、しかも一般的な集落では出土しないものも多く見られる上に、金属器・仏具を模したのではないかと思しき器形もあって、分類そのものが不安定な要素が多く見られる。ここでの分類では法量については目安として、形状を中心とした。

ちなみに()内の番号は第19図に同じとなっている。

無台坏(坏A) 平坦な底部から直線に立ち上がるもので、直線的に斜めに開くもの(6)、丸く内湾しながら立ち上がるもの(8)の大略2つのタイプに分けられる。前者には直線的に開いた口縁端部のみをわずかに外反させるものもある。口縁端部は先細りとなるものがほとんどであるが、先のタイプの後者には、端部を丸くするものもある。底部の調整は回転ヘラきりののち、弱いナデか未調整に近いものが主体である。また底部からの立ち上がりがゆるく丸みをおびて平底にならないものもあって、このタイプの底部には「スノコ状圧痕」が残されているものが多い。逆に底部からの立ち上りを意識して角を持たせた、一般的な無台坏とは明らかに異なるつくりのもの(7)、底部を非常に丁寧なケズリ調整のまま残すもの(9)もある。どこまで一般的な無台坏とし、どこから特殊なものとするか、特に苦慮する器種である。

高台坏(杯B) 直線的に斜めに開き端部になるもの(12・15)と、口縁端部のみをわずかに外反させるもの(13)の大略2つのタイプに分けられる。立ち上がりがより垂直になるものは、口径が17cmを超えるものに見られるが、いずれも口縁端部をわずかに外反させる。皿、もしくは高盤にも分類される器種で高台が付き、口径に比して坏部が明らかに低いもの(14)についてもここに含める。

杯蓋 摘みが付くもの(有蓋)(1・2・3)と、摘みが付かないもの(無蓋)(4)に加えて、平坦な天井部



第19図 大塚向山遺跡・山腰遺跡出土土器種類分類図（アミ部分は1/6、他は1/3）

から垂直に口縁となる一般的には短頸壺にともなうもの(5)の3タイプに分けられる。ここでは明らかに無蓋のものは数点のみで、摘みが付く有蓋のものがほとんどであると想定される。典型的な宝珠形の摘みも少なく、擬宝珠形、さらに扁平となったものが主体である。完全に扁平化しているものも数点ある。天井部はやや丸みのあるもの(2)と、平坦面を有するもの(1)があるが、個々の分類は不可能である。

壺 丸く立ち上がる深い坯身に高台が付くもので、杯部が直線的に開くもの(10)と、内湾しながら開くもの(11)があるが、後者が多い。口径が15cmを超える大きめのものが中心で、12・13cmのより小型のものは少ない。高台を踏ん張るように大きく外側へ突出させるもの(11)もある。

皿(盤) 平底に短い立ち上がりの口縁がつくもので、同じような杯身に高台が付くもの(14)は高台杯とした。口縁がより開いて底部からの立ち上がりが不明瞭なもの(16)、立ち上がりそのものが丸く木製の皿を思わせるもの(17)もある。底部は回転ヘラきり後、ナデ調整未調整に近いものが多い。なかには非常に丁寧なケズリ調整を行うものがあり、調整の影響か底部から口縁への立ち上がりが角を持つように明確なもの(18)も一定量存在する。いずれも口径が15cmを超えるものがほとんどである。

鉢 口縁が屈曲する広口の鉢(29)と、内傾する口縁が端部となるいわゆる鉄鉢タイプのもの(30)が中心となる。体部の底部近くにズリ調整をするものがある。このほかに、無台杯に近く口径に対してより器高が高く身が深いもの(24)、器壁が厚く直口のもの(27・31)、さらに角のある肩部から短い口縁が立ち上がる広口短頸壺に近いもの(26)もある。直口のもの全体がわかるものが少なく不明点が多い。

高杯 杯蓋を上下逆にした杯部にすかしのない長脚がつくもの(25)である。脚のみのものが多く、坯部が蓋に含まれている可能性も否定できない。杯部が深く、施軸陶器の「香炉」に近いものもある。

壺 壺として呼称される器種がもっともバラエティーに富んだものであるが、大きく分けて長頸のもの(2)と短頸のもの(5)の2種類に分けることができる。長頸のものには大きな耳がつくと思われるものがあるが、長い耳が付く双耳瓶の確実なものは見当たらない。長頸壺の頸部から口縁部のみ、または胴部のみ図化できたものが多く、全体が判るものは少ない。口縁部も大きく開くもの(34)や、口縁部を持つものなど個体差が大きい。短頸壺は肩部が丸いもの(34)はあるが、肩部が角張るものはない。広口短頸壺には全体を図化できたもの(35)がある。胴部中央に小さな把手が付くものも広口短頸壺であろう。このほかに長い胴部に肩部と下半に環状の把手が三方向に付き、短く小さな口縁がつくもの(36)がある。

瓶 横瓶(31)と平瓶(32)の2種類である。横瓶そのものが少なくなる地域だけに本遺跡で5点も図化できたのは珍しいものと考えている。平瓶は当該期にある一般的なものより変化したものが目立つ。

甕 丸い胴部のすばまった頸部から口縁が開くもので、内外面をタタキ調整する大型のもの(38)である。口縁は面を取るもの、短く端部が立ち上がるもの、先細りのものなど個体差が大きい。底部は尖底気味のものもあるが、基本的には平底である。1点だけしっかりした平底のものがあるが、北陸では通有のものではない。また本来は土師器の器形である長胴甕もある。

その他の特殊品 灯明器(灯明皿) これまで分類してきたものに含まれないものとして、無台杯の口縁端部が短く外反して屈曲するもの(21・22・23)がある。顕著な煤の付着が認められることから、灯明皿の用途として、特別な器種であると考えられる。

浅鉢 壺の大型品とも考えられるもので、中世陶器の摺鉢に近い器形のもの(37)である。数は少ない。

施軸陶器 灰軸陶器がほとんどで、壺(19)・皿(20)のほか器形さえ特定できないものもある。(赤澤)

*分類については奈良文化財研究所 第70冊『平城京発掘調査報告XVI』2005年国立奈良文化財研究所の「第7表須恵器 器種分類」と「第90図 須恵器の器種」を参照した。

第4章 大塩向山遺跡

第1節 C地区 G地区背後のI地区から一段北へ登った尾根続きで、遺跡南部のP地区と同様に本遺跡では東の日野山側（沖積地）に先端が大きく突き出する尾根である。尾根の北側では小さな谷を挟んで既に報告したE地区背後の尾根に平行する。向山の主尾根から東へ約200m強、標高にして40mほど降った、東に伸びる尾根先端部分を中心の約2,000㎡を調査対象とした。調査区の西端が最も高い109m強あるが、尾根先端部との間に1mにも満たない鞍部を経て、先端部では108.5mとなってからは、北北東に尾根が伸びて次第に山麓部へ至る。調査範囲で最も低いのは、この先端部分の標高101m付近である。この先には試掘調査でB地区、その谷筋の平坦面がA地区とした位置となる。そして谷を挟んだ北側が国営事業地であるが、谷に面した平坦面がD地区で、北に接するのが本調査をして先に報告したE地区である。C地区の両側は人間の登攀が困難な急斜面であるが、C地区のある向山の主脈に近い尾根も試掘しているが、遺構・遺物ともに確認されていないことは試掘調査の記述で述べた。

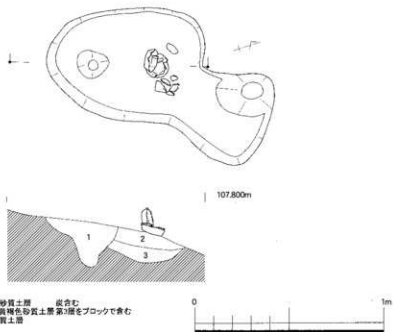
調査は標高102mの尾根先端部まで表土の除去を行ったが、一部、須恵器などの小片は出土するものの、顕著な遺構・遺物は確認されなかった。堆積していた土は厚いところでも20cm程度で、腐葉土を除去すれば遺物が出土する状況であった。遺構は小さなピットから、平面形や断面の形状が不整形で、底からの立ち上りが明確でなく、人工的な遺構としては不明確なものまで約90基ある。その主要なものは一覧表とした。そのなかで平面形や、底からの立ち上がりが直線的になり、人工的に掘削されたものと、または覆土が明らかに周辺からの流れ込みなどとは異なり、炭が含まれたりするものなどについて個々の説明をする。北東の急斜面のものは後に述べるような被熱を受けたものは見当たらず、遺構の平面形、立ち上がりともに不明瞭のものが多く、遺物の出土も皆無に近いことから、風倒木の痕跡であると考えられる。図化できる遺物を出土したのはS K01（第21図）の1基のみで、そのほかは図化できるほどの遺物がない。明らかにその場で火を焚いて、土坑の壁が被熱を受けたと想定されるものは5基ある。尾根先端の最高所から東斜面へ若干下った位置に2基（S K24・S K74）、尾根先端からやや主尾根に引いた、調査区の中で鞍部となる南東斜面に3基（S K51・S K63・S K81）確認されている。以下、ここの遺構の大きさなどのデータは一覧表にある。

S K01（第21図） 尾根先端の最高地点である108.5mの位置から北へ5mほど離れた地点で検出された。長軸は南北からやや東に傾く。ピットが2基重なったような瓢箪形を呈するが、土層断面からも2基のピットが重複していると考えられる。表土を除去した検出面で須恵器の坏2個体（第23図1・11）が入れ子状で出土している。この後に説明する5基とは異なり、土坑壁面などに被熱の痕跡は見られない。

S K24（第22図） 尾根の先端から南東に1mほど下った、標高107m付近に位置する。平面形は四隅がやや丸い長方形を呈し、長軸は南北からやや東に傾く。土坑の底と壁面に被熱を受けているが、特に北東側（平野側）が著しく被熱を受けた状況である。以降に説明する4基の焼土坑とは異なり、覆土の中層に炭化物・焼土を多く含んでいる。

S K51（第22図） 調査区の中で鞍部の尾根筋から南東に1mほど下った、標高107m付近に位置する。北側には隣接するようにS K63が位置する。平面形は四隅がやや丸い長方形を呈すると思われるが、西と南を立ち木の根で大きく攪乱されており、明確ではない。長軸はほぼ東西にあるものと考えられる。土坑壁面の一部に被熱を受けているほか、覆土の底面近くに炭化物が大量に残されていた。

S K 63 (第22図) 調査区の中で鞍部の尾根筋から南東に1mほど下った、標高107.5m付近に位置する。南側にはS K 51が、北側にはS K 81が隣接するようにあって、この2基の焼土坑に挟まれている。平面形は四隅が丸い方形を呈し、長軸は南北からやや東に傾く。南側の一部を浅い皿状のピットで切られている。土坑の壁面に被熱を受けているほか、覆土の底面近くに炭化物が大量に残

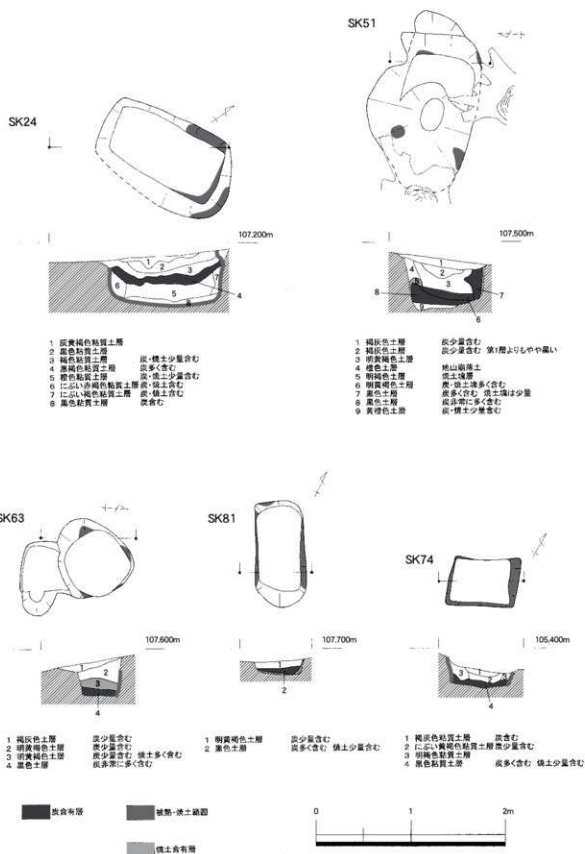


第21図 大塚向山遺跡C地区S K 01遺物出土状況図(縮尺1/20)

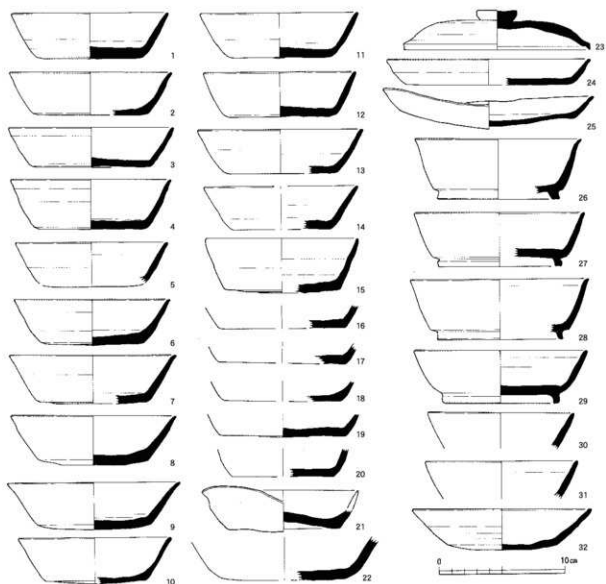
第7表 C地区土坑一覧表

No	位置	平面形状	縦横(m)		深さ(m)	断面形状	覆土	備考
			東西	南北				
1	A 2	瓢箪形	62	122	24	塊状	灰褐色土	第21図
2	A 2	瓢箪形	16	22	10	中央が盛り上がる	灰褐色土	
3	B 2	楕円形	30	24	20	塊状	灰褐色土	黒炭層片出土
4	B 2	楕円形	21	41	10	中央が盛り上がる	灰褐色土	
5	B 2	楕円形	710	90	25	塊状	灰褐色土	
9	B 2	塊状	30以上	20	8	塊状	灰褐色土	黒炭層片出土
12	B 1	楕円形	80	20	10	塊状	灰褐色土	
13	B 1	楕円形	26	39	20	塊状	灰褐色土	
15	B 2	楕円形	80	21	10	塊状	灰褐色土	
16	B 1	楕円形	28	24	10	塊状	灰褐色土	
24	C 3	長方形	148	92	52	靴状	灰褐色土など	第22図
27	A 3	楕円形	26	32	14	塊状	(上) 灰褐色土 (下) 灰褐色土	
28	A 3	楕円形	40	26	16	塊状	灰褐色土	
29	A 3	楕円形	40	42	8	靴状	黄褐色土	
30	A 3	楕円形	40	39	10	靴状	黄褐色土	
31	A 3	不整形	100	90	6	靴状	灰褐色土	
32	A 3	不整形楕円形	66	58	6	靴状	灰褐色土	
33	A 3	楕円形	64	60	6	靴状	灰褐色土	
34	A 3	楕円形	46	36	5	靴状	灰褐色土	
35	A 3	楕円長方形	20	68	6	靴状	灰褐色土	
36	A 3	楕円形	44	70	5	靴状	灰褐色土	
37	A 3	楕円形	42	30	8	靴状	灰褐色土	
38	A 4	楕円形	52	44	4	靴状	灰褐色土	
39	A 5	楕円形	54	38	12	靴状	灰褐色土	
42	B 2	不整形楕円形	44	69	8	靴状	灰褐色土	
43	B 2	不整形	30	20	16	靴状	(上) 灰褐色土 (下) 灰褐色土	
44	B 4	楕円形	60	40	10	靴状	灰褐色土	
45	B 4	楕円形	18	22	12	塊状	灰褐色土	
46	B 4	楕円形	24	40	8	靴状	灰褐色土	
47	B 4	楕円形	70	32	8	靴状	灰褐色土	
48	B 4	楕円形	46	36	12	靴状	灰褐色土	
49	B 5	楕円形	40	52	4	靴状	灰褐色土	
50	B 5	楕円長方形	30	56	11	靴状	灰褐色土	
51	B 5	楕円形?	160	136	36	靴状	焼土坑	第22図
53	B 5	楕円形	68	42	14	靴状	灰褐色土	
54	A 4	楕円形	38	41	10	塊状	炭化物を含む	
55	A 4	楕円形	30	38	10	塊状	灰褐色土	
56	B 2	楕円形	30	26	10	塊状	灰褐色土	
57	B 2	楕円形	36	60	8	靴状	灰褐色土	
58	B 2	楕円形	100	60	12	靴状	灰褐色土	
60	B 2	不整形楕円形	78	180	11	靴状	灰褐色土	
63	B 5	不整形楕円形	84	76	40	靴状?	焼土坑	第22図
66	A 4	楕円形	34	38	14	靴状	(上) 灰褐色土 (下) 灰褐色土	
69	A 5	楕円形	56	62	9	靴状	灰褐色土	
70	A 5	楕円形	36	40	17	塊状	灰褐色土	
71	A 2	楕円形	46	38	10	靴状	灰褐色土	
72	A 2	不整形楕円形	38	32	8	靴状	灰褐色土	
73	A 2	不整形楕円形	72	26	8	靴状	灰褐色土	
74	C 2	楕円長方形	76	48	28	靴状	焼土坑	第22図
81	B 5	長方形	36	112	16	塊状	焼土坑	第22図
82	A 2	楕円形	100	150	18	靴状	灰褐色土	
83	B 5	不整形楕円形	50	70	7	靴状	灰褐色土	

注: 番号が欠番のものは検討の結果、銅板と判断し、この一覧から削除した。(以下の一覧についても同じ)



第22図 大塚向山遺跡C地区焼土坑遺構図(縮尺1/40)



第23図 大塚向山遺跡C地区出土遺物実測図(縮尺1/3)

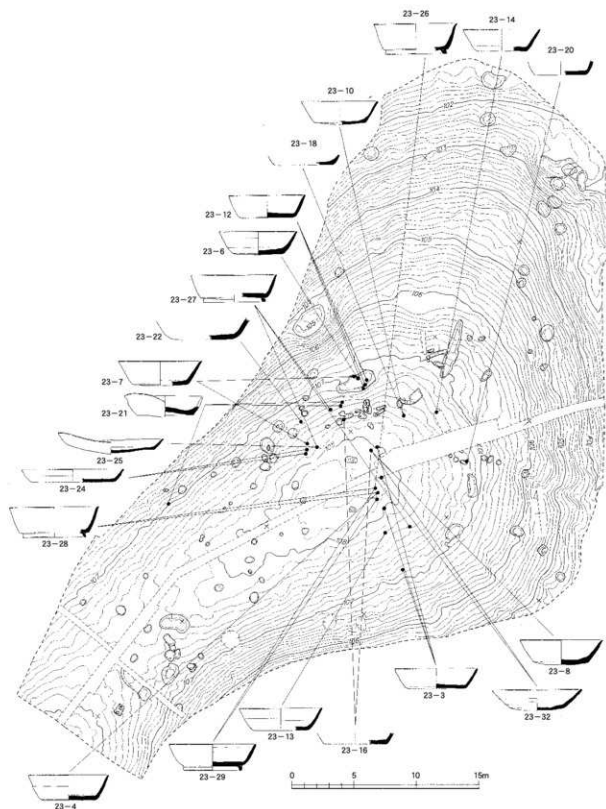
されていた。

S K 74 (第22図) S K 24から東へ2 mほど下った、標高105m付近に位置する。平面形は長方形とし長軸を東西方向とするが、長軸と短軸の長さにあまり差がなく、方形に近い。底から角度を持って壁面へ立ち上がる。土坑の底と壁面ともに非常に被熱を受け、さらに底面近くの覆土には炭化物が多く残されていた。

S K 81 (第22図) 調査区の中で鞍部の尾根筋に近い位置、標高108m付近に位置する。平面形は四隅がやや丸い長方形を呈し、長軸は南北からやや東に傾く。特に北・東・西の壁面に被熱の痕跡が見受けられる。この調査区で検出された焼土坑で、最も浅いものである。

以上、焼土坑は5基あるが、S K 63が円形に近い平面形で残りの4基が方形の平面形である。また覆土についてもいずれも炭化物を多く含むが、S K 24のみが中層に含み、他の4基が下層に含んでいる。その位置も、尾根先端の2基と先端からやや奥まった鞍部に3基とに別れ、見晴らしのいい先端のピークにないことに注目される。

これらS K 24・51・63・74・81の5基の焼土坑からは遺物は出土していない。



第24図 大塚向山遺跡C地区主な出土遺物地点図（遺構：縮尺1/300・遺物縮尺1/6）

遺物 出土した遺物は確認できた限り須恵器で、無台杯23点、高台杯4点、蓋1点、皿2点、不明2点の合計32点が図化できた（第23図）。無台杯には通常のものとは底部からの立ち上がり異なるもの（第23図8・15など）もいくつか見られる。また焼歪みが著しく、通常の使用に耐えられないと考えられるもの（第23図21・25）も2点含まれている。壺・鉢・甕などの中型・大型品はない。（赤澤）

第2節 G地区

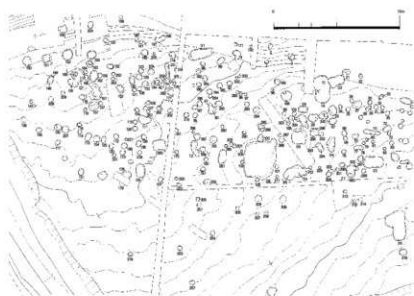
大塩向山遺跡の中では沖積地面に面した山麓の平坦面とその西側の斜面で、直接前面に山腰遺跡が隣接する地区である。この地区の斜面上の尾根にはI地区が位置する。試掘調査段階では平坦面と西側の部分をG地区、その北側に接する小さな谷部分と斜面の一部をH地区とし、当初は両者をあわせてGH地区と呼称していた。しかし調査の結果、H地区の部分にあたる範囲では遺構はなく、遺物の出土も数点にとどまり、G地区からの流れ込みと判断したため、その後はG地区と呼称している。南北最大幅約60m、東西最大幅約23mの台形の平坦面(約1,200㎡)と、その西側のI地区に連なる斜面の下部(約1,000㎡)とその周辺を調査対象範囲として、約3,006㎡を調査対象とした。平坦面は南になるほど高くなり南端で標高63.7mを、北側になるほど低くなり北端で標高61.7mを測る。つまり平坦面での比高差は2mほどであるが、現地で調査していても、数字に示したほど比高差は感じなかった。斜面の部分については足場が不安定で作業が困難なこともあって、試掘段階で掘削したトレンチ(第25図の全体図で白抜きになっている部分)を中心にして、表面の腐葉土を除去する作業を中心とした。遺物の出土も若干あった程度である。また山腰遺跡に面した平坦面の斜面は堅穴であるSK18の東側の壁面がないことから、それより南の縁辺部は排水路で削り取られていると考えられ、立ち上りが急な崖面となる。しかしそれより北側は水路がやや離れて掘削されており、やや緩やかな傾斜で自然崩落はあるものの、古代から大きな変化はないものと考えられる。また平坦面の北側も南側も次第に急斜面が迫る。

第8表 G地区土坑一覧表

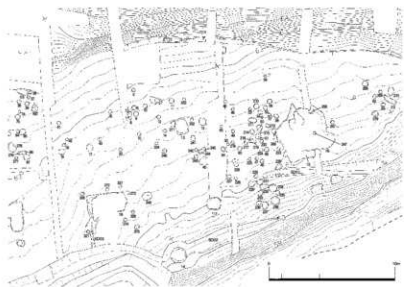
番号	グリッド	形状	規模 (cm)			断面の形状	覆土	備考
			長軸	短軸	深さ			
1	C 5	略長方形	170	80	15	皿状	褐色土	
2	D 5	不整形	134	65	14	皿状	炭混じり褐色土	
3	D 4	楕円形	92	43	22	箱状	炭混じり灰褐色土	
4	C 4	楕円形	128	64	24	2段階り 箱状	暗褐色土	
5	C 4	隅丸方形	110	110	44	箱状	暗褐色土	
6	B 6	おむすび形	81	71	18	皿状	炭混じり黒色土	
7	B 6	楕円形	104	96	18	皿状	炭混じり黒色土	
8	C 4	隅丸方形	265	245	22	皿状	炭混じり褐色土	第28図
9	B 5	楕円形	108	69	31	板状	暗褐色土	
10	D 4	溝状	133	28	17	箱状	暗褐色土	
11	C 4	不整形	96	57	14	皿状	炭化物混じり暗褐色土	
12	B 5	不整形	135	49	22	皿状	炭化物混じり茶褐色土	
13	E 3	隅丸長方形	127	96	35	箱状	赤褐色土	
14	E 2	楕円形	140	130	25	不明	暗褐色土	
15	F 3	隅丸長方形	104	65	25	不明	暗褐色土	
16	F 3	隅丸方形	425	399	22	不明	炭混じり褐色土	第29図
17	E 3	不明	120	110	15	不明	赤褐色土	
18	D 3	隅丸方形	410	318	16	不明	炭混じり褐色土	第31図
19	D 4・5	楕円形	216	110	9	皿状	暗褐色土	
20	C 5	溝状	158	25	14	板状	赤褐色土	
21	C 4	楕円形	100	65	14	中央が盛り上がる	暗褐色土	
22	D 4	略長方形	160	75	17	皿状	炭化物含む赤褐色土	
23	G 3	溝状	102	32	20	箱状	炭化物混じり褐色土	
24	C 4	二重円形	130	70	20	皿状	炭化物含む褐色土	焼土坑
25	C 4	正方形	85	80	13	皿状	炭化物含む褐色土	
26	D 3	不整形	237	157	13	皿状	炭化物含む暗褐色土	

注 番号が欠番のものは検討の結果、倒木痕と判断し、この一覧から削除した。

第2節 G地区

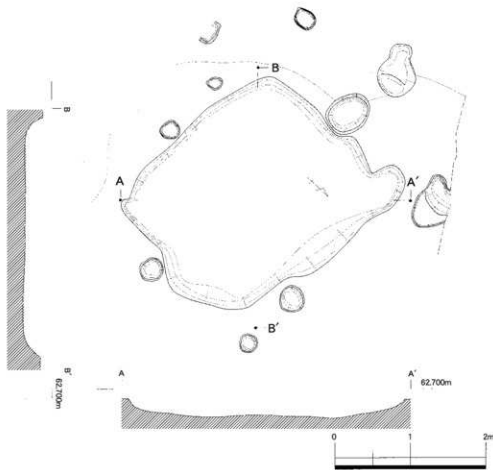


第26图 大塚向山遺跡G地区南部遺構配置図(縮尺1/300)



第27图 大塚向山遺跡G地区北部遺構配置図(縮尺1/300)

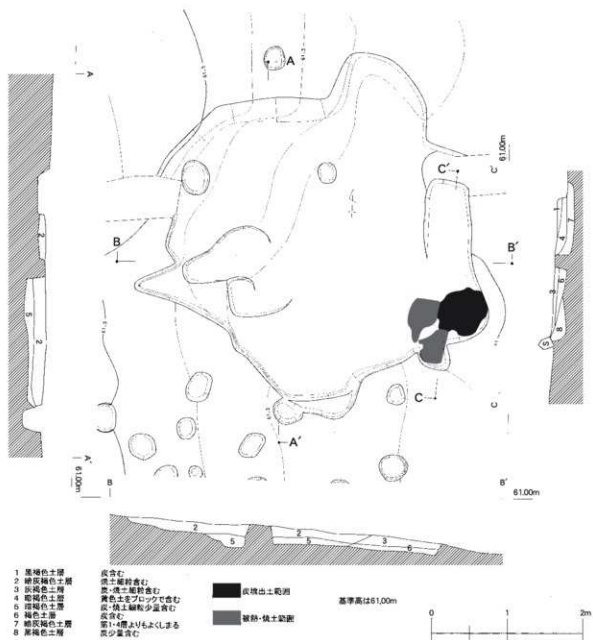
番号	形式	規模 (CD)		断面の形状	覆土	備考	番号	形式	規模 (CD)		断面の形状	覆土	備考
		長軸	短軸						長軸	短軸			
308	c.4 楕円形	56	32	楕状	炭化物混じり暗褐色土		323	C.5 円形	—	32	18	楕状	炭化物混じり赤褐色土
310	C.4 円形	27	26	13	楕状	褐色土	324	C.4 円形	27	25	17	楕状	炭化物混じり褐色土
311	C.4 円形	26	25	13	楕状	暗褐色土	324	C.4 楕円形	46	36	19	楕状	炭化物混じり暗褐色土
312	C.4 楕円形	33	26	29	楕状	暗褐色土	325	D.4 円形	34	34	22	楕状	暗褐色土
313	C.4 円形	34	33	13	楕状	暗褐色土	326	D.3 略方形	28	25	14	楕状	暗褐色土
314	C.4 円形	36	36	26	2段張り楕状	褐色土	327	D.3 円形	35	24	16	楕状	褐色土
315	C.5 溝丸方形	38	37	23	楕状	炭化物混じり赤褐色土	328	D.3 円形	34	34	19	楕状	暗褐色土
316	D.4 楕円形	56	48	46	楕状	炭化物混じり褐色土	329	C.4 円形	21	20	11	楕状	炭化物混じり暗褐色土
317	D.4 円形	16	16	20	楕状	暗褐色土	330	B.4 円形	26	24	23	楕状	炭化物混じり暗褐色土
318	B.5 楕円形	38	34	22	楕状	炭化物混じり暗褐色土	331	B.5 略円形	33	33	24	楕状	炭化物混じり暗褐色土
319	B.4 円形	40	37	23	楕状	炭化物混じり褐色土	332	E.3 円形	25	24	13	楕状	暗褐色土
320	C.4 楕円形	30	20	14	楕状	褐色土	333	E.3 円形	25	25	32	楕状	暗褐色土
321	D.3 円形	24	22	42	楕状	暗褐色土	334	E.3 略円形	28	25	34	楕状	赤褐色土



第28図 大塚向山遺跡G地区SK08遺構図(縮尺1/100)

堆積土は山裾の平坦面で厚くても30m程度、山裾から離れた中央部で10mまでである。斜面では腐葉土を除去した段階で地山が確認されている。G地区は須恵器の窟跡があることを想定していたために、山麓部では必要以上に地山を掘り抜いている（第25図土層断面図の3層）。遺構は平坦面の南半分にピットが集中するが、建物として想定できる並びのものは確認できていない。中央では堅穴状のやや大きな土坑が1基（S K08）検出されているが、その他の大きめの土坑からは古代の土器がまとまって出土しているのではないので、後世のものである可能性も否定できない。ピットは平坦面南側の山裾、S K08周辺と、北側のS K16周辺に多くが集中している。特に南側の縁辺部にはピットもほとんどないが、北側の斜面には幾つかピットが検出されている。また覆土や出土物についても大きな違いは見られなかった。平坦面の北東の崖面近くで壁面に貧弱ではあるがカマドを持つ堅穴住居が2棟検出されている。

S K08（第28図） 平坦面の南側に位置する、隅が丸い長方形を呈する堅穴状の土坑である。ほぼ東

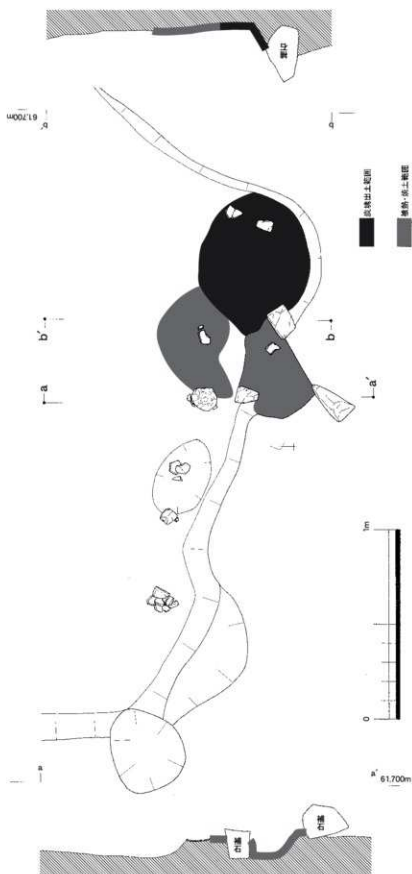


第29図 大塚向山遺跡G地区S K16遺構図（縮尺1/50）

西に長軸が向く。長軸280cm、短軸235cm、深さ20cmを測る。北西のコーナーが突出するように膨らみ、別のピットが重複していた可能性がある。また北西の長辺と北東の短辺が膨らみ直線ではないが、南西の長辺はほぼ直線である。底面はまったくのフラットではないが、大きな凹凸もない。底面からの立ち上りも緩やかで、断面の形状が皿状を呈する。周辺、特に山裾との間には多数のピットがある。出土した遺物で図化できたのは、壺口縁(第32図1)と高台杯2点(第32図12)の3点の須恵器である。なお北側にあるSK04からの土器と接合関係にあるものが2点ある。

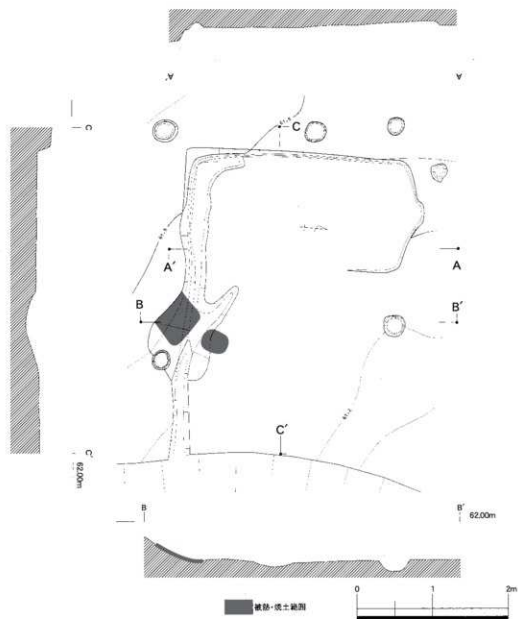
SK16(第29・30図)

平坦面の北端、斜面の法面近くに位置する。基本は平面形が方形に近いが、攪乱を受けて不整形となっていると表現したほうが的確かかもしれない。特に西側が攪乱を受けて大きく改変されているようで、壁も残されておらず、床面も傾斜に沿って凹

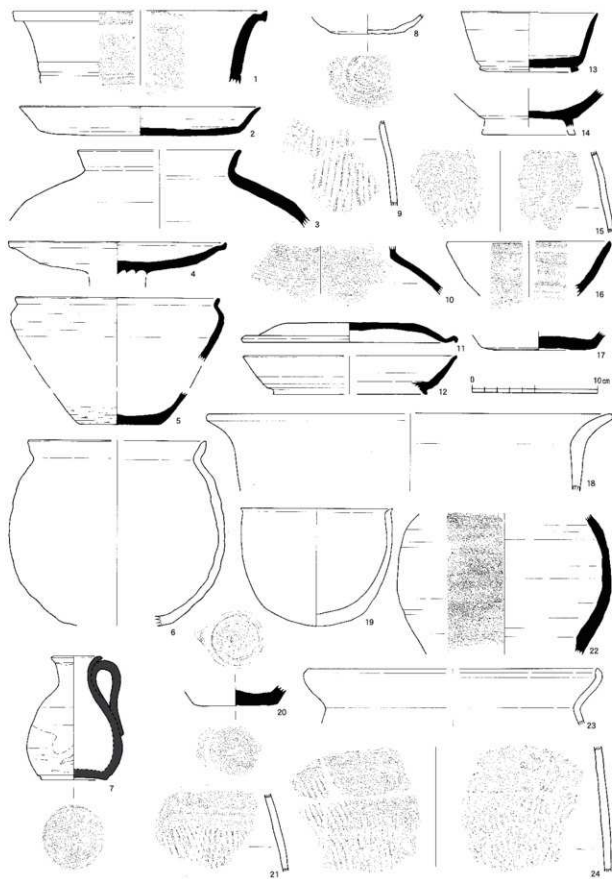


第30図 大塚向山遺跡G地区SK08遺構詳細図(縮尺1/20)

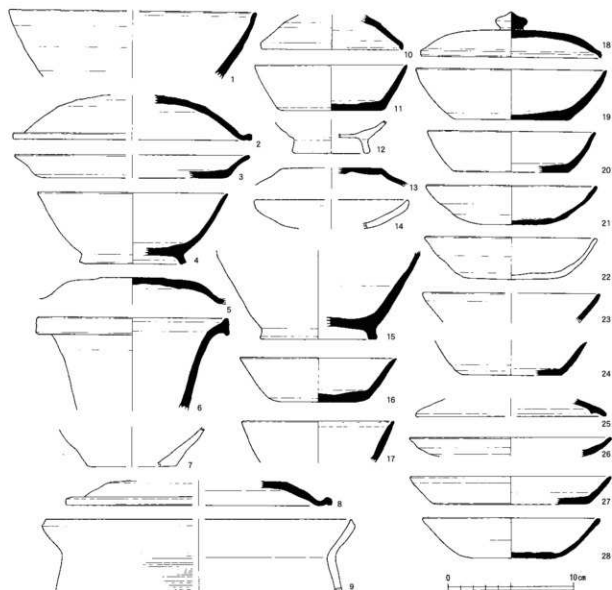
凸が目立つようになる。明確な掘り込みとカマドのような遺構が存在することから、通常の集落遺跡に存在する竪穴（住居）に類似すると考えている。南東のコーナー部分と思われる位置にカマドと想定される遺構が確認されている。カマドのソデの構築材（ソデの芯）に使われていたと考えられる石が、元位置ではないが3点残されていて、この石を中心に壁の一部が被熱を受けて、焼土も広がっていた。さらにこの石と焼土の広がる部分の東側で、壁が最も外に影らんでいる部分には炭化物が塊となり、東西に74cm、南北に60cm広がっている。柱穴と想定できるピットは確認されていない。またこの付近で土師器の小型甕と鉢？が3点（第32図6・18・19）出土している。さらにS K 16の覆土からではないが、カマドの周辺でも須恵器などが幾つか出土している（第50・51図）。さらに図化することができなかった



第31図 大塩向山遺跡G地区S K 18遺構図（縮尺1/100）



第32図 大塩向山遺跡G地区遺構出土遺物実測図（縮尺1/3）



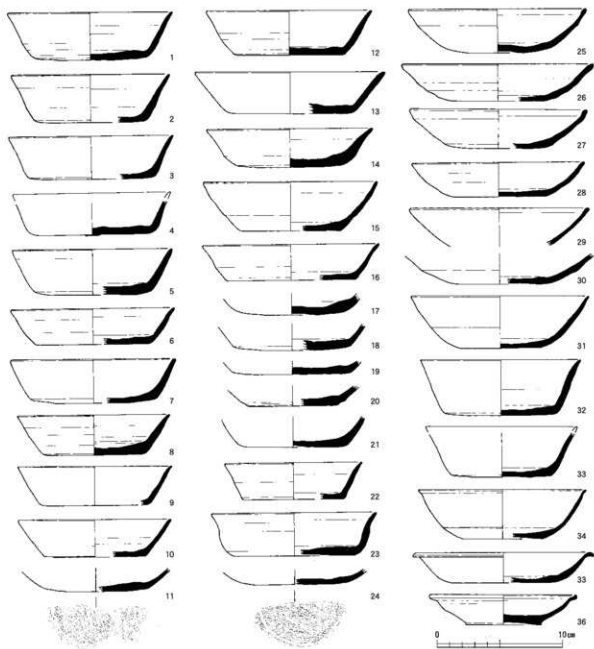
第33図 大塩向山遺跡G地区遺構出土遺物実測図(縮尺1/3)

が、やや大型の土師器胴部片がこのほかにもある(第34図)。しかしこれらの破片はそれぞれが丸みを帯び、器高が高くなるいわゆる一般的な長胴甕の破片ではない。調整についても、越前で通常見られる煮沸具の甕に見られるタタキ調整やカキメ調整は残されていない、基本的にはナデ、もしくはユビ押さえがかすかに観察される。これらのことからこの土師器片は「製塩土器」の可能性も想定される。ここで唐突に「製塩土器」の可能性を指摘したようであるが、今回の報告では「製塩土器」として抽出できたものはないが、既に報告した山腰遺跡ではタイプが異なるものの製塩土器が出土している。また大塩向山遺跡でもE地区でもSK16から出土しているものと同じような土師器の破片が出土している。このように単に通常の集落から出土するものとは異なる煮沸具、もしくは土師器に注意する必要があると考えられる。

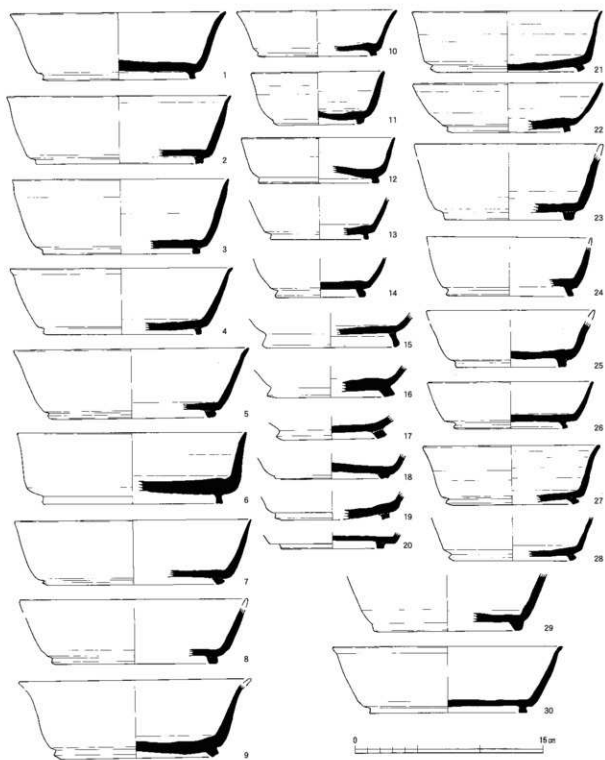
SK18(第31図) 平坦地の北側、SK16から南東へ5mほど離れた斜面の法面近くに位置する。コーナーが直角になる方形と考えられるが、北側は壁面が次第に低くなってなくなり、東側は平坦面全体が水路の掘削で削平されているものと考えられる。一部しか残されていないので平面形や規模は不明で



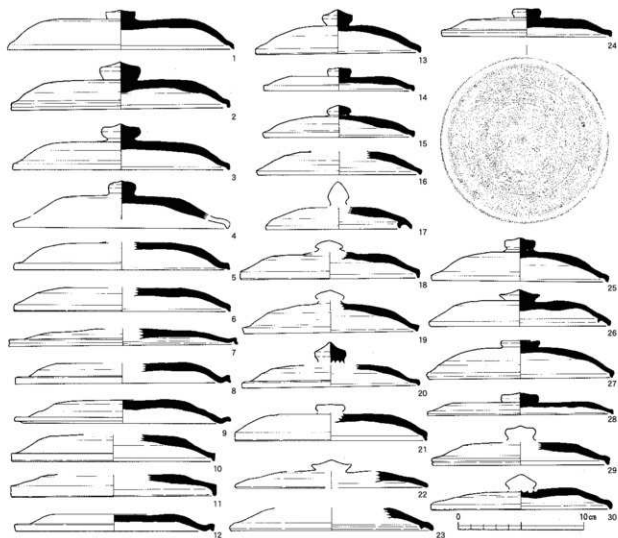
第34図 G地区SK16出土で図化できなかった土師器(煮沸具)破片(左:表面・右:裏面)



第35図 大塩向山遺跡G地区出土遺物(無台杯はか)実測図(縮尺1/3)



第36图 大塚向山遺跡G地区出土遺物(高台杯)実測図(縮尺1/3)

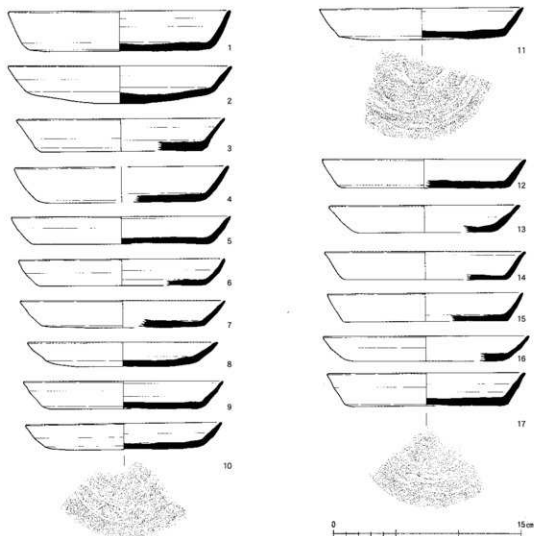


第37図 大塚向山遺跡G地区出土遺物(蓋)実測図(縮尺1/3)

あるが、四つあるはずのコーナーが南西のみしか残されていない。つまり残されているのは西辺と南辺の一部の壁と床面である。残されていた壁は、西辺がコーナーから北側へ228cm、南辺が同じくコーナーから東側へ330cmを測る。深さは最も残りのよい南西コーナー付近で16cmを測る。住居内に柱と考えられるピットは見当たらなかった。南辺の中ほどにカマドと考えられる遺構が確認されている。出土した遺物は図化できたのは壺頸部? (第32図10)、高台杯 (第32図13)、埵口縁? (第32図16) の3点の須恵器である。

以上の大きな3つの遺構についてのみ取り上げて説明したが、この他の遺構については特に取り上げるほどの特徴は見当たらない。しかしS K04からはS K08と接合関係があるものをはじめ、4点の須恵器 (第32図1・2・12・20) と1点の土師器 (第32図8) が、またS P156からは灰軸の小壺が出土していることは注目される。また古代以外の遺物が遺構から出土したのはS P40の近世のカワラケに限られ、このことはG地区の遺構のほとんどが古代であることを示すものとも考えられる。

遺物 遺構から出土した遺物として、須恵器37点、土師器13点、灰軸陶器1点、中近世のカワラケ1点の合計52点である (第32・33図)。この中でもっとも注目されるのが灰軸陶器の小型壺 (第32図7) がS P156から完形で出土している。越前は国府のある旧武生市内でもそれほど多く灰軸陶器が出土し



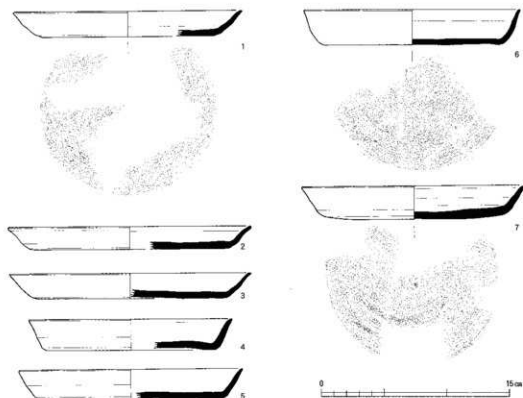
第38図 大塩向山遺跡G地区出土遺物(皿)実測図(縮尺1/3)

ているわけではなく、調査面積にもよるが、これほどの数量を報告することは珍しいことで、小型品であるが特にこのように完形のものがG地区で出土したことは特筆すべきことかと考えている。さらに同じG地区で包含層出土ではあるが、この灰軸陶器と5mほど離れた地点で土師器の小型壺(第47図4)が出土している。器形と大きさも灰軸の小型壺に類似するもので、両者がセットで用いられたか、同じような空間で所有されていたかの可能性も考えられる。先に述べたが、堅穴のカマド付近から土師器の小型壺が出土しているのは、カマドとして機能していたことを示すものと考えられる。このことは大塩向山遺跡も山腰遺跡も煮沸具である壺の出土が極端に少なく、生活の痕跡を唯一ここに見出すことができるものである。

またSP5からは依存状況は決して良くないが、明確に「熙寧元宝」(初铸1068年)と判読できる銭貨が出土している。

包含層出土として須恵器171点、土師器43点、灰軸陶器9点、そして中近世の陶磁器・カワラケが10点の合計276点の土器がある(第35~49図、第78図8~14)。

須恵器の無台坏には一般的なものが多くを占める。しかしC地区の出土土器でも述べたが、立ち上りが通常の杯とは異なるものが数点(第35図32など)ある。底部にスノコ状圧痕を残すもの(第35図11・



第39図 大塚向山遺跡G地区出土遺物(皿)実測図(縮尺1/3)

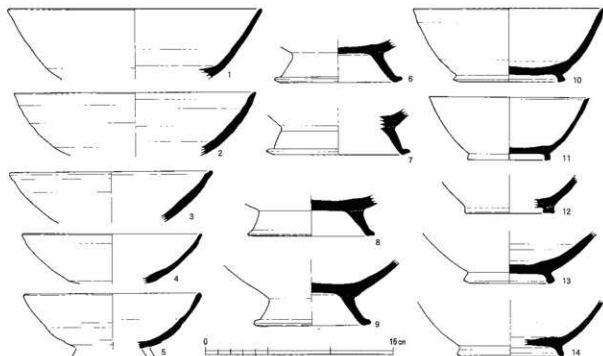
24)は少ない。このほかに皿状にひらく口縁がさらに外反するものがあり、他県の事例では灯明具として分類されているものが目立つ。ここではその中でもより特殊なものについて取り上げる。のちに述べるN地区では多く出土しているタイプに、無台杯の口縁端部が短いもの明らかに外反するものが1点ある(第35図23)。N地区のものは煤が付着しているが、この土器には認めることができない。明らかな平底から角度をもって深めに立ち上がる杯部の口縁端部を丸くおさめて短く外反させるもの(第35図34)、同じようなタイプであるが、やや浅めの杯部で、先のものと比較してやや厚手で、端部の外反もより明確なもの(第35図35・36)の3点も特殊なものである。特に後者のうち1点(第35図36)の内面は摩滅とするよりも、器壁が平滑で硯として使用された可能性がある。ちなみにこのタイプのものは底部からの立ち上りに丸みのある無台杯(第35図25~27)のものと同時期で、9世紀後半の能登(旧)高松町(石川県)周辺の窯跡に見られるものに類似するとの指摘(望月氏)があった。このように分類すると無台杯に含めるが、口縁端部のつくりが異なるものはこのほかにもある(第40図1・2)が、底部の遺存が悪くこれ以上はふれることができない。

高台杯は30点図化した(第36図)。特異なものは見当たらず、口径が18cm前後のもの、15cm前後のもの、12cmほどの小型のものの中中小の3種類がある。

蓋は30点図化した。明らかに無紐のものは1点のみ(第37図12)で、そのほかのものは摘みが付く



第40図 大塚向山遺跡G地区出土遺物(杯・皿)実測図(縮尺1/3)



第41図 大塚山道跡G地区出土遺物(埴)実測図(縮尺1/3)

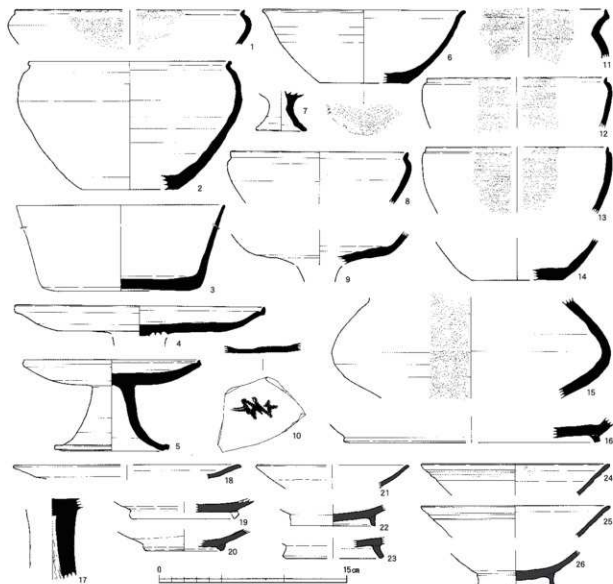
ものである。明らかに蓋の内面が、しかも全面に平滑となつて硯として使用されたものとしか考えられないもの(第35図24)がある。

皿は25点図化した(第38・39図、第40図3)、越前は皿の底部は、回転ヘラきりののちに弱くナデ調整を行うか、ヘラきりのままのものが基本であると認識している。しかし底部を丁寧にケズリ、その後ナデなどを行わないで、むしろケズリを見せるように残すものがある(第38図10~17・第39図1~7・第40図3)。ケズリも非常に丁寧なもの(特に第39図1・6・7、第40図3など)から、あまり丁寧とは言えないもの(例えば第38図10・11・17など)まであって、一概にこれらが丁寧なつくりのものとは言えない。

埴は脚の部分も含めて14点図化した(第41図1~14)。口径が20cmを超える大型のものから、12・3cmの小型のものまである。脚の端部が大きくつまみ出すように突出するもの(第41図6~9)は、口径が20cm近くなる大型のものになるのであろう。

鉢には口縁端部を小さく屈曲させるもの(第42図1・2・8・12・13)と頸部があつて端部を積み上げるもの(第42図11)などがある。前者については越前町佐々生窯跡の報告書では鉄鉢に分類されているものである。またこれら鉢の底部と考えられるものもある(第42図14)。鉢よりも埴に近いもの(第42図6)もあって、このタイプは先に無台埴でも特殊で灯明具の可能性も指摘したタイプの杯部が深いもの(第35図35・36)とも考えられる。また無台埴に近いが杯部がかなり深くなるもの(第42図3)もあるが、器高を完全に復元できないため特定はできない。高杯は4点あるが、1点は杯部の一部のみで確実ではない(第42図9)。1点のみ完形で(第42図5)、もう1点は脚が無いが、蓋の積み部分の欠損とは考えられないので高杯とした(第42図4)。また脚部だけのものもある(第42図17)。

このほかに器形など特定できないものに壺の胴部?(第42図15)、浅鉢の底部(第42図16)、何らかの脚(第42図7)などもある。ちなみに墨書土器は皿の底部かと考えられるものに、「大十」と書かれた

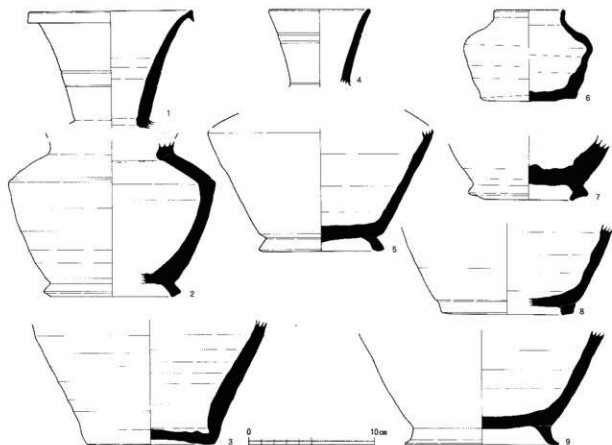


第42図 大塚向山遺跡G地区出土遺物（鉢・高坏・灰釉陶器ほか）実測図（縮尺1/3）

ものがあり、「本」の異体字ではとの指摘を受けた（第42図10）。

壺としては10点図化した（第43図、44図1）。完形となるものはないが、基本的には厚手で短い脚とするよりも高台と表現するようなものがつく胴部に、長い頸部から端部がある口縁がつくものが多い（第43図1・2・5・7～9、第44図1）。口縁に段を持たないものは小型の壺であろう（第43図4）。脚の付かない平底は1点のみである（第43図3）。完形で出土した小型の壺が1点あるが（第43図6）、小さいが厚手のつくりで、成形もごこちない。

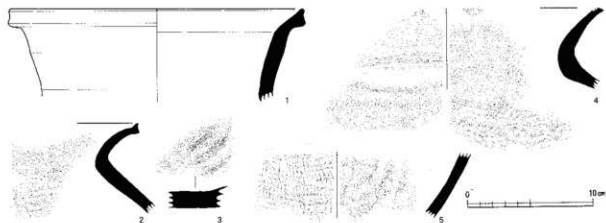
甕は6点図化した（第44図2・4・5、第45・46図）。口縁があるものは3点で、大きく外反して胴部に面をもつもの（第46図1）、口縁端部を上へ積み上げるもの（第44図2）、口縁が短いもの（第45図）に分かれる。また越前においては古代の須恵器甕は丸底、もしくは尖底気味にはなるものの平底はないが、ここでは平底が1点ある（第46図2）。平底の甕は7世紀末に東海地方で出現し、北陸では9世紀末には見られるとのことであるが（望月氏の指摘）、少なくとも越前では確実なものはないようである。



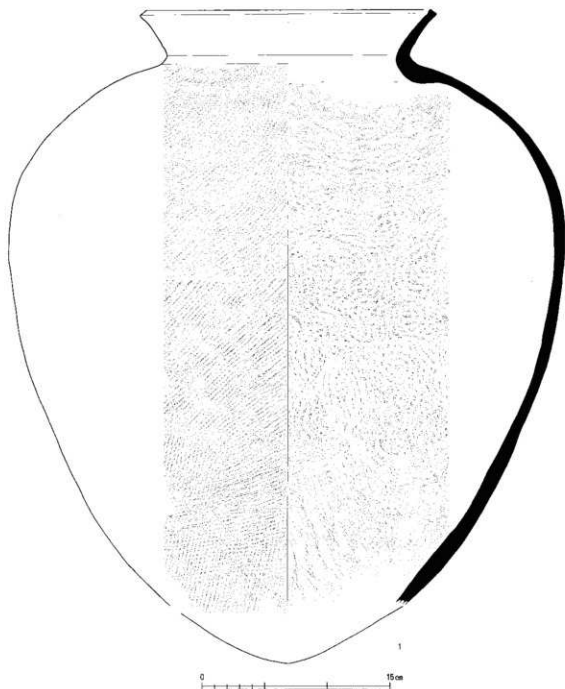
第43図 大塚向山遺跡G地区出土遺物（壺・瓶）実測図（縮尺1/3）

先に述べた皿の底部のケズリの問題とともに、東海と北陸の須恵器生産とその関係について今後さらなる検討が必要である。

灰釉陶器は9点図化した（第42図18～26）。口縁の一部、または高台部しかないため埴となるのか皿となるのか判断がつかないものが多いが、貼付高台のものは埴であろう（第42図26）。また胎土などから同一個体になる可能性があるものもある（第42図19～21）。釉薬が明瞭ではない無釉になる可能性の



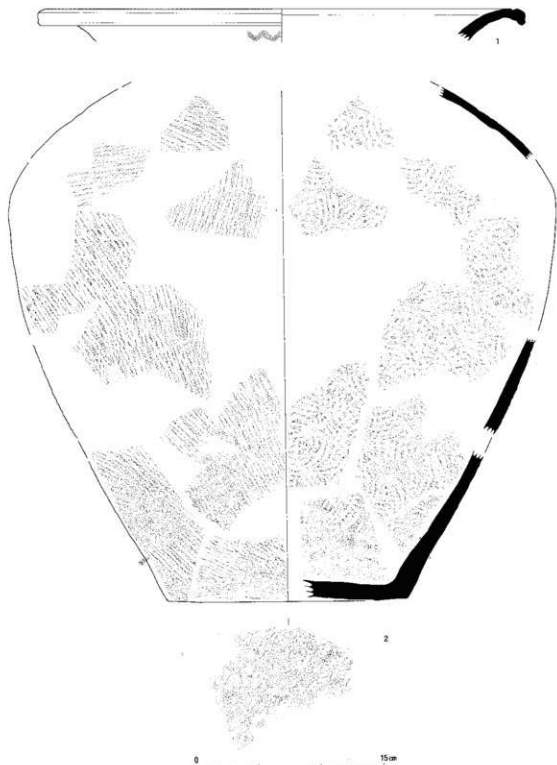
第44図 大塚向山遺跡G地区出土遺物（壺）実測図（縮尺1/3）



第45図 大塩向山遺跡G地区出土遺物(甕)実測図(縮尺1/3)

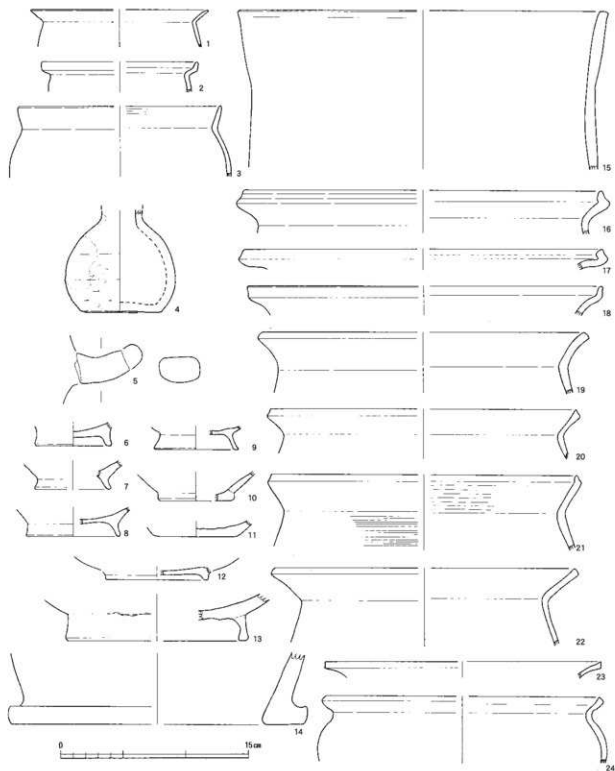
灰軸陶器もある(第42図18・22~25)。

土師器は山腰遺跡も含めて今回報告する地区では最も多い34点数を図化した(第47図、第48図)。いずれも細片が多く、器形が判るのは先にも述べた口縁部のみを欠く小型壺(第47図4)と、底部から丸く立ち上がる杯(第48図5)の2点だけである。点数が多いのは長胴になるであろう甕の口縁部で、頸部がゆるく屈曲してそのまま口縁端部となるもの(いわゆる「く」の字口縁で、第47図19~23)、口縁端部を摘み上げて有段、もしくは受口とするもの(第47図16~18)の2タイプある。また「く」の字口縁であるが、器壁が厚いものもある(第48図1・2)。小型の甕はいずれも口縁が「く」の字である(第



第46図 大塚向山遺跡G地区出土遺物(壺)実測図(縮尺1/3)

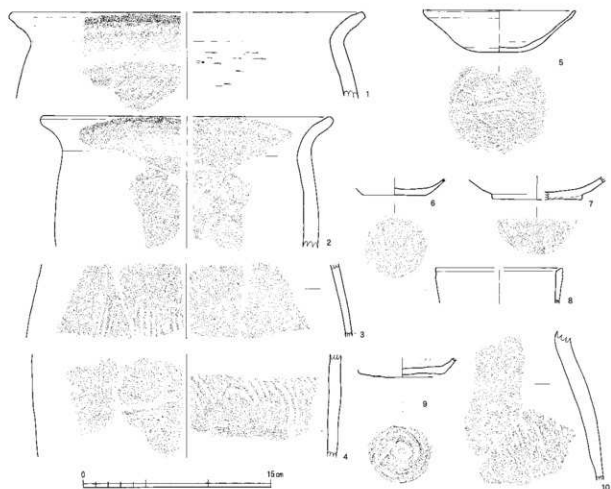
47図1～3)。胴部は外面に平行タタキ、内面に同心円タタキのものである(第48図3・4・10)杯類の底部もいくつかあり、高台の部分が6点あるが(第47図6～9・12・13)、1点はかなり大きい(第47図13)。また平底のもの(第47図10・11、第47図6・9)、貼付の平底(第48図7)などもある。このほか壺の口縁?(第48図8)や、甗?の把手(第48図5)などに加えて、器種が全く特定できないもの



第47図 大塩向山遺跡G地区出土遺物（土師器）実測図（縮尺1/3）

もある（第47図14）。

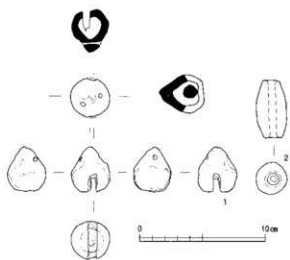
中近世の土器はカワラケ6点（第78図8～13）と鉢、または摺鉢が2点（第78図6・7）と亮胴部片1点（第78図14）の合計9点図化した。カワラケと鉢・摺鉢はいずれも近世であるが、亮は中世の可能性はある。



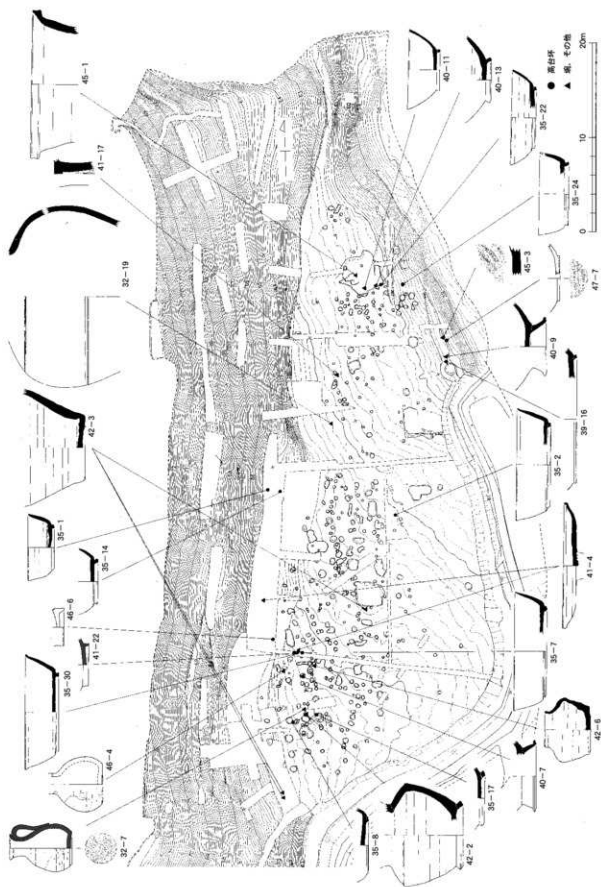
第48図 大塚向山遺跡G地区出土遺物（土師器）実測図（縮尺1/3）

このほかに土製品として土師質の土鍾が1点（第49図2）、同じく土師質の土鈴が1点（第49図1）ある。また金属製品は鉄釘が1点（第153図5）のほかに、銭貨で銭種不明なもの1点（第153図16）と寛永通宝が3点（第153図17・19・20）図化した。

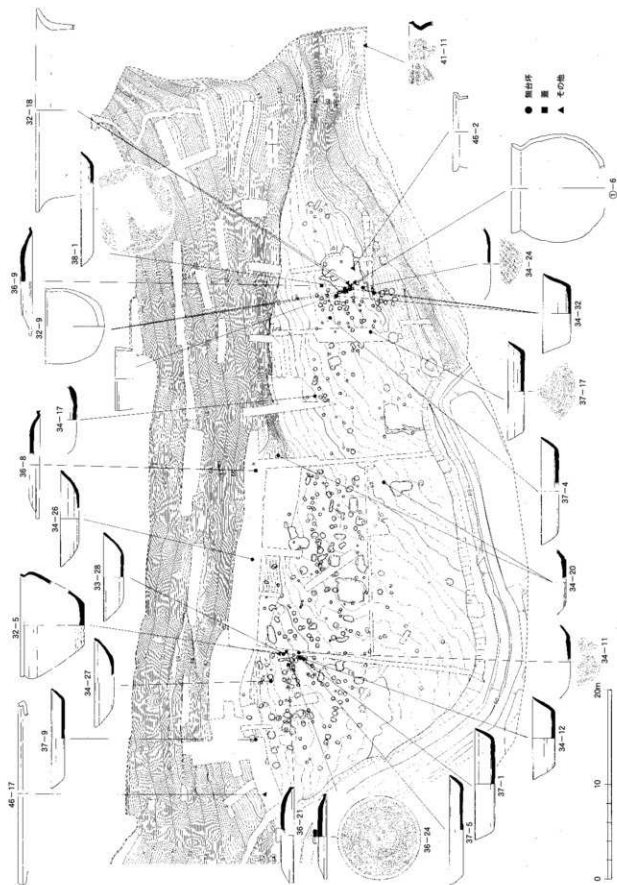
これまでG地区から出土した土器について個々の説明を行ってきたが、図化した土器の多くが包含層からの出土となっている。しかし出土地点が確認されているものは、南側のSK08周辺から山裾の部分と、北側のSK16周辺に集中することが明瞭である（第50図～54図参照）。しかしその出土もSK16周辺は既に述べたが杯類に加えて土師器が多いのに対して、南側は灰軸陶器の小型壺やそれを模したであろう土師器の小型壺、鉢、高杯、



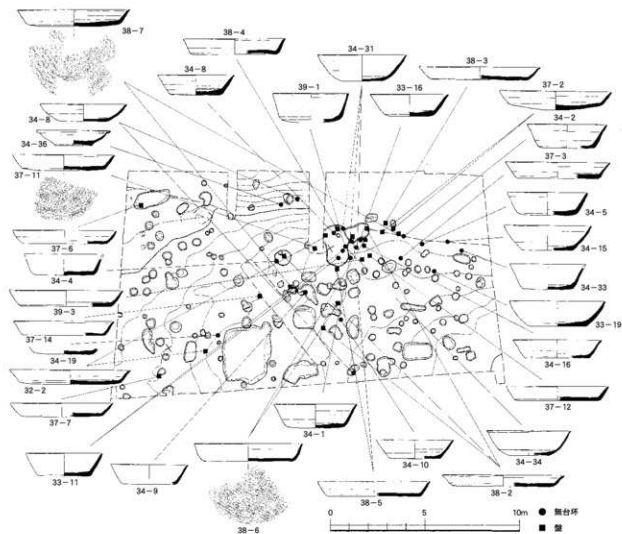
第49図 大塚向山遺跡G地区出土遺物（土製品）実測図（縮尺1/3）



第50図 大塩向山遺跡G地区主な出土遺物地点図①(遺構：縮尺1/400・遺物縮尺1/6)

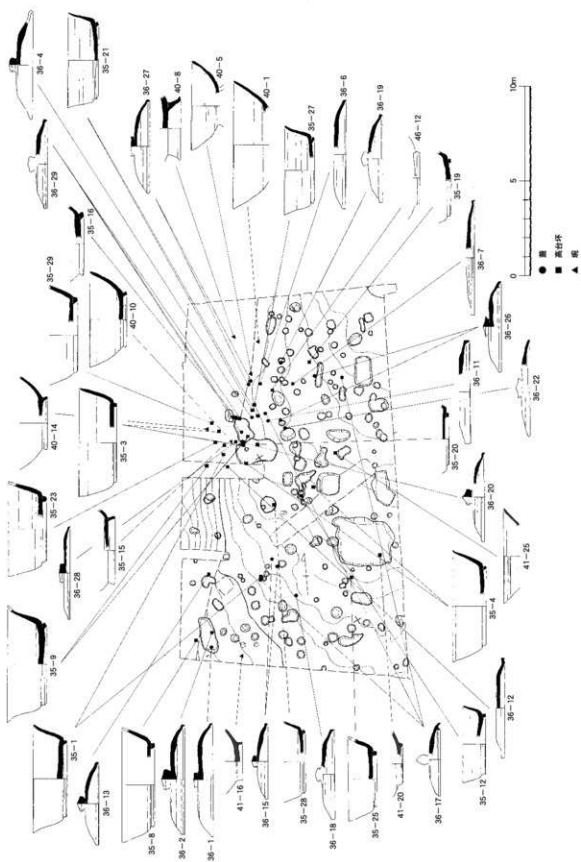


第51図 大塚向山道跡G地区主な出土遺物地点図② (遺構：縮尺1/400・遺物縮尺1/6)

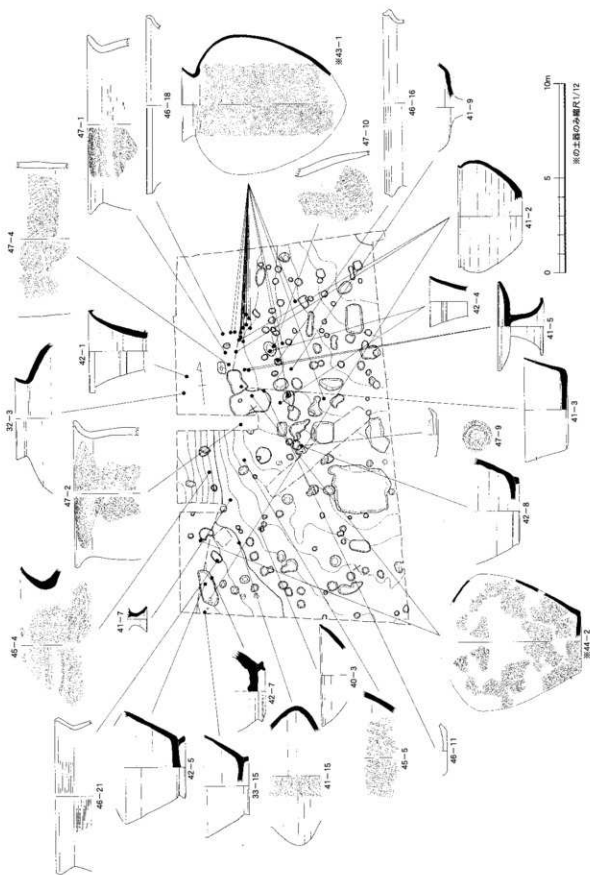


第52図 大塚向山遺跡G地区中心部主な出土遺物地点図①（遺構：縮尺1/200・遺物縮尺1/6）

碗に転用された可能性の高い蓋、そして皿でも底部に丁寧にケズリを残すものなど特殊なものの存在が非常に目立つ。ただし煤が付着したものが無くはないが、N地区と比較するとその比率は非常に少ない。G地区とN地区は同じような平坦面をもつ、土器の出土も山裾に多いなどの共通性があるが、その出土している土器類には明らかに違う様相を認めざるおえない。（赤澤）



第53図 大塚向山遺跡G地区中心部主要出土遺物地点②(遺構：縮尺1/200・遺物縮尺1/6)



第54図 大塩向山遺跡G地区中心部主要出土遺物地点図③(遺構：縮尺1/200・遺物縮尺1/6)

第3節 I地区 先に述べたG地区の西側背後の尾根で、尾根の先端は南を向いてN・L地区へ入る谷を隔ててP地区に対峙する。最初に述べたC地区と北側で尾根続きとなってつながる。C地区とI地区はそれぞれがアルファベットの「Y」の二股に分かれている部分に相当する。C地区へつながる尾根の標高110m付近から枝分かれして一段下った平坦面がI地区である。C地区とP地区は尾根の先端を平野側に向けるのに対して、I地区のみが尾根の側面を平野部に向ける。しかし現地を確認した限りでは日野山の正面に当たり、C地区よりはその山容がもっとも良く見える位置ではないかと考えられる(P地区では尾根先端は調査対象外=未買収地で立木が伐採されていないため、この点については十分に確認できていない)。平坦面とG地区へ続く斜面の一部の1,560㎡を調査対象範囲とした。調査区の北側の調査範囲外で、地形図には現れていないが、現地での地表面の観察ではやや低くなる部分がある。調査範囲内でも北端で標高が96mと一番高くなる部分が盛り上がり、調査区外よりも若干(30cmほど)高くなっている。南の先端部では標高89mまで表土を除去したが、遺物が多く出土し、遺構も確認されたのは標高93mより高い94m前後に広がる平坦面である。遺構はC地区と同様にピットのみであるが、焼土坑も8基ほど確認されている。そのほかのピットは調査区北側のG地区へ下る斜面とやはり平坦面の先端部分に集中する。作業の足場を確保するため、作業開始時点で想定した調査区内に地山を掘削して、平坦な通路を設けた(第55図の東西と南の白抜き部分)。この作業において、西側では遺構・遺物は確認されなかったが、東側では3つの遺構を断割ることになってしまった。これらの遺構が検出されたため、さらに東側に調査区を広げたが、焼土坑やピットなどは確認されなかったが、遺物は少ないながらも数点出土している。

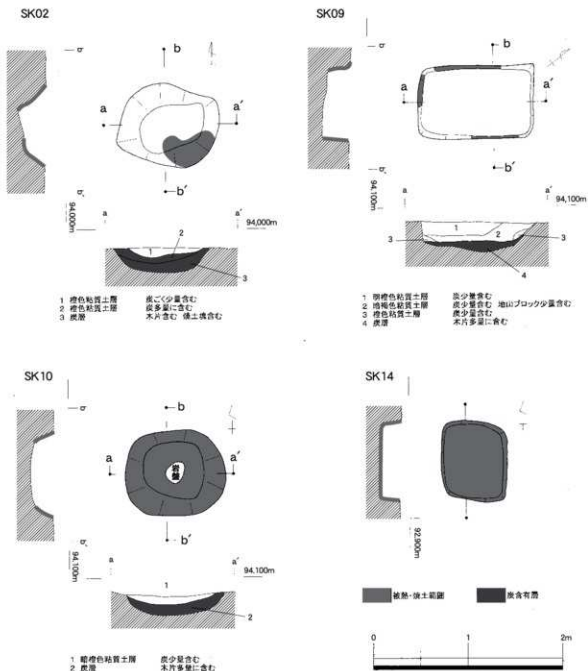
S K 02 (第56図) 平坦面でも焼土坑としては最も尾根先端の標高93.8mに位置する。平面形は不整形な方形で、長軸100cm、短軸84cmを測る。断面は皿状を呈し、深さ25cmを測る。中層から下層を中心にして焼土・炭化物が多く含まれる。南東の壁面に被熱を受けた痕跡がある。

第10表 I地区土坑一覧表

番号	位置	平面形状	規模 (cm)			断面形状	覆土	備考
			東西	南北	深さ			
02	F 8	楕円形	100	84	25	皿状	炭化物多い	第56図
04	G 7	楕円形	68	34	10	皿状	灰褐色土	
05	G 7	楕円形	42	60	8	皿状	灰褐色土	
06	G 7	楕円形	68	72	12	皿状	灰褐色土	
07	G 7	不整楕円	74	50	16	塊状	灰褐色土	トレンチで切断
08	G 7	楕円形					炭化物多い	
09	G 8	隅丸長方形	123	78	32	箱状	炭化物多い	第56図
10	G 8	楕円形	34	40	4	皿状	黄灰褐色土	第56図
11	G 8	不整楕円	120	116	26	皿状	黄褐色土と灰褐色土がブロック	
14	F 7	隅丸長方形	143	143	50	箱状	炭化物多い	第56図
15	H 7	隅丸方形	84	69	25	皿状	炭化物多い	第57図
16	H 8	楕円形	122	90	36	塊状	炭化物少ない	第57図
17	I 8	不整方形	114	107	28	塊状	炭化物多い	第57図
18	G 8	楕円形	52	66	22	箱状	黄灰褐色土	
19	G 8	不整楕円形	190	72	26	皿状	黄灰褐色土	
20	G 8	楕円形	36	50	20	2段掘り	黄灰褐色土	
21	H 7	楕円形	44	39	21	片側のみ2段掘り	黄灰褐色土	
22	H 7	不整方形	50	42	19	塊状	黄灰褐色土	
23	I 7	不整楕円形	50	118	6	皿状	黄灰褐色土	
24	I 7	楕円形	32	41	13	箱状	灰褐色土	
25	I 7	不整方形	40	33	14	箱状	灰褐色土	
26	H 7	不整楕円形	48	41	14	箱状	灰褐色土	
27	J 8	不整楕円形	94	100	15	箱状?	灰褐色土	第57図
28	J 8	楕円形	48	50	16	塊状	灰褐色土	
33	J 7	楕円形	36	112	4	皿状	黄灰褐色	

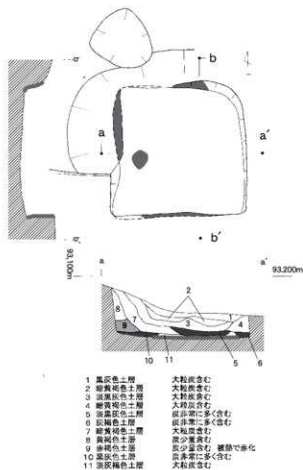
S K09 (第56図) 平坦面の尾根先端でもS K02ほどではないが、やや近い標高91.1mに位置する。西側にS K10が隣接する。平面形は角が明瞭な長方形で、長軸が北東から南西にそろう。長軸123cm、短軸78cmを測る。断面は全体に箱状を呈し、深さ32cmを測る。最下層に木片と炭化物が多く含まれる。長辺にあたる南東・北西と短辺の南西の壁面に被熱を受けた痕跡があり、北東の短辺には顕著な被熱の痕跡はない。

S K10 (第56図) S K09と同じくS K02ほどではないが、やや先端部に近い標高91.1mに位置する。東側にS K09が隣接する。平面形は隅丸方形で、長軸がほぼ東西方向にそろう。長軸106cm、短軸92cmを測る。断面は皿状を呈し、深さ29cmを測る。全体に炭化物が含まれるが、下層では木片と炭化物が多く含まれる。底面と壁面の全面に被熱を受けた痕跡がある。

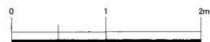
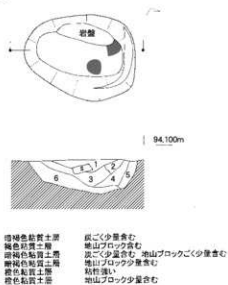


第56図 大塚向山遺跡I地区焼土坑遺構図その1 (縮尺1/40)

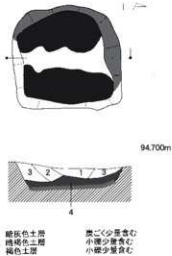
SK15



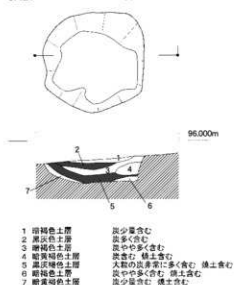
SK16



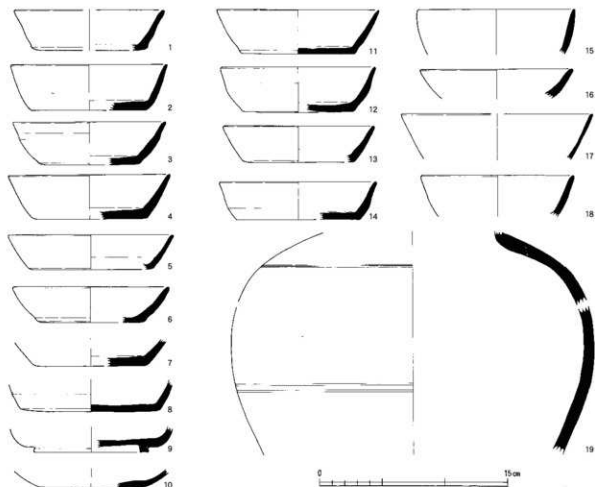
SK17



SK27



第57図 大塚向山道跡I地区焼土坑遺構図その2 (縮尺1/40)



第58図 大塚向山道跡I地区出土遺物実測図(縮尺1/3)

S K 14 (第56図) 平坦面からややG地区のある東側へ降った標高93mの斜面に位置する。北東のコーナーを中心に立木の攪乱で上場の一部が壊されている。平面形は1辺143cmを測る正方形で、各辺が東西南北にそろう。断面は壁面が垂直に近い箱状を呈し、深さは最も残されている部分で50cmを測る。基本的には下層に焼土・炭化物が多く含まれるが、炭化物が多い層と少ない層とでいくつかに別れることから、何回かに別れて覆土が堆積したと考えられる。底面の一部と北辺と東辺の壁面の一部に被熱を受けた痕跡がある。

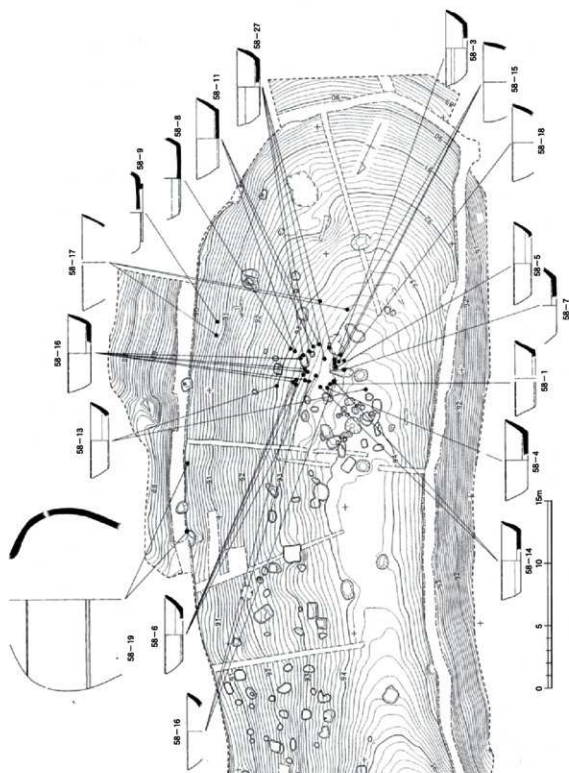
S K 15 (第57図) 平坦面からややG地区のある東側へ降った標高93mの斜面に位置する。平面形は不整形な方形で、長軸が南北方向にそろう。長軸84cm、短軸69cmを測る。断面は皿状を呈し、深さ25cmを測る。下層を中心にして焼土・炭化物が多く含まれる。南東の壁面に被熱を受けた痕跡がある。

S K 16 (第57図) 平坦面のほぼ中央の標高94.1mに位置する。周辺には焼土坑も他のピットがない、遺構の空白エリアである。平面形は不整形な円形で、長軸が南北にそろう。長軸122cm、短軸90cmを測る。断面は碗状を呈し、深さ36cmを測る。この土坑の覆土に限って炭化物が少ない。北側の底面の一部に被熱を受けた痕跡がある。

S K 17 (第57図) 平坦面の北端近くの標高95mに位置する。S K 16と同様に周辺には焼土坑もピットもない。平面形はやや不整形な隅丸方形で、南北がやや長く、長軸が南北にそろう。長軸114cm、短軸107cmを測る。断面は碗状を呈し、深さ28cmを測る。下層に炭化物が多く含まれる。西辺と北辺の壁

面と底面に被熱を受けた痕跡があるが、底面は中央が南北に带状に被熱の痕跡が弱いか、全く被熱を受けていない可能性がある。

S K 27 (第57図) I地区の調査区北端でやや高くなった標高96mに位置する。I地区で確認された焼土坑、ピットの中では最も標高の高い位置にある。平面形は不整形な方形で、南北方向が若干長い。



第59図 大塚向山遺跡I地区主な出土遺物地点図 (遺構：縮尺1/300・遺物縮尺1/6)

長軸107cm、短軸105cmを測る。断面は塊状を呈し、深さ28cmを測る。中層と下層に炭化物が多く含まれる。壁面や底面に被熱を受けた痕跡は顕著ではない。

ちなみにS K02、S K09・10、S K16、S K17、S K27の7基は尾根の頂部に、7から8mの間隔をあけて1列に並ぶ。またS K14とS K15の2基はほぼ同じの高さに並ぶ。

このことは平坦面でも尾根の頂部から東側とその斜面に遺構が集中することからも納得できる。また図化することができた遺物も尾根の先端部分からと、この東側の斜面から出土したものである。つまり遺跡は東側に向けて形成されたものであるといえよう。

遺物 (第58図) 出土した土器は須恵器のみで、図化できたのは19点ある。無台杯が13点(第58図1～8・10～14)でC地区と同様に底部から角を持って立ち上がるタイプがいくつかある(第58図2・3・4)。高台杯は底部のみの1点である(第58図9)。口縁部しかないが塊になると考えられるのが4点あるが(第58図15～18)、底部までないので不確定である。また胴部片だけであるが沈線が巡る壺が2片あるが、同一個体と判断した(第58図19)。出土地点を把握しているのが図化した19点のうち、18点あって、そのいずれもがS K02からS K14がある尾根の先端部分である。

第4節 L地区 主尾根からC地区、またはI地区に延びる支尾根の南側山麓部に貼り付くようにある平坦面である。このあとに述べるN地区とは、大塩山遺跡でもっとも大きい谷を挟んだ北側の小さな平坦地である。また小さな谷を挟んで東側にI地区を仰ぎ見るような位置、逆にI地区からは見下ろすことになる。完全に埋没している可能性の須恵器窯跡を想定したため平坦面とその背後の斜面が調査範囲とした。

平坦面は南側に頂部が張り出した三角形で、高さ約10m、底辺約20mを測る、標高74mから75mの100㎡ほどの小さいものである。

先にも述べたように埋没した須恵器窯跡を想定していたため、試掘段階では不十分であった地山の断割りも斜面にも拡大して行い、その可能性がないことを確実とした。表土の除去も平坦面とその背後の斜面、平坦面から谷に降る斜面までいった。その結果、遺構は平坦面の中央で確認された土坑が3基である。

S K01 平坦面の北より山麓部よりにある土坑で、平面形が不明瞭である。東西97cm、南北57cmを測る楕円形と思われる。土坑内に散らばってカワラケが多く出土した(第64図)。

S K02 (第62図) 平坦面のほぼ中央に位置し南北106cm、東西66cmを測る楕円形を呈する。皿状の断面で、底部からの立ち上りも明瞭である。炭化物を多く含むものの土器類な



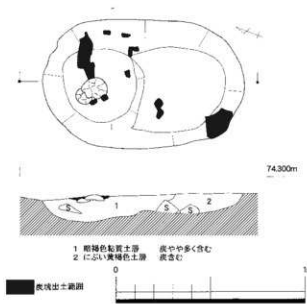
第60図 大塩山遺跡L地区全現況測量図(縮尺1/300)

どの遺物は出土していない。

遺物 L地区出土の土器で図化できたのは古代の遺物として須恵器13点、土師器1点、中世のカワラケ20点である。

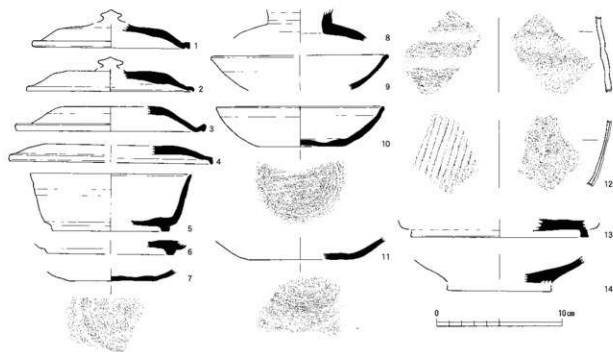
須恵器は無台杯4点、高台杯3点、壺1点、蓋4点と壺の頸部らしきものが1点である。土師器は2つの破片に分かれているが、色調などが類似しており、同一個体の小型の甕の胴部上半と下半と考えられる。いずれも図化に苦慮するような小片である。

中世の土器としてカワラケが20点図化できた。復元できる口径が15cm近いもの1点(第64図19)を除き、そのほかの19点は口径が6~8cm前後の小型のものである(第64図1~18・20)。いずれも手捏ねで成形して、口縁部をユビで挟んででんで回して立ち上げる。

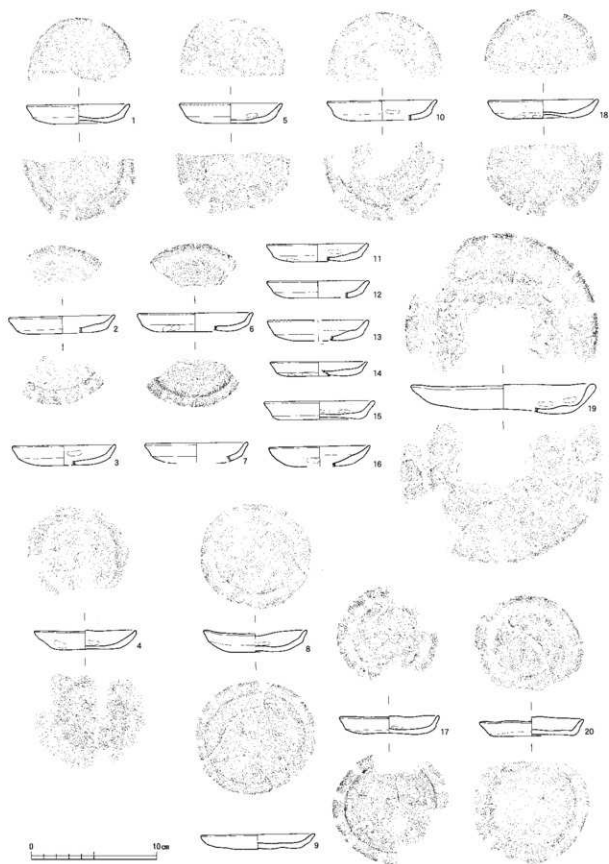


第62図 大塚向山遺跡L地区 S K 02遺構図(縮尺1/20)

遺構から出土した遺物は中世のカワラケだけで、しかも遺構に伴わないものもその周辺で出土している(第65図)。しかし古代の須恵器や土師器は遺構に伴わず、平坦面やその周辺の斜面各所で散らばって出土している。また中世の遺物であるカワラケは完形に復元できたものも多いが、古代の遺物については小片であることは述べた。これらのことから判断すると古代の遺物は周辺からの紛れ込みで、この平坦面は完形のカワラケが示す時期にも使われたものと考えられる。つまり大塚向山遺跡では遺跡の主

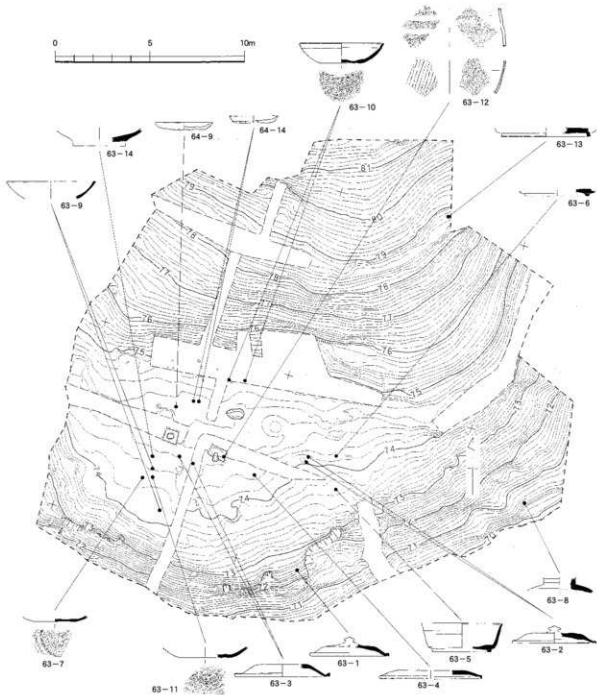


第63図 大塚向山遺跡L地区出土遺物(古代)実測図(縮尺1/3)



第64図 大塚向山遺跡L地区出土遺物(中世)実測図(縮尺1/3)

体となる時期が古代であるのに対して、L地区のみが中世であることになる。不明瞭といえ中世のカワラケが完形に近い状態でまとも出土し（SK01）、古代の遺物を伴わない炭化物を多く含む土坑（SK02）が3mほどしか離れていない近くにあることを考えるとL地区は中世の時期に使われたエリアと言える。視点をやると大塚向山遺跡は古代だけではなく、中世に入ったある時期にも祭祀的な行為がおこなわれていたことになる。

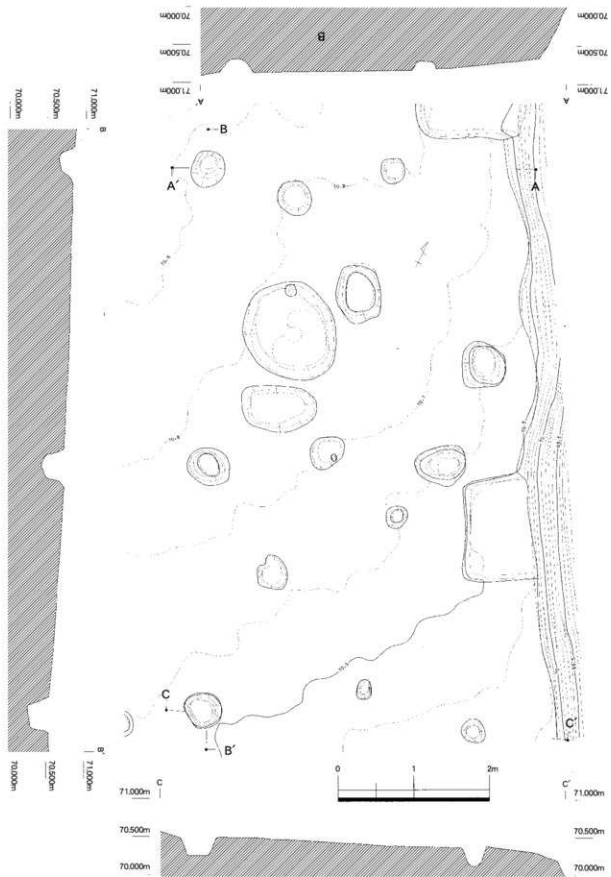


第65図 大塚向山遺跡L地区主な出土遺物地点図（遺構：縮尺1/300・遺物縮尺1/6）

第5節 N地区 大塩向山遺跡のなかでは唯一建物を復元できた地区である。G地区と同じように平坦面とその背後の尾根の範囲をN地区として調査した。G・I地区とO・P地区との間を口とする大きな谷の南側に位置し、山腰遺跡の平野部から眺めるとN地区の尾根が正面に見えるが平坦面の全体を見渡すことができない。先に述べたL地区とはこの谷を挟んで南側に位置する。N地区の南側にはO・P地区へ続く尾根との間に小さな谷が入る。この谷と背後の斜面に囲まれた平坦面は長軸を南北からやや西へふるもので、長さ約45m、幅約20mの長方形を呈する。その南東コーナーは突出するように張り出

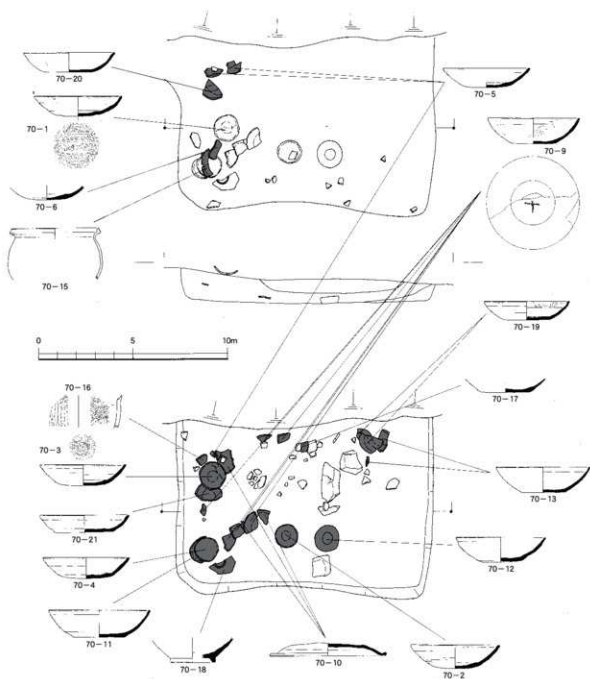
第11表 N地区遺構一覧表

番号	位置	形状	規模 (cm)			断面の形状	覆土	備考
			長軸	短軸	深さ			
土坑 (SK)								
1	C2	円形	76	75	16	皿状	灰黄褐色土	
2	D2	楕円形	131	120	17	皿状	炭泥じり黒褐色土	
3	D2	隅丸方形	—	134	16	箱状	炭泥じり褐色土	第60図
4	E2	隅丸長方形	—	111	15	箱状	炭泥じり褐色土	
土坑 (SP)								
1	C2	楕円形	64	46	8	皿状	褐色土	
2	C2	楕円形	73	64	16	2段掘り 椀状	褐色土	
3	C2	略方形	41	38	50	箱状	灰黄褐色土 上層は炭泥じる	上層から土師器片出土
4	D2	略長方形	38	34	25	箱状	褐色土	
5	D2	略円形	33	31	10	箱状	褐色土	
6	D2	隅丸方形	38	36	21	2段掘り 箱状	炭泥じり褐色土	
7	D2	楕円形	44	39	8	皿状	灰黄褐色土	
8	D2	不整楕円形	50	44	33	箱状	灰黄色土	
9	D2	不整楕円形	44	39	7	皿状	灰黄色土	
10	D2	楕円形	53	53	43	2段掘り 箱状	黄褐色土 上層は炭泥じる	
11	D2	楕円形	50	38	9	皿状	炭泥じり褐色土	
12	D2	楕円形	29	27	10	皿状	黒褐色土	
13	D2	楕円形	67	55	26	箱状	黒褐色土	
14	D2	楕円形	40	34	25	箱状	黒褐色土	29を切る
15	E2	楕円形	46	43	14	箱状	黄褐色土 上層は炭泥じる	
16	E2	楕円形	49	45	23	箱状	炭含む褐色土	須恵器片出土
17	E2	楕円形	60	44	13	椀状	炭泥じり褐色土	
18	E3	楕円形	53	38	9	皿状	地山多く含む褐色土	
19	E3	楕円形	57	44	25	2段掘り 箱状	灰黄色土	
20	E2	楕円形	70	57	12	椀状	暗灰黄色土	
21	D2	略方形	35	35	40	箱状	炭泥じり褐色土	中層から須恵器片多く出土
22	C2	楕円形	40	33	8	皿状	におい黄褐色土	
23	D2	略円形	29	28	20	椀状	炭泥じり黒褐色土	
24	C2	楕円形	30	27	33	箱状	炭泥じり褐色土	須恵器片、土師器片出土
25	D2	楕円形	33	29	20	箱状	炭泥じり黒褐色土	
26	D2	楕円形	31	26	31	2段掘り 箱状	灰黄色土 上層は炭泥じる	
27	D2	楕円形	33	28	20	箱状	灰黄色土	
28	D2	楕円形	36	18	23	箱状	灰黄色土	
29	D2	楕円形	75	60	25	箱状	炭泥じり暗褐色土	14に切られる
30	D2	楕円形	98	61	11	皿状	炭泥じり褐色土	
31	C2	楕円形	54	46	57	椀状	暗灰黄色土	
32	D2	略方形	33	29	30	箱状	灰黄褐色土	
34	D2	略方形	56	55	51	2段掘り 箱状	暗灰黄色土	
35	E2	略方形	33	32	11	箱状	灰黄褐色土	
36	E2	楕円形	48	43	22	椀状	褐色土	
37	D3	隅丸長方形	38	32	24	箱状	暗灰黄色土	
38	D3	楕円形	40	29	18	箱状	暗灰黄色土	
39	屋根上	楕円形	28	35	14	皿状	不明	
40	屋根上	略円形	77	70	25	椀状	不明	
41	屋根上	略円形	30	24	14	皿状	不明	
42	屋根上	楕円形	34	30	25	皿状	不明	
43	屋根上	楕円形	52	30	13	皿状	不明	
44	屋根上	略円形	36	31	8	皿状	不明	
45	屋根上	円形	43	40	12	皿状	不明	
46	屋根上	略円形	62	—	20	皿状	不明	
47	屋根上	楕円形	82	—	15	皿状	不明	
48	屋根上	略円形	55	52	18	皿状	不明	
49	屋根上	円形	24	23	17	皿状	不明	

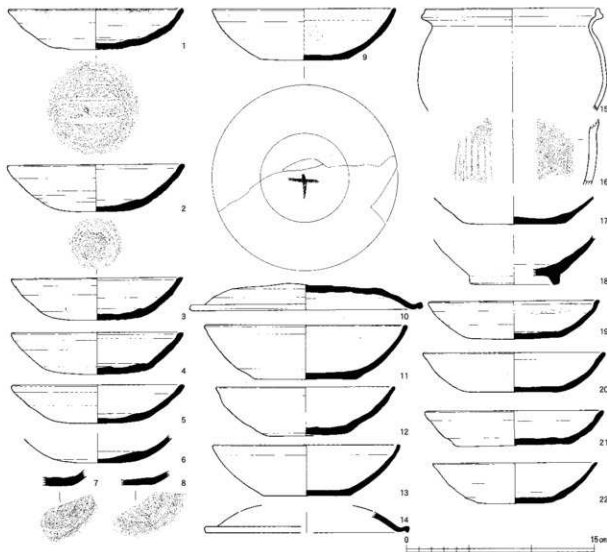


第68图 大塚向山道跡N地区堀立柱建物全体图(縮尺1/50)

し先に述べた谷の間に消える。この突出部分は平坦面の段丘が谷に消える標高68m付近まで、表土を除去したが、遺構はもちろん、遺物についてもほとんど出土していない。また北西のコーナーもゆるい傾斜となり標高も72から75mと次第に高くなりながら北西へ突出する。この部分についても遺構はもちろん、遺物についてもほとんど出土していない。北から東で段丘の崖面となるが、谷底とは2～3mの比高差があり、簡単に登れるものではない。おそらくこのあとに述べる掘立柱建物の谷側の柱が欠け、土坑も半分近く失われているような状況から、古代の時期にはもう少し北と東に張り出していたのが、古代以降に削平されてこのようになったと考えられる。つまり本来はこのような急斜面でなかった可能性も高い。谷と反対の尾根山麓部は標高71～72m前後で立ち上がって、尾根の先端となる斜面へ続く。尾



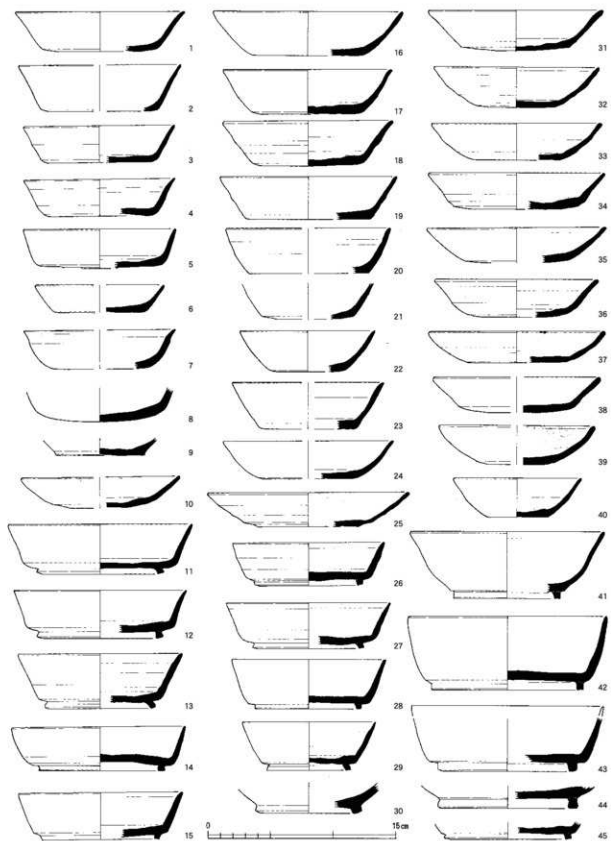
第69図 大塚向山遺跡N地区S KOG遺構図・遺物出土状況図（縮尺1/20）



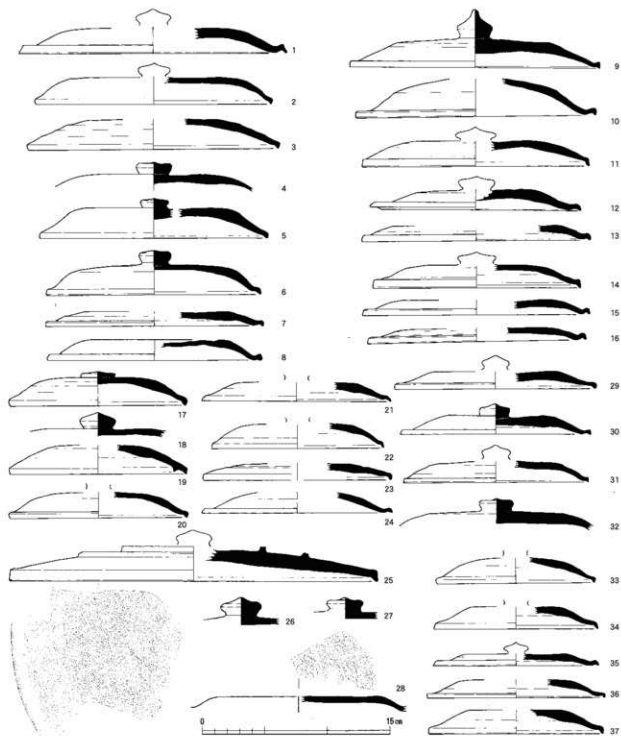
第70図 大塚向山道跡N地区遺構出土遺物実測図(縮尺1/3)

根の先端部は標高100m付近で小さな平坦部となり、幅5m、長さ20mの100㎡ほどについて表土を除去した。この平坦面では小さなピット11基と図化することはできないほどの須恵器小片も出土した。

しかしピット・遺物とも確認できたのは表土を除去した先端部分だけで、先端から奥へ入った部分では遺構・遺物とも確認されていない。斜面については標高71・72m付近から100m付近までの斜面は試掘調査時においても須恵器片が各所で出土したため、全面について腐葉土を除去するような形で表土を除去した。作業にあたって、足場と排土搬出する通路を確保することもかねて尾根の等高線に沿うようにトレンチ状に掘削した(第60図の斜面部分の白抜き)。この作業の時点でも須恵器を主体とした遺物が点在して出土した。足場を確保してから全体の表土を除去したが、標高80m付近から100mまでは腐葉土程度の除去で地山が確認された。標高80mから下の山麓部になるにしたがい、堆積土が厚くなり、最も厚い層では50cmほどの堆積があった。土器も平坦地に近くなるにしたがい多くなり、遺物のほとんど、特に図化できた遺物はこの付近に集中する(第79・80・81・82・83)。G地区などと同じように須恵器窯跡の存在を想定して調査を開始したため、遺物が多く出土した山裾の上の斜面にかけて地山を断割するような深めのトレンチを設定して窯跡の存在がないことを確認した。



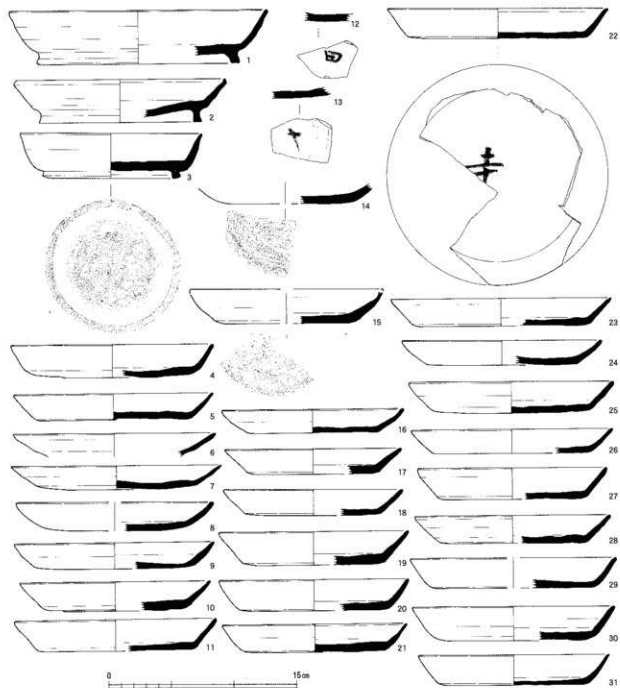
第71図 大塚向山遺跡N地区出土遺物(無台坏・高台坏)実測図(縮尺1/3)



第72図 大塚向山遺跡N地区出土遺物(並)実測図(縮尺1/3)

平坦面では先にも述べたように山裾の堆積土から多数の遺物が出土しているが、山裾から離れた平坦面の中央部などそれ以外の地点ではまばらな出土で、ピットなどの遺構もほとんど無い。堆積土も平坦面では厚くても20cm以下、ほとんどが10cmにも満たない厚さである。

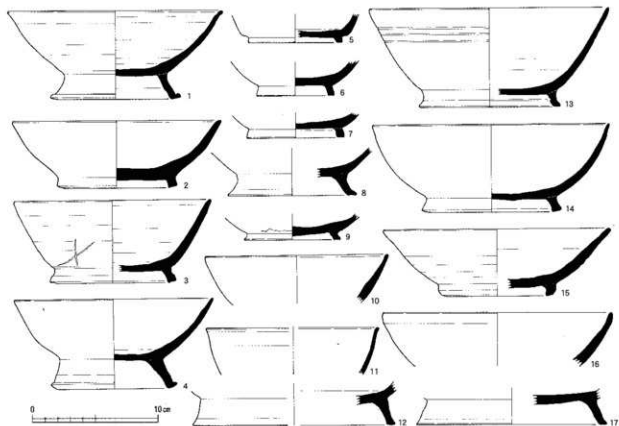
遺構としては掘立柱建物1棟と土坑4基、ピットが38基である。土坑もほとんどのピットも掘立柱建物の周辺に集中する。



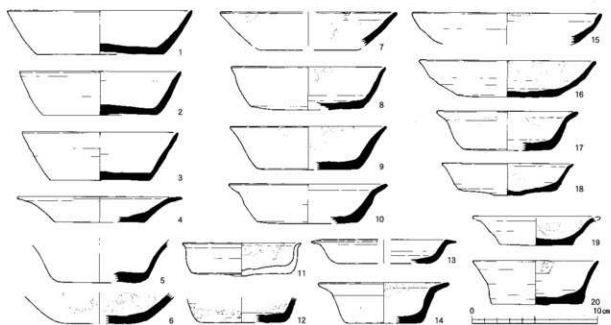
第73図 大塩向山遺跡N地区出土遺物(盤)実測図(縮尺1/3)

掘立柱建物(第68図) 先にも述べたように段丘の崖縁に面して確認され、土坑(SK03・04)も半分近くが失われており、掘立柱建物もその東半分がすでに失われていた可能性が高い。掘立柱建物として確認できたのは南北に2間、東西に1間で、それぞれの柱穴の間隔は2.5mから4mとばらつきがある。柱穴の深さも15cmから25cm、直径も60cmから35cmとばらつきがある。土坑のうちSK02とSK03が想定した掘立柱建物の柱間の内側にある。

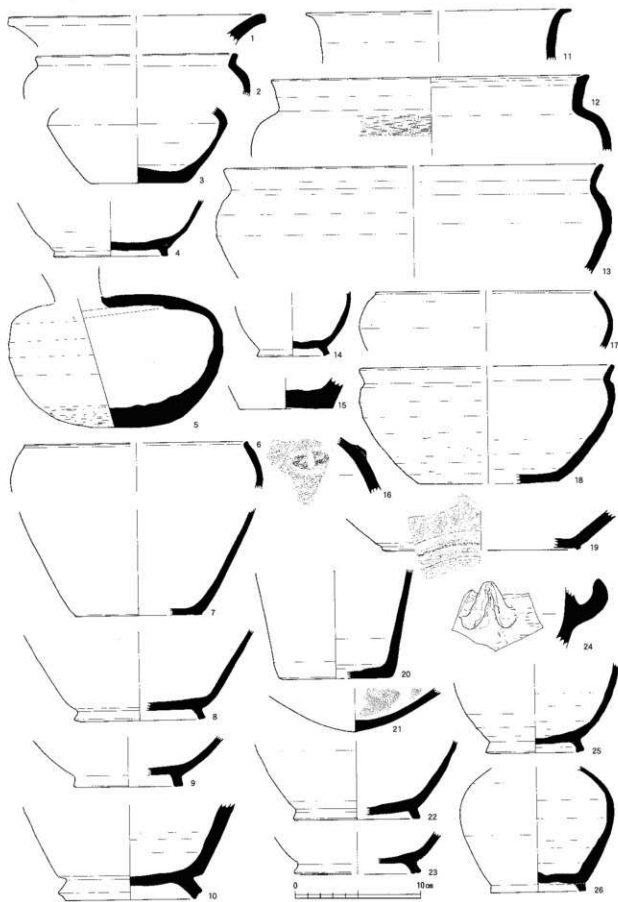
SK3(第69図)先にも述べた掘立柱建物の柱穴の内側にある。東側のかなりの部分が失われているが、完形に近い杯類を中心に20点あまりの土器が出土している。無台坏14点(第70図1~6・9~13・19~



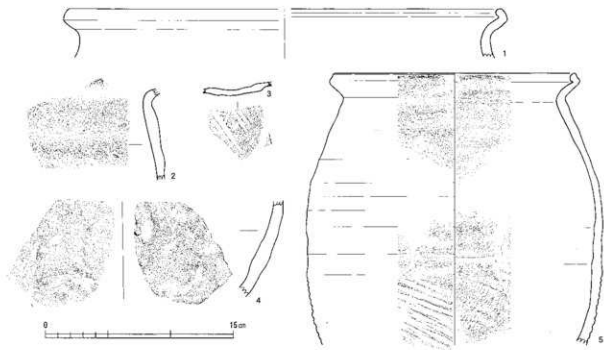
第74图 大塚向山遺跡N地区出土遺物(碗)実測図(縮尺1/3)



第75图 大塚向山遺跡N地区出土遺物(特異な坏頤)実測図(縮尺1/3)



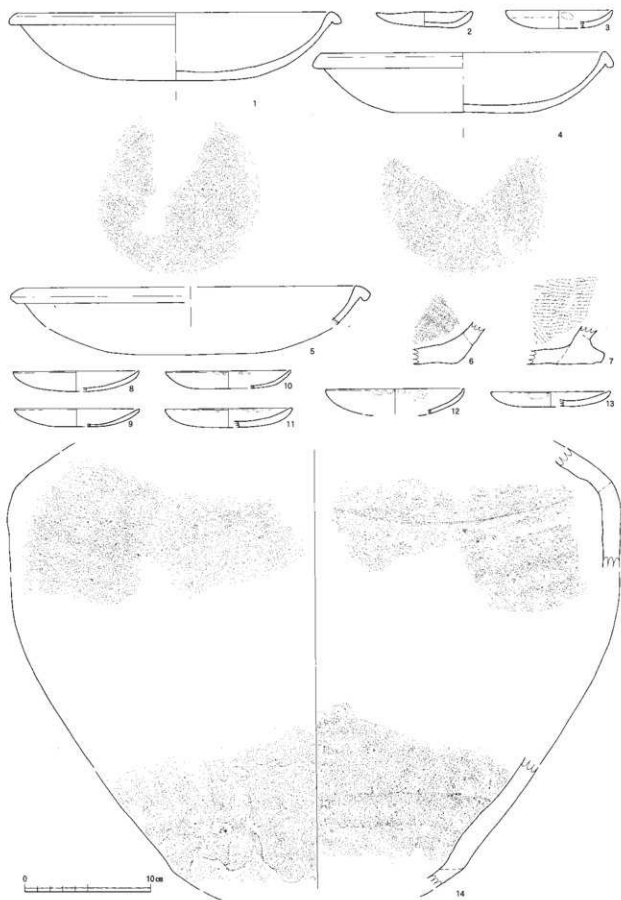
第76図 大塩向山遺跡N地区出土遺物（鉢・壺・瓶類）実測図（縮尺1/3）



第77図 大塩向山遺跡N地区出土遺物（土師器）実測図（縮尺1/3）

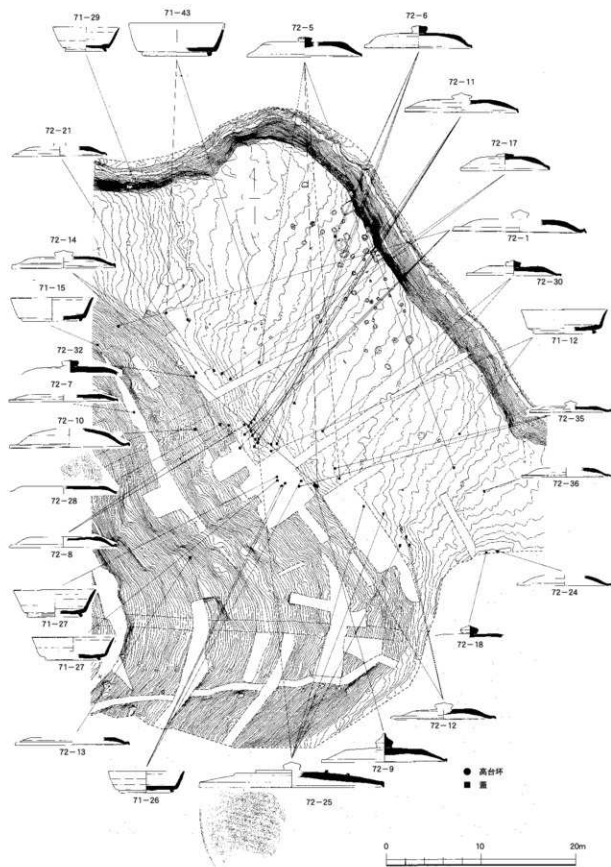
21)、蓋1点（第70図10）、埴1点（第70図18）、土師器の甕2点（第70図）を図化した。特にこの土坑出土の土器で特徴的なものは、無台坏でも口縁部が残されたもの12点のうち7点（第70図1・2・3・9・12・15・19）に煤の付着が顕著なことである。また無台坏でも底部が平らな埴に近いものではなく、ゆるく立ち上がるタイプが目立つ。また1点だけであるが「十」と書かれた墨書土器がある（第70図9）

遺物 古代の遺物としてはすでに述べたが、今回図化した多くの土器は包含層でも掘立柱建物やピットが集中する平坦面の東側ではなく、西側の山麓部である。ここでは無台坏30点（第71図1～10・16～24・31～40）、高台杯15点（第71図11～15・26～30・41～45、第73図1～3）、蓋37点（第72図）、皿28点（第73図4～31）、埴17点（第74図）、無台坏ではあるが口縁端部が外反する特異なもの（第75図）、そのほかの鉢または壺など26点（第76図）、土師器は細片も含めて5点（第77図）などを図化した。ここで注目されるのは無台坏でも特異なものとした20点である。通常は無台坏とは異なり、底部から角度を持って立ち上がる金属器を意識したようなもの（第75図1～3、7・8）や、口縁端部を小さいが明瞭に外反させたもの（第75図4・10～14・19・20）など個々の個体差が大きい。この中には他の遺跡や他県では灯明具としているもの（第75図11・14）もあり、事実、ここで分類した20点のうち13点には煤の付着が明瞭である（第75図6・7～9・11～20）。蓋には大型で天井部に2重に凸帯を廻らせるものがある（第72図25）。この地区では確実に無鈕となるものは1点のみである（第72図28）。高台杯には底部外面に「×（？）」のヘラ記号のあるもの、皿には「寺」（第73図22）・「田」（第73図12）・「十（？）」（第73図13）などの墨書土器もある。皿にはG地区ほど数は多くないが、底部外面を丁寧にヘラ削りするものも2点ある（第73図14・15）。鉢も鉄鉢と呼称していいようなものである（第76図6・17・21）。このほかには口縁部がないが平瓶の胴部がほぼ全部残っており、器形からは7世紀末にその時期が求められるもので、N地区のみならず大塩向山遺跡・山腰遺跡も含めて、最も古い時期のものではないかと考えている（第76図5）。また口縁部がなく、丸みのある胴部も下半のみで高台も小さい小ぶりの壺が3点ある（第76図14・25・26）。このような小ぶりの壺はN杯のみに認めることができる。

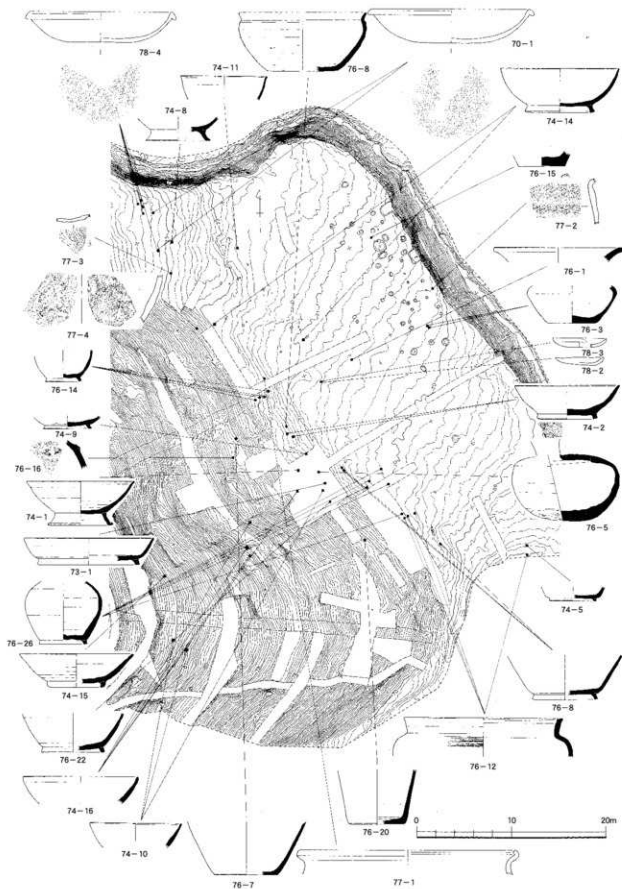


第76图 大塩向山遺跡G・N地区出土遺物(中近世)実測図

第5節 N地区



第80图 大塚向山遺跡N地区平坦面主な出土遺物地点图① (遺構：縮尺1/300・遺物縮尺1/6)

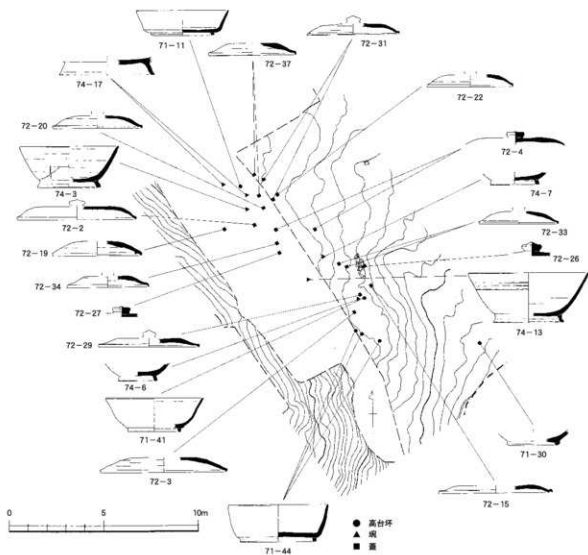


第81図 大塚向山遺跡N地区平坦面主な出土遺物地点図②(遺構：縮尺1/300・遺物縮尺1/6)

土師器は底部を欠く長胴甕1点(第77図5)と同じような口縁部のみの破片(第77図1)の2点が口縁部を残す。甕の胴部片と思われるが、器壁が厚く、調整も摩のためか不明瞭なものも2点ある(第77図2・4)。杯類は底部と聞き破片しかない(第77図3)。土師器についてはG地区と比較すると比率的にも少ない。

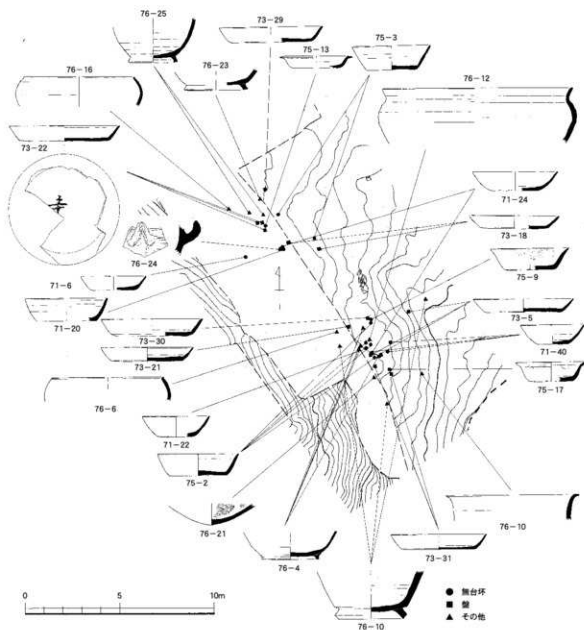
以上、古代の土器について概観してきたが、G地区との比較についてはすでに先行してG地区のなかで述べてきた。土器の出土地点は同じような山裾に集中するが、G地区ではその山裾に建物として復元できないもののピットが多数検出されているが、N地区では土器の出土が集中する山裾では遺構が全く確認されていない。このことはこれらの土器が本来は斜面にあったものが転落して、山裾に溜まっていた可能性がある。

また中近世の土器として5点を図化した(第78図)が、5点とも近世のものである。カワラケ2点(第78図2・3)と焙烙3点(第78図1・4・5)である。焙烙は調査区の北西の緩斜面から平坦面に変化するところでまどまって出土している。ちなみに北陸でも近世の城下町の調査が盛んに行われており(石川県金沢城跡・福井県福井城跡など)、その出土品は多数ある。しかし焙烙の出土は破片でも非常にまれな存



第82図 大塚向山道跡N地区集中地点主な出土遺物地点図①(遺構:縮尺1/100・遺物縮尺1/6)

在で、北陸の近世陶磁器に詳しい専門家に聞いても、北陸内で見るとは珍しいとのことである。むしろ大阪湾沿岸から瀬戸内を中心とする西日本では豆をいれるのにごく最近まで用いられており、非常に日常的な道具とのことである。本遺跡で出土した3点のうち2点は器形を完全に復元できるもので、城下町も近くにない大塩向山遺跡でこのような形で出土したかは非常に興味深い。また実物を確認していないが、このような形の焙烙は先の地域でも北陸に近い京都・大阪周辺のものではなく、香川、もしくは対岸の岡山で生産されたものである可能性が高いとの指摘を受けている(財団法人 大阪府文化財センターの降矢哲男氏による)。(赤澤)

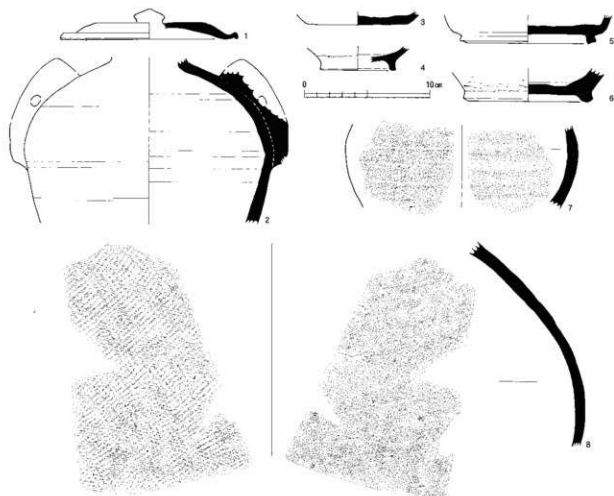


第83図 大塩向山遺跡N地区集中地点主な出土遺物地点②(遺構:縮尺1/100・遺物縮尺1/6)

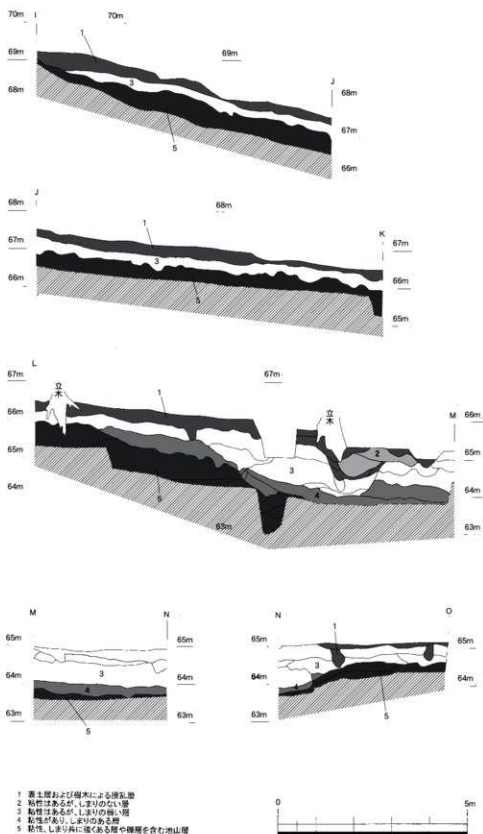
第6節 O地区 大塩向山遺跡の南端の尾根先端に近い山麓部北斜面で、直接に山腰遺跡に隣接する地区である。この尾根の上にP地区が位置する。N・L地区へ入る谷を隔てて山麓部のG地区に対峙する。調査の当初はN地区などと同じ須恵器窯跡を想定したもので、特にこの地区では先にも述べた林道の断面に、地山が硬化して変色した部分が帯状に観察できていたことから、窯跡の存在は確実なものと考えていた。試掘で遺物が出土しない理由も完全に山麓部が、林道脇の水田の下に埋め込まれている可能性を考えていた。

調査区の北東部に広がる平坦面は東西に細長い三角形に近い平面形で、東西の最大長さ約30m、南北の最大幅幅約7mを測り、面積も700㎡にも満たない小さいものである。平坦地の西側が標高65m、東側で63.5mと西から東へ傾斜する。G地区との間には調査前には小さな水田が3枚あったが、本来は谷の出口でもあり、周辺から盛土して造成されたものと考えられる。山裾には小さな車であれば通行が可能な程度の道が谷奥へ続いており、山裾の一部はこの道で削平を受けたものと判断される。この平坦面の南側にP地区へつながる急斜面については、標高65mから81mまでを調査の対象とし、そのなかでも平坦面とその周辺について、トレンチで確認しながら掘削した。土層断面図からも判るように、崩落したと考えられる土が厚く堆積していた。

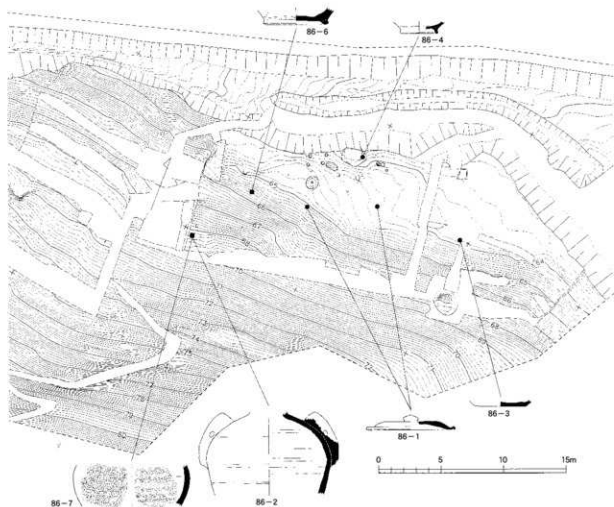
遺物 出土した遺物も非常に少なく、そのなかで図化できたのは須恵器が8点である（第86図）。蓋



第85図 大塩向山遺跡O地区出土遺物（縮尺1/3）



第86図 大塩向山遺跡O地区土層断面図 (縮尺1/100)



第67図 大塚向山遺跡O地区主な出土遺物地点図（遺構：縮尺1/300・遺物縮尺1/6）

は鈕を欠くが、おそらく無鈕ではないと思われる（第86図1）。杯は底部片ばかりで無台坏1点（第86図3）、高台杯1点（第68図5）、埴の高台（第68図4）などである。高台でのケズリがあるもの（第68図6）は杯類以外の器種と考えられる。また壺でも双耳のもの（第68図2）、丸い胴部のもの（第68図7）などの破片もある。甕の胴部片は外面にタタキ、内面はナデのものである（第68図8）。

また銭貨が2枚S K03から出土している。1枚は祥符元宝（初铸1008年）（第153図11）、もう1枚は一部判読できない（第153図12）。

第7節 P地区 大塩岡山遺跡の南端で東側の沖積地へ突き出るように延びる尾根の先端に位置する。I地区はもちろん、C地区の尾根よりもさらに東側に突き出した尾根で、この尾根の山麓部近くに大塩西川や大塩谷川などが沿うように流れている。つまり沖積地の山麓遺跡もこの山麓部では遺跡範囲外となるか、遺構そのものも少なくなっていることが、試掘調査の成果からもいえる。ただしP地区の調査対象地は尾根といっても平坦面の傾斜変化がはじまる先端部、さらに尾根中央となる平坦地の中心部分も未採取地で、いずれも調査の対象外である。尾根に広がる平坦地としては全面を調査したC地区やI地区よりも、かなり広いもので大塩岡山遺跡に含まれる尾根では非常に目立つ存在である。

調査の範囲は完全に平坦になりなごめる標高106mから下、傾斜がきつくなる標高103mまでの、平面形が東西に細長い長方形を呈する。尾根頂部の最高所は調査対象外の106.5mを測るものと考えられる。尾根平坦面の側縁に近い部分の調査といえる。東西42m、南北の最大幅10.5mの401㎡を発掘調査した。

調査地が中心地と想定している尾根の中央部分からやや外れた縁辺部でもあったためか、遺構も遺物も立地が同じようなC・I地区と比較すると少ない。倒木痕ではないと考えられる遺構は焼土坑・ピットなど8基確認されている。ここでは焼土坑を主に3基について取り上げる。

S K04 (第89図) 調査区のなかでも最も東より、先端部により近い平坦部の縁辺部よりもやや降った標高104.3mに位置する。周辺にもいくつかピットはある。平面形は不整形な楕円で、長軸がほぼ南北にそろう。長軸100cm、短軸70cmを測る。断面は壁面が垂直に近い箱状を呈し、深さ40cmを測る。中層から下層に炭化物が若干含まれる。明瞭な被熱の痕跡はない。

S K07 (第89図) 調査区の西側、最も先端部から離れた平坦地の縁辺部よりもやや降った標高105mに位置する。平面形は不整形な長方形を呈し、長軸が北西にそろう。長軸120cm、短軸95cmを測る。断面は壁面が垂直に近い箱状を呈し、深さ25cmを測る。明らかに炭化物が含まれるものではない。被熱の痕跡はない。

S K08 (第89図) 調査区のほぼ中央、平坦地の縁辺部よりもやや降った標高104.2mに位置する。

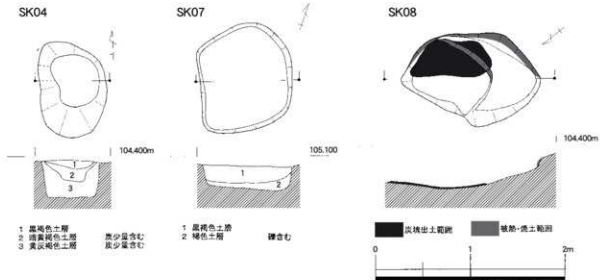
第12表 P地区土坑一覧表

番号	位置	形状	長軸 (cm)			断面の形状	覆土	備考
			真軸	短軸	深さ			
1	B-1	不整形円形	120	80	17	皿状	灰まじり灰褐色土	
2	B-1	楕円形	100	85	15	皿状	黄灰色土	
3	B-1	楕円形	70	70	20	2段掘り 皿状	灰褐色土 下部は炭少量混在	残骨・須恵器出土
4	B-2	楕円形	100	70	40	皿状	灰褐色土	
5	B-2	不整形円形	135	90	12	皿状	灰褐色土	
6	B-2-4	略長方形	115	90	14	皿状	灰褐色土	
7	B-4	略方形	120	95	25	皿状	黒褐色土	
8	B-2	不整形円形	145	100	25	2段掘り	不明	西側では壁と床面が被熱し、炭化物が盛でも広がる

周辺が自然崩落か倒木によるものかわからないが、地表面に大きな乱れがあってこの遺構の平面形も不明瞭である。長軸が北東から南西方向に向く。長軸145cm、短軸100cmを測る。壁面が明確な立上るものではなく、断面がより皿状に近い。東側では先に述べたように大きく乱れており、明確な壁面を指摘できない。深さも10cm前後を測る程度である。底面の東側と壁面の南から東にかけて被熱を受けた痕跡がある。

遺物 全体に少ない遺物の中で、8点の須恵器と1点の灰軸陶器の9点を図化した。いずれも細片である。蓋が3点あるが、摘みがあるのか、無紐なのか判断が付かない(第90図3・4・5)。杯類は無台杯の底部片のみの3点である(第90図2・7・8)。このほかに高台の上にケズリ調整を行うものは大型の浅鉢であろう(第90図6)。このほかに壺の頸部かと推定される破片が1点ある(第90図9)。C

第7節 P地区

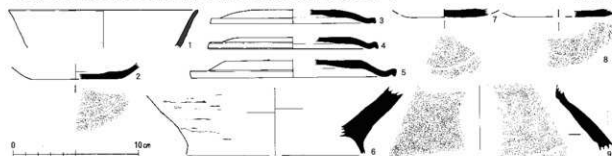


第89図 大塚向山遺跡P地区焼土坑遺構図(縮尺1/40)

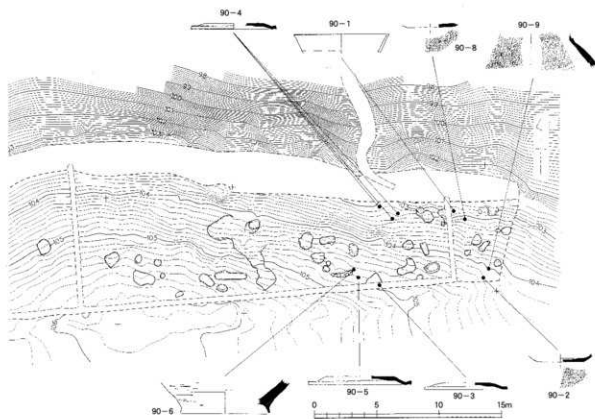
地区やI地区ではなかった灰軸陶器も口縁部片の1点がある(第90図1)。

遺物の出土もI地区と同じく、尾根の先端部に近い部分で多い。

(赤澤)



第90図 大塚向山遺跡P地区出土遺物(縮尺1/3)



第91図 大塚向山遺跡P地区主な出土遺物地点図(遺構:縮尺1/300・遺物縮尺1/6)

第5章 山腰遺跡

第1節 山腰遺跡の概要（第92図 折込13）

試掘調査の結果から、今回の調査地は遺跡全体の北側に位置し、遺構・遺物ともに少ないと想定していた。遺構は掘立柱建物1棟と溝5条のほかにはピットが点在して確認されただけである。しかし南側のS D01が大きく屈曲している内側では地山検出時点で、20から30cm前後の平坦な石を幾つか確認していることは既に述べ、これらが建物の礎石である可能性も指摘した。しかし明確なプランを持って並ぶものではないので最終的に建物などの遺構としては取り上げずに、その事実のみを記録するに留めておく。一般的に沖積地は粘質土が地山で礫層は見当たらない。山腰遺跡は沖積地に広がる遺跡ではあるが、場所によっては地山に礫層が出ている部分もある。表土を除去した後に、下層を確認する作業を兼ねて排水用のトレンチを調査区の周囲と、それにつながるように東西に3本、南北に4本掘削した。またS D01の南側では前述のように礎石らしきものを確認し、地山の一部分に礫を確認したこともあって、礫層などの洪水による再堆積の可能性なども考えた。可能性は薄いとは考えたが、浅くて幅広のトレンチを6本ほど掘削して、未確認の遺構面、遺構などが無いかを確認した。

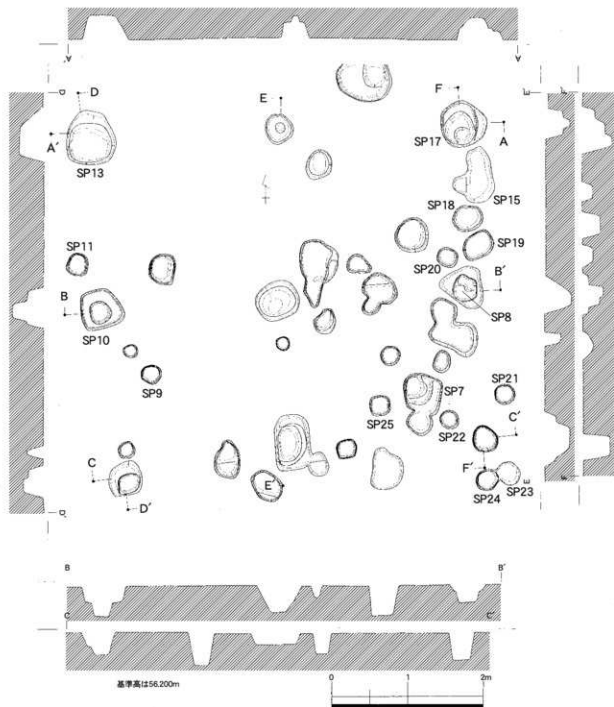
地山の検出面の標高は南側で56.4mから56.5m、北側では56.2mから56.1mと若干ながら北側が20・30cmほど低い。これは耕地整理の段階での削平によるものと考えるか、もともと地山が低いものと考えられるかは判断する材料が少ない。しかし北より流れていたS D1が、調査区の中央で大きく東へ折れて調査区の東へ消えていくこと。またS D05がS D01をささぎるように東西に流れるなど単純には考えられない。しかしS D02はその北端では不明瞭となり、消えるものと考えられることから今回の調査区の北辺が遺跡の縁辺部、もしくは端であると考えている。

第2節 掘立柱建物（第93図）

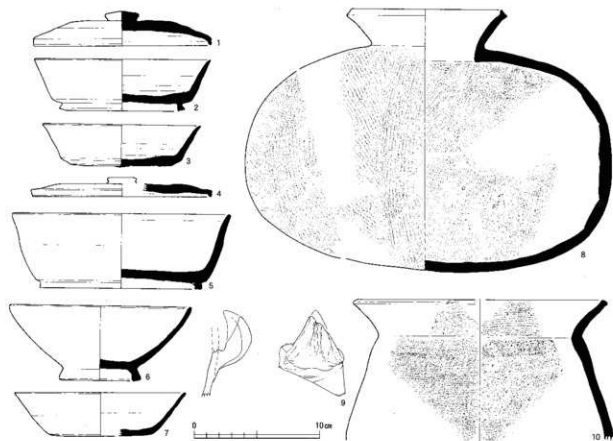
今回の調査区で検出された唯一の建物である。S D01とS D02の間が広がり、北東へ流れていたS D01が東へ大きく流れを変える位置の西側で、2間2軒の方形の建物が柱の軸を東西南北からわずかに西へ振って位置する。その北側にはS D05が北側を区画するように東西に伸びる。

柱穴と考えられる穴の大きさは6本あるが、この建物のある周辺に限ってピットが多数確認されている。ここでは遺物が出土しているピットに限って、番号を明示した。S P13としたものが北西隅の柱として、一番大きく長軸72cm、短軸65cm、深さ34cmを測る隅丸方形である。その南方の柱が、長軸57cm、短軸53cm、深さ42cmを測り、やや崩れた方形で中心の部分が一段下がる2段掘りである。さらにその南方に位置し、建物の南西隅の柱が、43cm四方の隅丸方形で、深さ25cmを測る。S P13の東方の柱が長軸39cm、短軸37cm、深さ29cmを測り、ほぼ円形で中心の部分が一段下がる2段掘りである。さらに東方の建物北東の隅にあたる柱が、61cm四方の円形で、深さ31cmを測り、北側の壁が3段になる。北東隅の南方にある柱は遺物が出土しており、S P8とした。上面の平面がおむすび形の三角形、下面が円形に近い。長軸56cm、短軸55cm、深さ29cmを測り、北側が2段、南側が3段の掘り方となっている。その南方、つまり建物の東南隅の柱は直径35cm、深さも35cmを測るほぼ円形である。建物の南辺中央のものは長軸72cm、短軸46cm、深さ14cmを測る。建物の柱と想定した他の柱より大きいが浅い。その東西両側にある穴が掘り方がしっかりしており、こちらが柱の可能性もある。建物の真ん中ものは長軸59cm、短軸51cm、深さ36cmを測る楕円形である。柱穴の間隔は南北の並びが2 m20cmから30cm、東西の並びが2 m30cmから2 m50cmである。

遺物 SP2から出土している甕（第94図9）は、土師器の把手である。SP8から出土している高台杯（第94図5）は、平坦な底部から直線的に立ち上がり、口縁端部が僅かに外反する器形である。底部のほぼ外端に高台が付く。SP13から出土している有台椀（第94図6）は、平坦な底部から、丸みを帯びつつ立ち上がり、口縁部が僅かに内湾する器形である。10世紀初頭のものか。SP15から出土している坏蓋（第94図4）は、鈕の痕跡がある扁平な器形である。8世紀後半のものか。SP16から出土している横瓶（第94図8）は、タタキ整形の口縁端部を内側に折り返す器形である。SP19から出土している無台杯（第94図7）は、平坦な底部から、直線的に立ち上がる器形である。9世紀初頭のものか。



第93図 山腰遺跡掘立柱建物全体図（縮尺1/50）



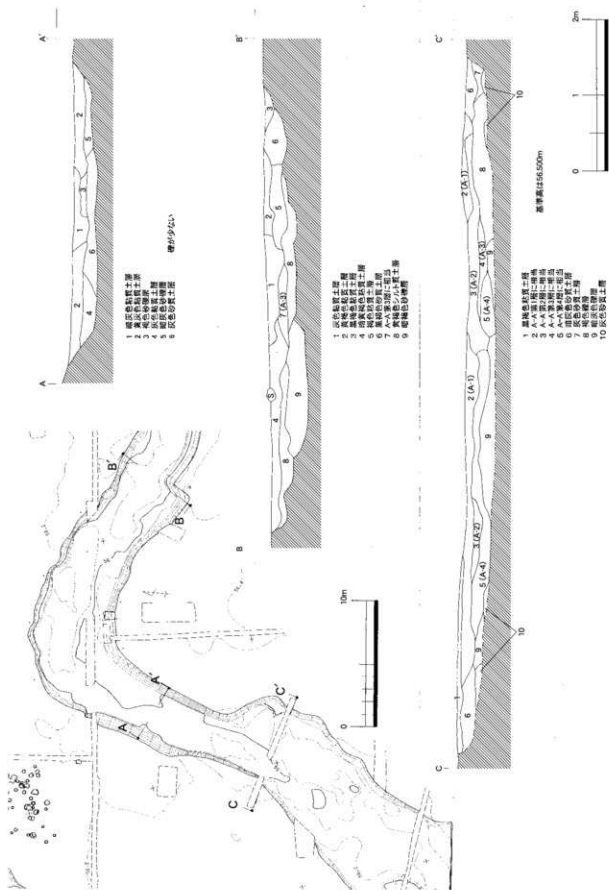
第94図 山腰遺跡掘立柱建物のはか出土遺物実測図（縮尺1/3）

これらのことから、この周辺のピットから8世紀後半代以降の須恵器が出土し、SP13から10世紀代の須恵器が出土している。この須恵器の時期を参考にすれば、この周辺に8世紀後半代から建物があって、最終的には10世紀にかかる時期の建物が最終のもので遺跡もこの時期の状況を示しているものと想定できる。

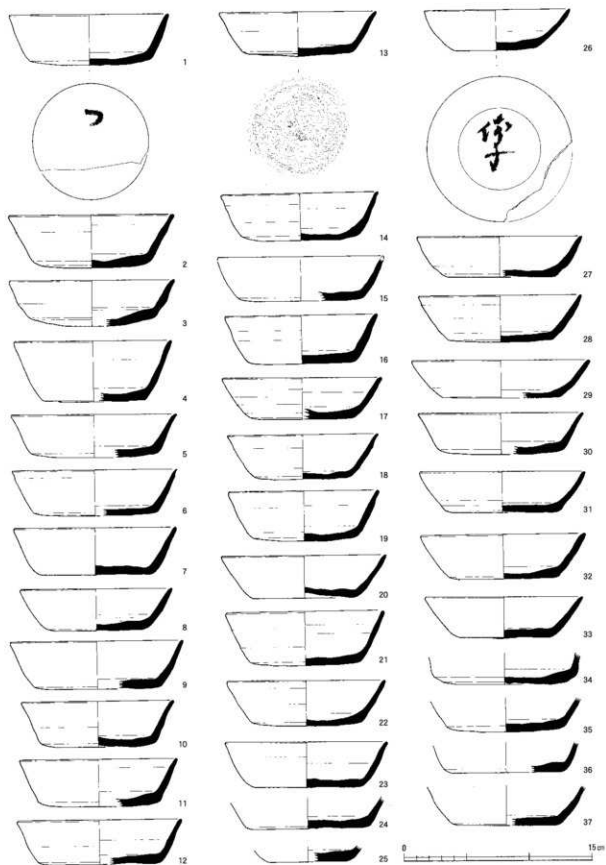
また全体図に掘立柱建物の北側にあるSK01とした遺構は、遺構精査の段階で遺物が出土していたため、土坑に類する遺構と判断した。しかし明確な掘り込みのある遺構ではなかった。SK1から出土している遺物は、坏蓋（第94図1）、高台坏（第94図2）、無台坏（第94図3）、甕（第94図10）の4点である。坏蓋は天井部に平坦面を持ち、口縁端部を折り返す器形である。扁平な鈕が付く。高台坏は平坦な底部から直線的に立ち上がり、僅かに外反する口縁部である。底部の外端から少し内側に高台が付く。無台坏は平坦な底部から直線的に立ち上がり、僅かに外反する口縁部である。甕（第94図10）は、口縁部をくの字に折り返し、口縁端部に面取りを施す器形である。この4点の土器の時期は、坏蓋（第94図1）、高台坏（第94図2）、無台坏（第94図3）の3点が8世紀前半、甕は須恵器であるためその判断は難しいが、8世紀代と考えられる。

第3節 S D01

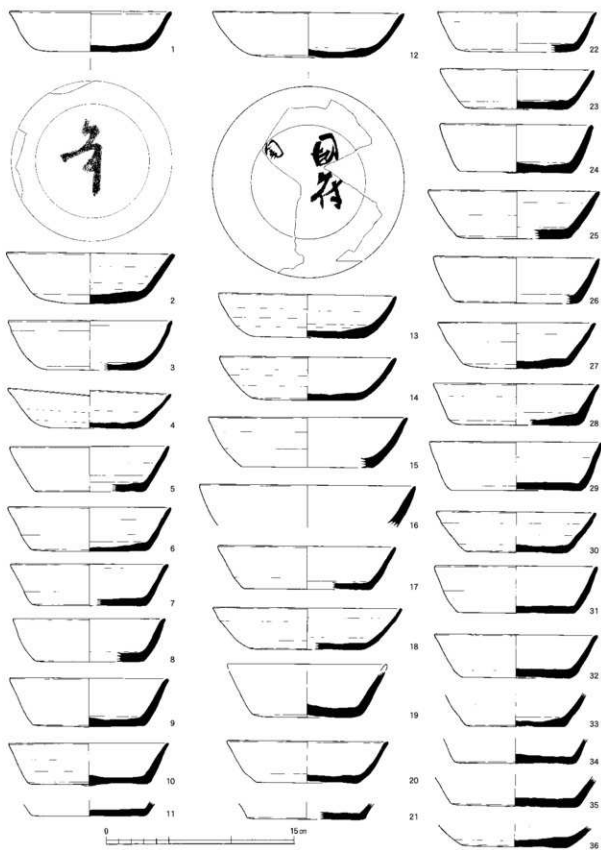
調査区の南辺から北東へ流れるが、調査区の中ほどで屈曲しその流れを大きく東へ変える。溝の幅は南で最大約9m、屈曲する手前で約4m弱と狭まるが、屈曲の途中で6m前後の幅のまま調査区の東辺へ消える。溝底の標高は南端で56.2m、屈曲部分で55.8m、調査区から消える東端ではやや浅くなって



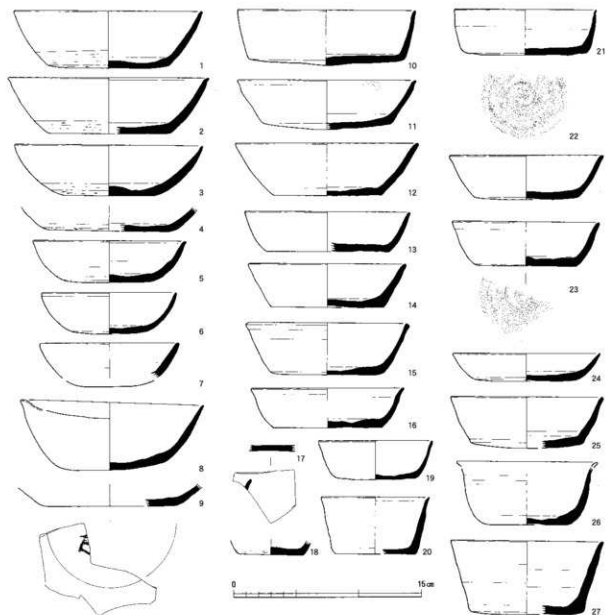
第96圖 山腰遺跡S D01屈曲部分圖 (縮尺 1/300) · 土層断面圖 (縮尺 1/100)



第97図 山腰遺跡出土遺物（無台杯）実測図（縮尺1/3）



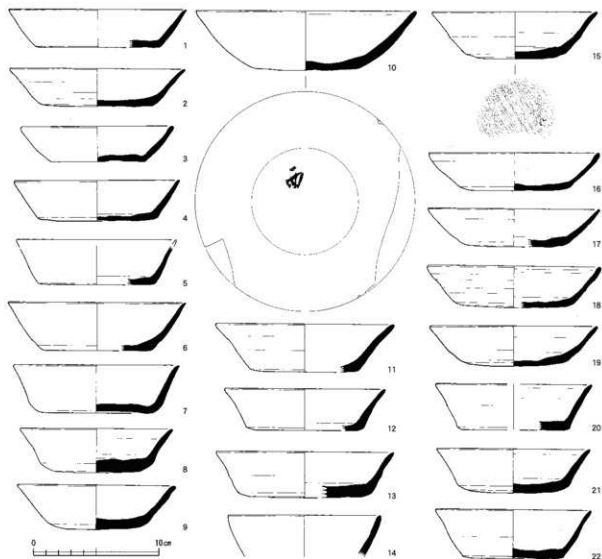
第96図 山椒道跡出土遺物（無台杯）実測図（縮尺1/3）



第99図 山腰遺跡出土遺物（無台坏）実測図（縮尺1/3）

55.9mを測り、浅いところで20cm未満、深いところでも30cm前後と明確に流れが想定できるものではない。断面は溝の底から非常にゆるく立ち上がる部分が多くて一概には言えないが、あえて言えば非常に幅の広いU字とも言えようか。遺物は山腰遺跡から出土した土器の半分以上を占め、特に屈曲部分での出土が多い。溝の堆積は灰褐色から黒褐色の粘質土を主体とし、一部に礫層を含むものである。上層から下層まで遺物はほぼ全体に含まれていた。特に北流していた溝の流れが大きく東へ流れの向きを変える屈曲部分でも、溝の外側となる北岸に沿って、完形品に近い小型品を中心に出土している。また坏・埴類以外もこの部分での出土が目立つ。例えば横瓶（第111図4・5）などや、「美」の異体字かと判読される大型の高台坏（第104図1）などである。

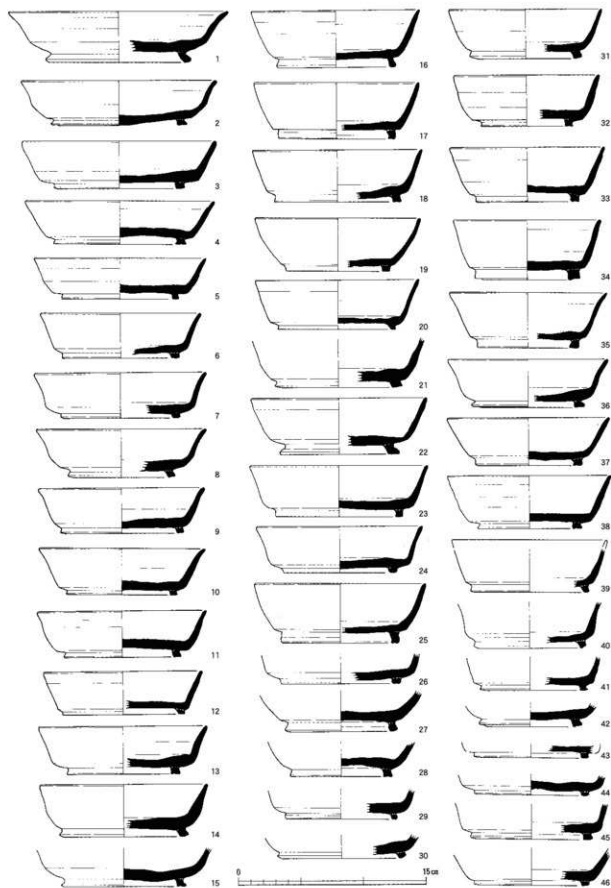
S D01から出土している遺物は、土師器の甕2点以外はすべて須恵器である。須恵器は無台坏122点（第97図1～37、第98図1～36、第99図1～27、第100図1～22）、高台坏61点（第101図1～46、第102図1～15）、蓋38点（第103図1～38）、より扁平な高台坏6点（第104図1～6）、皿97点（第105図1～



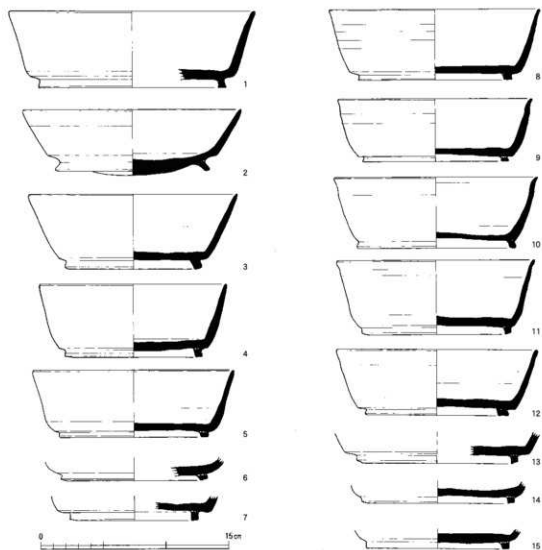
第100図 山腰遺跡S D01出土遺物(無台坏)実測図(縮尺1/3)

39、第106図1～39、第107図1～19)、埴23点(第108図1～23)、鉢1点(第109図1)、高坏10点(第109図2～5・6～13)、鉢類13点(第110図1～13)、壺・瓶類32点(第111図1～14、第112図1～9、第113図1～9)、甕類12点(第114図1・2、第115図1・2、第116図1・2、第117図1～4、第118図1・2)がある。土師器は甕2点(第119図1・2)がある。

無台坏は器形によって、坏形の1類(第97図1～37・第98図1～36・第100図1～22)、いわゆる金属塊模倣器形の2類(第99図1～27)に分類した。坏形の1類には、口縁部が外反するもの(第97図5・10・12・30・第100図2・5・8・11～13・21)、直線的なもの(第97図1～4・6～9・11・13・15～23・28・32・33・第98図2・4～7・9・10・17・19・22～32・第100図1・3・4・7・9・15・20・22)、内湾するもの(第97図14・26・27・29・31・第98図1・3・8・12～15・18・第100図6・10・16～19)がある。底部が丸底のもの(第97図3・第98図2)以外は、すべて平底である。底部外面に墨書したものがあり、「国府」「国」と記載されるもの(第98図12)がある。金属塊模倣は、他の坏とは異なった底部の立ち上がりの特徴があるものを分類したものである。それらは底部の立ち上がりが、丸みを帯びるもの(第99図1～9・24)と角をもつもの(第99図10～16・18～23・25～27)である。これらの



第101图 山腰遗址S D01出土遗物(高台杯)实测图(缩尺1/3)



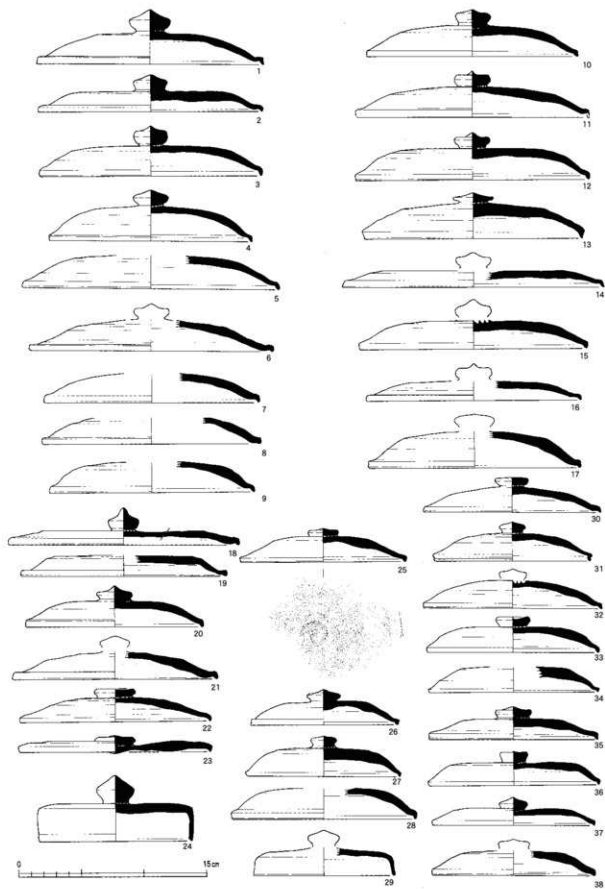
第102図 山腰遺跡S D01出土遺物(高台坪)実測図(縮尺1/3)

なかには、口縁端部をつまみ出すもの(第99図2・5・8・10・11・13・14・16・20~27)が多い。また、金属塊模倣器形には、底部を丁寧に削るもの(第99図1~5・12・18・20・26)がある。口縁端部に面取りを施すもの(第99図15)と、深身で口径の小さいもの(第99図20・26・27)がある、これらは坏というよりは鉢に近い器形といえる。

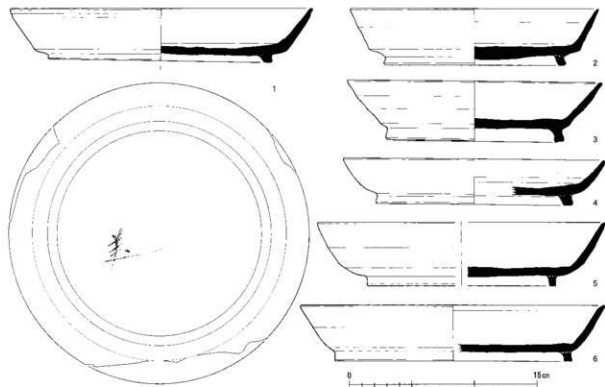
高台坪には偏平器形(第101図1~14・16~25・31~39)と深身器形(第102図1~12)がある。偏平器形は口縁部が、大きく外反するもの(第101図1・2)、少し外反するもの(第101図6~10・24・35~37)、直線的なもの(第101図3~5・11~14・16~18・20~23・31~34)、内湾するもの(第101図19・25)がある。深身器形は口縁部がほぼ直線的に立ち上がり、口縁端部が僅かに外反するもの(第102図1・8~12)と直線的なもの(第102図2~5)がある。

蓋は短頸壺の蓋(第103図24・29)以外はすべて坏蓋である。坏蓋は口縁部の折り返しが接地するものがないため、いずれも鈕が付くと考えられる。笠型器形と天井部が平坦面の器形と偏平器形がある。

高台坪の扁平なものには口縁部の立ち上がり、直線的なもの(第104図1~3・5・6)と丸みを帯びるもの(第104図4)がある。底部外面に墨書されるもの(第104図1)もある。



第103図 山腰遺跡S D01出土遺物(蓋)実測図(縮尺1/3)



第104図 山腰遺跡S D01出土遺物(高台坏)実測図(縮尺1/3)

皿は口縁部が、外反するもの(第107図8・12)、直線的なもの(第105図1・3・4・6~39、第106図1~22・24~30・32~39、第107図1~7・9~11・13~19)、内弯するもの(第105図2・5・34、第106図23・31、第107図11)がある。

碗は、稜腕模倣のもの(第108図2)と瓷器系模倣のもの(第108図1・3~23)がある。

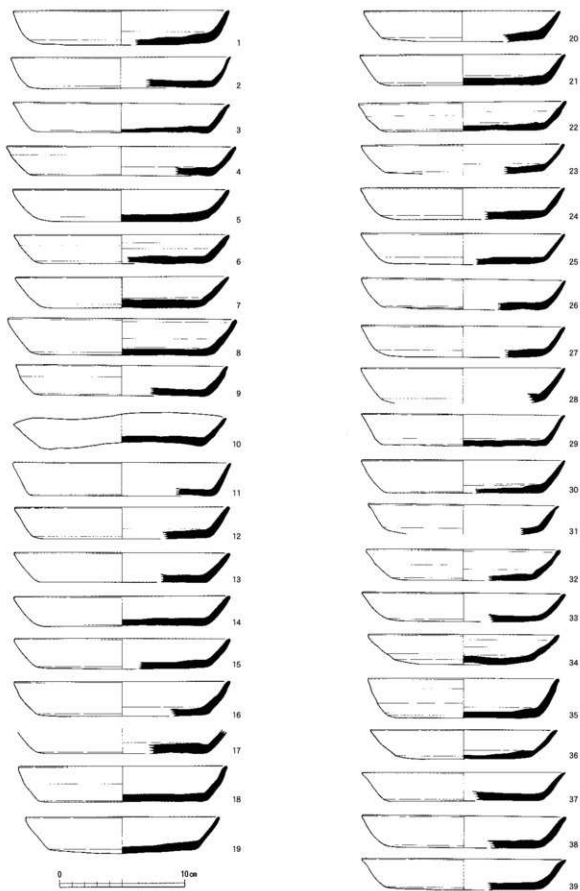
鉢は厚みのある器形で、外面をカキメ調整する。つき鉢とも呼称される。内面が摩滅しており、つき跡がある。

高坏は、坏部が小型鉢のもの(第109図5)と皿のもの(第109図8・9)がある。坏部が小型鉢のものは脚台坏であり、台付きの灯明皿と考えられる。

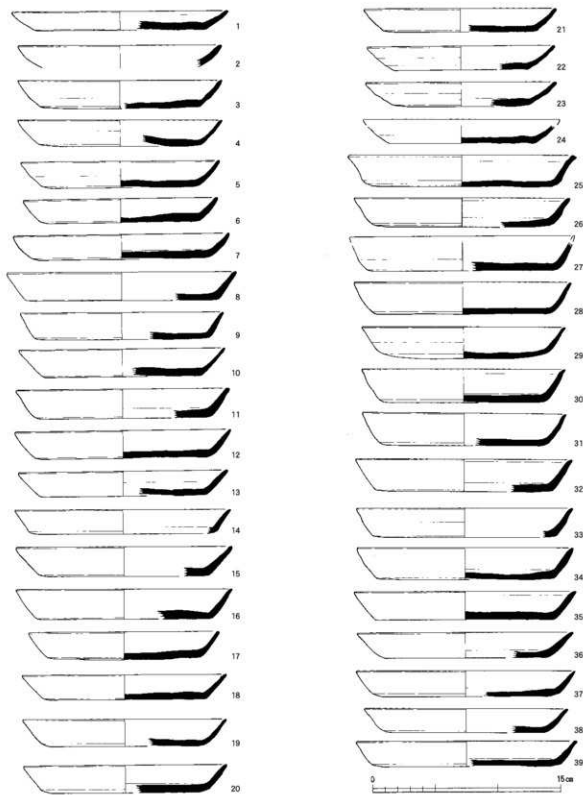
鉢類はいわゆる括れ鉢(第110図1・9・第116図1・第117図3)、鉄鉢(第110図2・3)、大平鉢(第110図6)、その他の鉢(第110図4・5・7・8・10~13)がある。括れ鉢は、口縁端部に段を有するもの(第110図1)と内側に折り返すもの(第110図9)がある。大型のもの(第116図1・第117図3)もある。鉄鉢は、平底で口縁部が内弯し、口縁端部を外側に屈曲させる。口縁端部に面取りを施す。壺・瓶類は、平瓶(第111図1・2)、横瓶(第111図4・5)、長頸瓶(第111図10)、三耳壺(第112図4)がある。平瓶は、体部に沈線を施すもの(第111図1)と口縁部に沈線を施すもの(第111図2)がある。壺類でも口縁端部をつまみ出すようなもの(第112図1・4~6)は東海的と考えられる。この他に土師器の器形の須恵器甕(第113図6)がある。

甕は、中型のもの(第114図1・2・第115図1・2・第116図2・第117図1・2・4)と大型のもの(第118図1・2)がある。大型のものは口縁部に波状紋を施す。

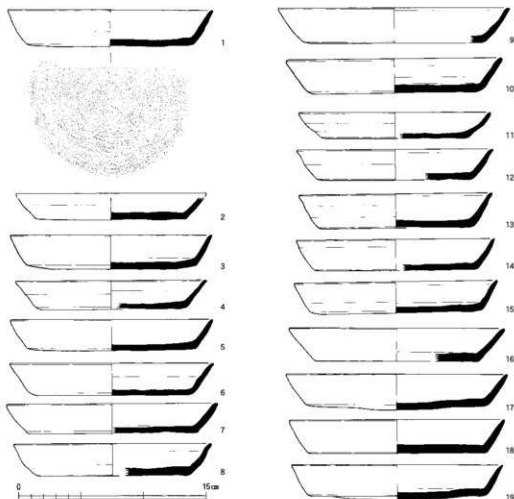
土師器甕は、口縁部が外側にくの字に屈曲し、外面にカキメを施すもの(第119図1)と体部片(第119図2)がある。



第105図 山腰遺跡S D01出土遺物(Ⅲ)実測図(縮尺1/3)



第106圖 山腰遺跡S D01出土遺物(皿)実測図(縮尺1/3)

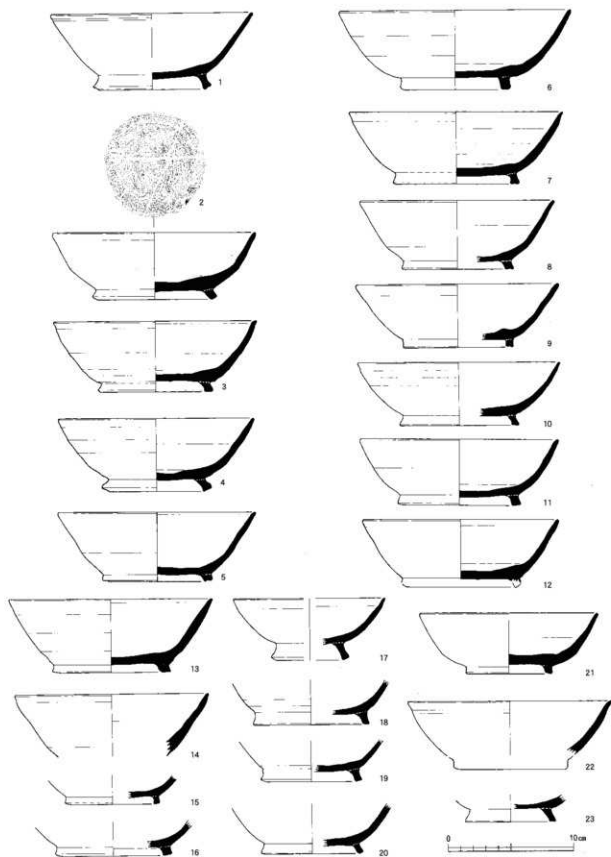


第107図 山腰遺跡S D01出土遺物(皿)実測図(縮尺1/3)

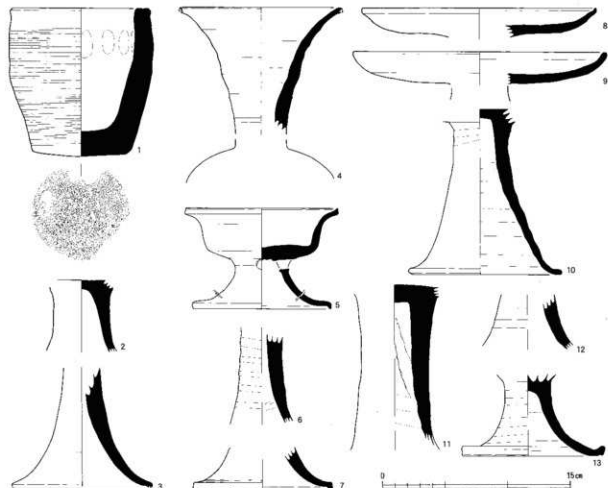
最初に述べたが、S D01出土については400点を超える土器を図化した。土師器は2点のみで、他すべてが須恵器、つまり貯蔵具の甕はあるものの、供膳具の器種がほとんどで、煮沸具である土師器は極端に少ない。

墨書土器としては7点ある。無台杯の底部にあるもの6点と高台杯の底部にあるものの1点である。無台杯のものは、1点は2行書かれるもので、「国府」「国」を判読できる(第98図12)。また立ち上りが丸く塊とも言えるような無台杯については「西」と判読できる。このほか墨痕は明瞭ながら文字の判読ができないものは「つ」の可能性のあるもの(第97図1)、「依か女」と考えられるもの(第97図26)、大きな文字で墨痕は明瞭ながら想定される文字が全く考えられないもの(第98図1)である。またここでは高台杯として分類したが、有台皿とも呼称される、口径が24cmにもなるものには「美」の異体字であろうか。これらは、これまで越前で出土が確認されている墨書土器の事例に多いものではないと考えられる。

以上のS D01出土土器を検討する。無台杯は坏形器形と金属塊模倣器形がある。坏形器形の口縁部形状は、外反するもの、直線的なもの、内湾するものがあり、これらは時期差を示唆するものと考えられる。外反形状は8世紀初頭から末頃に、直線的な形状は9世紀初頭～中頃に、内湾形状は9世紀中頃に、それぞれ多くみられる傾向であることから、これらの時期を比定したい。比率的には直線的なも



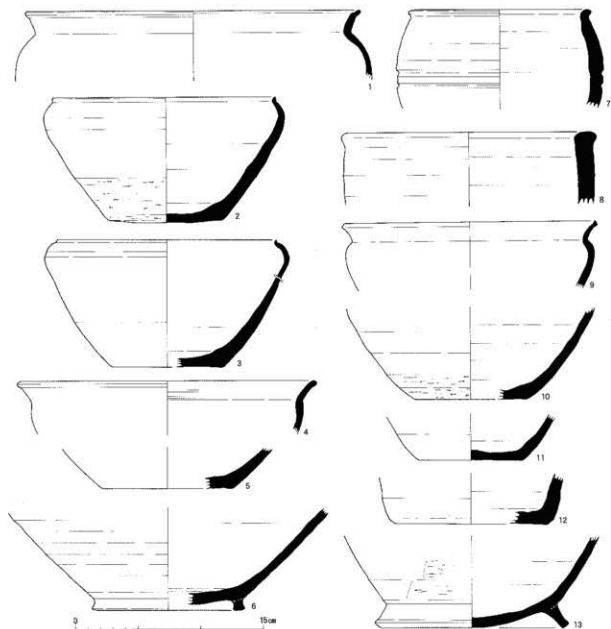
第108圖 山腰遺跡S D01出土遺物(埴)実測図(縮尺1/3)



第109図 山腰遺跡S D01出土遺物（鉢・高杯）実測図（縮尺1/3）

のが多く、それが主体的な時期ということになる。以上のことから、無台杯の時期は、8世紀初頭から10世紀初頭までのものがあり、数量の傾向から主体時期は8世紀後半から9世紀前半と想定したい。金属模倣器形は、舟場1号窯灰原に存在するため、同窯の年代である9世紀前半代のものと考えられる。また、なかには7世紀の無台杯の可能性もある器形（第99図5）もあるが、7世紀代の遺物がほとんど存在しないため、ここでは他の金属模倣器形と同様の時期を想定したい。金属模倣器形については、銅碗といった金属器をより忠実に模倣した可能性がある。また、底部ケズリの技法自体は東海の特徴であるため、東海系技術の流入と考えることもできる。出土した金属模倣としたもの多くは、つまみ出すように口縁端部が外反する。口縁端部をつまみ出す技法は、東海系の壺の口縁にもみられるため、これを考慮した場合には東海系としての位置づけも妥当となる。いずれにせよ、数量はそれほど多くなく、仏具系の特殊品として扱われた可能性は高い。

高台杯には扁平器形と深身器形がある。扁平器形は8世紀代に多くみられるものである。特に、丸みを帯びつつ外反する器形（第101図1・2・8）は8世紀初頭のものと考えられる。扁平器形のなかでも口縁部が外反するものは、8世紀中頃以前への位置づけを想定したい。深身器形は8世紀中頃以降に出現する器形である。出土した高台杯は口縁部の立ち上がりがほぼ直上であるため、9世紀初頭頃を想定したい。内弯する器形（第101図19）は、9世紀後半の可能性が高い。以上のことから、高台杯は8世紀初頭から9世紀後半までのものがあり、数量の傾向から主体時期は8世紀代と想定したい。



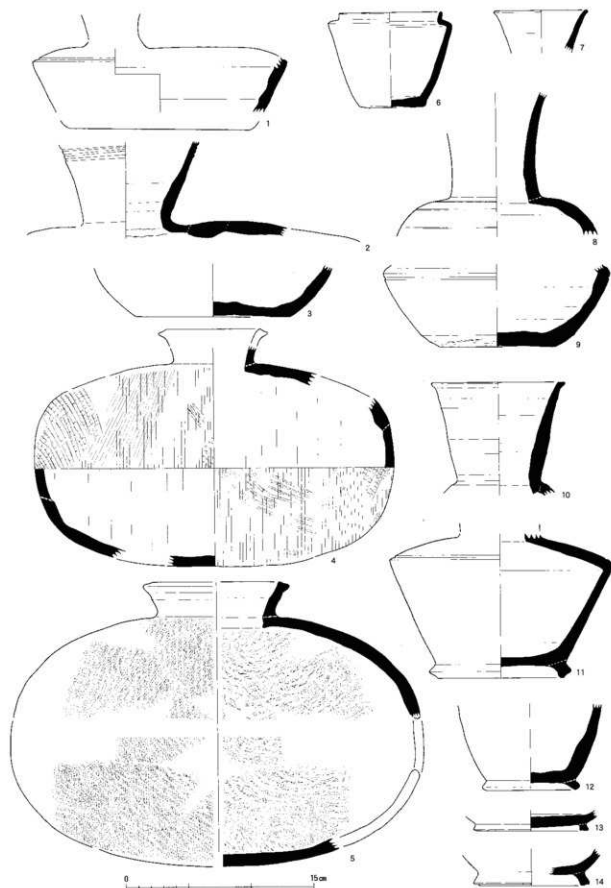
第110図 山腰遺跡S D01出土遺物(鉢)実測図(縮尺1/3)

無台杯と高台杯のそれぞれにおける主体時期が異なることは、8世紀前半代は無台杯よりも高台杯が比率的に多い傾向であることから、それぞれの時期の比率差がより反映された結果と考えられる。

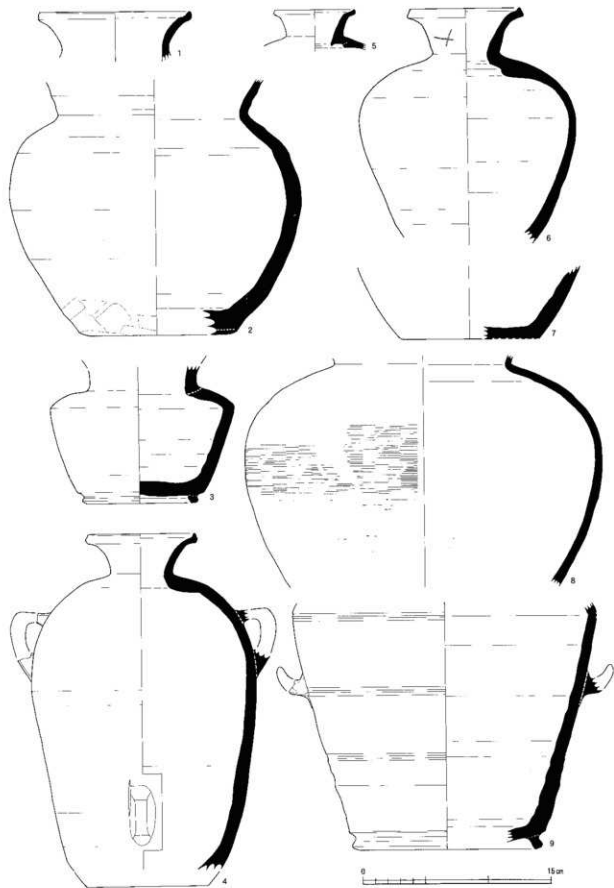
杯蓋はいずれも鈕が付くと考えた場合には、9世紀中頃以前の時期に比定できる。笠型器形は8世紀初頭から前葉、天井部が平坦面の器形は口縁部の折り返しが接地しないため8世紀中葉から末の時期を想定したい。蓋の時期は、鈕の形状がほとんど偏平のものであることから主体時期を8世紀代に想定し、僅かに9世紀のものも存在するとしておきたい。

扁平な高台杯は口縁部の立ち上がりがあり、直線的なものと丸みを帯びるものがある。直線的なものを9世紀初頭から前葉に想定したい。

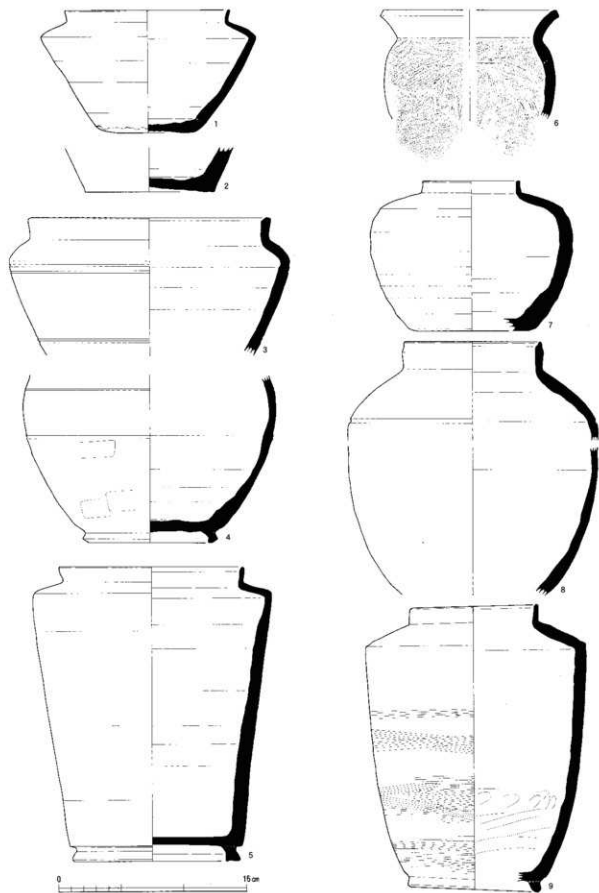
皿は口縁部が、坏形器形の口縁部形状は、外反するもの、直線的なもの、内湾するものがあり、無台杯と共通する要素が多いと考えられる。ただし、皿は8世紀中葉に出現し、出土土器の様相は8世紀後



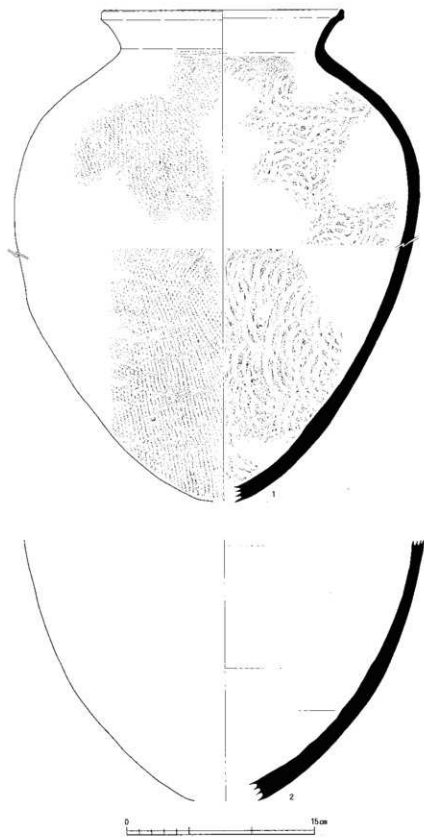
第111圖 山腰遺跡S D01出土遺物(壺・瓶類)実測図(縮尺1/3)



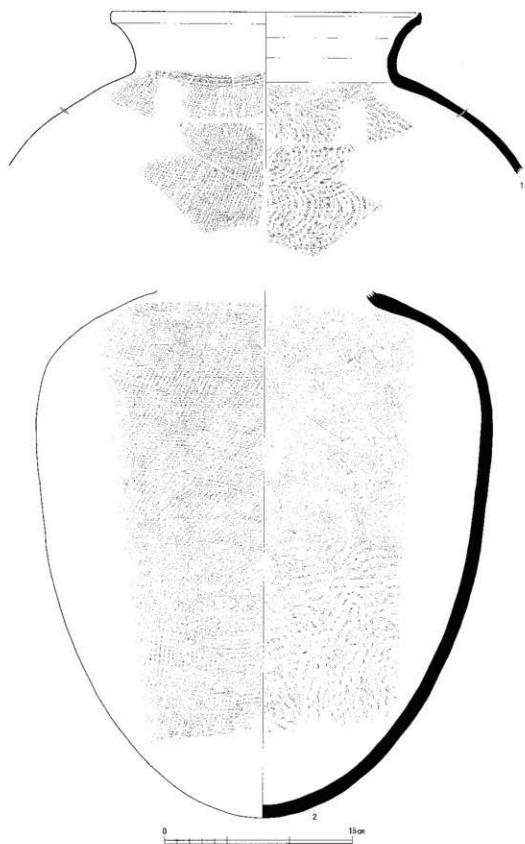
第112図 山鹿遺跡S D01出土遺物(壺・瓶類)実測図(縮尺1/3)



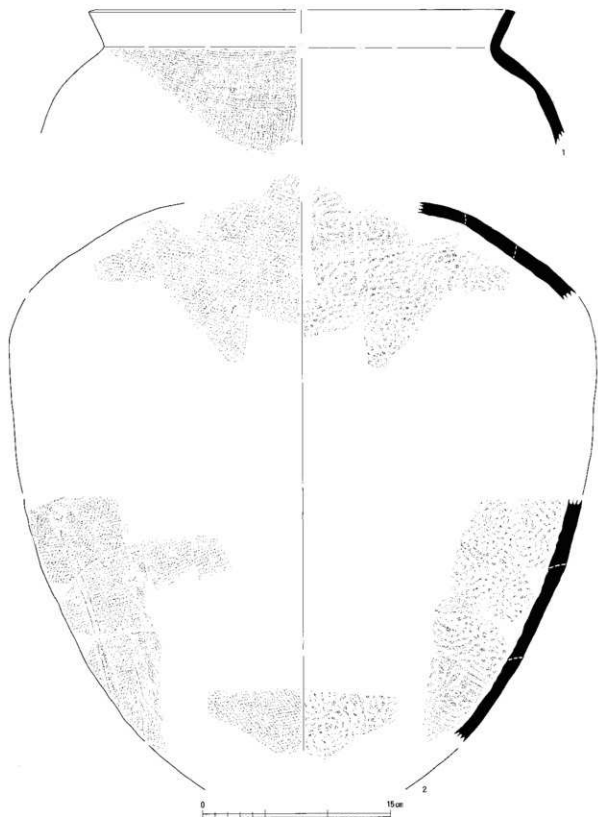
第113図 山腰遺跡S D01出土遺物（壺・瓶類）実測図（縮尺1/3）



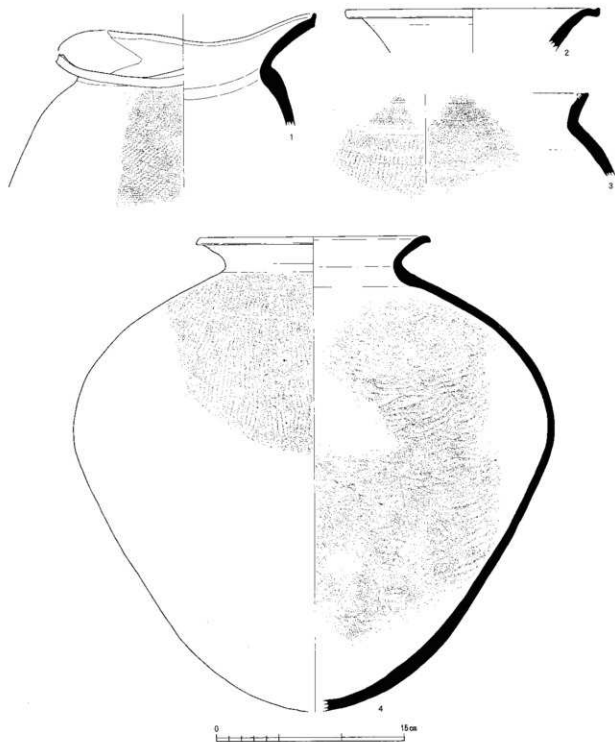
第114圖 山腰遺跡S D01出土遺物(壺)実測図(縮尺1/3)



第115図 山腰遺跡S D01出土遺物(壺)実測図(縮尺1/3)



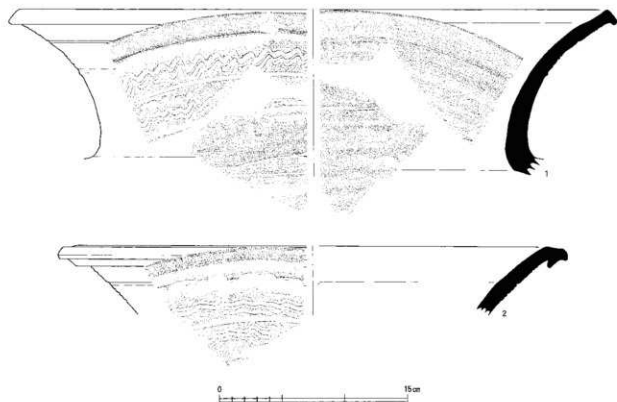
第116圖 山腰遺跡S D01出土遺物(甕)実測図(縮尺1/3)



第117図 山腰遺跡S D01出土遺物(要)実測図(縮尺1/3)

葉以降のものと考えられる。そのため、外反形状は8世紀後葉から末頃に、直線的な形状は9世紀初頭～中頃に、内弯形状は9世紀中頃以降に、それぞれの時期を比定したい。数量的傾向から主体的な時期は9世紀前半ということになろう。

壺は稜塊模倣のものと瓷器系模倣のものがある。稜塊模倣のものは7世紀末から8世紀初頭にみられる。出土土器は高台の形状が簡略的であるため、8世紀初頭を想定したい。瓷器系模倣のものは9世紀



第118図 山腰遺跡S D01出土遺物(壺)実測図(縮尺1/3)

後半以降にみられる。出土土器には10世紀代にみられる焼成が不良のものも存在するため、9世紀後半から10世紀初頭までの時期を想定したい。

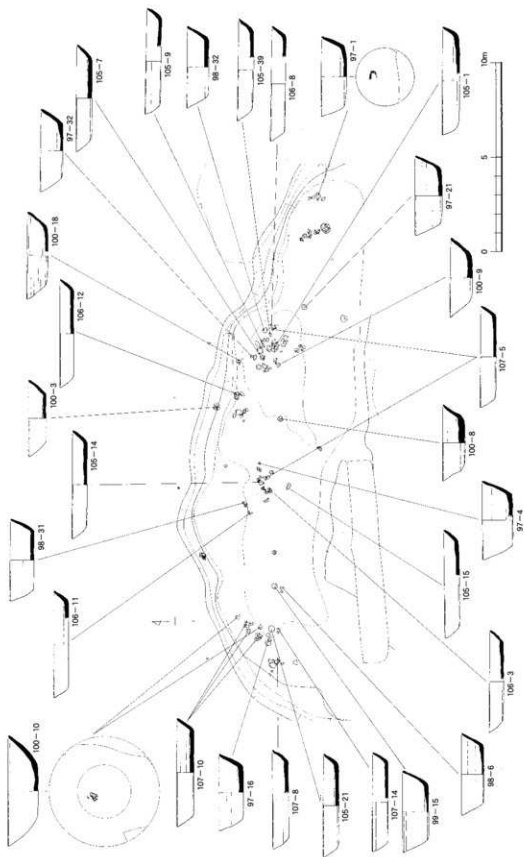
皿形器形の高坏は8世紀中頃以降のものと考えられる。

鉢類は括れ鉢・鉄鉢・大平鉢がある。鉄鉢は9世紀初頭以前のもが多くみられる傾向があるため、その時期のものと考えられる。大平鉢は9世紀後半以降に出現する器形である。東海的な壺は流通状況の一端を示すものと思われる。大型の壺の出土は、有力者と関連するという見解もあることから、考慮すべき要素である。

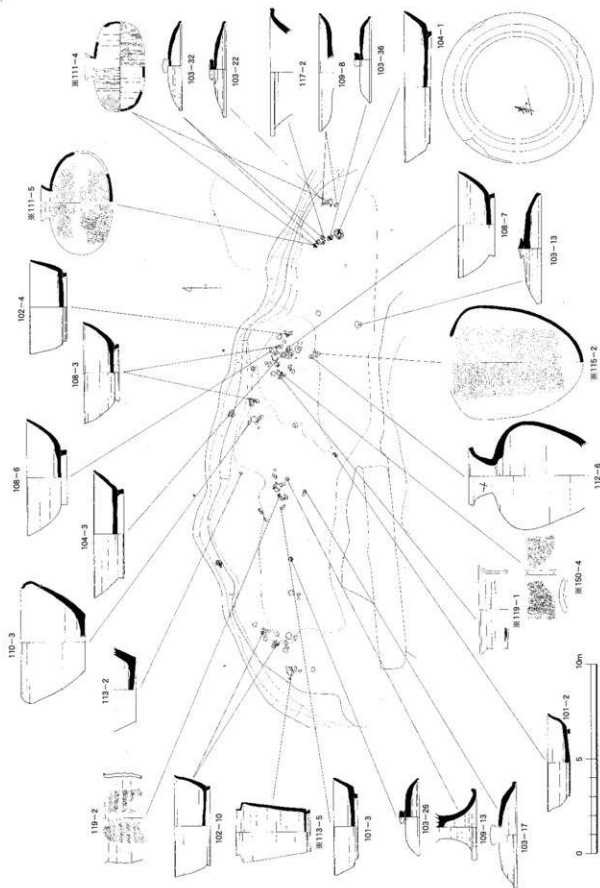
以上のことからS D01の出土土器は、8世紀初頭から10世紀初頭までのものが存在し、おおよそ8世紀後半から9世紀前半の時期のものが多いといえる。



第119図 山腰遺跡SD01出土遺物(土師器)実測図(縮尺1/3)



第120図 山腰遺跡屈曲部分主な出土遺物地点図①(遺構：縮尺1/100・遺物縮尺1/6)



第121図 山腰遺跡屈曲部分主な出土遺物地点図② (遺構：縮尺1/100・遺物縮尺1/6)

第4節 S D02

S D01の西側に並んで調査区の南辺から、北からやや東よりにほぼ直線的に流れるのがS D02である。延長約66mを検出し、最も幅の広いところで約4m、狭いところで約1.2m、深さも20から30cm前後である。溝底の標高は調査区の南端で56.1m、不明瞭となる北端で55.7mを測る。断面は基本的に幅の広いU字に近い。南辺近くで分流したS D04がS D01と繋がる。また次に述べるS D03は最終的にS D02の一部となった。調査区の中ほどで一部円形に深くなる場所が2箇所あるが、井戸など別遺構も想定したが、土層断面の検討の結果、別な遺構との判断には至らなかった。また溝としての特異な堆積を示すものでもなかった。基本的には暗灰褐色から青灰色の粘質土が堆積している。小石などを含む層はあるが、S D01とは異なり礫層として考えられるものはなかった。

調査区の北になるに従い流れを東よりに変えて、調査区端ではほぼ東方向近くに向きを変えている。調査区の北端では溝の立ち上がりそのものが不明瞭となり、溝を切断するように地山を断ち割りながら確認するが、明確には確認できていない。この北側については調査前の試掘段階でも遺跡の範囲外としたように、遺物の出土を認めることができなく、遺跡の地山と考えている青灰色粘質土は若干深い位置で確認され、低湿で沼地のような状況が想定されていたことから、S D02の溝そのものが調査区の北端で湿地帯に注ぎ込んでいたものと考えるのが妥当である。

遺物の出土状況は先に触れた調査区の北端では少なくなり、出土する土器も小片が多かった。しかしそれ以外は偏在することなく全体にわたって出土している。

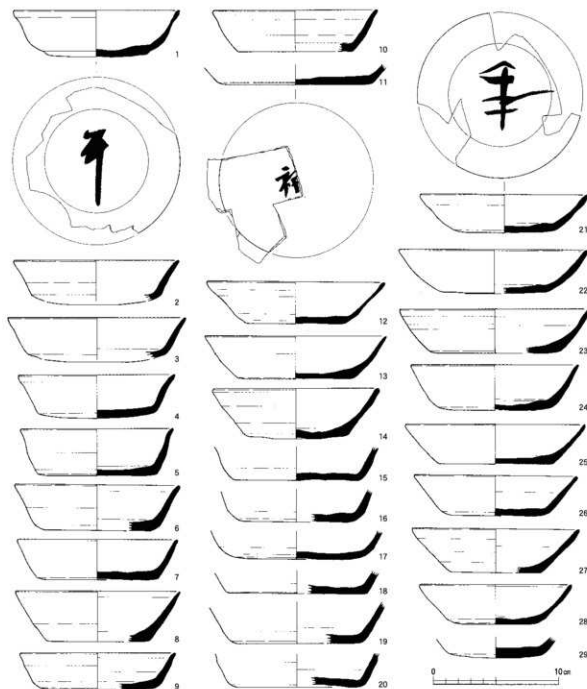
S D02から出土している遺物は、土師器甕2点と無台坏1点以外はすべて須恵器である。須恵器は無台坏56点(第123図1～29・第124図1～14・第125図1～13)、高台坏33点(第126図1～33)、蓋15点(第127図1～15)、より扁平な高台坏3点(第128図1～3)、皿27点(第128図4～30)、埴29点(第129図1～29)、壺・鉢・瓶類30点(第130図1～6・第131図1～6・第132図1～18)、甕類8点(第133図1～8)がある。土師器は甕2点(第134図1・2)、無台坏1点(第134図3)がある。

無台坏は器形によって、坏形の1類(第123図1～29・第124図1～14)、金属塊模倣器形の2類(第125図1～13)に分類した。1類は口縁部が、外反するもの(第123図2・4・6)、直線的なもの(第123図1・3・5・7～10・12・14・26)、内湾するもの(第123図13・21～25・28・第124図1・3・5～14)がある。いわゆるベタ高台のもの(第124図14)小型器形(第125図12・13)がある。底部外面に墨書をしたものがあり、それぞれ「石井」(第124図6)「奈」(第124図1)「年」(第123図1)と記載される。

高台坏には深身器形(第126図1～4・6・7・22～28)と扁平器形(第126図5・10～15)がある。深身器形は大型のもの(第126図1～4・6・7)と小型のもの(第126図22～28)がある。大型のものは、口縁部がほぼ直線的に立ち上がる。小型のものは、口縁部が僅かに外反するもの(第126図25)と直線的なもの(第126図22～24・26～28)がある。扁平器形は口縁部が、外反するもの(第126図12・15)、直線的なもの(第126図10・11・13・14)がある。

蓋はいずれも坏蓋である。有鈕のものは、扁平なもの(第127図4・7・11)、そろばん型のもの(第127図1・9・12～15)、中央が尖るもの(第127図6)がある。無鈕のもの(第127図10)もある。坏蓋の形状は、扁平のもの(第127図3・4・5・10)と笠型のもの(第127図1・2・8・9・11～15)がある。

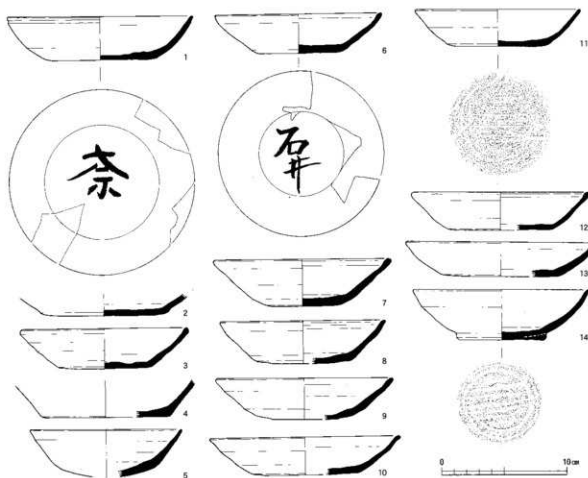
より扁平な高台坏は口縁部が直線的に開く。口縁部に段を有するもの(第128図2)もある。



第123図 山腰遺跡S D02出土遺物(無台坏) 実測図(縮尺1/3)

皿は口縁部が、外反するもの(7・9)、直線的なもの(4・6・8・10・13・15・26・28~30)、内弯するもの(14・27)がある。

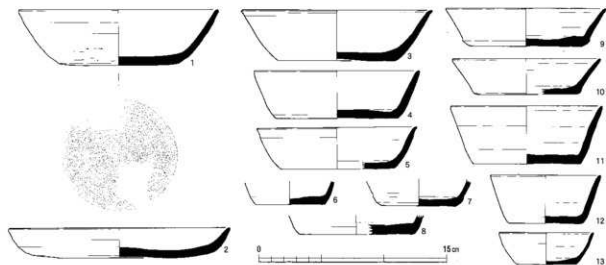
碗はいわゆる金属碗模倣のもの(第129図14・16)と瓷器系模倣のもの(第129図1~13・15・17~29)がある。高台端部を外側に折り返すもの(第129図1)がある。口縁端部が、外反するもの(第129図3・4・11・16・17)、直線的なもの(第129図1・7・9~12・18・19・23)、内弯するもの(第129図5・13・14)がある。高台が三日月型のもの(第129図19)は、高台形状が灰袖陶器黒笹90号窯式の2段階のものに似ている。墨書土器は、底部外面に「山田」と記載されるもの(第129図1)と体部外面に「石



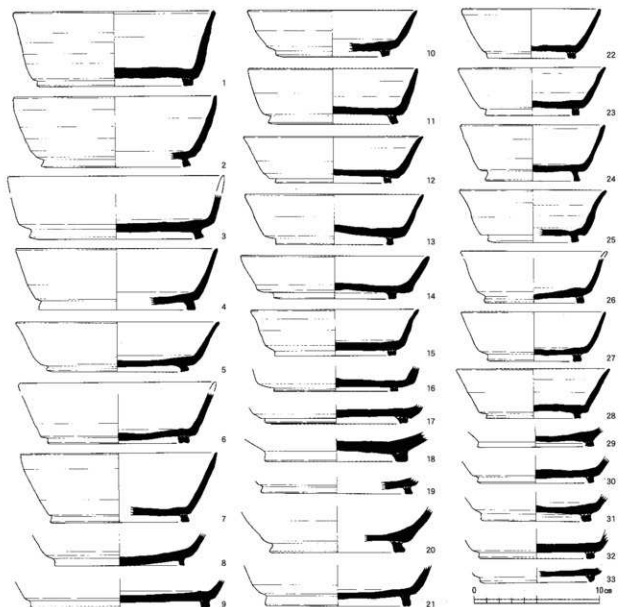
第124図 山腰遺跡S D02出土遺物（無台坏）実測図（縮尺1/3）

井」と記載されるもの（第129図13）がある。

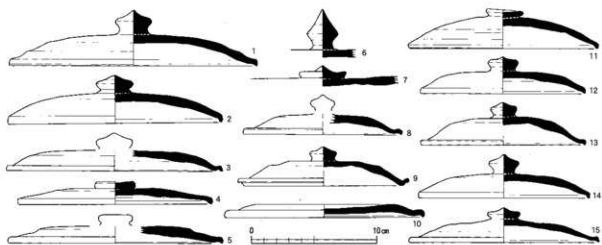
壺・鉢・瓶類は、長頸瓶（第130図1・2）、厚手の鉢（第130図5）、大平鉢（第131図1）、鉄鉢（第131図3～5）、括れ鉢（第131図6）、短頸壺（第131図2・第132図1・10）、横瓶（第132図2・3）、平瓶（第132図11）がある。鉄鉢は平底で口縁端部を外側に折り返す。括れ鉢は口縁端部を内側に折り返す。



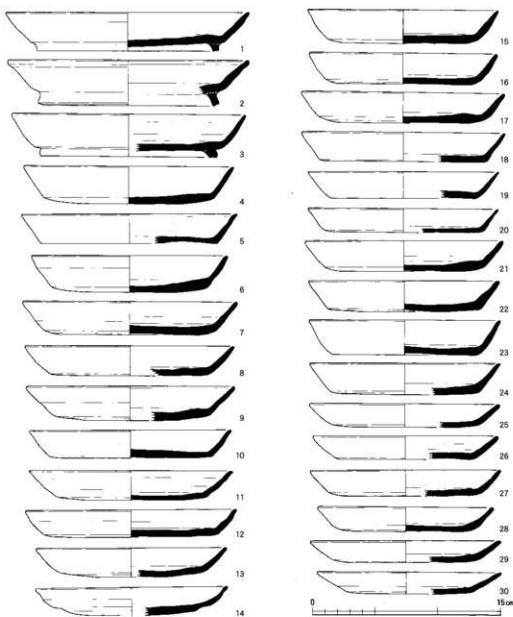
第125図 山腰遺跡S D02出土遺物（無台坏・皿など）実測図（縮尺1/3）



第126圖 山腰遺跡S D02出土遺物(高台杯)實測圖(縮尺1/3)



第127圖 山腰遺跡S D02出土遺物(蓋)實測圖(縮尺1/3)

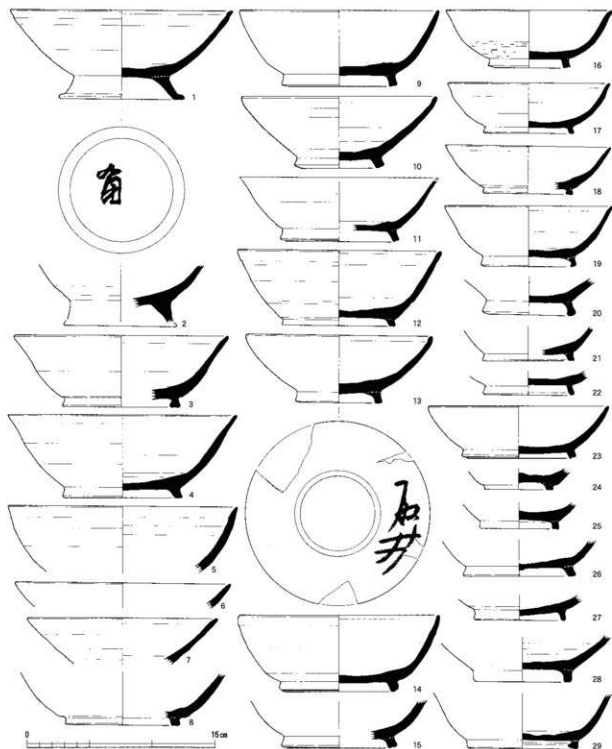


第128図 山腰遺跡S D02出土遺物(皿)実測図(縮尺1/3)

甕は、中型のもの(第133図1・2・5～8)と大型のもの(第133図3・4)がある。大型のものは口縁部に波状紋を施す。

土師器甕は、口縁部をくの字に外側に折り返し、口縁部を面取りする(第134図1)。土師器無台杯は、内湾する口縁部である。

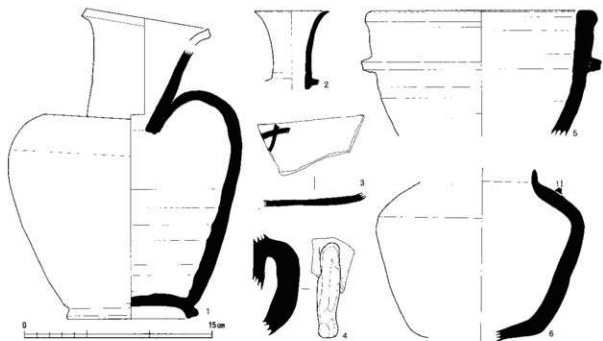
以上のS D02出土土器を検討する。無台杯の口縁部形状から、外反形状は8世紀初頭から末頃に、直線的な形状は9世紀初頭～中頃に、内湾形状は9世紀中頃以降の時期を想定したい。比率的には内湾形状のものが多く、それが主体的な時期ということになろう。金属塊模倣器形は、多くは9世紀前半代のものと考えられるが、口縁部が内湾し口縁部で外反する器形(第125図1・3)は8世紀前半のものである可能性もある。小型器形(第125図12・13)は、鉢伏2・3号室にみられるため、9世紀後葉から末を想定したい。以上のことから、無台杯の時期は、8世紀初頭から10世紀初頭までのものがあり、数量の傾向から9世紀代が多く、特に9世紀後半に主体があると想定したい。



第129図 山腰遺跡S D02出土遺物(埴)実測図(縮尺1/3)

高台杯には偏平器形と深身器形がある。偏平器形は8世紀代に多くみられ、口縁部が外反するものを8世紀中頃以前と想定したい。深身器形は8世紀中頃以降に出現し、出土した高台杯は口縁部の立ち上がりはほぼ直上であるため、9世紀初頭頃を想定したい。以上のことから、高台杯は8世紀初頭から9世紀初頭までのものがあり、数量の傾向から主体時期は8世紀代と想定したい。

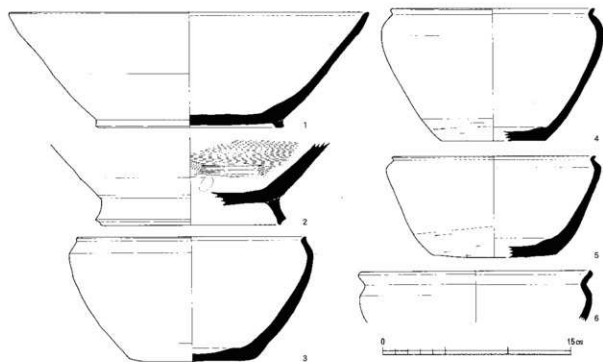
坏蓋は笠型器形を8世紀初頭から前葉、天井部が平坦面の器形を口縁部の折り返しが接地しないもの



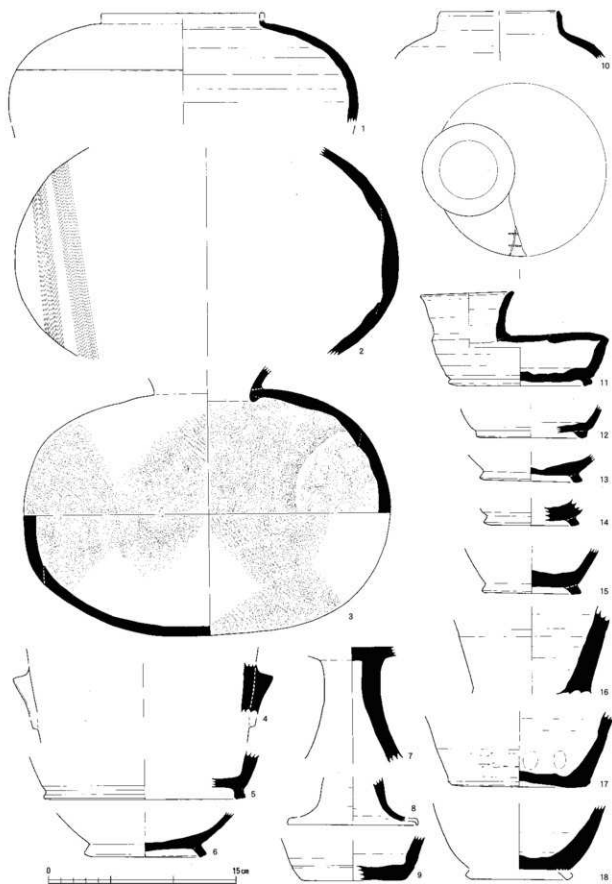
第130図 山腰遺跡S D02出土遺物（鉢・壺など）実測図（縮尺1/3）

を8世紀中葉から末の時期、口縁部の折り返しが接地するものを9世紀前半、無鈕蓋を9世紀後葉に想定したい。ただし、鈕の形状がそろばん形のものが多いため、主体時期は9世紀初頭段階まで下げて想定したい。

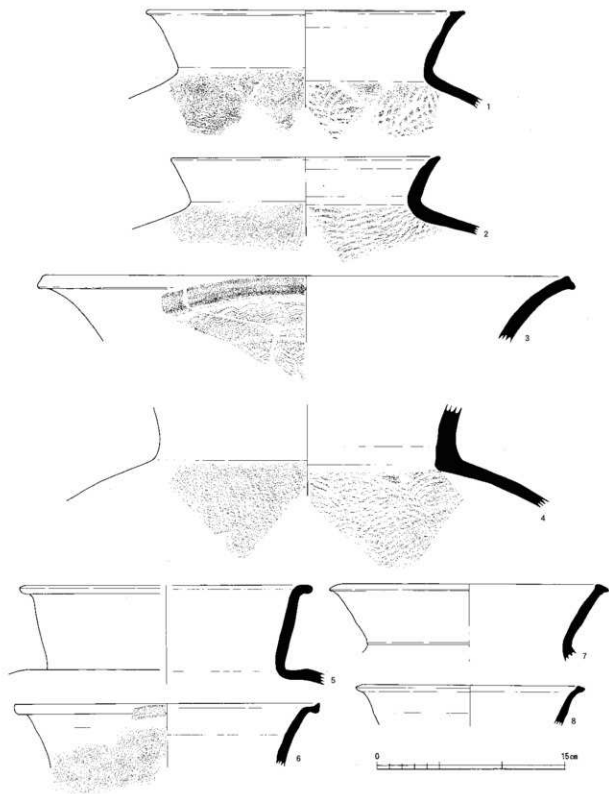
皿は口縁部形状から、外反形状は8世紀後葉から末頃に、直線的な形状は9世紀初頭～中頃に、内弯形状は9世紀中頃以降に、それぞれの時期を比定したい。数量的傾向から主体的な時期は9世紀前半ということになる。



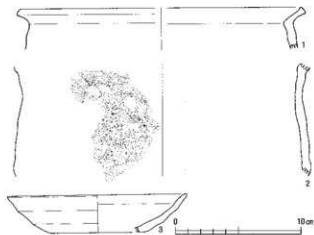
第131図 山腰遺跡S D02出土遺物（鉢）実測図（縮尺1/3）



第132図 山腰遺跡S D02出土遺物（瓶・高杯など）実測図（縮尺1/3）



第133圖 山腰遺跡S D02出土遺物(甕)実測圖(縮尺1/3)



第134図 山腰遺跡S D02出土土器(土師器)実測図(縮尺1/3)

碗は、金属塊模倣のものと瓷器系模倣のものがある。金属塊模倣のものは舟場1号窟灰原の時期である9世紀前半代のもと考えられる。瓷器系模倣のものは9世紀後半以降にみられる。出土土器に焼成が不良のものも存在するため、9世紀後半から10世紀初頭までの時期を想定したい。

第5節 S D03・S D04

S D03は検出段階ではS D02の東側にある別の溝について想定したが、確実な溝底から立上りを確認した結果、最終的にはS D02の一部と判断するにいたったものである。S D02の上層、もしくはS D02埋没後に形成された溝と考えられ、S D02よりも後出するものである。よって遺物はS D02とは別に取上げていく。

S D03から出土している土器は、無台杯(第135図1・7・12・13)、高台杯(第135図2～4・8)、皿(第135図5)、碗(第135図6・14・15)、鉢底部(第135図9)鉄鉢(第135図10)、括れ鉢(第135図11)、甕(第135図16)である。

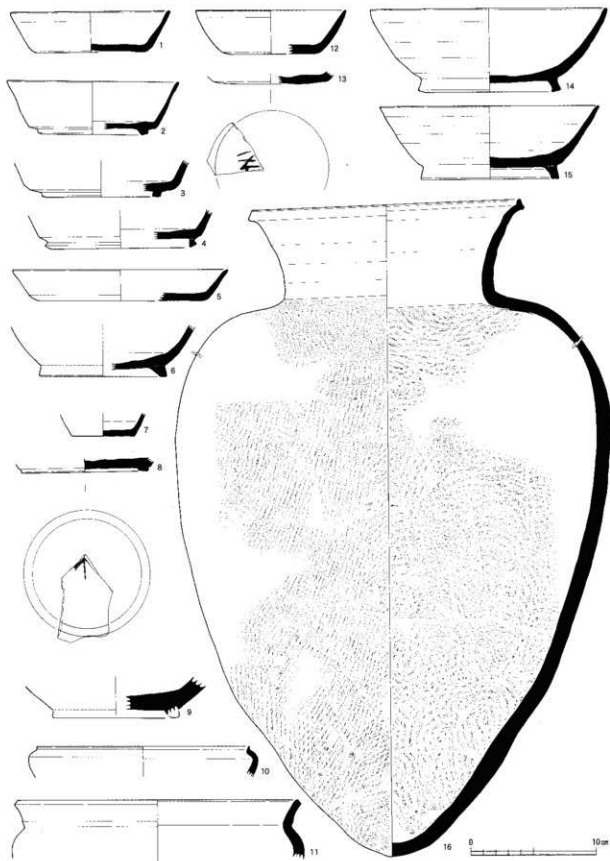
無台杯は、口縁部が直線的なもの(第135図1)とやや内湾するもの(第135図2)がある。高台杯と皿は、口縁部が直線的である。碗は口縁部が内湾するもの(第135図14)と直線的なもの(第135図15)がある。高台の内径が接地するもの(第135図14)がある。甕は中型のものと考えられる。尖り底の長胴タイプのもので、口縁端部をつまみ上げる。

S D03の無台杯と高台杯は8世紀前半頃、碗は高台径が小さいため、おそらく10世紀前半頃に位置づけられる。

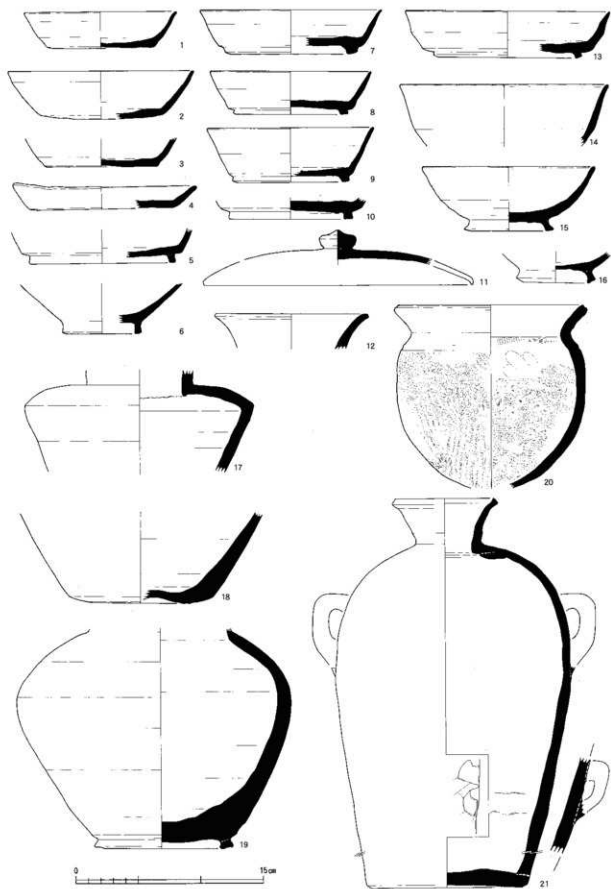
S D04はそのS D03としたものから、分流してすぐにS D01に合流する、長さ幅の短い溝である。この溝とS D02・3、またはS D01との先後関係は確認できなかった。

S D04から出土している土器は、無台杯(第136図1～3)、高台杯(第136図5・7～10・13)、皿(第136図4)、蓋(第136図11)、碗(第136図6・14～16)、壺・甕・瓶類(第136図12・17～21)である。

無台杯は、口縁部が内湾し口縁端部が外反するもの(第136図1)と口縁部が僅かに内湾するもの(第136図2)がある。高台杯には扁平なもの(第136図7・8)、より扁平なもの(第136図13)、深身なもの(第136図9)がある。蓋はやや扁平な鈕が付き、笠形器形のものと考えられる。碗は高台径が小さい。高台の内径が接地するもの(第136図6・15)がある。壺・甕・瓶類のなかでも、肩部が角をもつもの(第136図17)は製作技法から瓶と思われる。肩部が丸みをもつもの(第136図19)は底部の調整がいびつなため、瓶の底部と思われる。甕(第136図20)は、胎土に砂粒を含み調整も土師器のものであるため、土師器として製作し須恵器質に焼成したものと考えられる。三耳壺(第136図21)は口縁端部をつまみ上げる。器形としては、東海系であろうか。



第135図 山腰遺跡 S D03出土遺物（須恵器）実測図（縮尺1/3）



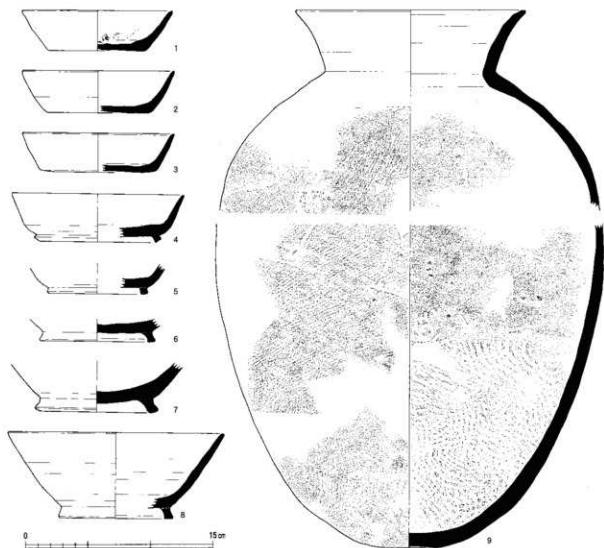
第136圖 山腰遺跡S D04出土遺物(須恵器)実測図(縮尺1/3)

S D04の無台坏と高台坏は9世紀初頭頃、椀は9世紀末頃に位置づけられる。そのため、時期幅を考慮し、9世紀代と想定したい。

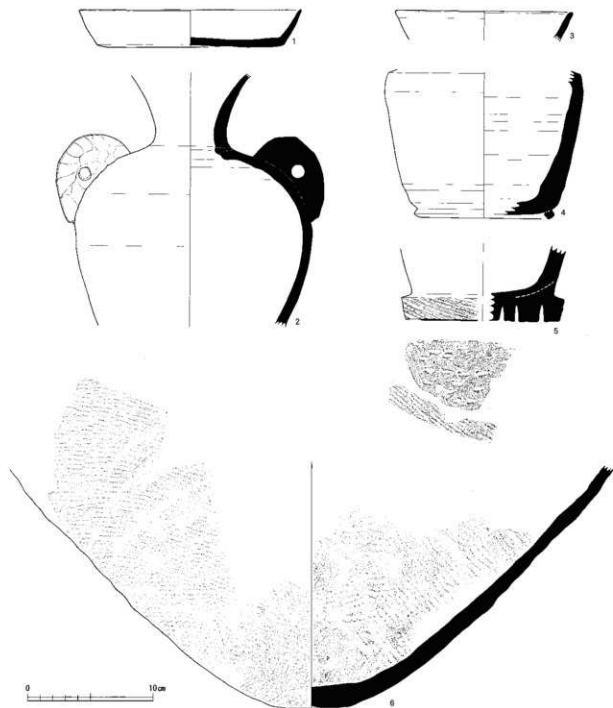
ちなみにS D03・S D04ともに堆積している土や出土している土器に大きな違いはないように思う。そのため、図化した遺物ではやや差があるが、ほぼ同じ時期の溝と考えられる。

第6節 S D05 調査区の北辺をほぼ東西に伸びて、東流する溝で、その西側でS D02を切るように交差して溝はなくなる。当初はこの部分は別の溝（当初S D06と呼称）と考えていたが、最終的には1本溝となった。このことから推察されるように、プランの検出が非常に困難な溝で、溝底から確認し、一部地山を断割りながら掘削した。延長約36m、調査区中央の溝の幅が影らむところで1.6m、西側の狭いところで0.7m、深さは東端で20cm前後、中央から西側で60cm前後を測る。つまり水の流れがあれば東から西へ流れることになる。溝の幅が狭く、深い西側の部分では直線に走り、断面も立ち上りが急なU字形で明らかに人工の掘削によるものである。出土遺物はまた先にも触れたようにS D02を切って交差する部分は別の溝と考えていたため、遺物の取り上げも分けてある。

S D05から出土した土器は、無台坏1点、高台坏1点、皿1点、椀3点、壺・甕・瓶類がある。



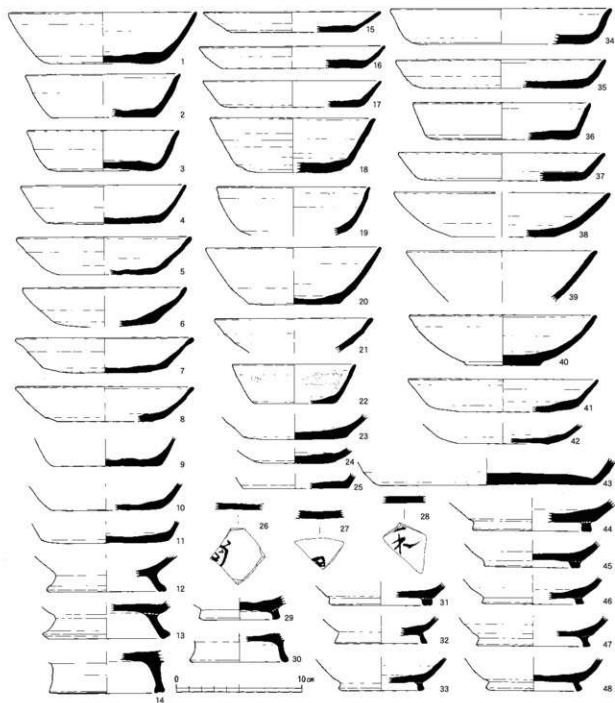
第137図 山腰遺跡S D05出土遺物（須恵器）実測図（縮尺1/3）



第138図 山腰遺跡S D06出土遺物(須恵器)実測図(縮尺1/3)

無台杯は口縁部が内弯するもの(第137図1・2)と直線的なもの(第137図3)がある。高台杯(第137図4)は、口縁部が僅かに外反する。碗(第137図8)は口縁部が直線的に開くものと、口縁部(第138図3)がある。壺は双耳壺の底部と口縁部をかくもの(第138図2)と、底部のみのもの(第138図4)の2点がある。甕は2個体あり、接合はしないものの同一個体として長胴に復元できるもの(第137図9)と、底部のみのもの(第138図6)である。

S D05の無台杯と高台杯は8世紀前半頃、碗は10世紀初頭頃に位置づけられる。皿は口縁部がほぼ直線的に開くため9世紀初頭頃、双耳壺(第138図2)は9世紀後半以降と考えられる。

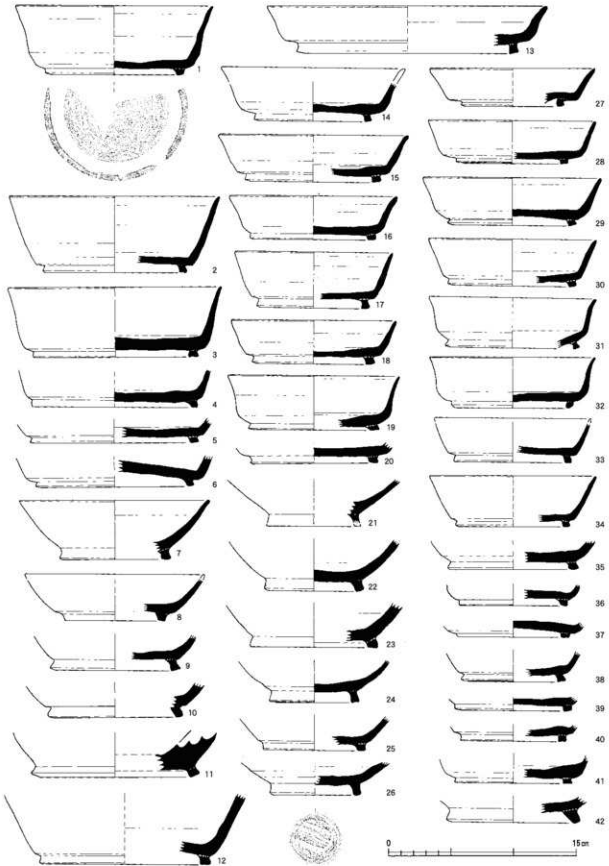


第139図 山腰遺跡包含層出土遺物（無台杯・盤・埴類）実測図（縮尺1/3）

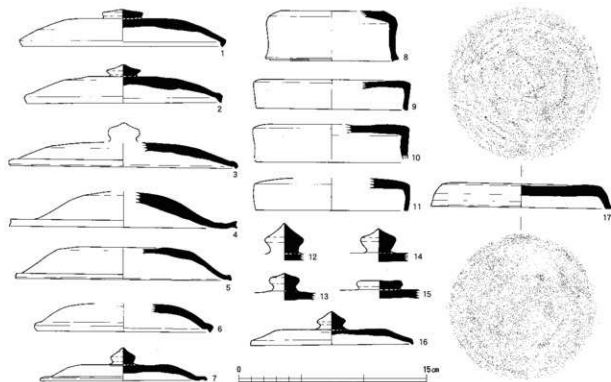
第7節 包含層出土の土器

包含層から出土した土器は、無台杯19点（第139図1～11・18～22・38～40）、高台杯35点（第140図1～11・13～20・25・27～41）、埴17点（第139図12～14・29～33・44～48・第140図21・22・24・26）、蓋17点（第141図1～17）、高杯6点（第143図1～6）、壺・鉢・瓶類33点（第140図23・42・第142図1～27・第143図7～12）、甕12点（第143図13・14・第144図1・2・第145図1～4・第146図1～4）である。

無台杯は口縁部が、直線的なもの（第139図1～5・7・18・20・22）と内弯するもの（第139図6・8・19・21・38～40）がある。ベタ高台のもの（第139図40）がある。8世紀後半から10世紀初頭まで



第140図 山腰遺跡包含層出土遺物(高台杯)実測図(縮尺1/3)



第141図 山腰遺跡包含留出土遺物(蓋)実測図(縮尺1/3)

のものが存在する。

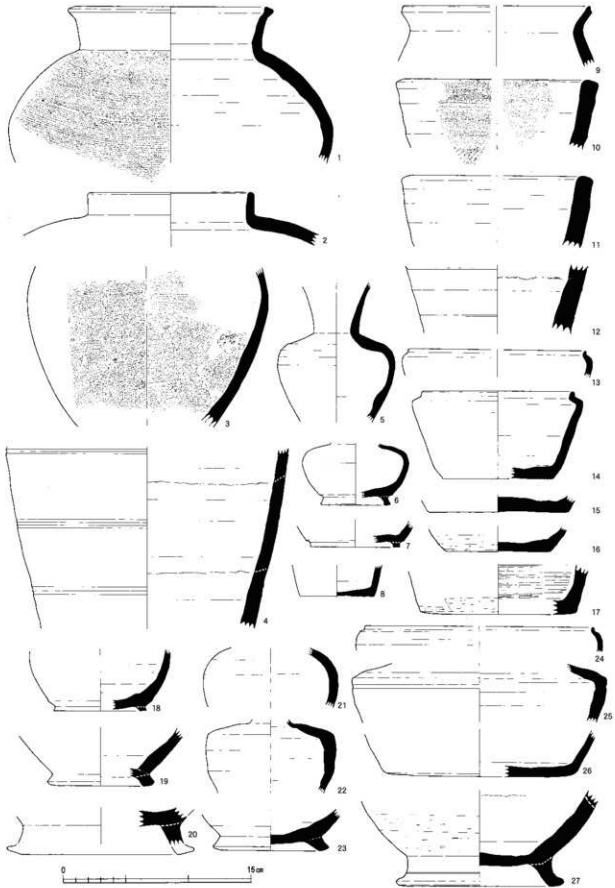
高台坯は偏平のもの(第140図8・14・19・27・34)、より偏平なもの(第140図13)、深身のもの(第140図1・3・7)がある。偏平のものは口縁部が、外反するもの(第140図14・16・19・27・31・32)、直線的なもの(第140図17・18・28・29・30・33・34)、内弯するもの(第140図7・8)がある。深身のもの、口縁部がほぼ直線的に開く。

埴はすべて高台のみである。高台が高いもの(第139図12・14・30)と低いもの(第139図29・31・33・44・48)がある。

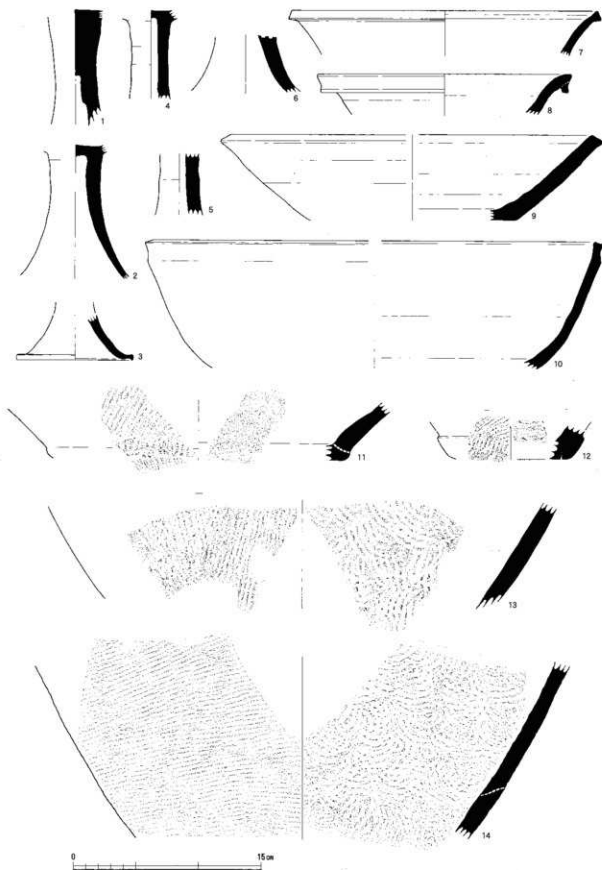
蓋は坏蓋(第141図1・7・16)と短頸壺蓋(第141図8・11・17)がある。坏蓋は笠形のもの(第141図1・2)、平坦な天井部で口縁部を折り返すもの(第141図3・6・7・16)、特殊なもの(第141図4)がある。短頸壺蓋は口縁部を、外側に折り返すもの(第141図8・17)内側に折り返すもの(第141図9・11)がある。

壺・鉢・瓶類は、短頸壺(第142図1・2)、長頸瓶(第142図5・6)、厚手の鉢(第130図10・12)、鉢(第143図9・10)、鉄鉢(第142図13・24)、甗の可能性のあるもの(第142図4)、口縁部を折り返す鉢(第143図14)がある。

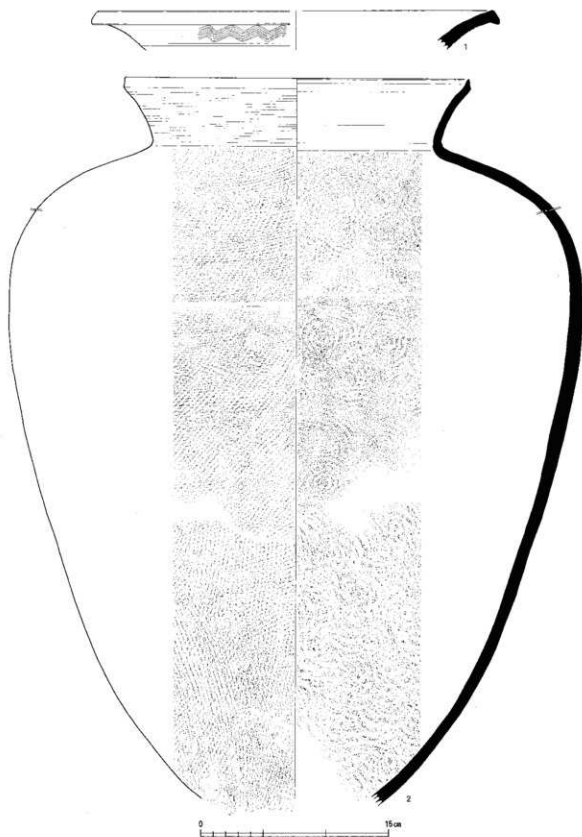
甗は、中型のもの(第144図1・2)と大型のもの(第145図1・4・146図1・4)がある。



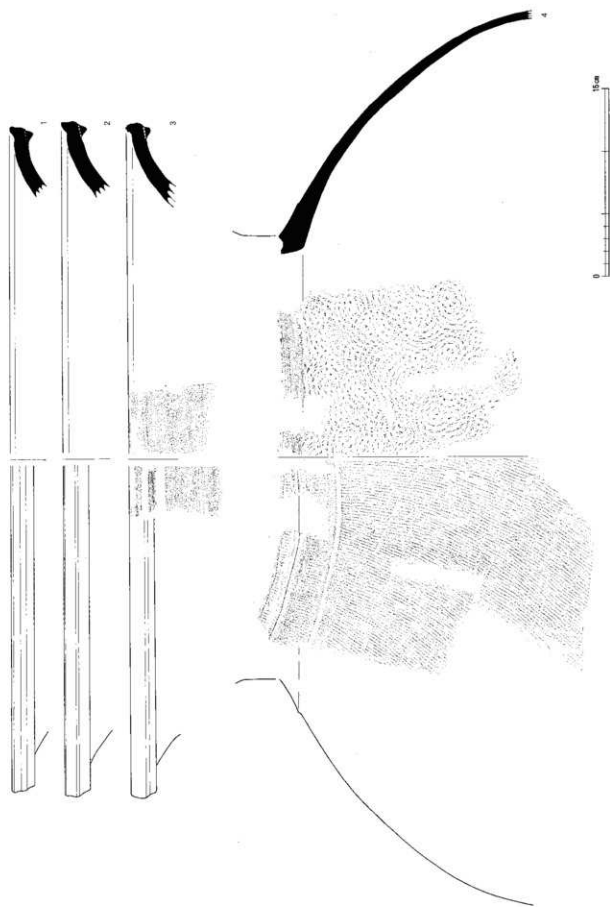
第142図 山腰遺跡包含層出土遺物（鉢・瓶・壺など）実測図（縮尺1/3）



第143図 山腰遺跡包含層出土遺物（高杯・鉢・板・甕など）実測図（縮尺1/3）



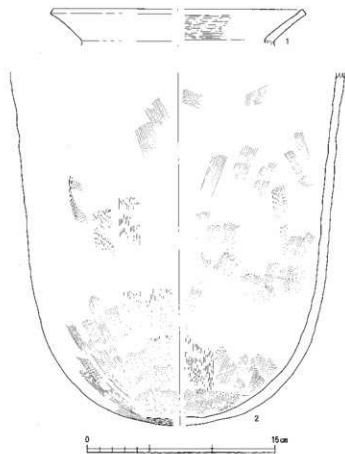
第144図 山腰遺跡包含層出土遺物(罽)実測図(縮尺1/3)



第145図 山腰遺跡包含層出土遺物(要)実測図(縮尺1/3)



第146図 山腰遺跡包含層出土遺物(壺)実測図(縮尺1/3)



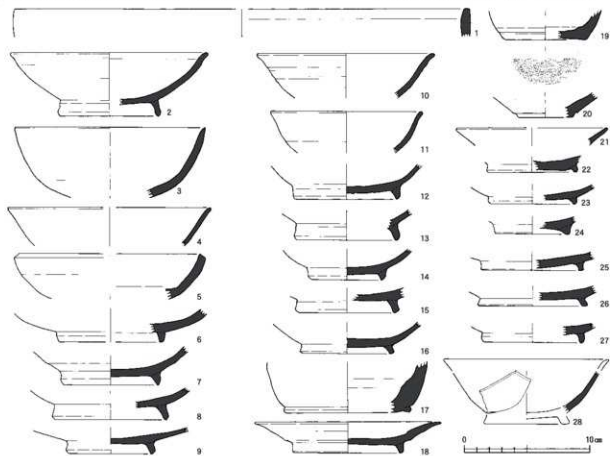
第147図 山腰遺跡包含層出土遺物（土師器）実測図（縮尺1/3）

土師器甕は「く」の字に開き口縁端部に面取りを施すもの（第147図1）と、長胴甕の体部（第147図2）がある。

第8節 灰軸陶器・緑軸陶器

施軸陶器についてはSD01などからも出土しているが、ここでは包含層出土のものとおわせて報告する。灰軸陶器が27点、緑軸陶器は1点のみの合計28点である。

灰軸陶器は壺（第148図2～4・10・11）、皿（第148図18）、小壺（第148図19）、特殊器形（第148図1）がある。壺は口縁端部が外反する。皿はやや外反する口縁部である。高台を分類すると、三日月型のもの（第148図6・7・12～14・18・23・27）、台形のもの（第148図8・9・15・16・22・24～26）がある。三日月型のは黒笹90号室式のものと考えられるが、外側に開くもの（第148図7・



第148図 山腰遺跡包含層出土遺物（灰軸陶器）実測図（縮尺1/3）

12・23)は黒笹90号窯式よりも後出すると考えられ、折戸53号窯式以降のものと考えられる。また、釉の濃いもの(第148図3)は、黒笹14号窯式に上がる可能性もある。そのため、9世紀中葉から10世紀初頭までのものが存在し、黒笹90号窯式の9世紀後半が主体の時期と考えられる。

緑釉陶器(第148図28)は、坏部的一部分である詳細は全く不明である。ちなみに軟質の胎土である。

第9節 土製品・石製品(第149図)

土製品としては土鍾が7点と、正確には土製品ではなく双耳壺の耳の部分と思われるのが2点ある。

土鍾はSD01から2点(第149図2・3)、SD2から2点(第149図1・7)、包含層から4点(第149図4・5・6・10)である。須恵質は5点(第149図1～5)、土師質が2点(第149図6・7)である。双耳壺は耳の両端を欠き、穴の部分がないうもの(第149図8)と、両端を残し穴が1孔残るもの(第149図9)である。

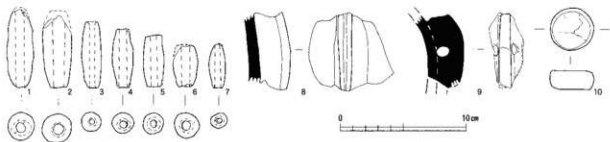
石製品は円形のボタン状で黒色の石材である(第149図10)。

第10節 瓦(第150・151図)

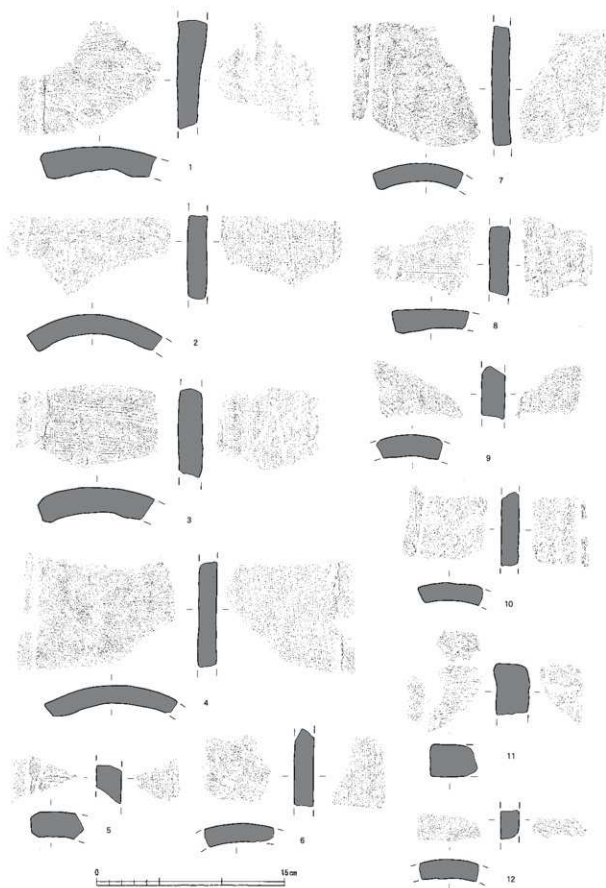
既に報告した北陸農政局事業地の山腰遺跡で瓦が出土し、今回の調査区でも細片ではあるが出土している。ここではよほどの細片でない限り図化し、21点を提示した。いずれも平瓦と判断される。個々についての記述は観察表によるものとするが、そのほとんどに外面にケズリ、内面には布目の圧痕が残されている。また焼成は不良で軟質のものがほとんどである。古代の瓦そのものの生産は周辺では両遺跡から北東に約4km離れた片山窯跡や、その手前約3km離れた広瀬窯跡などもあるが、尾根の反対側にある王子保窯跡でも生産していることが判明している。しかし越前では大垣向山遺跡・山腰遺跡の主体となる時期には瓦そのものがなくなるとされている。そのなかで両遺跡から出土している事実は建築部材として集落内に持ち込まれたものと考えている。このような事実は福井市の和田防町遺跡から約5km東へ離れた篠尾庵寺と同じ瓦が出土しており、篠尾庵寺がその名前のように廃絶されたのちに集落内に持ち込まれたものと考えられている。

第11節 中近世の陶磁器(第152図)

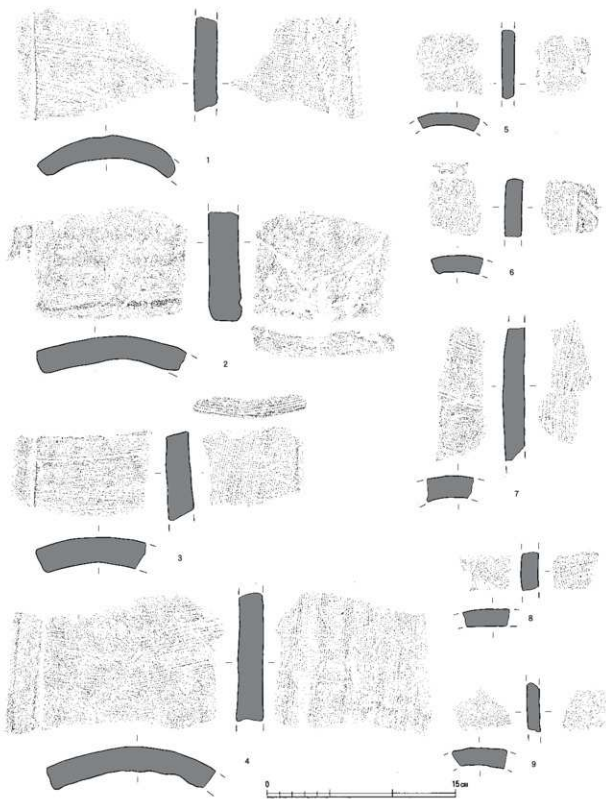
山腰遺跡でも中近世の陶磁器が細片ではあるが、いくつか出土している。ここではその中でも特徴的なものについて合計13点を図化した。青磁は碗の口縁部が5点(第152図1・2・4・5・10)、胴部が1点(第152図3)、高台部が1点(第152図7)、坏の口縁部が1点(第152図6)、皿底部が1点(152



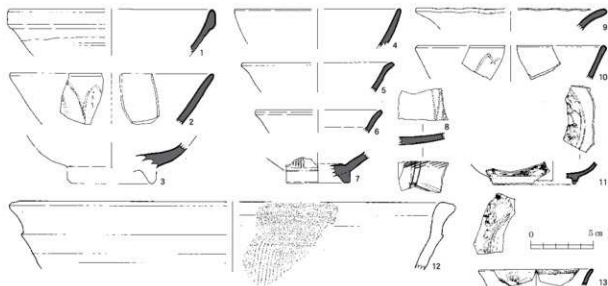
第149図 山腰遺跡包含層出土遺物(土製品)実測図(縮尺1/3)



第150图 山腰道路包含层出土遗物(瓦)实测图(縮尺1/3)



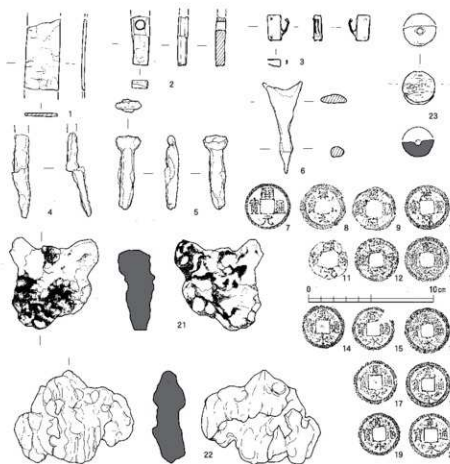
第151圖 山腰遺跡包含層出土遺物(瓦)実測圖(縮尺1/3)



第152図 山腰遺跡包含層出土遺物（中近世陶磁器など）実測図（縮尺1/3）

図8）、稜花皿の口縁部が1点（第152図9）の合計10点である。染付けは高台杯が1点（第152図11）、坏が1点（第152図13）ある。これらの時期は大きく分けると、12・13世紀代のもの（第152図1・2など）と16世紀代のもの（第152図9・11など）の二時期となるようである。

越前焼は近世の摺鉢の口縁部が1点（第152図12）ある。



第153図 大塚向山遺跡・山腰遺跡出土金属製品（縮尺1/3）

第12節 金属器・ガラス製品（第153図）

金属器として青銅製品が3点、鉄製品が3点、鉄滓が2点、そして銭貨が14点ある。

青銅製品としたものはいずれも何らかの金具であると考えられるものである。薄い板材のようなものは幅1.8cm、厚さ0.2cmを測り、両端を欠くが残された長さは2mmを測る。ハンマーの頭の部分に近い形状のものは、一方を欠く。欠いている方向が僅かに厚くなり、中央に直径5mmほどの穴が開く。もう1点は薄い板状の銅版で木質の部分を挟み、

小さな鋳で2ヶ所を留めるものである。背に当たる部分細い把手が付く。青銅製品については、何の製品であるか、どの部分にあたるのかも全く検討が付いていない。

鉄製品は釘が2本、鎌が1本ある。釘の1本は頂部を欠出するが先端は残る（第153図4）。もう1本の頂部は残るが先端を欠出する（第153図5）。鉄鎌は雁股鎌で、二股に分かれる先端の1方向が僅かに欠出する（第153図6）。鉄滓は大きさ8から10cm、厚さ2cmの大きさのものである（第153図21・22）。鉄釘については、1点（第153図4）が古代の須恵器を多く出土しているN地区SK03から出土していることから、平安時代のもと考えられ、鉄鎌も雁股鎌である形態から中世よりむしろ古代の類例が多いように考えている。

銭貨は渡来銭、もしくは渡来銭と判断されるものが7点ある。銭種が判るのは開元通宝（第153図10）、祥符元宝（第153図11）、熙寧元宝（第153図14）の3点である。また寛永通宝も7点（第153図17～23）ある。銭種が全く不明なのは2点である（第153図15・16）。

ガラス玉は穿孔された穴の部分から半分に割れている（第153図9）。若干ではあるが黄色味のある褐色を呈し、気泡が目立つ。表面の風化が著しい。

第13表 大塚山遺跡出土土器観察表

注1「調整・技法・文様など」の項目は下記のように番号で表した。①回転ヘラ切り後ナテ調整 ②回転ヘラ切り後未調整 ③回転ヘラ切り後削り調整 ④ナテ(回転・横・縦)⑤承切り ⑥削り(回転・ヘラ) ⑦タタキ ⑧当て具直
 注2「胎土」の項目は下記のように番号で表した。①砂粒(直径1~2mm)を含む ②小石(直径2mm以上)を含む③砂粒(直径1~2mm)を含む ④小石(直径2mm以上)を含む
 注3備考の()内の漢字は胎跡から表探された須恵器と比較した堀大介氏の肉眼観察による。(小)は小曾原窟跡群、(標)は標津窟跡群、(金)は金比羅山登り11号窟跡、(佐)は佐々生窟跡から採集・出土した須恵器胎土と認識できるとのことである。また(分析)と記載してあるのは附編で報告した化学分析した土器を示す。

地区	調査番号	子母関係	種類	器種	部位	組み合わせ	調整・技法・文様など	口径	底径	器高	色調	胎土	備考
C	23 1 37		須恵器	無台杯		11/12	⑤① 内①	(12.2)	(8.2)	3.5	黄灰色	②	SK-1 SK-3
	23 2 37		須恵器	無台杯		1/2	⑤① 内①	(12.6)	(9.0)	3.4	黄灰色	①	
	23 3 37		須恵器	無台杯		?	⑤① 内①	(13.0)	(9.2)	3.2	灰オリーブ色	①	
	23 4 37		須恵器	無台杯		?	⑤① 内①	(12.4)	8.8	4.5	灰色	①②	
	23 5 38 ①		須恵器	無台杯	口縁部	1/3	⑤① 内①	(12.0)	-	[3.2]	灰色	①	SK-1
	23 6 38 ①		須恵器	無台杯		1/2	⑤① 内①	(12.2)	(8.0)	3.6	灰色	①	SK-5
	23 7 38 ②		須恵器	無台杯		1/4	⑤① 内①	(13.0)	(9.0)	3.8	灰黄色	①	SK-1 SK-3
	23 8 37		須恵器	無台杯		?	⑤①② 内①	(13.0)	(8.6)	3.9	灰色	①	
	23 9 37		須恵器	無台杯		1/2	⑤① 内①	(13.4)	(9.0)	3.7	灰色	①	SK-1
	23 10 37		須恵器	無台杯		1/4	⑤① 内①	(12.0)	8.2	3.6	灰オリーブ色	①	
	23 11 37		須恵器	無台杯	底部	⑤① 内①		12.5	8.0	3.6	灰(灰オリーブ色 内) 灰色	②	SK-1(小)
	23 12 37		須恵器	無台杯		11/12	⑤①②(工具痕 内)①	(12.0)	(8.8)	3.5	灰色	②	SK-5
	23 13 38 ①		須恵器	無台杯		1/12	⑤① 内①	(12.8)	(9.0)	[2.5]	灰色	②	
	23 14 38 ②		須恵器	無台杯		1/12	⑤① 内①	(12.0)	(8.0)	[2.5]	灰色	②	
堀	23 15 38 ①		須恵器	無台杯		1/12	⑤① 内①	(11.9)	(9.0)	4.3	灰(灰オリーブ色 内) オリーブ灰色	①	
	23 16 38 ①		須恵器	無台杯	底部	⑤① 内①	-	(10.0)	[1.8]	黄灰色	①		
	23 17 38 ①		須恵器	無台杯	底部	⑤① 内①	-	(10.1)	[1.7]	にぶい黄褐色	①		
	23 18 38 ①		須恵器	無台杯	底部	⑤① 内①	-	(9.3)	[1.6]	にぶい黄褐色	①		
	23 19 38 ①		須恵器	無台杯	底部	⑤① 内①	-	(10.0)	[1.8]	にぶい黄褐色	①		
	23 20 38 ①		須恵器	無台杯	底部	⑤① 内①	-	(8.0)	[2.2]	灰(黄灰色 内) オリーブ灰色	①		
	23 21 37		須恵器	無台杯		1/4	⑤① 内①	(12.8)	8.7	3.3	灰オリーブ色	②	読み犬
	23 22 38 ①		須恵器	無台杯	底部	⑤① 内①	-	(9.8)	[3.5]	灰色	①		
	23 23 37		須恵器	蓋		1/2	⑤① 内①	(14.6)	-	3.1	黄褐色	①	
	23 24 38 ①		須恵器	皿		1/6	⑤① 内①	(15.9)	(12.8)	[2.1]	灰オリーブ色	②	SK-5
	23 25 37		須恵器	皿		?	⑤① 内①	16.5	13.7	2.2	灰色	①	読み犬(小?)
	23 26 38 ①		須恵器	高台杯		1/6	⑤① 内①	(12.9)	(8.0)	[4.4]	灰オリーブ色	①	
	23 27 37		須恵器	高台杯		1/12	⑤① 内①	(13.3)	9.6	4.2	灰色	①	(標?)
	23 28 38 ①		須恵器	高台杯		1/12	⑤① 内①	(12.9)	(7.0)	[4.0]	灰(灰色 内) オリーブ灰色	①	(標?)
沢	23 29 36 ③		須恵器	高台杯		1/3	⑤① 内①	(13.4)	9.0	4.2	灰色	①	(標?)
	23 30 38 ①		須恵器	碗	口縁部	1/4	⑤① 内①	(11.0)	-	[2.8]	オリーブ灰色	①	SK-5
	23 31 38 ①		須恵器	碗		1/3	⑤① 内①	(12.0)	-	[3.0]	黄灰色	②	SK-5
	23 32 37		須恵器	無台杯		1/2	⑤①②(スノコ状圧痕 内)①	(14.0)	(8.6)	3.2	灰色	②	(小)
	32 1 49 ②		須恵器	壺	口縁部	1/12	⑤① 内①	(20.0)	-	[5.7]	灰オリーブ黒色 内) 灰色	①	SK-4 SK-8
	32 2 47 ①		須恵器	皿		?	⑤① 内①	(19.0)	(15.8)	2.3	灰色	②	SK-4
	32 3 42		須恵器	短頸壺	口縁部 肩部	1/12	⑤① 内①	(12.8)	-	[6.1]	灰(黄灰色 内) 黄褐色	②	SK-3
	32 4 49 ②		須恵器	高杯	受部	1/6	⑤①② 内①	(17.0)	-	[2.6]	灰(黄灰色 内) オリーブ灰色	①	SK-22
	32 5 45 ①		須恵器	鉢	口縁部 底部	1/6	⑤①② 内①	(16.0)	6.8	[7.5]	灰黄色	①②	SP-197 SP-126
	32 6 42		土師器	甕		1/12	⑤①不明 内)不明	(13.8)	-	[14.5]	灰(黄色 内) にぶい黄褐色	②③	SK-16
	32 7 44 ①		灰陶土器	小壺		⑤①②③ 内①	(5.7)	5.1	9.7	灰黄色	①②③	SP-196	
	32 8 50 ①		土師器	無台杯	底部		⑤① 内)不明	-	(5.0)	[1.5]	灰白色	②③	SK-4
	32 9 50 ①		土師器	甕	胴部		⑤①上-キキメ 下-② 内)不明	-	-	[6.8]	灰白色	②	SK-1
	32 10 45 ①		須恵器	壺	肩部		⑤① 内①	-	-	[3.8]	灰色	①	SK-16
32 11 41		須恵器	蓋		1/2	⑤① 内①	17.7	-	[2.6]	灰(灰色 内) 黄褐色	①	SP-2 5D-2 分析(小)	
堀	32 12 49 ②		須恵器	高台杯	口縁部	?	⑤① 内①	(16.6)	(13.0)	[3.1]	灰(灰色 内) オリーブ灰色	①	SK-8
	32 13 42		須恵器	高台杯		?	⑤① 内①	(19.8)	(7.8)	4.7	灰黄色	①	SK-4 SK-8
	32 14 48 ①		須恵器	碗	底部		⑤① 内①	-	(7.0)	[2.0]	灰色	①	SK-26
	32 15 50 ①		土師器	甕	胴部		⑤①上-キキメ 下-② 内)キキメ	-	-	[6.4]	灰白色	②	SK-1
	32 16 45 ①		須恵器	碗	口縁部	1/12	⑤① 内①	-	-	[4.3]	灰(にぶい黄褐色 内) 黄褐色	①	SK-16

第12節 金属器・ガラス製品

品名	規格番号	写和図	種別	器種	部位	残存率	調整・技法・文様など	口径	底径	器高	色調	土土	備考
G	32 17 45 ①		磁器器	無台坪	底部		外② 内①	—	8.8	11.5	灰色	②	SK-18
	32 18 50 ①		土師器	皿	口縁部	?	外①不明 内①不明	—	—	6.0	外①褐色 内①に灰黄褐色	③①	SK-16
	32 19 42 ①		土師器	鉢	口縁先		外①不明 内①不明	(13.8)	(2.0)	(9.3)	に灰黄褐色	③①	SK-16
	32 20 45 ①		磁器器	壺	底部		外① 内①	—	3.2	(1.6)	灰白色	②	SK-4
	32 21 50 ①		土師器	蓋	側部		外①上ノキヌ 下ノ① 内①	—	—	(6.1)	に灰黄褐色	②	SD-2
	32 22 49 ②		磁器器	壺	側部		外① 内①	—	—	(10.6)	外①に灰黄褐色 内①灰色	③	SP-115
	32 23 50 ①		土師器	蓋	口縁部 肩部	1/12	外①不明 内①不明	(22.7)	—	(4.5)	浅黄褐色	②	SD-2
	32 24 50 ①		土師器	蓋	側部		外①上ノキヌ 下ノ① 内①(ゆちノキヌ)	—	—	(9.9)	外①に灰褐色 内①に灰黄褐色	⑦	SD-2 外①接着
	33 1 45 ①		磁器器	鉢	口縁部	?	外① 内①	(19.4)	—	(5.3)	オリーブ灰色	①	SP-30
	33 2 46 ①		磁器器	蓋			外①② 内①	(18.7)	—	(3.5)	灰色	①	SP-111 芯み大(小)
	33 3 45 ①		磁器器	皿		?	外① 内①	(18.4)	(15.0)	1.8	灰色	①	SP-87
	33 4 41 ①		磁器器	鉢		1/4	外① 内①	(15.0)	(8.4)	5.6	外①に灰褐色 内①灰黄色	①	SP-25
	33 5 50 ①		磁器器	蓋	天骨部		外①不明 内①不明	—	(10.6)	(2.1)	に灰褐色	②	SP-25 生掛け
	33 6 44 ②		磁器器	壺	口縁部		外① 内①	(14.8)	—	(6.9)	オリーブ灰色	①	SP-82
	33 7 50 ①		土師器	蓋	底部		外①不明 内①不明	—	(6.6)	(3.1)	に灰黄褐色	②	SP-26
	33 8 46 ①		磁器器	蓋			外①②ノコ鉄瓦肌 内①	(21.0)	—	(1.9)	灰白色	①	SP-165
	33 9 50 ①		土師器	壺	口縁部 肩部	1/8	外①口縁不明 肩ノキヌ 内①不明	(24.0)	—	(5.7)	に灰褐色	③①	SP-88
	33 10 49 ①		磁器器	蓋	口縁部	?	外①② 内①	(11.0)	—	(2.7)	灰色	①	SP-155 芯み大
	33 11 42 ①		磁器器	無台坪		1/6	外①不明 内①不明	(12.0)	(8.6)	3.6	灰白色	②	SP-23
	33 12 50 ①		土師器	壺	底部		外①不明 内①不明	—	(5.6)	(2.6)	外①浅黄褐色 内①灰白色	③①	SP-174
	33 13 45 ①		磁器器	蓋	天骨部		外①② 内①	—	(8.0)	(1.4)	灰色	①	SP-26
	33 14 50 ①		かわらけ		口縁部	1/6	外①不明 内①不明	(12.0)	—	(2.3)	に灰黄褐色	①	SP-40
	33 15 43 ①		磁器器	壺	底部 側部		外① 内①	—	9.0	(7.0)	灰色	③①	SP-154
	33 16 47 ②		磁器器	無台坪		1/2	外① 内①	(12.2)	(4.0)	3.5	灰色	③	SP-100
	33 17 47 ②		磁器器	無台坪	口縁部	1/8	外① 内①	(12.0)	—	(4.3)	灰色	①	SP-3
	33 18 49 ①		磁器器	蓋		1/6	外①② 内①	14.1	—	3.6	灰色	③①	SP-167(産)
	33 19 42 ①		磁器器	無台坪		1/12	外① 内①	(15.0)	9.0	4.0	灰色	③①	SP-80 (産)
	33 20 47 ②		磁器器	無台坪		1/12	外① 内①	(13.0)	9.0	3.3	外①灰色 内①オリーブ灰色	①	SP-175
	33 21 45 ①		磁器器	無台坪		1/4	外①②ノコ鉄瓦肌 内①	(13.4)	(6.0)	3.1	灰色	③	SP-175 SP-282(小)
	33 22 42 ①		土師器	無台坪		出た器	外①不明 内①不明	13.4	7.5	3.3	に灰黄褐色	②	SP-124 分析
	33 23 46 ②		磁器器	無台坪	口縁部	1/6	外① 内①	(13.8)	—	(2.4)	緑灰色	①	SP-309
	33 24 47 ②		磁器器	無台坪			外① 内①	—	(8.0)	(2.7)	灰オリーブ色	①	SP-209
33 25 49 ①		磁器器	壺	口縁部	1/12	外① 内①	(15.0)	—	(1.4)	外①灰オリーブ色 内①灰色	②	SK-19	
33 26 46 ②		磁器器	皿	口縁部	1/8	外① 内①	(16.0)	—	(1.5)	外①外オリーブ灰色 内①オリーブ灰色	②	SP-45	
33 27 47 ②		磁器器	皿		1/8	外① 内①	(15.8)	(12.4)	2.2	灰白色	①	SP-138	
33 28 41 ①		磁器器	無台坪		完形	外①②ノコ鉄瓦肌 内①(ゆちノコ鉄瓦肌)	14.0	7.0	3.2	灰色	③	SP-124 分析(小)	
35 1 39 ①		磁器器	無台坪		1/10	外①? 内①	13.0	8.8	3.8	灰色	②		
35 2 39 ①		磁器器	無台坪		?	外①? 内①	(12.5)	(8.3)	3.8	灰色	②		
35 3 39 ①		磁器器	無台坪		1/4	外① 内①	(12.8)	(9.8)	3.4	外①灰白色 内①灰色	①		
35 4 47 ②		磁器器	無台坪	口縁先		外① 内①	—	9.6	(2.6)	灰色	③①		
35 5 39 ①		磁器器	無台坪		1/6	外① 内①	(12.4)	(9.2)	3.6	外①浅黄褐色 内①黄褐色	②		
35 6 47 ②		磁器器	無台坪		1/4	外① 内①	(12.8)	9.0	2.9	浅黄褐色	③		
35 7 47 ②		磁器器	無台坪		1/12	外① 内①	(130)	(10.0)	3.5	灰色	③		
35 8 39 ①		磁器器	無台坪		11/12	外① 内①	(12.0)	(8.0)	3.2	灰色	①		
35 9 47 ②		磁器器	無台坪		1/4	外① 内①	(12.0)	(9.0)	(3.1)	灰色	③		
35 10 45 ②		磁器器	無台坪		1/6	外① 内①	(11.9)	(8.0)	3.0	灰色	③①		
35 11 46 ②		磁器器	無台坪	底部		外①②ノコ鉄瓦肌 内①	—	(8.5)	(1.9)	オリーブ灰色	③		
35 12 40 ①		磁器器	無台坪		?	外① 内①	13.0	8.8	3.5	灰色	②	分析	
35 13 47 ②		磁器器	無台坪		1/6	外① 内①	(15.0)	(10.0)	3.3	外①灰オリーブ 内①黄褐色	①		
35 14 47 ②		磁器器	無台坪		1/6	外① 内①	(13.0)	(9.0)	3.1	灰黄色	③		
35 15 46 ②		磁器器	無台坪		?	外① 内①	(13.6)	(8.0)	3.9	灰白色	①		

第5章 山腰遺跡

地区	図数番号	写和図種	種別	器種	部位	残存率	調整・技法・文様など	口径	底径	器高	色調	出土	備考
石	35 16 46	②	須恵器	無台坪		1/4	95① 内①	13.8	10.0	2.8	灰色	①	
	35 17 46	②	須恵器	無台坪	底部		95① 内①	—	18.4	1.7	オリーブ灰色	①	
	35 18 46	②	須恵器	無台坪	底部		95① 内①	—	9.2	2.0	灰色	①	
	35 19 46	②	須恵器	無台坪	底部		95① 内①	—	9.2	1.1	灰色	①	
	35 20 46	②	須恵器	無台坪	底部		95灰不明 條一ナア内①ナ	—	7.2	1.5	灰色	①	
	35 21 46	②	須恵器	無台坪	底部		95① 内①	—	18.4	2.5	灰白色	①	
	35 22 47	②	須恵器	無台坪		1/6	95① 内①	(10.8)	18.0	2.9	灰色	①	
	35 23 47	②	須恵器	無台坪		1/4	95① 内①	(12.9)	9.4	3.4	オリーブ灰色	①	
	35 24 46	②	須恵器	無台坪	底部		95①スノコ状既内①	—	18.5	1.2	灰オリーブ色	①	特殊な付着
	35 25 30		須恵器	無台坪		1/12	95① 内①	(13.8)	8.2	3.5	灰白色	①	(小)
	35 26 45	②	須恵器	無台坪		1/4	95①スノコ状既内①	(15.0)	7.4	2.9	灰色	②③	(小)
	35 27 45	②	須恵器	無台坪		1/8	95① 内①	(14.0)	18.4	3.1	95灰白色 内灰色	②	(小)
	35 28 45	②	須恵器	無台坪		1/4	95① 内①	(13.6)	8.2	2.7	灰色	①②	分析(小)
	35 29 45	②	須恵器	無台坪		1/4	95① 内①	(14.0)	—	3.0	灰色	③	
	35 30 39		須恵器	無台坪	底部		95① 内①	—	7.0	2.4	灰黄色	①	(小)
	35 31 40		須恵器	無台坪		1/6	95① 内①	(14.0)	6.3	4.2	灰色	①②	分析
	35 32 40		須恵器	無台坪		1/12	95① 内①	(12.6)	8.8	4.4	灰色	②	
	35 33 45	②	須恵器	無台坪	口縁欠失		95① 内①	—	7.8	3.5	灰色	②	
	35 34 39		須恵器	無台坪		1/3	95① 内①	(13.2)	6.2	2.9	黄灰色	?	
	35 35 39		須恵器	無台坪		1/12	95① 内①	14.2	8.2	2.4	灰色	①	
	35 36 39		須恵器	無台坪		1/4	95① 内①	11.2	6.0	2.4	灰色	?	
	36 1 39		須恵器	高台坪		1/12	95① 内①	(17.0)	12.0	5.2	95灰黄色 内灰黄色	①	
	36 2 48	②	須恵器	高台坪		1/6	95① 内①	(17.8)	13.0	5.4	灰色	①	
	36 3 39		須恵器	高台坪		1/4	95① 内①	(17.0)	12.4	5.9	95灰黄色 内暗灰色	②	
	36 4 39		須恵器	高台坪		1/4	95① 内①	(17.4)	12.4	5.3	灰色	①②	
	36 5 48	①	須恵器	高台坪		1/6	95① 内①	(18.4)	13.0	5.5	灰色	①	
	36 6 40		須恵器	高台坪		1/4	95① 内①	(18.0)	14.0	5.6	95灰色 内灰黄色	①	読み小
	36 7 48	①	須恵器	高台坪		1/12	95① 内①	(18.5)	11.2	5.1	灰色	①	
	36 8 48	①	須恵器	高台坪	口縁欠失		95① 内①	—	12.8	4.4	95灰色 内オリーブ色	①	
	36 9 47	②	須恵器	高台坪	口縁欠失		95① 内①	—	12.9	5.7	灰色	①	
	36 10 48	①	須恵器	高台坪		1/12	95① 内①	(12.6)	9.4	3.6	灰色	①	
	36 11 48	①	須恵器	高台坪		1/3	?	10.5	7.3	4.2	暗灰褐色	①	
	36 12 39		須恵器	高台坪		2/3	95① 内①	(12.0)	9.3	3.6	灰色	①	分析
	36 13 48	①	須恵器	高台坪	底部		95① 内①	—	7.0	3.3	95灰色 内灰白色	①	
	36 14 48	①	須恵器	高台坪	底部		95① 内①	—	6.0	3.1	灰白色	①②	
36 15 48	①	須恵器	高台坪	底部		95① 内①	—	10.0	2.7	灰白色	①②	転用説?	
36 16 48	①	須恵器	高台坪	底部		95① 内①	—	10.0	2.5	灰色	①②		
36 17 48	①	須恵器	高台坪	底部		95① 内①	—	18.6	1.8	灰色	①		
36 18 48	①	須恵器	高台坪	底部		95① 内①	—	8.9	2.0	灰色	①②		
36 19 48	①	須恵器	高台坪	底部		95① 内①	—	9.0	2.2	95灰色 内オリーブ黄色	①		
36 20 48	①	須恵器	高台坪	底部		95① 内①	—	8.0	1.3	灰色	③		
36 21 39		須恵器	高台坪		?	95① 内①	(14.8)	12.0	4.8	灰色	②		
36 22 48	②	須恵器	高台坪		?	?	(15.0)	9.7	3.9	暗灰褐色	①		
36 23 48	②	須恵器	高台坪	口縁欠失		95① 内①	—	10.0	5.7	95灰色 内オリーブ灰色	①②		
36 24 48	①	須恵器	高台坪	底部		95① 内①	—	10.0	3.9	灰色	①		
36 25 48	②	須恵器	高台坪	口縁欠失		95① 内①	—	18.6	3.7	灰色	①		
36 26 39		須恵器	高台坪		?	95① 内①	(13.0)	9.0	3.7	95灰色 内灰オリーブ色	②		
36 27 48	①	須恵器	高台坪		?	?	14.0	10.5	4.7	暗灰色	②		
36 28 48	①	須恵器	高台坪	底部		95① 内①	—	10.0	3.4	95灰オリーブ色 内灰色	①		
36 29 48	①	須恵器	高台坪	底部		95① 内①	—	11.0	4.5	黄灰色	①		
36 30 48	②	須恵器	高台坪		?	95① 内①	(18.0)	12.4	5.2	灰色	①		
37 1 41		須恵器	蓋		?	95①② 内①②	(17.8)	—	3.1	灰色	①②③		
37 2 41		須恵器	蓋		?	95① 内①	17.2	—	3.7	黄灰色	?		
37 3 45		須恵器	蓋		1/12	95①② 内①②	(17.0)	—	3.7	オリーブ灰色	①		
37 4 49	①	須恵器	蓋	天幕部		95① 内①	—	—	2.9	灰白色	①		
37 5 46	①	須恵器	蓋		1/6	95①② 内①②	17.0	—	2.1	オリーブ灰色	①	(標)	

第12節 金属器・ガラス製品

地区	国庫番号	写和図番	種別	器種	部位	残存率	調整・技法・文様など	口径	底径	器高	色調	胎土	備考
G	37 6 46 ①		磁器器	蓋		1/6	外①内①	(16.9)	-	(1.9)	灰色	①	
	37 7 46 ①		磁器器	蓋		1/5	外①内①	(18.0)	-	(1.3)	青灰色	?	
	37 8 46 ①		磁器器	蓋		1/4	外①スノコ状底残内①	(17.0)	-	(1.6)	灰色	①	
	37 9 41		磁器器	蓋		?	外①内①	(17.0)	-	1.9	灰色	?	特製(小)
	37 10 46 ①		磁器器	蓋		1/6	外①内①	(15.9)	-	(2.0)	緑灰色	①	
	37 11 46 ①		磁器器	蓋	口縁部	1/12	外①内①	(16.2)	-	(1.8)	灰白色	②	
	37 12 41		磁器器	蓋		1/2	外①内①	(15.5)	-	1.3	灰色	①③	
	37 13 49 ①		磁器器	蓋		1/12	外①内①	(12.8)	-	3.5	緑灰色	①	
	37 14 41		磁器器	蓋		1/2	外①内①	(11.7)	-	1.8	外)青灰色 内)オリーブ灰色	①③	
	37 15 41		磁器器	蓋		3/4	外①内①	(11.7)	-	2.5	灰オリーブ色	①③	
	37 16 46 ①		磁器器	蓋		1/2	外①内①	(12.7)	-	(1.9)	外)灰色 内)緑灰色	①	
	37 17 49 ①		磁器器	蓋		1/4	外①内①	(11.4)	-	(1.7)	灰色	①	
	37 18 46 ①		磁器器	蓋	つまみ欠失	1/6	外①内①	(13.8)	-	(2.1)	外)灰オリーブ色 内)灰色	①	
	37 19 46 ①		磁器器	蓋	つまみ欠失	1/4	外①内①	(13.6)	-	(2.5)	灰色	①	
	37 20 49 ①		磁器器	蓋		1/4	外①内①	(12.9)	-	(3.5)	外)緑灰色 内)オリーブ灰色	①	
	37 21 46 ①		磁器器	蓋	つまみ欠失	1/6	外①内①	(15.0)	-	(2.2)	灰色	①③	
	37 22 49 ①		磁器器	蓋	口縁部	1/12	外①内①	(15.2)	-	(1.3)	灰色	①	器大
	37 23 49 ①		磁器器	蓋	口縁部	1/8	外①内①	(16.0)	-	(1.8)	灰色	①	
	37 24 41		磁器器	蓋	口縁部	外①内①		(13.2)	-	2.3	外)青灰色 内)灰色	①③	新発見
	37 25 41		磁器器	蓋		1/6	外①内①	(13.8)	-	3.4	灰色	①③	
	37 26 41		磁器器	蓋		1/6	外①内①	(14.0)	-	2.4	灰色	①	
	37 27 41		磁器器	蓋		5/6	外①内①	(14.4)	-	3.0	灰褐色	?	分析
	37 28 49 ①		磁器器	蓋		1/4	外①内①	(14.6)	-	1.7	青灰色	?	
	37 29 41		磁器器	蓋	つまみ欠失	1/2	外①内①	(14.0)	-	(1.8)	灰オリーブ色	①	
	37 30 49 ①		磁器器	蓋		1/8	外①内①	(14.0)	-	(1.5)	灰色	①	
	38 1 40		磁器器	皿		1/8	外①?内①	(17.5 14.2 3.2 ?)			?	?	分析
	38 2 40		磁器器	皿		1/2	外①内①	(17.4 14.6 3.0)			灰色	①	
	38 3 47 ①		磁器器	皿		1/5	外①内①	(16.4) (12.8)			2.6 青灰色	?	分析
	38 4 47 ①		磁器器	皿		?	外①内①	(16.8)	(13.2)		2.8 灰オリーブ色	①	
	38 5 40		磁器器	皿		?	外①内①	(17.1 14.1 2.2)			灰色	①③	分析
	38 6 46 ②		磁器器	皿		1/6	外①内①	(16.0) (13.0)			2.1 灰色	①	
	38 7 47 ①		磁器器	皿		1/4	外①内①	(16.2 12.8)			2.2 青灰色	?	分析
	38 8 46 ②		磁器器	皿		1/12	外①内①	(15.0)	(12.0)		1.9 灰色	①③	
	38 9 47 ①		磁器器	皿		1/2	外①内①	(15.8 12.8)			2.2 灰白色	①③	分析
	38 10 47 ①		磁器器	皿		1/4	外①内①	(15.4) (11.8)			2.1 灰色	①	
	38 11 47 ①		磁器器	皿		1/4	外①スノコ状底残内①	(16.0) (13.0)			2.5 灰白色	①	
	38 12 47 ①		磁器器	皿		1/12	外①内①	(16.0) (12.8)			2.3 灰色	①	
38 13 46 ②		磁器器	皿		1/6	外)底-未調整 内)外①	(15.0 (11.4)			2.2 灰色	①		
38 14 47 ②		磁器器	皿		1/6	外①内①	(15.8)	(13.0)		2.3 オリーブ灰色	①		
38 15 46 ②		磁器器	皿		1/4	外①内①	(15.6)	(13.0)		2.3 灰色	①		
38 16 47 ①		磁器器	皿		1/6	外①内①	(16.2)	(12.0)		2.0 灰色	①		
38 17 46 ②		磁器器	皿		1/4	外①内①	(15.6 12.8)			2.6 灰オリーブ色	①		
39 1 40		磁器器	皿		1/3	外①内①	(18.0)	(13.5)		2.0 灰色	①		
39 2 49 ②		磁器器	皿		?	外①内①	(19.0) (16.0)			(1.8) 緑灰色	①③		
39 3 40		磁器器	皿		1/12	外①内①	(19.0) (15.2)			2.0 灰色	②		
39 4 40		磁器器	皿		1/6	外①内①	(15.8)	(13.2)		2.5 灰オリーブ色	①		
39 5 47 ①		磁器器	皿		1/3	外①内①	(17.6)	(14.2)		2.3 外)オリーブ灰色 内)灰オリーブ色	①	外)縁付着	
39 6 49 ②		磁器器	皿		1/6	外①内①	(16.8)	(13.6)		2.8 灰色	①③	分析	
39 7 40		磁器器	皿		1/4	外①内①	(17.6)	(14.0)		2.6 外)灰オリーブ色 内)灰色	①③		
40 1 41		磁器器	無台坪		1/6	外①内①	(11.8)	(9.0)		4.6 外)黄灰色 内)灰白色	②		
40 2 46 ②		磁器器	無台坪		?	外①内①	(15.8)	(6.0 4.4)		灰色	①	SP-142	
40 3 40		磁器器	皿		1/4	外①内①	(17.6)	(14.0)		2.5 灰色	②		
41 1 45 ②		磁器器	碗	口縁部		外①内①	(20.0)	-	-	(5.6)	灰色	②	
41 2 45 ②		磁器器	碗	口縁部	1/12	外①内①	(18.8)	-	-	(5.0)	外)オリーブ灰色 内)灰白色	①③	
41 3 46 ②		磁器器	碗	口縁部	1/12	外①内①	(15.8)	-	-	(4.0)	灰オリーブ色	①	
41 4 45 ②		磁器器	碗	口縁部	1/6	外①内①	(14.0)	-	-	(3.9)	灰色	①③	

第5章 山腰遺跡

地区	図面番号	写和図番	種別	器種	部位	残存率	調査・技法・文様など	口径	底径	器高	色調	胎土	備考		
G	41	5 45 ②	須恵器	埴	高台先	1/8	95① 内①	34.0	-	[4.2]	黄灰色	①	(小)		
	41	6 40 ②	須恵器	埴	底部		95① 内①	-	[10.0]	[3.3]	95(黄灰色) 内(灰白色)	②	(小)		
	41	7 48 ②	須恵器	埴	底部		95① 内①	-	[11.2]	[2.6]	95(にふい)黄灰色 内(灰黄色)	②			
	41	8 48 ②	須恵器	埴	底部		95① 内①	-	[10.0]	[3.2]	灰色	①			
	41	9 48 ②	須恵器	埴	底部		95① 内①	-	9.0	[5.6]	95(灰色) 内(黄灰色)	①②	(小)		
	41	10 40 ②	須恵器	埴		7	95① 内①		[34.8]	[8.8]	5.8	灰オリーブ色	②		
	41	11 48 ②	須恵器	埴		1/12	95① 内①		[12.6]	[6.4]	4.9	95(黄灰色) 内(灰黄色)	①		
	41	12 48 ②	須恵器	埴	底部		95① 内①	-	(7.0)	[3.0]		95(灰色) 内(オリーブ黒色)	②		
	41	13 48 ②	須恵器	埴	底部		95① 内①	-	(7.0)	[4.1]		灰色	②		
	41	14 48 ①	須恵器	埴	底部		95① 内①	-	8.4	[4.4]		灰色	②		
	42	1 45 ①	須恵器	鉢	口縁部	1/12	95① 内①		[18.0]	-	[2.7]	95(灰色) 内(灰白色)	①		
	42	2 43 ①	須恵器	鉢		?	95① 内①		[18.0]	(7.5)	[10.1]	灰褐色	②		
	42	3 43 ①	須恵器	無台杯		?	95① 内①		[16.2]	12.4	[6.8]	黄灰色	②③	(標)	
	42	4 49 ②	須恵器	高坏	受部	1/4	95①② 内①②		[19.6]	-	[2.3]	95(灰色) 内(オリーブ灰色)	①		
	42	5 44 ①	須恵器	高坏		1/3	95① 内①		[13.8]	9.0	7.2	95(灰色) 内(灰白色)	②		
	42	6 43 ①	須恵器	無台杯		1/2	95①② 内①②		[16.0]	(7.0)	3.8	オリーブ灰色	①		
	42	7 45 ①	須恵器	高坏	脚部		95① 内①	-	(4.0)	[3.2]		95(オリーブ灰色) 内(灰色)	①		
	42	8 45 ①	須恵器	鉢	口縁部	1/6	95① 内①		[13.8]	-	[4.1]	緑褐色	①		
	42	9 49 ②	須恵器	高坏	受部		95① 内①	-	-	[2.6]		灰オリーブ色	①		
	42	10 44 ③	須恵器	皿	底部		95①スコップ状底面 内①	-	-	[0.8]		灰白色	①	遺書	
	42	11 45 ①	須恵器	鉢	口縁部		95① 内①	-	-	[3.8]		灰黄色	①		
	42	12 45 ①	須恵器	鉢	口縁部	1/12	95① 内①		[14.0]	-	[4.1]	灰色	①		
	42	13 45 ①	須恵器	鉢	口縁部 肩部	1/12	95① 内①		[14.0]	-	[5.3]	灰色	③		
	42	14 45 ①	須恵器	鉢	底部		95① 内①	-	(7.0)	[3.3]		灰色	②		
	42	15 49 ②	須恵器	壺	胴部		95① 内①	-	-	[7.9]		灰色	①		
	42	16 45 ①	須恵器	高台杯	底部		95① 内①	-	[20.2]	[2.0]		灰白色	①		
	42	17 45 ①	須恵器	高坏	脚部		95① 内①	-	-	[6.3]		灰黄色	①②		
	42	18 44 ①	須恵器	内輪内部	皿	口縁部	1/12	95① 内①		[18.0]	-	[1.1]	?	②や④	
	42	19 44 ①	須恵器	内輪内部	皿	底部		95① 内①	-	-	[0.9]	?	①	④	
	42	20 44 ①	須恵器	内輪内部	皿	底部		95① 内①	-	(6.2)	[1.6]	?	①	④	
	42	21 44 ①	須恵器	内輪内部	皿	口縁部	1/12	95① 内①		[11.8]	-	[1.8]	?	①	④
	42	22 44 ①	須恵器	内輪内部	皿	底部		95① 内①	-	6.6	[1.6]	?	①	④	
	42	23 44 ①	須恵器	内輪内部	皿	底部		95① 内①	-	(7.8)	[1.6]	?	①	④	
	42	24 44 ①	須恵器	内輪内部	皿	口縁部	1/12	95①(沈線2条?) 内①		[15.0]	-	[2.5]	?	②や④ 内(有沈線)	
	42	25 44 ①	須恵器	内輪内部	皿	口縁部	1/12	95①(沈線2条) 内①		[15.0]	-	[2.5]	?	②や④	
	42	26 44 ①	須恵器	内輪内部	皿	底部		95① 内①	-	6.0	[2.8]	?	①	④	
	43	1 44 ②	須恵器	壺	口縁部	1/8	95①(沈線2条) 内①		[12.8]	-	[9.2]	灰色	③		
	43	2 44 ②	須恵器	壺	胴部		95① 肩-沈線1条 内①	-	(10.8)		[12.2]	灰色	②		
	43	3 43 ①	須恵器	壺	底部		95① 内①	-	(10.0)	[9.8]		灰色	②③		
	43	4 44 ③	須恵器	壺	口縁部	1/6	95①(沈線1条) 沈線2条 頸部-沈線1条 内①	(7.6)	-	[6.0]		95(黄灰色) 内(黄灰色)	①		
	43	5 42 ①	須恵器	壺	底部		?	-	9.8	[9.5]		黄灰色	①		
	43	6 43 ①	須恵器	小壺	定形		95① 内①		5.2	7.5	7.2	灰色	②③		
43	7 42 ①	須恵器	壺	底部		95① 内①	-	(10.4)	[5.2]		95(黄灰色) 内(にふい)黄灰色	①	縁部灰(標)		
43	8 44 ③	須恵器	壺	底部		95① 内①	-	10.4	[7.1]		95(黄灰色) 内(灰色)	①			
43	9 42 ①	須恵器	壺	底部		95① 内①	-	[12.0]	[9.0]		95(黄灰色) 内(にふい)黄灰色	①			
44	1 44 ③	須恵器	壺	口縁部	1/6	95① 内①		[23.0]	-	[7.3]	95(灰色) 内(灰オリーブ色)	①②			
44	2 44 ③	須恵器	壺	口縁部 肩部		95①② 内①②	-	-	[7.0]		95(黄灰色) 内(黄灰色)	①			
44	3 44 ③	須恵器	?	底部		95(不明) 赤線? 内①	-	-	[1.7]		灰白色	②			
44	4 44 ③	須恵器	壺	口縁部 肩部	1/12	95①口縁-① 肩-② 内①口縁-① 肩-②	-	-	[6.3]		灰オリーブ色	①			
44	5 44 ③	須恵器	壺	胴部		95① 内①	-	-	[5.0]		灰色	①			
45	1 43 ①	須恵器	壺		1/4	95① 内①		[22.4]	-	[46.3]	灰色	③	SP-33		
46	1 44 ④	須恵器	壺	口縁部	?	95① 内①(沈線状)		[28.4]	-	[2.5]	灰色	①②			
46	2 44 ④	須恵器	壺	胴部		95① 内①	-	(17.0)	[39.8]		95(黄灰色) 内(灰オリーブ色)	②	SK-4		

第12節 金属器・ガラス製品

地区	国産品	品目	種類	部種	部位	残存率	調整・技法・文様など	口径	底径	器高	色調	胎土	備考			
G	47	1	50	②	土師器	蓋	口縁部 肩底	1/12	外)不明 内)不明	(13.8)	-	(3.9)	外)にぶい棕色 内)にぶい黄棕色	①④		
	47	2	50	②	土師器	蓋	口縁部	1/12	外)不明 内)不明	(12.2)	-	(2.4)	棕色	①		
	47	3	50	②	土師器	蓋	口縁部 肩底	1/12	外)不明 内)不明 内)口縁-横ハナ	(16.8)	-	(3.5)	外)にぶい黄褐色 内) ?	①	内)備付者	
	47	4	43		土師器	小壺	底部 胴部		外)②③ 内)不明	-	6.4	(6.0)	?		②や④ 外)備付者	
	47	5	50	②	土師器	把手		?	-	-	-	灰白色	①④			
	47	6	50	②	土師器	埴	底部	外)不明 内)不明	-	(5.8)	(1.9)	浅黄棕色	②④			
	47	7	50	②	土師器	埴	底部	外)不明 内)不明	-	(5.8)	(2.3)	棕色	②④			
	47	8	50	②	土師器	埴	底部	外)不明 内)不明	-	(7.2)	(2.3)	にぶい黄棕色	②			
	47	9	50	②	土師器	埴	底部	外)不明 内)不明	-	(6.6)	(1.9)	浅黄棕色	①			
	47	10	50	②	土師器	埴	底部	外)不明 内)不明	-	(5.5)	(2.3)	外)浅黄棕色 内)浅黄色	②			
	47	11	50	②	土師器	無台坪	底部	外)不明 内)不明	-	(6.0)	(1.2)	にぶい黄棕色	②④			
	47	12	50	②	土師器	埴	底部	外)不明 内)不明	-	(8.0)	(1.9)	外)灰黄色 内)にぶい黄棕色	②④			
	47	13	50	②	土師器	埴?	底部	外)不明 内)不明	-	(14.4)	(3.7)	外)にぶい黄棕色 内)黄褐色	②			
	47	14	50	②	土師器	埴	底部	外)不明 内)不明	-	(23.0)	(5.7)	棕色	②④			
	47	15	50	②	土師器	鉢?	口縁部 胴部	1/8	外)不明 内)不明	(27.6)	-	(12.5)	外)棕色 内)にぶい黄棕色	②④		
	47	16	50	②	土師器	蓋	口縁部	1/6	外)不明 内)不明	(28.0)	-	(3.4)	灰白色	②		
	47	17	50	②	土師器	蓋	口縁部	1/12	外)不明 内)不明	(28.0)	-	(1.6)	にぶい棕色	①		
	47	18	50	②	土師器	蓋	口縁部	1/12	外)不明 内)不明	(30.0)	-	(2.4)	浅黄棕色	②		
	H	47	19	50	②	土師器	蓋	口縁部 肩底	1/12	外)不明 内)不明	(25.2)	-	(4.7)	外)浅黄棕色 内)にぶい棕色	②④	
		47	20	50	②	土師器	蓋	口縁部 肩底	1/12	外)不明 内)不明	(24.0)	-	(3.8)	外)浅黄棕色 内)灰黄色	②④	
47		21	50	②	土師器	蓋	口縁部 肩底	1/12	外)口縁-① 肩-カキメ 内)口縁-横ハナ?	(24.0)	-	(6.4)	外)にぶい棕色 内)にぶい黄棕色	①④		
47		22	50	②	土師器	蓋	口縁部 肩底	1/6	外)不明 内)不明	(23.5)	-	(6.1)	にぶい黄棕色	②④		
47		23	50	②	土師器	蓋	口縁部	1/4	外)不明 内)不明	(24.0)	-	(1.3)	にぶい黄棕色	②④		
47		24	50	②	土師器	鉢	口縁部 肩底	1/12	外)不明 内)不明	(21.4)	-	(5.2)	灰黄色	①		
48		1	50	①	土師器	蓋	口縁部 肩底	1/12	外)口縁-不明 肩-ケズリ 内)口縁-不明 肩-①	(27.4)	-	(6.8)	外)浅黄色 内)灰黄色	②④		
48		2	50	①	土師器	蓋	口縁部 肩底	1/8	外)口縁-①のみ② 肩-①のみ②横ハナ? 内)口縁-不明 肩-②③④⑤⑥	(22.4)	-	(10.3)	灰白色	②④	大G図例-番号?	
48		3	50	①	土師器	蓋	胴部		外)② 内)①のみカキメ	-	-	(5.7)	外)にぶい棕色 内)浅黄棕色	②④		
48		4	50	②	土師器	蓋	胴部		外)②のみカキメ 内)①のみカキメ	-	-	(8.2)	にぶい棕色	②④		
48		5	42		土師器	無台坪		外)① 内)不明	(12.0)	4.0	3.3	灰黄色	②④			
48		6	50	①	土師器	無台坪	底部	外)① 内)不明	-	4.9	(1.3)	棕色	②④	内)灯芯油瓶		
48	7	50	①	土師器	無台坪	底部	外)①② 内)①	-	(7.0)	(1.8)	浅黄棕色	①				
48	8	50	①	土師器	鉢	口縁部	1/4	外)口縁-四隅1本 内)不明	(10.0)	-	(2.8)	外)にぶい棕色 内)にぶい黄棕色	②④	SK-16		
48	9	50	①	かわらけ		底部	外)不明 内)①②③④⑤⑥ 係-①	-	6.6	(1.5)	にぶい黄棕色	蓋 ①	内)灯芯油瓶			
I	48	10	50	①	土師器	蓋	胴部		外)② 内)不明	-	-	(11.9)	外)灰白色 内)灰黄色	②④	大G図例-番号?	
	58	1	38	③	須恵器	無台坪	1/12	外)① 内)①	(11.6)	(9.2)	3.2	浅黄色	①			
	58	2	38	③	須恵器	無台坪	1/4	外)① 内)①	(12.2)	(9.0)	3.6	灰黄色	①			
	58	3	38	③	須恵器	無台坪	1/12	外)① 内)①	(12.0)	(8.0)	3.4	灰黄色	①			
	58	4	38	③	須恵器	無台坪	1/4	外)① 内)①	(12.6)	(9.0)	3.5	浅黄色	①			
	58	5	38	③	須恵器	無台坪	1/6	外)① 内)①	(12.8)	(9.1)	3.8	オリーブ灰色	①			
	58	6	38	①	須恵器	無台坪	1/3	外)① 内)①	(12.0)	(8.4)	(2.8)	灰オリーブ色	①			
	58	7	38	③	須恵器	無台坪	底部	外)② 内)①	-	(9.0)	(2.1)	浅黄色	①			
	58	8	38	③	須恵器	無台坪	底部	外)① 内)①	-	(10.0)	(2.5)	灰白色	①			
	58	9	38	③	須恵器	高台坪	底部	外)① 内)①	-	(9.0)	(2.1)	灰白色	①			
	58	10	38	③	須恵器	無台坪	底部	外)① 内)①	-	(8.0)	(1.5)	灰色	①			
	58	11	38	③	須恵器	無台坪	1/8	外)① 内)①	(12.8)	(8.8)	3.5	灰黄色	①			
	58	12	38	③	須恵器	無台坪	1/4	外)② 内)①	(12.0)	(8.8)	3.6	灰白色	①			
58	13	38	③	須恵器	無台坪	1/6	外)① 内)①	(11.8)	(8.9)	(2.9)	オリーブ灰色	①				

第5章 山腰遺跡

地区	図数番号	写和図種	種別	器種	部位	残存率	調査・技法・文様など	口径	底径	器高	色調	出土	備考		
I	28	14	36	⑤	須恵部	無台坪	1/3	外⑤ 内⑤	(12.2)	9.8	3.0	灰黄色	①	SK-7	
	28	15	36	⑤	須恵部	埴	口縁部	1/4	外⑤ 内⑤	(12.4)	-	[3.6]	外/灰黄色 内/黄褐色	①	
	28	16	36	⑤	須恵部	埴	口縁部	1/4	外⑤ 内⑤	(11.8)	-	[2.4]	灰白色	①	
	28	17	36	⑤	須恵部	埴	口縁部	1/12	外⑤ 内⑤	(15.0)	-	[6.6]	灰色	①	
	28	18	36	⑤	須恵部	埴	口縁部	1/8	外⑤ 内⑤	(11.8)	-	[3.3]	灰黄色	①	
	28	19	36	⑤	須恵部	瓦器類	胴部	外⑤(注線対称地画 胴部中央内⑤)	-	-	[17.6]	外⑤にふい黄色 内/灰色	②		
	63	1	51	⑤	須恵部	蓋	つまみ欠失	1/12	外⑤ 内⑤	(12.2)	-	[1.9]	オリーブ灰色	②	
	63	2	51	⑤	須恵部	蓋	つまみ欠失	1/2	外⑤(⑤) 内⑤(⑤)	13.2	-	[1.7]	外/灰色 内/灰オリーブ色	③	(横)
	63	3	51	⑤	須恵部	蓋		1/3	外⑤ 内⑤	(14.7)	-	[2.0]	灰色	③	(金)
	63	4	51	⑤	須恵部	蓋	?	外⑤ 内⑤	(15.8)	-	[1.4]	オリーブ灰色	②		
L	63	5	51	⑤	須恵部	高台坪		1/12	外⑤ 内⑤	(12.7)	9.0	[4.1]	外/灰色 内/灰オリーブ色	②	(横)
	63	6	51	⑤	須恵部	高台坪	底部	外⑤ 内⑤	-	9.9	[2.1]	灰色	②		
	63	7	51	⑤	須恵部	無台坪	底部	外⑤(スノコ状瓦肌内⑤)	-	(7.0)	[1.0]	灰色	①	(小)	
	63	8	51	⑤	須恵部	蓋	胴部	外⑤ 内⑤	-	-	[2.5]	外/灰色 内/灰オリーブ色	①		
	63	9	51	⑤	須恵部	無台坪	口縁部	1/12	外⑤ 内⑤	(14.0)	-	[2.7]	灰色	③	
	63	10	51	⑤	須恵部	無台坪		1/4	外⑤(スノコ状瓦肌内⑤)	(13.1)	6.9	3.2	灰色	①②	(小)
	63	11	51	⑤	須恵部	皿	底部	外⑤ 内⑤(好着物)	-	18.0	[1.6]	灰色	①	(小)	
	63	12	51	⑤	土師器	蓋	胴部	外①上-① 下-? 内①上-① 下-?	-	-	-	-	浅黄褐色	①	
	63	13	51	⑤	須恵部	高台坪	底部	外⑤ 内⑤	-	(14.0)	[1.4]	灰色	②		
	63	14	51	⑤	須恵部	埴	底部	外⑤ 内⑤	-	-	[2.2]	外/灰色 内/オリーブ灰色	③		
III	64	1	52	⑤	かわらけ		1/2	外⑤ 内⑤(指押え)	(8.0)	(4.2)	1.5	にふい黄褐色	②	書 SK-1	
	64	2	52	⑤	かわらけ		1/4	外⑤ 内⑤	(8.2)	(3.5)	1.3	外/灰色 内/黄褐色	②	書 SK-1	
	64	3	52	⑤	かわらけ		1/3	外⑤ 内⑤(指押え)	(8.0)	(4.5)	1.6	褐色	①	書 SK-1	
	64	4	52	⑤	かわらけ		1/4	外⑤(指押え 内⑤(指押え)	8.0	5.4	1.5	にふい黄褐色	②③	SK-1	
	64	5	52	⑤	かわらけ		1/6	外⑤? 内⑤(指押え)	(8.0)	7.0	1.6	外⑤にふい黄褐色 内⑤(明黄褐色)	②	書 SK-1	
	64	6	52	⑤	かわらけ		1/4	外⑤(指押え 内⑤(不明)	(9.0)	(6.0)	[1.5]	にふい黄褐色	①	書 SK-1	
	64	7	52	⑤	かわらけ		1/4	外⑤ 内⑤	(8.0)	-	[1.5]	黄褐色	①	書 SK-1	
	64	8	52	⑤	かわらけ	突起	外⑤ 内⑤(指押え)	8.1	4.7	1.5	にふい黄褐色	②	書 SK-1		
	64	9	52	⑤	かわらけ		1/2	外⑤(不明 内⑤(不明)	8.0	6.0	1.1	褐色	②		
	64	10	52	⑤	かわらけ		1/2	外⑤ 内⑤(指押え)	(8.2)	(5.0)	1.6	外/黄褐色 内/暗灰黄色	①	書 SK-1	
IV	64	11	51	⑤	かわらけ		1/3	外⑤(指押え 内⑤(指押え)	(8.0)	(5.5)	1.4	黄褐色	②	書 SK-1	
	64	12	-	-	かわらけ		1/8	外⑤ 内⑤(不明)	(8.0)	(5.0)	[1.8]	外⑤にふい黄褐色 内/灰黄褐色	①	書 SK-1	
	64	13	52	⑤	かわらけ		1/12	外⑤(指押え 内⑤)	(8.0)	(4.0)	1.6	灰黄褐色	①	書 SK-1	
	64	14	52	⑤	かわらけ		1/3	外⑤(指押え 内⑤(不明)	(7.6)	(5.0)	1.2	褐色	②③	書 SK-1	
	64	15	52	⑤	かわらけ		1/2	外⑤(指押え 内⑤(指押え)	(8.6)	(6.2)	1.5	にふい褐色	②	書 SK-1	
	64	16	52	⑤	かわらけ		1.6	外⑤(指押え 内⑤(不明)	(8.0)	(5.0)	[1.6]	明黄褐色	①	書 SK-1	
	64	17	52	⑤	かわらけ		2/3	外⑤(指押え 内⑤(指押え)	7.8	5.8	1.4	外/明黄褐色 内/黄褐色	①	書 SK-1	
	64	18	52	⑤	かわらけ		1/2	外⑤(指押え 内⑤)	(8.6)	(5.5)	1.5	外⑤にふい黄褐色 内/黄褐色	②	書 SK-1	
	64	19	52	⑤	かわらけ		1/2	外⑤(不明 内⑤(指押え)	14.4	10.5	2.0	外/黄褐色 内/暗灰黄色	②	書 SK-1	
	64	20	52	⑤	かわらけ		1/2	外⑤ 内⑤(底-指押え)	8.2	6.4	1.5	にふい黄褐色	②	書 SK-1	
V	70	1	53	⑤	須恵部	無台坪	突起	外⑤ 内⑤	13.8	6.6	3.2	灰色	③	SK-3 (内)残存者(小)	
	70	2	53	⑤	須恵部	無台坪	?	外⑤ 内⑤	13.6	10.0	3.3	灰白色	③	SK-3 (内)残存者(小)	
	70	3	53	⑤	須恵部	無台坪	?	外⑤ 内⑤	13.6	8.0	3.2	灰白色	③	SK-3 (内)へラ記号 残存者(小)	
	70	4	53	⑤	須恵部	無台坪	?	外⑤ 内⑤	14.0	7.5	3.7	灰白色	③	SK-3(小)	
	70	5	53	⑤	須恵部	無台坪	1/2	外⑤(スノコ状瓦肌内⑤)	(13.4)	(5.0)	3.0	灰白色	②	SK-3 生焼け(小)	
	70	6	56	①	須恵部	無台坪	底部	外⑤(スノコ状瓦肌内⑤)	-	(5.0)	[2.2]	灰色	②③	SK-3	
	70	7	56	①	須恵部	無台坪	底部	外⑤ 内⑤	-	-	[1.1]	オリーブ灰色	②	SK-2	
	70	8	56	①	須恵部	無台坪	底部	外⑤ 内⑤	-	-	[1.2]	オリーブ灰色	②	SK-2	
	70	9	53	⑤	須恵部	無台坪	?	外⑤? 内⑤	14.5	7.0	4.1	灰色	①	SK-3 「十」部書 (内)残存者(小)	

第12節 金属器・ガラス製品

地区	商標番号	写し細目	種別	器種	部位	残存率	調査・技法・文様など	口径	口径	器高	色調	胎土	備考
N	70 10 53	①	磁器器	蓋		1/2	外① 内①	18.4	—	2.1	灰色	?	SK-3
	70 11 53	①	磁器器	無台坪		1/2	外①不明 内①不明	(15.8)	(8.0)	4.3	外①灰黄色 内①灰黄色	③	SK-3 生焼け(小)
	70 12 53	①	磁器器	無台坪		完形	外①平打ヘラ切り模① 内①	14.2	6.1	3.9	灰白色	?	SK-3 器小 内①難付着(小)
	70 13 53	①	磁器器	無台坪		1/4	外①スノコ状模① 内①	(14.6)	(6.8)	4.0	灰白色	③	SK-3(小)
	70 14 56 ②	②	磁器器	蓋	口縁部	1/8	外①② 内①②	(16.0)	—	(1.6)	灰色	③	SP-21
	70 15 53	①	土師器	蓋	口縁部 胴部	1/3	外①不明 内①②	(13.6)	—	[6.1]	にぶい黄褐色	①	SK-3 外①難付着
	70 16 62 ①	①	土師器	蓋	胴部	?	外①? 内①?	—	—	[5.1]	にぶい黄褐色	①	SK-3
	70 17 56 ①	①	磁器器	無台坪	底部	?	外①不明 内①不明	—	(8.0)	[2.1]	灰色	③	SK-3
	70 18	①	磁器器	碗	底部	?	外①② 内①②	—	(7.1)	[3.9]	灰黄褐色	②	SK-3
	70 19 53	①	磁器器	無台坪		?	外①? 内①①	13.5	6.8	3.0	灰白色	②	SK-3 内①難付着(小)
	70 20 56 ①	①	磁器器	無台坪		1/2	外①スノコ状模① 内①	(14.3)	(7.0)	3.1	灰白色	②	SK-3 生焼け(小)
	70 21 53	①	磁器器	無台坪		完形	外①② 内①②	14.2	9.0	2.3	灰白色	?	SK-4 器小(小)
	70 22 56 ①	①	磁器器	無台坪		1/4	外①細いスノコ状模① 内①	(14.0)	4.6	3.2	灰白色	③	SP-21(小)
	71 1 60 ①	①	磁器器	無台坪		1/12	外①② 内①②	(13.3)	(9.0)	3.2	オリーブ灰色	③	
	71 2 60 ①	①	磁器器	無台坪		1/8	外①② 内①②	(12.7)	(8.0)	[3.7]	灰白色	①	生焼け
	71 3 60 ①	①	磁器器	無台坪		1/4	外①② 内①②	10.8	(8.3)	2.9	灰色	①	
	71 4 60 ①	①	磁器器	無台坪		?	外①② 内①②	12.9	8.5	2.9	暗灰色	③	
	71 5 60 ①	①	磁器器	無台坪		1/12	外①② 内①②	(12.0)	(10.0)	3.1	灰色	③	
	71 6 60 ①	①	磁器器	無台坪		?	外①② 内①②	(10.0)	(6.0)	2.2	灰色	①	生焼け
	71 7 56 ①	①	磁器器	無台坪		1/12	外①② 内①②	(12.0)	(8.2)	[3.1]	外①灰黄色 内①灰白色	②	生焼け
71 8 56 ①	①	磁器器	無台坪	底部	?	外①② 内①②	—	(8.9)	[2.7]	灰白色	③		
71 9 56 ①	①	磁器器	無台坪	底部	?	外①② 内①②	—	(7.0)	[1.4]	灰オリーブ色	②		
M	71 10 57 ②	②	磁器器	無台坪		1/12	外①② 内①②	(12.4)	(8.0)	2.5	灰色	③	
	71 11 56 ②	②	磁器器	高台坪		1/2	外①② 内①②	(14.6)	(9.0)	3.9	外①灰色 内①灰白色	②	
	71 12 56 ②	②	磁器器	高台坪		1/12	外①② 内①②	(13.6)	(8.8)	3.8	外①灰色 内①灰オリーブ色	①	
	71 13 56 ②	②	磁器器	高台坪		1/5	外①? 内①?	(13.0)	(8.8)	4.3	外①緑灰色 内①灰色	③	(標)
	71 14 56 ②	②	磁器器	高台坪		3/4	外①② 内①②	13.6	9.8	3.6	灰色	?	分析
	71 15 56 ②	②	磁器器	高台坪		?	外①? 内①②	13.0	9.5	3.7	灰色	②	
	71 16 60 ①	①	磁器器	無台坪		1/12	外①② 内①②	(14.8)	(8.8)	3.5	灰色	②	
	71 17 60 ①	①	磁器器	無台坪		?	外①② 内①②	(13.3)	(8.8)	3.5	外①灰色 内①灰黄色	①	
	71 18 54	①	磁器器	無台坪		2/4	外①② 内①②	13.5	8.6	3.6	灰色	②	
	K	71 19 60 ①	①	磁器器	無台坪		1/6	外①② 内①②	(14.0)	(10.0)	3.4	?	①
71 20 60 ①		①	磁器器	無台坪		1/8	外①② 内①②	(13.0)	(9.5)	3.6	灰色	①	
71 21 56 ①		①	磁器器	無台坪	底部	?	外①②③ 内①③	—	(7.4)	[2.8]	灰黄色	③	内①付着跡有
71 22 57 ②		②	磁器器	無台坪		1/2	外①② 内①②	(10.4)	(5.8)	3.2	オリーブ灰色	①	
71 23 57 ②		②	磁器器	無台坪		1/12	外①② 内①②	(12.0)	(7.4)	3.7	灰白色	①	
71 24 56 ①		①	磁器器	無台坪		1/12	外①② 内①②	(13.4)	(7.8)	3.0	灰オリーブ色	①	
71 25 56 ①		①	磁器器	無台坪		1/6	外①② 内①②	(15.9)	(8.0)	2.7	灰オリーブ色	①	
71 26 54		①	磁器器	高台坪		1/2	外①③ 内①③	(12.0)	(7.8)	3.4	灰色	③	分析
71 27 56 ②		②	磁器器	高台坪		1/4	外①② 内①?	(13.0)	(8.8)	3.6	灰色	③	
71 28 54		①	磁器器	高台坪		?	外①? 内①②	12.2	8.4	3.9	灰色	②	(標)
71 29 56 ②		②	磁器器	高台坪		1/6	外①③ 内①③	(10.5)	(6.0)	3.8	外①暗褐色 内①灰色	①	(標)
71 30 56 ②		②	磁器器	高台坪	底部	?	外①② 内①③	—	(7.0)	[2.4]	灰色	①	内面能用?
71 31 54		①	磁器器	無台坪		1/2	外①② 内①③	(13.6)	(8.4)	3.2	灰色	①	(小)
71 32 60 ①		①	磁器器	無台坪		1/4	外①スノコ状模① 内①	(13.0)	(6.1)	3.2	灰白色	③	
71 33 60 ①		①	磁器器	無台坪		1/8	外①② 内①③	(13.5)	(7.0)	2.9	灰白色	②	
71 34 60 ②		②	磁器器	無台坪		1/12	外①? 内①?	(14.0)	(10.0)	2.9	灰色	③	
71 35 60 ①		①	磁器器	無台坪		1/4	外①③ 内①③	(14.0)	(8.0)	[2.8]	灰色	③	(小)
71 36 57 ②		②	磁器器	無台坪		?	外①② 内①③	13.0	7.2	3.0	灰色	②	
71 37 57 ②	②	磁器器	無台坪		1/8	外①② 内①③	14.0	—	2.5	黄灰色	③		
71 38 60 ②	②	磁器器	無台坪		?	外①② 内①③	(13.0)	(9.0)	2.9	灰黄色	③		

第5章 山腰遺跡

地区	国勢番号	写和別名	種別	器種	部位	残存率	調査・技法・文様など	口径	底径	器高	色調	胎土	備考		
N	71	39	60	①	須恵器	無台坪	1/12	95① スノコ状圧痕 P0①	⑬2.2	(6.4)	3.1	灰色	①	内/灯芯線肌	
	71	40	56	①	須恵器	無台坪	1/4	95① 内①	⑬0.1	(4.4)	3.1	灰色	①	①	
	71	41	56	②	須恵器	高台坪	?	95① 内①	⑬5.4	(8.0)	5.3	灰色	②	②	
	71	42	54	②	須恵器	高台坪	1/12	95① 内①	⑬5.6	(11.0)	5.8	外/黄灰色 内/灰白色	①	①	
	71	43	56	②	須恵器	高台坪		95① 内①	-	(9.8)	[4.3]	外/灰オリーブ色 内/灰青色	①	①	
	71	44	56	②	須恵器	高台坪	底部	95① 内①	-	(11.0)	[1.8]	灰青色	①	①	
	71	45	56	②	須恵器	高台坪	底部	95① 内①	-	(10.0)	[1.4]	外/灰色 内/灰オリーブ色	①	①	
	72	1	58	①	須恵器	蓋	つまみ欠失	1/4	95①② 内①	⑬2.2	-	[2.0]	灰白色	①	分析
	72	2	58	①	須恵器	蓋	つまみ欠失	1/3	95①② 内①	⑬8.6	-	[2.1]	黄灰色	①	転用履
	72	3	59	②	須恵器	蓋		1/6	95① 内①	⑬9.6	-	[2.4]	灰オリーブ色	②	②
	72	4	58	①	須恵器	蓋	天井部	95① 内①	-	-	[2.3]	灰色	①	転用履	
	72	5	54	②	須恵器	蓋		1/3	95①② 内①	⑬8.0	-	[3.2]	灰色	①	分析
	72	6	54	②	須恵器	蓋		1/6	95①② 内①	⑬8.9	-	2.5	灰色	②	②
	72	7	59	②	須恵器	蓋		1/4	95① 内①	⑬7.1	-	1.2	灰白色	③④	③④
	72	8	59	②	須恵器	蓋		1/2	95① 内①	⑬7.0	-	[1.6]	外/黄灰色 内/黄灰色	③	(小)
	72	9	58	①	須恵器	蓋		1/12	95①② 内①	⑬9.8	-	4.6	浅黄色	①	(標)
	72	10	58	①	須恵器	蓋	つまみ欠失	1/2	95① 内①	⑬9.0	-	[3.0]	灰白色	①	(小)
	72	11	58	①	須恵器	蓋	つまみ欠失	1/6	95①② 内①	⑬7.9	-	[2.0]	灰白色	③④	鎌倉前
	72	12	54	②	須恵器	蓋	つまみ欠失	11/12	95① 内①	⑬8.7	-	[2.1]	灰色	①	①
	72	13	59	②	須恵器	蓋	口縁部	1/6	95① 内①	⑬8.0	-	[1.2]	黄灰色	③④	③④
	72	14	59	②	須恵器	蓋	つまみ欠失	1/3	95① 内①	⑬6.3	-	1.9	灰白色	③④	③④
	72	15	59	②	須恵器	蓋	口縁部	1/6	95① 内①	⑬8.0	-	[1.2]	外/黄灰色 内/灰青色	②	②
	72	16	59	②	須恵器	蓋		1/12	95① 内①	⑬7.2	-	1.1	黄灰色	②	生焼け
	72	17	58	②	須恵器	蓋		1/4	95①② 内①	⑬4.0	-	2.2	灰色	①	①
	72	18	58	②	須恵器	蓋	天井部	95① 内①	-	-	[1.5]	灰色	③④	③④	
	72	19	58	②	須恵器	蓋	口縁部	1/4	95① 内①	⑬4.0	-	[2.3]	灰青色	①	①
	72	20	58	②	須恵器	蓋	口縁部	1/12	95① 内①	⑬4.0	-	[2.0]	灰青色	③④	③④
	72	21	58	②	須恵器	蓋	口縁部	1/4	95① 内①	⑬5.0	-	[1.5]	灰色	①	鎌倉前
	72	22	58	②	須恵器	蓋	口縁部	1/3	95① 内①	⑬3.6	-	[1.9]	外/灰オリーブ色 内/灰色	①	①
	72	23	58	②	須恵器	蓋		1/8	95① 内①	⑬4.7	-	[1.3]	灰色	③	③
	72	24	58	②	須恵器	蓋	口縁部	1/6	95① 内①	⑬5.0	-	[1.6]	灰青色	①	①
	72	25	54	②	須恵器	蓋	つまみ欠失	1/6	95① 内①/ハヤ	⑬9.0	-	[2.7]	灰色	①	①
	72	26	58	①	須恵器	蓋	つまみ	95① 内①	-	-	[2.2]	灰色	①	①	
	72	27	58	①	須恵器	蓋	つまみ	95① 内①	-	-	[1.7]	灰色	①	①	
	72	28	59	②	須恵器	蓋	天井部	95②スノコ状圧痕 P0①	-	-	[1.2]	灰色	①	内面転用	
	72	29	56	②	須恵器	蓋	つまみ欠失	1/8	95①不明 内①	⑬5.8	-	[1.4]	外/黄褐色 内/灰色	①	①
	72	30	58	②	須恵器	蓋		1/6	95② 内①	⑬5.0	-	2.4	灰色	②	②
	72	31	58	②	須恵器	蓋	つまみ欠失	1/2	95①② 内①	⑬4.6	-	[1.7]	灰黄色	①	鎌倉前(標)
	72	32	58	②	須恵器	蓋	天井部	95① 内①	-	-	[2.5]	灰色	③④	③④	
	72	33	59	②	須恵器	蓋	口縁部	1/6	95① 内①	⑬2.4	-	[2.0]	灰色	③④	③④
	72	34	59	②	須恵器	蓋	口縁部	1/4	95① 内①	⑬3.0	-	[1.8]	灰黄色	③④	③④
	72	35	59	②	須恵器	蓋	つまみ欠失	1/3	95① 内①	⑬3.0	-	9.5	灰色	③④	③④
	72	36	59	②	須恵器	蓋	口縁部	1/6	95① 内①	⑬4.0	-	[1.5]	灰黄色	③④	(標)
	72	37	59	②	須恵器	蓋		1/2	95① 内①	⑬3.7	-	1.9	灰色	③④	(標)
	73	1	56	②	須恵器	高台坪	1/12	95①② 内①	⑬0.5	(16.0)	4.2	暗黄灰色	②	鎌倉前	
	73	2	54	②	須恵器	高台坪	?	95? 内①	36.8	12.8	3.4	暗灰色	②	②	
	73	3	54	②	須恵器	高台坪	?	95? 内①	34.4	11.0	2.5	暗灰色	②	底/ヘラ記号?	
73	4	60	②	須恵器	皿	1/12	95① 内①	⑬6.0	(13.8)	2.6	灰色	③④	③④		
73	5	57	①	須恵器	皿	1/12	95② 内①	⑬5.8	(12.2)	2.1	灰色	③④	③④		
73	6	57	①	須恵器	皿	口縁部	1/6	95① 内①	⑬6.0	-	[1.9]	オリーブ灰色	③④	③④	
73	7	57	①	須恵器	皿		3/2	95① 内①	⑬6.6	(12.6)	1.9	灰色	①	①	
73	8	57	①	須恵器	皿		1/8	95② 内①	⑬5.4	(11.6)	2.3	灰色	③	③	
73	9	57	①	須恵器	皿		1/6	95① 内①	⑬5.8	(12.8)	2.1	外/淡黄色 内/灰黄色	①	①	
73	10	60	②	須恵器	皿		1/4	95② 内①	⑬5.0	(11.2)	2.3	灰色	③	③	
73	11	60	②	須恵器	皿		1/8	95? 内?	⑬6.0	(12.5)	2.5	灰色	③	③	
73	12	54	②	須恵器	皿	底部	95② 内①	-	-	[0.8]	灰色	②	器蓋		
73	13	54	②	須恵器	皿	底部	95② 内①	-	-	[0.9]	オリーブ灰色	②	器蓋		

第12節 金属器・ガラス製品

地区	国産番号	写和照番	種類	器種	部位	残存率	調整・技法・文様など	口径	底径	器高	色調	胎土	備考	
N	73	14	57	①	磁器器	皿	底部	95)② 内)①	—	9.0	[1.6]	灰色	②	内面化粧?
	73	15	60	②	磁器器	皿	口縁欠失	95)② スノコ状底版? 内)①	—	(11.4)	[2.3]	灰白色	②	
	73	16	57	①	磁器器	皿	1/2	95)① スノコ状底版 内)①	(14.1)	(10.4)	[1.9]	灰白色	②	
	73	17	57	①	磁器器	皿	1/12	95)① 内)①	(14.0)	(9.4)	2.0	?	①	
	73	18	57	①	磁器器	皿	1/12	95)① 内)①	(14.1)	(10.8)	2.1	灰色	③	
	73	19	57	①	磁器器	皿	?	95)② 内)①	(14.8)	(11.2)	2.7	灰白色	③	
	73	20	60	②	磁器器	皿	1/12	95)① 内)①	(14.9)	(11.8)	2.5	灰白色	①	
	73	21	60	②	磁器器	皿	?	95)① 内)①	14.6	11.2	2.2	灰白色	①	
	73	22	54	②	磁器器	皿	1/8	95)① 内)①	(17.3)	(14.2)	2.4	外)灰白色 内)灰色	①	墨書
	73	23	60	②	磁器器	皿	1/12	95)① 内)①	(19.4)	(13.0)	2.2	にぶい黄褐色	①	
73	24	54	②	磁器器	皿	1/12	95)① 内)①	(15.8)	(12.0)	1.9	灰黄色	①	墨痕あり	
73	25	54	②	磁器器	皿	2/3	95) ? 内) ?	16.4	12.0	2.5	灰色	③	分析	
73	26	60	②	磁器器	皿	1/6	95)① 内)①	(15.9)	(12.4)	1.9	外)黄灰色 内)灰色	③		
73	27	57	①	磁器器	皿	1/8	95)① 内)①	(15.0)	(11.0)	2.5	灰褐色	③		
73	28	57	①	磁器器	皿	1/4	95)① 内)①	(15.5)	(11.8)	3.2	灰色	②	分析	
73	29	57	①	磁器器	皿	?	95)① 内)①	(16.2)	(13.0)	2.4	浅黄色	③		
73	30	60	②	磁器器	皿	?	95)① 内)①	(16.0)	(11.2)	2.2	灰色	③		
73	31	60	②	磁器器	皿	?	95)② 内)①	(15.0)	(12.0)	2.4	灰黄色	③		
74	1	59	①	磁器器	碗	?	95) ? 内) ?	17.0	10.3	7.0	緑灰色	③	分析(小)	
74	2	59	①	磁器器	碗	1/12	95)① 内)①	(16.4)	(8.2)	5.3	外)緑黄灰色 内)黄灰色	①		
74	3	59	①	磁器器	碗	?	95)① 内)①	13.6	10.0	6.5	灰色	①	外)ヘラ記号(小)	
74	4	55	②	磁器器	碗	2/3	95) ? 内) ?	(15.8)	9.8	7.1	黄灰色	?	内)穴(小)	
74	5	57	②	磁器器	碗	底部	95)① 内)①	—	(7.4)	[2.2]	黄灰色	①		
74	6	57	②	磁器器	碗	底部	95)① 内)①	—	(6.0)	[2.7]	外)黄灰色 内)にぶい黄色	①		
74	7	57	②	磁器器	碗	底部	95)① 内)①	—	(7.6)	[1.9]	灰色	①		
74	8	57	②	磁器器	碗	底部	95)① 内)①	—	(10.0)	[3.8]	灰色	②	(小)	
74	9	57	②	磁器器	碗	底部	95)② 内)①	—	(7.5)	[2.0]	外)黄灰色 内)浅黄色	①		
74	10	59	①	磁器器	碗	口縁部	1/2	95)① 内)①	(14.4)	—	[3.8]	外)灰色 内)黄灰色	③	
74	11	57	②	磁器器	碗	口縁部	1/8	95)① 内)①	(14.8)	—	[3.7]	灰白色	①	
74	12	59	①	磁器器	碗	底部	95)① 内)①	—	(16.0)	[3.4]	灰白色	①		
74	13	56	①	磁器器	碗	1/4	95)①底縁3巻 内)①	(18.8)	(10.4)	7.8	外)灰色 内)灰白色	①		
74	14	59	①	磁器器	碗	1/12	95)① 内)①	(18.6)	(9.6)	6.9	灰色	③		
74	15	59	①	磁器器	碗	?	95) ? 内) ?	18.0	9.2	5.3	緑灰色	③	釜み大	
74	16	59	①	磁器器	碗	口縁部	1/6	95)① 内)①	(18.0)	—	[4.0]	にぶい黄色	①	
74	17	59	①	磁器器	碗	底部	95)① 内)①	—	(15.0)	[2.3]	灰色	③		
75	1	61	②	磁器器	無台杯	1/12	95)① 内)①	(14.6)	10.0	3.5	灰色	①		
75	2	60	①	磁器器	無台杯	1/4	95)① 内)①	(12.7)	9.0	3.4	浅黄色	③	分析	
75	3	60	①	磁器器	無台杯	1/4	95)① 内)①	(12.2)	(7.8)	3.8	灰色	①		
75	4	61	②	磁器器	無台杯	1/12	95)① 内)①	(12.6)	(7.0)	2.0	灰色	①		
75	5	61	②	磁器器	無台杯	底部	95)① 内)①	—	(6.5)	[3.4]	灰黄色	①		
75	6	61	②	磁器器	無台杯	底部	95)② スノコ状底版 内)①	—	(7.6)	[2.4]	灰色	②	内外)灯芯油瓶	
75	7	61	②	磁器器	無台杯	口縁部	1/8	95)① 内)①	(14.0)	—	[2.6]	灰色	①	内外)灯芯油瓶
75	8	55	②	磁器器	無台杯	1/2	95)① 内)①	(10.1)	(9.0)	3.4	灰白色	③	内)灯芯油瓶 分析	
75	9	61	②	磁器器	無台杯	?	95)① 内)①	(12.2)	(8.0)	3.4	浅黄色	①	内外)灯芯油瓶 分析	
75	10	61	②	磁器器	無台杯	1/4	95)① 内)①	(12.4)	—	3.2	にぶい黄褐色	①	左焼付	
75	11	55	②	磁器器	無台杯	?	95)① 内)①	(9.4)	(8.0)	2.6	浅黄色	①	内)灯芯油瓶	
75	12	61	②	磁器器	無台杯	底部	95)① 内)①	—	(6.8)	[1.9]	灰色	②	内外)灯芯油瓶	
75	13	61	②	磁器器	無台杯	1/12	95)① 内)①	(11.4)	7.2	1.9	外)灰黄色 内)浅黄色	①		
75	14	61	②	磁器器	無台杯	1/4	95)① 内)①	(10.4)	(6.0)	3.2	灰黄色	①	内)灯芯油瓶 左焼付	
75	15	61	②	磁器器	無台杯	口縁部	1/6	95)① 内)①	(14.8)	—	[2.5]	オリーブ灰色	③	内)灯芯油瓶?
75	16	61	②	磁器器	無台杯	?	95)① 内)①	(13.8)	8.0	2.9	外)灰色 内)灰オリーブ色	③	内)灯芯油瓶(小)	
75	17	61	②	磁器器	無台杯	?	95)① 内)①	(11.2)	(7.0)	3.1	灰白色	③	内外)灯芯油瓶	
75	18	55	②	磁器器	無台杯	1/8	95)① 内)①	(10.2)	7.8	2.5	にぶい黄褐色	①	内)灯芯油瓶	
75	19	61	②	磁器器	無台杯	口縁欠失	95)② 内)①	—	5.8	[2.2]	外)黄灰色 内)灰白色	③	内)灯芯油瓶 左焼付	

第5章 山腰遺跡

地区	図数番号	写和図番号	種別	器種	部位	残存率	調査・技法・文様など	口径	底径	器高	色調	胎土	備考		
N	75	29	55	須恵器	無台坏	1/2	95② 内①	9.8	7.2	3.5	灰黄色	①	内/灯芯油灰 生焼け		
	76	1	57	②	須恵器	壺?	口縁部	1/12	95② 内①	(20.2)	-	[2.4]	95②色 内/オリーブ黒色	①	
	76	2	57	②	須恵器	鉢	口縁部	1/12	95② 内①	(15.6)	-	[3.4]	灰黄色	①	
	76	3	61	①	須恵器	壺	底部 胴部		95① 内①	-	(8.0)	[5.9]	95①色 内/灰白色	①	SK-2
	76	4	56	②	須恵器	壺?	底部		95① 内①	-	(8.0)	[4.3]	緑褐色	②	
	76	5	55	②	須恵器	平瓶	底部 胴部		95①② 内①	-	4.5	10.4	灰色	②③	
	76	6	61	①	須恵器	鉢	口縁部	1/12	95① 内①	(17.6)	-	[3.8]	灰黄色	①	
	76	7	61	①	須恵器	鉢?	底部 胴部		95① 内①	-	(10.0)	[8.3]	95①オリーブ灰色 内/明オリーブ灰色	①	
	76	8	59	①	須恵器	壺?	底部 胴部		95① 内①	-	(9.4)	[6.8]	95①灰色 内/オリーブ色	①	
	76	9	57	②	須恵器	壺	底部		95① 内①	-	(8.4)	[5.9]	灰黄色	①	
	76	10	55	②	須恵器	壺	底部		95① 内①	-	(10.0)	[7.4]	95①オリーブ 内/にぶい黄褐色	①	
	76	11	57	②	須恵器	鉢?	口縁部	1/12	95① 内①	(21.0)	-	[4.0]	灰色	①	
	76	12	61	①	須恵器	鉢	口縁部 胴部	1/2	95①胴① 身①-2のみ② 内①	(24.8)	-	[6.1]	灰色	①	分析
	76	13	61	①	須恵器	鉢	口縁部 胴部	1/12	95① 内①	(30.0)	-	[8.7]	オリーブ灰色	②③	
	76	14	55	②	須恵器	壺	底部		95① 内①	-	4.9	[5.0]	灰色	②	
	76	15	61	①	須恵器	壺?	底部		95① 内①	-	7.4	[2.4]	灰色	②	
	76	16	57	②	須恵器	瓶?	口縁部	1/12	95①不明 内①	-	-	[4.5]	にぶい黄褐色	①	生焼け
	76	17	61	①	須恵器	鉢	口縁部	1/12	95① 内①	(15.0)	-	[4.5]	95①灰色 内/灰白色	②	
	76	18	61	①	須恵器	鉢	口縁部	1/12	95①② 内①	(19.7)	(11.0)	9.3	灰色	②③	
	76	19	61	①	須恵器	浅鉢?	底部		95①② 内①	-	(15.0)	[3.1]	95①黄褐色 内/灰白色	①	
	76	20	61	①	須恵器	鉢?	底部		95① 内①	-	(9.0)	[8.5]	灰色	①	
	76	21	61	①	須恵器	鉢	底部		95① 内/龍ハケのみ②	-	2.0	[3.3]	浅褐色	①	生焼け
	76	22	59	①	須恵器	壺	底部		95① 内①	-	(10.0)	[6.0]	緑褐色	②	
	76	23	57	②	須恵器	壺	底部		95① 内①	-	(9.0)	[3.3]	灰色	①	
	76	24	61	①	須恵器	把手			95? 内①	-	-	-	灰色	①	
	76	25	55	②	須恵器	壺	底部		95① 内①	-	6.5	[7.0]	灰色	②	
76	26	55	②	須恵器	壺	底部 胴部		95② 内①	-	(7.4)	[9.8]	灰色	①		
O	77	1	62	①	土師器	壺	口縁部	1/12	95①不明 内①不明	(34.0)	-	[3.8]	95①浅黄褐色 内/にぶい黄褐色	②	
	77	2	62	①	土師器	壺	胴部		95①不明 内①	-	-	[7.1]	にぶい黄色	②	
	77	3	62	①	土師器	無台坏	底部		95①スノコ状圧痕 内①不明	-	-	[1.1]	浅黄褐色	②	内/赤影
	77	4	62	①	土師器	壺	胴部		95① 内①②遊部圧痕ハケ	-	-	[8.1]	95①にぶい黄褐色 内/浅黄褐色	①	
	77	5	55	②	土師器	壺	口縁部 胴部	1/2	95①胴① 胴①-カキマ 下部① 内①胴①-胴① 7基①	(18.8)	-	[21.4]	にぶい黄褐色	①	SK-4
	78	1	51	⑤	信楽		1/2	95② 内①	26.0	10.6	5.4	95②黄褐色 内/黒褐色	①		
	78	2	62	②	かわらけ		1/2	95①不明 内?	(7.6)	4.5	1.2	95②色 内/明黄褐色	②③	内/赤影?	
	78	3	62	②	かわらけ		1/3	95? 内/指押え	(8.4)	4.5	1.4	にぶい黄褐色	②③		
	78	4	51	③	信楽		1/2	95② 内①	22.2	10.8	4.8	にぶい黄褐色	①		
	78	5	62	③	信楽	口縁部	1/3	95① 内①	(28.4)	-	-	[3.1]	にぶい黄褐色	①	
E	78	6	62	③	越前焼	茶鉢	底部		95① 内①	-	-	[3.3]	?	①	
	78	7	62	③	越前焼	茶鉢	底部		95① 内/押目	-	-	[3.0]	?	①	
	78	8	62	③	かわらけ		1/2	95①不明 内①不明	(9.9)	(4.0)	1.6	にぶい黄褐色	①		
	78	9	62	③	かわらけ		1/2	95①不明 内①不明	(9.8)	(4.0)	1.4	灰白色	②		
	78	10	62	③	かわらけ		1/3	95①不明 内①不明	(9.8)	(4.0)	[1.4]	浅黄褐色	壺 ②	内外/灯芯油灰	
	78	11	62	③	かわらけ		1/2	95①上①-横ナテ	(9.9)	(4.0)	1.5	褐色	壺 ①	内外/灯芯油灰	
	78	12	62	③	かわらけ		1/6	95①不明 内①不明	(10.9)	-	[2.0]	褐色	壺 ②	内外/灯芯油灰	
	78	13	62	③	かわらけ		1/6	95①不明 内/口縁①-指ハキ	(9.4)	5.5	[1.2]	にぶい黄褐色	壺 ②	内外/灯芯油灰	
O	78	14	62	③	越前焼	壺	胴部		95② 内①	-	-	-	?	①	SK-24
	86	1	62	③	須恵器	壺	つまみ欠失		95① 内①	(13.8)	-	[1.3]	95①黄褐色 内/にぶい黄褐色	②	鎌倉灰(郡)
	86	2	62	③	須恵器	取耳壺	胴部		95① 内①	-	-	[13.0]	95①灰色 内/灰白色	①	

第12節 金属器・ガラス製品

地区	国産番号	写真図録	種類	器種	部位	残存率	調整・技法・文様など	口径	底径	器高	色調	胎土	備考	
O 地 区	86 3	62 ⑤	磁器器	無台坪	底部		95)② 内)①	—	(7.8)	[1.1]	灰白色	②		
	86 4	62 ⑤	磁器器	椀	底部		95)② 内)①	—	(7.6)	[1.9]	灰黄色	①		
	86 5	62 ⑤	磁器器	高台坪	底部		95)② 内)①	—	(9.4)	[2.2]	95)灰灰色 内)灰黄色	①		
	86 6	62 ⑤	磁器器	鉢	底部		95)①④工具痕 内)④	—	(9.4)	[2.7]	95)灰黄色 内)灰白色	①		
	86 7	62 ⑤	磁器器	壺	胴部		95)④ 内)①	—	—	[6.5]	95)にふい黄褐色 内)灰白色	①		
	86 8	62 ⑤	磁器器	壺	胴部		95)⑦ 内)①	—	—	[16.1]	95)にふい黄色 内)灰黄褐色	①		
P 地 区	90 1	62 ④	磁器器	碗	口縁部	1/12	95)① 内)①		(14.8)	—	[3.0]	オリーブ灰色	①	
	90 2	62 ④	磁器器	無台坪	底部		95)① 内)①	—	(7.0)	[1.3]	にふい黄褐色	①		
	90 3	62 ④	磁器器	蓋		1/3	95)⑩ 内)①		(13.0)	—	[1.1]	灰色	③④	
	90 4	62 ①	磁器器	蓋		1/2	95)⑩④ 内)①	—	(13.3)	[0.9]	95)オリーブ灰色 内)灰オリーブ色	③④	(磨)	
	90 5	62 ④	磁器器	蓋		1/6	95)① 内)①		(16.0)	—	[1.6]	灰オリーブ色	①	
	90 6	62 ④	磁器器	鉢	底部		95)⑩ 内)①	—	—	[5.2]	95)オリーブ灰色 内)灰オリーブ色	③④		
区	90 7	62 ④	磁器器	無台坪	底部		95)① 内)①	—	(6.3)	[0.7]	にふい黄褐色	①		
	90 8	62 ④	磁器器	無台坪	底部		95)① 内)①	—	(7.0)	[1.1]	にふい黄褐色	①		
	90 9	62 ④	磁器器	?	胴部		95)① 内)④微細圧痕	—	—	[5.2]	95)オリーブ灰色 内)灰オリーブ色	①		

第5章 山腰遺跡

第14表 山腰遺跡出土土器観察表

* 表中の(調整・技法・文様など)や(胎土)の欄の数字は大塚山遺跡の観察表の例に同じ

遺構	図版番号	写真図版番号	種類	器形	部位	残存率	調整・技法・文様など	口径	底径	器高	色調	胎土	備考	
SK-1	94	1	95	須恵部	蓋		1/2 外)① 内)①	13.8	-	2.7	外)オリーブ灰色 内)灰色	①①		
SR-1 SD-2	94	2	95	須恵部	高台杯		1/3 外)① 内)①	(13.8)	(9.9)	4.1	灰色	①		
SK-1	94	3	95	須恵部	無台杯		1/12 外)① 内)①	(12.4)	(8.2)	3.4	オリーブ灰色	②		
SP-15	94	4	96 ①	須恵部	蓋		1/3 外)不明 内)①	(14.0)	-	[1.0]	外)灰色 内)灰白色	②		
SP-8	94	5	95	須恵部	高台杯		1/2 外)① 内)①	(16.9)	12.7	5.9	青灰色	①	読み小	
SP-13	94	6	96 ①	須恵部	碗	?	外)① 内)①	(14.2)	6.4	5.9	灰色	①		
SP-19	94	7	95	須恵部	無台杯		2/3 外)① 内)①	13.3	8.0	3.5	外)灰色 内)灰白色	①		
SR-1 SP-16 SD-2	94	8	95	須恵部	横瓶		1/4 外)口縁-① 胴-①カキメ 内)口縁-① 胴-①カキメ	(11.8)	-	[20.5]	青灰色	③		
SD-2	94	9	96 ①	須恵部	把手		外)?	-	-	-	灰色	①		
SK-1	94	10	96 ①	須恵部	蓋	口縁部 胴部	?	外)①カキメ 内)①カキメ	(19.2)	-	[11.2]	灰白色	①①	生焼け
SD-1	97	1	63	須恵部	無台杯		1/12 外)① 内)①	(12.4)	(9.2)	4.0	灰白色	②	器書	
	97	2	63	須恵部	無台杯		3/4 外)① 内)①	(12.8)	(8.4)	4.2	灰色	②		
	97	3	73 ②	須恵部	無台杯		?	外)① 内)①	(13.0)	(9.8)	3.7	外)灰色 内)灰白色	①	
	97	4	76 ①	須恵部	無台杯		1/12 外)① 内)①	(12.2)	(8.2)	4.8	灰色	①		
	97	5	76 ②	須恵部	無台杯		1/6 外)① 内)①	(12.8)	(10.0)	3.4	外)灰色 内)灰白色	①		
	97	6	63	須恵部	無台杯		1/3 外)① 内)①	12.9	9.7	3.6	外)灰色 内)灰白色	③		
	97	7	76 ②	須恵部	無台杯		?	外)① 内)①	(12.8)	(9.2)	3.7	灰色	②	
	97	8	77 ①	須恵部	無台杯		1/12 外)① 内)①	(11.8)	(7.6)	2.3	灰白色	②		
	97	9	76 ②	須恵部	無台杯		1/12 外)① 内)①	(13.4)	(10.0)	2.8	オリーブ灰色	②		
	97	10	77 ①	須恵部	無台杯		1/3 外)① 内)①	(11.8)	(8.8)	3.6	灰白色	①		
	97	11	75 ②	須恵部	無台杯		1/12 外)① 内)①	(12.4)	(9.6)	3.7	灰色	①		
	97	12	63	須恵部	無台杯		?	外)① 内)①	(12.8)	9.7	3.5	灰色	①	
	97	13	63	須恵部	無台杯		1/2 外)① 内)①	12.2	8.7	3.5	灰白色	①	底ヘラ記号	
	97	14	63	須恵部	無台杯		1/2 外)① 内)①	(12.2)	(9.2)	3.7	外)灰白色 内)灰色	①		
	97	15	77 ①	須恵部	無台杯	口縁欠失		外)① 内)①	-	(10.0)	[2.5]	淡黄色	③	
	97	16	63	須恵部	無台杯	底部		外)① 内)①	11.7	8.2	3.9	灰色	①①	
	97	17	75 ②	須恵部	無台杯		1/12 外)① 内)①	(12.4)	(8.0)	3.3	オリーブ灰色	①		
	97	18	63	須恵部	無台杯		3/4 外)① 内)①	11.8	7.2	3.6	明青灰色	②①		
	97	19	76 ②	須恵部	無台杯		1/6 外)① 内)①	11.6	10.0	4.0	灰色	①	分析	
	97	20	63	須恵部	無台杯		1/2 外)① 内)①	(12.8)	7.8	3.3	外)灰色 内)灰白色	①		
	97	21	63	須恵部	無台杯		3/4 外)① 内)①	11.9	8.8	4.3	灰白色	③	生焼け	
	97	22	63	須恵部	無台杯		?	外)① 内)①	(12.3)	8.6	3.6	オリーブ灰色	①	
	97	23	76 ①	須恵部	無台杯		1/2 外)① 内)①	(12.6)	(8.8)	3.6	灰白色	①	分析	
	97	24	73 ①	須恵部	無台杯	底部		外)① 内)①	-	(9.4)	[2.5]	外)灰白色 内)灰色	②	
	97	25	77 ①	須恵部	無台杯	底部		外)① 内)①	-	(6.2)	[1.2]	灰色	①	
	97	26	63	須恵部	無台杯		4/5 外)① 内)①	11.3	6.5	3.2	灰白色	?	器書	
	97	27	63	須恵部	無台杯		1/2 外)① 内)①	(12.8)	(8.8)	3.2	灰白色	②		
97	28	63	須恵部	無台杯		2/3 外)① 内)①	(12.6)	(8.0)	3.7	灰色	②			
97	29	76 ②	須恵部	無台杯		1/8 外)① 内)①	(14.0)	(9.2)	3.0	灰白色	①			
97	30	75 ①	須恵部	無台杯		1/6 外)① 内)①	(12.8)	(9.8)	3.3	青灰色	②			
97	31	63	須恵部	無台杯		1/4 外)① 内)①	(13.0)	(9.0)	3.3	灰白色	②			
97	32	63	須恵部	無台杯		1/2 外)① 内)①	(12.8)	(8.6)	3.5	灰白色	②			
97	33	76 ①	須恵部	無台杯		1/2 外)① 内)①	(12.4)	(7.4)	3.2	灰白色	②	分析		
97	34	77 ①	須恵部	無台杯	底部		外)① 内)①	-	(11.0)	[2.5]	灰白色	②		
97	35	75 ①	須恵部	無台杯	底部		外)① 内)①	-	(9.4)	[2.6]	灰色	②		
97	36	75 ①	須恵部	無台杯	底部		外)① 内)①	-	(8.6)	[2.3]	灰白色	①		
97	37	77 ①	須恵部	無台杯	底部		外)① 内)①	-	(8.2)	[3.1]	外)オリーブ灰色 内)黄色	③		
98	1	64	須恵部	無台杯		ほぼ完全	外)① 内)①	12.7	9.0	3.2	灰色	①	器書	

第12節 金属器・ガラス製品

通称	国産番号	万国国番	種別	器種	部位	残存率	調査・技法・文様など	口径	底径	器高	色調	胎土	備考
	98-2-64		須恵部	無台坏		2/3	外① 内①	(13.0)	9.0	4.0	灰白色	①	
	98-3-75 ①		須恵部	無台坏		?	外① 内①	(12.8)	(7.0)	3.9	外緑灰色 内灰色	①	
	98-4-64		須恵部	無台坏		1/6	外① 内①	12.7	6.5	3.0	明緑灰色	①	
	98-5-75 ②		須恵部	無台坏		1/12	外① 内①	(12.4)	(8.6)	3.6	明オリーブ灰色	①	
	98-6-64		須恵部	無台坏		1/2	外① 内①	12.7	9.2	3.5	?	①	
	98-7-75 ②		須恵部	無台坏		1/2	外① 内①	12.2	(9.0)	3.3	青灰色	①	
	98-8-77 ①		須恵部	無台坏		1/6	外① 内①	(11.8)	(8.4)	3.4	灰白色	②	
	98-9-64		須恵部	無台坏		1/2	外① 内①	(12.4)	(8.8)	3.8	灰白色	①	
	98-10-64		須恵部	無台坏		?	外① 内①	(12.4)	(9.2)	3.4	灰色	①	
	98-11-75 ①		須恵部	無台坏	底部		外① 内①	-	(9.0)	[1.2]	灰色	②	
	98-12-64		須恵部	無台坏		1/6	外① 内①	(15.0)	(9.0)	3.6	灰白色	①	器蓋
	98-13-76 ②		須恵部	無台坏		1/6	外① 内①	(13.8)	(8.6)	3.4	灰白色	②	
	98-14-75 ①		須恵部	無台坏		1/4	外① 内①	(13.8)	(8.6)	3.4	灰白色	①	分析
	98-15-77 ①		須恵部	無台坏		1/8	外① 内①	(15.6)	(10.4)	3.9	灰色	②	
	98-16-75 ①		須恵部	埴	口縁部	1/4	外① 内①	(17.0)	-	[3.3]	外灰色 内灰白色	①	
	98-17-75 ②		須恵部	無台坏		1/12	外① 内①	(13.8)	(10.0)	3.4	灰白色	①	
	98-18-64		須恵部	無台坏		?	外① 内①	(14.8)	9.0	[3.5]	青灰色	①	
	98-19-75 ①		須恵部	無台坏	口縁欠失		外① 内①	-	(8.6)	[3.6]	灰白色	①	
	98-20-75 ②		須恵部	無台坏		1/4	外① 内①	12.6	8.0	3.3	青灰色	①	
	98-21-75 ②		須恵部	無台坏	底部		外① 内①	-	8.8	[1.4]	灰色	①	
	98-22-64		須恵部	無台坏		1/12	外① 内①	(12.4)	(9.4)	3.2	灰色	②	
	98-23-75 ②		須恵部	無台坏		1/3	外① 内①	12.0	8.0	3.2	緑灰色	①	
	98-24-64		須恵部	無台坏		?	外① 内①	(13.8)	(8.8)	3.8	オリーブ灰色	①	
	98-25-76 ②		須恵部	無台坏		1/3	外① 内①	(12.8)	(8.6)	3.8	灰白色	①	
	98-26-76 ②		須恵部	無台坏		1/6	外① 内①	(13.0)	(9.4)	3.6	明オリーブ灰色	①	
	98-27-64		須恵部	無台坏		11/12	外① 内①	12.4	8.5	3.7	灰色	②	
	98-28-75 ①		須恵部	無台坏		1/12	外① 内①	(13.0)	(10.0)	3.3	灰色	①	
	98-29-64		須恵部	無台坏	口縁欠失	外① 内①		13.5	10.2	3.9	灰白色	①	
	98-30-64		須恵部	無台坏		1/2	外① 内①	12.4	8.1	3.2	灰色	①	分析
	98-31-75 ②		須恵部	無台坏		1/12	外① 内①	(12.6)	(9.2)	3.7	明オリーブ灰色	①	
	98-32-64		須恵部	無台坏		2/3	外① 内①	(12.8)	(8.6)	3.4	灰白色	①	
	98-33-77 ①		須恵部	無台坏	底部		外① 内①	-	(7.8)	[2.7]	灰白色	①	
	98-34-77 ①		須恵部	無台坏	底部		外① 内①	-	(9.6)	[2.0]	灰色	②	
	98-35-77 ①		須恵部	無台坏	底部		外① 内①	-	(10.0)	[2.5]	灰白色	①	
	98-36-75 ①		須恵部	無台坏	底部		外① 内①	-	(8.6)	[1.8]	灰色	①	
	99-1-64		須恵部	無台坏		1/2	外① 内①	(14.6)	(9.4)	4.5	灰色	②	
	99-2-64		須恵部	無台坏		1/3	外① 内①	(15.8)	(9.6)	4.5	灰色	②	
	99-3-76 ①		須恵部	無台坏		1/3	外① 内①	(14.6)	(7.0)	4.0	灰白色	②	
	99-4-76 ①		須恵部	無台坏	底部	1/4	外① 内①	-	(10.4)	[2.0]	灰白色	①	
	99-5-65		須恵部	無台坏		1/2	外① 内①	(12.0)	(9.2)	3.3	灰色	①	
	99-6-65		須恵部	無台坏		2/3	外① 内①	(10.6)	(6.0)	3.3	灰色	②	
	99-7-75 ②		須恵部	無台坏	口縁部	1/4	外① 内①	(10.8)	-	[2.8]	灰色	②	
	99-8-65		須恵部	無台坏		1/12	外① 内①	14.2	9.0	5.1	灰白色	①	
	99-9-76 ①		須恵部	無台坏	底部		外① 内①	-	(10.6)	[1.8]	灰白色	②	器蓋
	99-10-83 ②		須恵部	無台坏		1/8	外① 内①	(14.0)	(12.2)	4.5	外灰色 内灰白色	①	
	99-11-76 ②		須恵部	無台坏		1/6	外① 内①	(13.8)	(10.0)	3.9	外灰白色 内灰色	①	内)灯芯線痕
	99-12-76 ①		須恵部	無台坏		1/2	外① 内①	(14.2)	(8.4)	4.2	灰白色	②	
	99-13-76 ②		須恵部	無台坏		1/8	外① 内①	(13.0)	(9.6)	3.1	明オリーブ灰色	①	
	99-14-76 ①		須恵部	無台坏		1/3	外① 内①	(12.2)	(8.8)	3.5	灰白色	①	
	99-15-65		須恵部	無台坏		3/4	外① 内①	12.4	9.0	4.1	明青灰色	①	
	99-16-75 ②		須恵部	無台坏		1/8	外① 内①	(11.8)	(8.6)	3.2	灰白色	②	
	99-17-76 ①		須恵部	無台坏	底部		外① 内①	-	-	[0.5]	灰色	①	器蓋
	99-18-76 ①		須恵部	無台坏	底部		外① 内①	-	(5.0)	[2.1]	灰白色	①	
	99-19-65		須恵部	無台坏		1/4	外① 内①	9.0	6.3	3.0	灰白色	①	
	99-20-65		須恵部	無台坏		1/8	外① 内①	8.4	6.2	4.5	灰白色	①	
	99-21-83 ②		須恵部	無台坏		1/6	外① 内①	11.2	9.6	3.3	灰色	①	

SD-1

第5章 山腰遺跡

遺構	図版番号	方孔四角柱	種類	部材	部位	残存率	調査・技法・文様など	口排	底排	部高	色調	粘土	備考
99	22	65	須恵部	無台環		1/12	外)① 内)⑤	(12.0)	8.2	3.5	黒灰色	①	内)へラ記号
99	23	75 ①	須恵部	無台環		1/6	外)① 内)⑤	(12.4)	(8.0)	(3.5)	灰色	①	
99	24	75 ①	須恵部	無台環		1/12	外)不明 内)不明	(11.6)	(8.0)	2.2	灰白色	①	
99	25	65	須恵部	無台環		1/6	外)① 内)⑤	(12.0)	(8.8)	4.1	灰白色	②	
99	26	65	須恵部	無台環	口縁欠失	1/2	外)① 内)⑤	(10.1)	(7.0)	(4.5)	黒灰色	②	
99	27	65	須恵部	無台環		1/12	外)① 内)⑤	(12.0)	(9.0)	3.8	外)灰色 内)灰白色	①	
100	1	76 ②	須恵部	無台環		1/12	外)① 内)⑤	(14.0)	(9.8)	3.0	灰白色	①	
100	2	76 ②	須恵部	無台環		1/4	外)① 内)⑤	(13.8)	(8.8)	3.0	灰白色	①	
100	3	65	須恵部	無台環		1/8	外)① 内)⑤	(11.8)	(7.6)	2.8	灰白色	②	
100	4	65	須恵部	無台環		3/4	外)① 内)⑤	12.8	8.5	3.2	灰色	②	
100	5	77 ①	須恵部	無台環	口縁欠失		外)① 内)⑤	-	(8.2)	(3.0)	灰白色	①	
100	6	76 ②	須恵部	無台環		1/6	外)① 内)⑤	(14.0)	(8.4)	3.8	灰白色	②	
100	7	75 ②	須恵部	無台環		1/4	外)① 内)⑤	(12.8)	(9.4)	3.8	外)淡黄色 内)灰白色	①	
100	8	65	須恵部	無台環		1/8	外)① 内)⑤	(12.0)	(8.8)	3.5	灰色	②	
100	9	65	須恵部	無台環	変形	外)① 内)⑤	12.5	3.9	4.5	灰白色	?	田本大	
100	10	65	須恵部	無台環		2/3	外)① 内)⑤	17.0	8.4	4.7	灰白色	②	墨書
100	11	77 ①	須恵部	無台環		1/6	外)① 内)⑤	(13.8)	(8.6)	3.8	灰白色	②	
100	12	76 ①	須恵部	無台環		1/12	外)① 内)⑤	(12.6)	(9.2)	3.3	灰白色	①	
100	13	75 ①	須恵部	無台環		1/12	外)① 内)⑤	(12.8)	(10.4)	3.6	灰色	②	
100	14	77 ①	須恵部	無台環	口縁部	1/6	外)① 内)⑤	(11.8)	-	(3.3)	灰白色	①	
100	15	65	須恵部	無台環		?	外)①スノコ状圧痕 内)⑤	(12.8)	(7.8)	3.7	外)灰色 内)灰白色	①	
100	16	66	須恵部	無台環		1/4	外)① 内)⑤	13.6	8.8	3.0	灰白色	②	
100	17	66	須恵部	無台環		1/2	外)① 内)⑤	13.3	7.6	3.0	灰色	②	
100	18	77 ①	須恵部	無台環		1/4	外)① 内)⑤	(13.6)	(9.4)	3.3	灰白色	②	
100	19	66	須恵部	無台環		3/4	外)① 内)⑤	(13.0)	(7.8)	3.2	外)灰色 内)オレンジ色	②	(小)
100	20	77 ①	須恵部	無台環		?	外)① 内)⑤	(12.2)	(8.8)	3.6	灰色	②	
100	21	77 ①	須恵部	無台環		1/8	外)① 内)⑤	(12.0)	(8.6)	3.5	灰白色	①	
100	22	66	須恵部	無台環		1/3	外)① 内)⑤	(12.0)	7.9	3.9	灰白色	①	
101	1	79 ①	須恵部	高台環		1/6	外)① 内)⑤	(17.0)	(11.4)	4.0	灰色	①	
101	2	77 ②	須恵部	高台環		3/4	外)① 内)⑤	(15.1)	11.4	3.6	黄灰色	①	
101	3	66	須恵部	高台環		1/4	外)① 内)⑤	(15.1)	(10.3)	3.8	黒灰色	①	
101	4	79 ①	須恵部	高台環		1/6	外)① 内)⑤	(14.7)	10.4	3.4	灰白色	①	
101	5	77 ②	須恵部	高台環		1/2	外)① 内)⑤	(13.4)	9.2	3.2	灰白色	①	分形(横)
101	6	79 ①	須恵部	高台環		1/6	外)① 内)⑤	(12.5)	(9.2)	3.6	灰色	①	(横)
101	7	78 ②	須恵部	高台環		1/6	外)① 内)⑤	(13.4)	(9.4)	3.6	黄灰色	①	
101	8	79 ①	須恵部	高台環		1/12	外)① 内)⑤	(13.2)	(8.5)	3.8	灰色	①	①
101	9	78 ①	須恵部	高台環		1/4	外)① 内)⑤	(12.8)	(9.6)	3.6	外)灰色 内)灰白色	①	
101	10	66	須恵部	高台環		1/8	外)① 内)⑤	(12.9)	8.8	3.7	黄灰色	①	
101	11	66	須恵部	高台環		1/6	外)① 内)⑤	(13.1)	(9.2)	3.7	灰色	①	
101	12	78 ①	須恵部	高台環		1/4	外)① 内)⑤	(12.4)	(9.6)	3.4	黄灰色	①	
101	13	78 ①	須恵部	高台環		1/6	外)① 内)⑤	13.0	(8.9)	3.8	外)オレンジ色 内)黄灰色	①	(横)
101	14	78 ①	須恵部	高台環		1/6	外)① 内)⑤	(13.0)	10.2	4.1	外)オレンジ色 内)灰色	①	
101	15	79 ①	須恵部	高台環	縦部		外)① 内)⑤	-	9.8	(3.1)	黄灰色	①	
101	16	77 ②	須恵部	高台環		1/4	外)① 内)⑤	(13.4)	(9.2)	4.5	灰色	①	(横)
101	17	79 ①	須恵部	高台環		1/12	外)① 内)⑤	(12.8)	(9.2)	4.4	外)灰オレンジ色 内)灰白色	①	
101	18	78 ①	須恵部	高台環		?	外)① 内)⑤	(13.2)	(10.0)	4.2	外)暗黄灰色 内)黄灰色	①	(横)
101	19	78 ①	須恵部	高台環		?	外)①スノコ状圧痕 内)⑤	(12.8)	8.2	4.2	灰色	②	
101	20	66	須恵部	高台環		3/4	外)① 内)⑤	12.8	9.1	3.9	明黄灰色	?	
101	21	78 ②	須恵部	高台環	縦部		外)① 内)⑤	-	(10.0)	(3.9)	灰色	②	
101	22	66	須恵部	高台環		2/3	外)① 内)⑤	13.6	(9.4)	4.4	外)灰色 内)灰オレンジ色	①	
101	23	66	須恵部	高台環		?	外) ? 内) ?	(13.8)	(10.0)	4.1	外)灰色 内)オレンジ色	①	

第12節 金属器・ガラス製品

通称	国取番号	万国取番号	種別	器種	部位	残存率	調査・技法・文様など	口径	底径	器高	色調	加工	備考		
SD-1	101	24	78	①	瓶蓋部	高台環	1/2	外①内①	(13.0)	4.4	3.7	灰色	①	分析(佐)	
	101	25	78	①	瓶蓋部	高台環		1.8	外①内①	(13.4)	(9.0)	4.7	黄灰色	①	
	101	26	78	①	瓶蓋部	高台環	瓶蓋部	外①内①	-	(9.4)	[2.3]	黄灰色	①		
	101	27	78	②	瓶蓋部	高台環	瓶蓋部	外①内①	-	(8.8)	[3.2]	灰白色	②		
	101	28	78	②	瓶蓋部	高台環	瓶蓋部	外①内①	-	(8.0)	[2.7]	外・緑灰色 内・灰白色	②		
	101	29	77	①	瓶蓋部	高台環	瓶蓋部	外①内①	-	(8.8)	[2.4]	灰白色	②		
	101	30	79	①	瓶蓋部	高台環	瓶蓋部	外①内①	-	(10.0)	[1.9]	灰色	②		
	101	31	66		瓶蓋部	高台環	1/4	外①内①	(11.9)	8.8	3.9	外・灰色 内・灰白色	①		
	101	32	66		瓶蓋部	高台環	10/12	外①内①	11.3	(7.2)	4.1	黄灰色	①		
	101	33	77	②	瓶蓋部	高台環	1/12	外①内①	12.0	8.1	4.3	灰色	①		
	101	34	66		瓶蓋部	高台環	1/2	外①内①	(11.4)	8.2	4.7	灰白色	①		
	101	35	66		瓶蓋部	高台環	1/6	外①内①	(12.3)	(8.0)	4.4	黄灰色	①		
	101	36	78	①	瓶蓋部	高台環	?	外①内①	(12.4)	(8.9)	3.8	外・オリーブ灰色 内・明黄灰色	①	(佐)	
	101	37	79	①	瓶蓋部	高台環	1/6	外①内①	(12.6)	(8.4)	3.8	緑灰色	①	(佐)	
	101	38	66		瓶蓋部	高台環	1/12	外①内①	(12.7)	8.2	4.2	黄灰色	①		
	101	39	78	②	瓶蓋部	高台環	口縁欠失	外①内①	-	(8.4)	[3.4]	外・灰白色 内・灰色	②		
	101	40	77	②	瓶蓋部	高台環	瓶蓋部	外①内①	-	(8.8)	[3.6]	外・灰白色 内・灰色	②		
	101	41	79	①	瓶蓋部	高台環	瓶蓋部	外①内①	-	(9.0)	[2.7]	灰色	②		
	101	42	78	②	瓶蓋部	高台環	瓶蓋部	外①内①	-	(8.0)	[1.9]	灰色	②		
	101	43	78	②	瓶蓋部	高台環	瓶蓋部	外①内①	-	(9.0)	[1.0]	灰色	①		
	101	44	77	②	瓶蓋部	高台環	瓶蓋部	外①内①	-	(9.0)	[1.7]	灰色	①		
	101	45	77	②	瓶蓋部	高台環	瓶蓋部	外①内①	-	(9.6)	[2.8]	灰白色	②		
	101	46	78	②	瓶蓋部	高台環	瓶蓋部	外①内①	-	(9.0)	[2.9]	灰白色	②		
	102	1	79	②	瓶蓋部	高台環	1/2	外①内①	(19.2)	(14.8)	6.0	灰色	①	(佐)	
	102	2	67		瓶蓋部	高台環	1/2	外①内①	(17.1)	(12.2)	5.2	灰白色	①		
	102	3	67		瓶蓋部	高台環	?	外①内①	(16.4)	(10.8)	5.9	灰白色	①		
	102	4	67		瓶蓋部	高台環	1/4	外①内①	(14.3)	10.8	5.8	外・オリーブ灰色 内・灰色	①		
	102	5	67		瓶蓋部	高台環	1/2	外①内①	15.8	11.8	5.3	明黄灰色	①	分析	
	102	6	77	②	瓶蓋部	高台環	瓶蓋部	外①内①	-	(11.4)	[1.9]	灰白色	②		
	102	7	77	②	瓶蓋部	高台環	瓶蓋部	外①内①	-	(10.0)	[1.9]	外・オリーブ灰色 内・灰白色	①		
	102	8	67		瓶蓋部	高台環	?	外①内①	16.5	12.0	5.6	外・灰色 内・オリーブ色	①	分析	
	102	9	67		瓶蓋部	高台環	1/4	外①内①	(15.1)	(11.4)	5.0	灰色	①		
	102	10	67		瓶蓋部	高台環	10/12	外①内①	(15.8)	(12.4)	5.6	灰白色	①	忠み大	
	102	11	67		瓶蓋部	高台環	?	外①内①	(15.6)	(11.8)	5.9	灰色	①		
	102	12	67		瓶蓋部	高台環	1/2	外①内①	15.6	11.2	5.2	明黄灰色	①	分析	
	102	13	79	①	瓶蓋部	高台環	瓶蓋部	外①内①	-	12.6	[2.5]	灰白色	①		
	102	14	79	①	瓶蓋部	高台環	瓶蓋部	外①内①	-	(12.0)	[1.8]	灰色	①		
	102	15	79	①	瓶蓋部	高台環	瓶蓋部	外①内①	-	11.0	[1.6]	黄灰色	①		
	103	1	67		瓶蓋部	蓋	1/2	外①内①	(17.8)	-	4.3	灰白色	①②		
	103	2	67		瓶蓋部	蓋	1/3	外①内①	(17.6)	-	2.9	灰白色	①	分析	
	103	3	67		瓶蓋部	蓋	1/2	外①内①	17.4	-	4.0	黄灰色	①		
	103	4	67		瓶蓋部	蓋	1/2	外①内①	(16.0)	-	4.0	灰色	①②		
	103	5	81	②	瓶蓋部	蓋	1/6	外①内①	(20.1)	-	[2.6]	外・緑灰色 内・黄灰色	①③		
	103	6	81	②	瓶蓋部	蓋	つまみ欠失	外①内①	(19.2)	-	[2.4]	灰色	①③	(小)	
	103	7	81	②	瓶蓋部	蓋	つまみ欠失	外①内①	(16.4)	-	[2.3]	明黄灰色	①		
103	8	81	②	瓶蓋部	蓋	11線部	外①内①	(17.2)	-	[2.0]	外・緑灰色 内・灰色	①			
103	9	81	②	瓶蓋部	蓋	11線部	外①内①	(16.0)	-	[2.4]	灰色	①			
103	10	68		瓶蓋部	蓋	1/6	外①内①	(16.6)	-	3.7	外・灰色 内・灰白色	①	分析		
103	11	81	②	瓶蓋部	蓋	口縁欠失	外①内①	-	-	[3.7]	黄灰色	②			
103	12	68		瓶蓋部	蓋	1/12	外①内①	(18.2)	-	3.7	明黄灰色	①			
103	13	68		瓶蓋部	蓋	1/2	外①内①	17.0	-	3.6	外・オリーブ灰色 内・灰色	①			

第5章 山腰遺跡

遺構	図版番号	写真図番号	種類	部種	部位	残存率	調査・技法・文様など	口径	底径	器高	色調	胎土	備考			
SD-1	102	14	81	②	須恵器	蓋	つまみ欠失	1/4	外)③④ 内)④	(20.4)	-	[1.3]	外)青灰色 内)黄灰色	①④		
	102	15	68		須恵器	蓋	つまみ欠失	1/4	外)③④ 内)④	(17.8)	-	[2.3]	黄灰色	④		
	102	16	81	②	須恵器	蓋	つまみ欠失	1/8	外)③④ 内)④	(16.8)	-	[1.5]	外)灰色 内)青灰色	④		
	102	17	68		須恵器	蓋	つまみ欠失	3/4	外)③④ 内)④	16.4	-	[2.9]	灰色	①④	(標)	
	102	18	81	②	須恵器	蓋		1/6	外)③④ 内)④	(18.0)	-	2.9	外)灰色 内)黄オリーブ色	④		
	102	19	67		須恵器	蓋	つまみ欠失	1/3	外)③④ 内)④	16.0	-	[1.5]	黄灰色	①④		
	102	20	81	②	須恵器	蓋		1/12	外)③? 内)④	(14.0)	-	3.2	外)灰白色 内)灰色	②	融着痕 分析(標)	
	102	21	67		須恵器	蓋	つまみ欠失	2/3	外)③④ 内)④	16.0	-	[2.2]	灰色	①④	(標)	
	102	22	81	②	須恵器	蓋		1/8	外)③ 内)④	(14.9)	-	[2.6]	外)灰色 内)緑灰色	①④		
	102	23	81	②	須恵器	蓋		1/3	外)③④ 内)④	14.9	-	[1.4]	黄灰色	④	器み大	
	102	24	68		須恵器	蓋		1/2	外)不明 内)④	(12.0)	-	5.2	灰白色	④	(標)	
	102	25	81	②	須恵器	蓋	?	外)③④ 内)④	(12.8)	-	2.6	黄灰色	④	ヘア記号		
	102	26	68		須恵器	蓋		3/4	外)③ 内)④	11.6	6.6	2.8	灰白色	?		
	102	27	81	②	須恵器	蓋	?	外)③④ 内)④	(12.0)	-	3.2	黄灰色	④			
	102	28	67		須恵器	蓋	つまみ欠失	2/3	外)③ 内)④	(14.3)	-	[2.4]	外)緑灰色 内)灰色	①④		
	102	29	68		須恵器	蓋	つまみ欠失	1/3	外)③ 内)④	(11.0)	-	2.2	灰色	④		
	102	30	68		須恵器	蓋		1/3	外)③④ 内)④	(14.0)	-	2.7	灰色	③	分析	
	102	31	68		須恵器	蓋		1/4	外)③④ 内)④	(12.2)	-	3.1	外)青灰色 内)黄灰色	④		
	102	32	68		須恵器	蓋	つまみ欠失	1/2	外)③④ 内)④	13.9	-	3.1	灰色	④		
	102	33	68		須恵器	蓋		1/2	外)③④ 内)④	13.3	-	2.8	黄灰色	③④		
	102	34	81	②	須恵器	蓋	つまみ欠失	1/12	外)③ 内)④	(13.2)	-	[2.0]	外)緑灰色 内)黄灰色	④		
	102	35	68		須恵器	蓋		1/2	外)③④ 内)④	13.2	-	2.6	黄灰色	④		
	102	36	68		須恵器	蓋		1/2	外)③④ 内)④	13.3	-	2.7	オリーブ灰色	④	(標)	
	102	37	68		須恵器	蓋		1/2	外)③④ 内)④	(13.8)	-	2.2	灰色	④		
	102	38	68		須恵器	蓋	つまみ欠失	?	外)③④ 内)④	12.7	-	[1.9]	緑灰色	①④		
	104	1	71		須恵器	高台環		?	外)③ 内)④	23.8	17.6	4.3	灰白色	?	遺構	
	104	2	71		須恵器	高台環		1/12	外)③ 内)④	(19.2)	14.2	4.5	外)オリーブ灰色 内)灰色	④		
	104	3	71		須恵器	高台環		?	外)③ 内)④	20.0	14.0	4.5	黄緑灰色	④		
	104	4	78	②	須恵器	高台環		1/8	外)③ 内)④	(20.4)	(15.4)	3.6	外)黄オリーブ灰色 内)灰白色	④		
	104	5	79	②	須恵器	高台環		1/12	外)③④ 内)④	(22.4)	(14.8)	[5.0]	黄緑灰色	④		
	104	6	79	②	須恵器	高台環		1/8	外)③ 内)④	(23.8)	(18.6)	4.4	灰色	④		
	105	1	80	①	須恵器	皿		1/12	外)③ 内)④	(16.8)	(14.6)	2.7	灰色	④		
	105	2	69		須恵器	皿		1/6	外)①ヌツコ状圧痕 内)④	17.2	15.0	2.5	灰白色	④		
105	3	69		須恵器	皿		1/8	外)④ 内)④	(17.0)	(14.0)	2.3	外)灰色 内)灰白色	④			
105	4	80	①	須恵器	皿		1/12	外)④ 内)④	(18.0)	(14.4)	2.3	灰白色	②			
105	5	69		須恵器	皿		3/4	外)④ 内)④	(17.0)	(13.8)	7.6	灰色	①④			
105	6	81	①	須恵器	皿		1/4	外)④ 内)④	(16.8)	(13.8)	2.3	灰色	④			
105	7	69		須恵器	皿		1/2	外)④⑤ 内)④	(17.0)	(13.4)	2.5	オリーブ灰色	②			
105	8	80	①	須恵器	皿		1/12	外)④ 内)④	(18.0)	(14.4)	2.9	灰白色	④			
105	9	80	①	須恵器	皿		1/3	外)④ 内)④	(16.6)	(13.0)	2.4	灰白色	④			
105	10	69		須恵器	皿		1/2	外)④ 内)④	16.8	12.7	2.6	灰色	①④			
105	11	82	①	須恵器	皿		1/12	外)④ 内)④	(17.0)	(14.6)	2.7	外)灰色 内)灰白色	④			
105	12	69		須恵器	皿		1/2	外)①工具痕 内)④	(16.4)	(14.0)	2.5	灰色	④	器み大		
105	13	80	①	須恵器	皿		1/12	外)④ 内)④	(16.8)	(13.2)	2.4	外)黄オリーブ灰色 内)灰色	④			
105	14	80	①	須恵器	皿		1/12	外)不明 内)不明	(17.0)	(13.2)	2.3	オリーブ灰色	④			
105	15	81	①	須恵器	皿		1/6	外)④ 内)④	(16.8)	(13.6)	2.4	灰色	④			
105	16	80	①	須恵器	皿		1/8	外)④ 内)④	(16.8)	(13.6)	2.7	灰白色	④			
105	17	80	①	須恵器	皿	底面		外)④ 内)④	-	(13.2)	[1.9]	外)灰白色 内)黄オリーブ灰色	②			
105	18	82	①	須恵器	皿		1/6	外)④ 内)④	16.2	13.2	2.8	黄灰色	④	分析		

第12節 金属器・ガラス製品

通称	国産番号	互換国産番	種別	部材	部位	残存率	調査・技法・文様など	口径	底径	器高	色調	胎土	備考	
	105-19	81	①	瓶蓋部	皿	1/2	外) ① 内) ①	15.0	11.6	2.9	灰白色	③		
	105-20	69	①	瓶蓋部	皿	1/4	外) ② 内) ①	(15.7)	(12.8)	2.4	灰白色	①		
	105-21	69	②	瓶蓋部	皿	完形	外) ② 内) ①	(16.2)	(13.2)	2.4	灰色	①		
	105-22	69	③	瓶蓋部	皿	1/8	外) ① 内) ①	(16.2)	(13.0)	2.3	灰色	①		
	105-23	81	①	瓶蓋部	皿	1/2	外) ① 内) ①	16.0	12.6	2.3	灰白色	①		
	105-24	80	①	瓶蓋部	皿	1/6	外) ③スノコ状圧痕 内) ①	16.0	(12.8)	2.5	灰白色	①		
	105-25	82	①	瓶蓋部	皿	1/6	外) ① 内) ①	(16.0)	(12.4)	2.5	灰色	①		
	105-26	80	①	瓶蓋部	皿	1/4	外) ① 内) ①	18.0	(13.1)	2.4	灰白色	①		
	105-27	80	②	瓶蓋部	皿	1/6	外) ② 内) ①	(16.0)	(12.0)	2.5	灰白色	①		
	105-28	80	②	瓶蓋部	皿	1/12	外) ① 内) ①	(16.0)	(12.9)	[2.8]	灰白色	①		
	105-29	81	①	瓶蓋部	皿	1/12	外) ① 内) ①	16.0	13.0	2.5	灰白色	②		
	105-30	69	①	瓶蓋部	皿	1/3	外) ③スノコ状圧痕 内) ①	16.0	12.4	2.6	灰白色	③		
	105-31	80	②	瓶蓋部	皿	1/12	外) ② 内) ①	(14.8)	(12.6)	[2.3]	灰白色	①		
	105-32	75	①	瓶蓋部	皿	1/3	外) ① 内) ①	(15.1)	(11.3)	2.5	灰色	①		
	105-33	82	①	瓶蓋部	皿	1/3	外) ① 内) ①	(16.0)	(12.2)	2.2	灰色	①		
	105-34	82	①	瓶蓋部	皿	1/6	外) ① 内) ①	(15.0)	(11.0)	2.4	暗オリーブ灰色	①		
	105-35	76	②	瓶蓋部	惣弁付	1/6	外) ① 内) ①	(15.8)	(13.0)	3.1	灰白色	①	分析	
	105-36	69	①	瓶蓋部	皿	完形	外) ① 内) ①	(14.6)	(10.6)	2.3	灰色	①	(小)	
	105-37	80	②	瓶蓋部	皿	1/2	外) ② 内) ①	15.9	12.6	2.3	灰白色	②		
	105-38	81	①	瓶蓋部	皿	1/6	外) ② 内) ①	(16.0)	(12.4)	2.6	灰白色	①		
	105-39	80	①	瓶蓋部	皿	1/6	外) ② 内) ①	16.0	12.1	2.5	灰色	①		
	106-1	82	①	瓶蓋部	皿	1/6	外) ③スノコ状圧痕 内) ①	(17.0)	(13.6)	1.5	灰色	②		
	106-2	80	①	瓶蓋部	皿	口縁部	1/2	外) ② 内) ①	(16.0)	—	[1.6]	灰白色	①	
	106-3	71	①	瓶蓋部	皿	1/2	外) ② 内) ①	(16.0)	12.6	2.2	灰色	①		
	106-4	80	①	瓶蓋部	皿	1/3	外) ② 内) ①	(16.0)	(12.6)	2.1	灰色	①		
	106-5	82	①	瓶蓋部	皿	1/6	外) ③スノコ状圧痕 内) ①	13.4	12.4	2.1	緑灰色	①	分析	
	106-6	71	①	瓶蓋部	皿	1/3	外) ② 内) ①	(15.6)	12.6	1.9	灰色	①		
SD-1	106-7	71	①	瓶蓋部	皿	1/2	外) ③スノコ状圧痕 内) ①	(17.0)	(13.0)	2.0	灰白色	①		
	106-8	80	①	瓶蓋部	皿	1/6	外) ② 内) ①	(17.8)	(15.0)	2.3	灰色	①		
	106-9	76	①	瓶蓋部	皿	1/6	外) ② 内) ①	(16.0)	(13.7)	2.2	灰色	①		
	106-10	80	②	瓶蓋部	皿	1/12	外) ② 内) ①	(16.0)	(12.4)	2.2	灰白色	①		
	106-11	80	①	瓶蓋部	皿	1/3	外) ② 内) ①	(16.8)	(14.0)	2.3	オリーブ灰色	①		
	106-12	71	①	瓶蓋部	皿	1/12	外)不明 内)不明	(16.8)	(13.2)	2.2	灰白色	①		
	106-13	82	①	瓶蓋部	皿	?	外) ② 内) ①	(16.4)	(13.0)	2.0	青灰色	①		
	106-14	82	①	瓶蓋部	皿	口縁部	1/6	外) ② 内) ①	(17.0)	(14.8)	[1.9]	外)灰色 内)灰白色	①	
	106-15	80	①	瓶蓋部	皿	1/4	外) ② 内) ①	(17.0)	(13.4)	2.3	灰色	①		
	106-16	81	①	瓶蓋部	皿	1/8	外) ② 内) ①	(16.8)	(13.8)	2.4	灰白色	①		
	106-17	71	①	瓶蓋部	皿	1/2	外) ② 内) ①	14.8	12.0	2.2	青灰色	①		
	106-18	71	①	瓶蓋部	皿	10/12	外) ② 内) ①	(16.0)	(12.6)	2.0	灰色	①②		
	106-19	81	①	瓶蓋部	皿	1/6	外) ② 内) ①	(16.0)	(12.0)	2.2	灰白色	①		
	106-20	81	①	瓶蓋部	皿	1/6	外) ③スノコ状圧痕 内) ①	(15.8)	(11.2)	2.2	灰白色	①		
	106-21	80	②	瓶蓋部	皿	1/4	外) ② 内) ①	15.0	(12.2)	1.9	明オリーブ灰色	①		
	106-22	81	①	瓶蓋部	皿	1/4	外) ② 内) ①	(14.7)	(10.6)	1.9	灰白色	①		
	106-23	81	①	瓶蓋部	皿	1/6	外) ② 内) ①	(14.9)	(10.6)	2.0	外)オリーブ灰色 内)灰色	①		
	106-24	81	①	瓶蓋部	皿	口縁欠失	外) ② 内) ①	—	(11.4)	[1.5]	オリーブ灰色	①		
	106-25	71	①	瓶蓋部	皿	1/4	外) ② 内) ①	17.3	14.2	2.5	青灰色	①②		
	106-26	80	②	瓶蓋部	皿	1/6	外) ② 内) ①	(16.8)	(13.6)	2.3	灰白色	②		
	106-27	82	①	瓶蓋部	皿	底部	外) ② 内) ①	—	14.1	[2.3]	外)灰色 内)オリーブ灰色	①		
	106-28	80	②	瓶蓋部	皿	1/6	外) ② 内) ①	17.0	13.8	3.0	灰色	①		
	106-29	80	②	瓶蓋部	皿	1/6	外) ② 内) ①	16.0	13.4	2.5	灰白色	①		
	106-30	80	②	瓶蓋部	皿	1/12	外) ② 内) ①	(16.0)	(12.6)	2.7	灰色	②		
	106-31	80	②	瓶蓋部	皿	1/6	外) ② 内) ①	16.0	13.4	2.6	灰白色	②		
	106-32	80,82②,①	①	瓶蓋部	皿	1/4	外) ② 内) ①	(17.0)	(13.8)	2.6	灰白色	①		
	106-33	80	②	瓶蓋部	皿	1/6	外) ② 内) ①	(16.8)	(14.4)	[2.3]	灰色	①		

第5章 山腰遺跡

遺構	図取番号	方向/階高	種類	部材	部位	残存率	調査・技法・文様など	口排	底排	部高	色調	粘土	備考	
	106	34	71	須恵部	瓦		1/6	外① 内①	(16.8)	(14.0)	2.5	灰色	①	
	106	35	80	②	須恵部	瓦	1/2	外① 内①	17.4	14.1	2.3	灰白色	①	遺構?
	106	36	80	②	須恵部	瓦	1/12	外① 内①	(16.8)	(12.4)	2.0	外①灰色 内①灰白色	①	
	106	37	80	②	須恵部	瓦	1/3	外① 内①	(17.2)	(13.0)	2.1	外①灰色 内①灰白色	①	
	106	38	77	①	須恵部	瓦	1/8	外① 内①	(16.0)	(12.3)	1.9	灰白色	①	
	106	39	71	須恵部	瓦		1/2	外① 内①	(17.2)	(14.8)	2.0	外①灰色 内①灰白色	①	
	107	1	69	須恵部	瓦		2/3	外①ハケ 内①	16.9	13.0	2.9	灰白色	②	
	107	2	81	①	須恵部	瓦		外① 内①	-	(11.8)	(11.8)	灰色	①①	
	107	3	69	須恵部	瓦			外① 内①	(15.8)	(13.4)	2.2	灰白色	①	
	107	4	82	①	須恵部	瓦	1/4	外① 内①	(15.0)	(12.0)	2.3	赭灰色	①	分析
	107	5	69	須恵部	瓦		1/2	外① 内①	16.9	13.2	2.5	灰白色	①	
	107	6	69	須恵部	瓦		1/2	外① 内①	(16.0)	(13.0)	2.6	灰色	①①	遺少
	107	7	69	須恵部	瓦		1/3	外① 内①	(16.4)	(13.4)	2.3	灰白色	②	
	107	8	69	須恵部	瓦		3/4	外① 内①	(15.5)	(12.0)	2.5	灰色	①①	
	107	9	81	①	須恵部	瓦	1/4	外① 内①	(18.0)	(14.2)	(2.8)	灰白色	①	
	107	10	69	須恵部	瓦		3/4	外① 内①	(16.8)	12.2	2.7	灰白色	①	
	107	11	81	①	須恵部	瓦	1/4	外① 内①	14.9	11.6	2.1	赭灰色	①	
	107	12	81	①	須恵部	瓦	1/4	外① 内①	(15.3)	(12.2)	2.4	灰色	①	
	107	13	69	須恵部	瓦		1/2	外① 内①	15.0	(12.2)	2.7	灰色	①	
	107	14	69	須恵部	瓦		2/3	外① 内①	(15.5)	12.8	2.5	灰白色	①	
	107	15	82	①	須恵部	瓦	1/12	外① 内①	(16.0)	(13.0)	2.6	灰白色	②	
	107	16	80	①	須恵部	瓦	1/4	外① 内①	(17.0)	(12.8)	2.6	灰白色	②	
	107	17	69	須恵部	瓦		1/12	外① 内①	(17.4)	(14.3)	2.9	灰色	①	
	107	18	69	須恵部	瓦		1/3	外① 内①	(16.8)	(14.0)	2.7	灰白色	①	
	107	19	80	①	須恵部	瓦	1/4	外① 内①	(16.6)	(14.0)	2.8	外①灰色 内①灰白色	②	
	108	1	70	須恵部	埴		2/3	外① 内①	(15.9	(8.2)	(6.0)	灰色	①①	(小)
	108	2	70	須恵部	埴		1/2	外① 内①	(15.8)	(9.8)	5.3	灰色	②	内ハナ記号
	108	3	70	須恵部	埴		2/3	外① 内①	16.0	9.0	5.6	外①オリーブ灰色 内①灰色	①①	(小)
	108	4	70	須恵部	埴		1/2	外① 内①	15.2	(10.6)	5.3	灰色	①	
	108	5	78	②	須恵部	埴	1/8	外① 内①	(15.5)	(8.6)	5.5	赭灰色	①①	
	108	6	70	須恵部	埴	高台欠失	3/4	外① 内①	(18.2)	-	(5.4)	外①灰色 内①灰白色	②	遺少大
	108	7	70	須恵部	埴		1/2	外① 内①	16.6	9.9	5.7	外①赭灰色 内①灰色	①①	
	108	8	70	須恵部	埴		1/6	外① 内①	(15.1)	(8.8)	5.4	赭灰色	①	
	108	9	78	②	須恵部	埴	1/8	外① 内①	(15.8)	(8.6)	(4.6)	灰白色	②	
	108	10	70	須恵部	埴		1/3	外① 内①	(16.0)	(9.4)	5.0	灰色	②	
	108	11	70	須恵部	埴		10/12	外① 内①	(15.0)	(9.0)	5.2	灰色	②	
	108	12	70	須恵部	埴	高台欠失	3/4	外① 内①	(15.2)	(9.2)	(5.0)	灰色	②	
	108	13	70	須恵部	埴		1/4	外① 内①	(16.0)	(9.2)	5.8	灰色	①	
	108	14	70	須恵部	埴	口排部	2/3	外① 内①	15.1	-	(4.9)	赭灰色	①	
	108	15	78	②	須恵部	埴	底部	外① 内①	-	(7.4)	(2.3)	灰白色	①	
	108	16	79	①	須恵部	埴	底部	外① 内①	-	(8.2)	(2.7)	灰白色	②	
	108	17	78	①	須恵部	埴	1/12	外① 内①	(12.0)	(6.0)	4.9	灰色	②	
	108	18	77	②	須恵部	埴	底部	外① 内①	-	(9.2)	(3.5)	灰白色	②	
	108	19	77	②	須恵部	埴	底部	外① 内①	-	(8.0)	(3.3)	灰色	①	
	108	20	78	②	須恵部	埴	底部	外① 内①	-	(8.0)	(4.0)	灰白色	②	
	108	21	70	須恵部	埴		1/2	外① 内①	13.8	6.8	4.8	赭灰色	①①	
	108	22	70	須恵部	埴	口排部	2/3	外① 内①	(16.0)	-	(4.2)	灰白色	②	
	108	23	78	②	須恵部	埴	底部	外① 内①	-	(7.0)	(2.1)	オリーブ灰色	②	
	109	1	72	須恵部	鉢			外① 内①	10.7	7.7	11.7	外①灰黄色 内①灰色	①	
	109	2	83	①	須恵部	高坏	脚部	外① 内①	-	-	(5.6)	灰白色	①	
	109	3	82	①	須恵部	高坏	脚部	外① 内①	-	-	(8.4)	灰白色	①	
	109	4	83	①	須恵部	釜	口排部	外① 内①	(12.3)	-	(10.0)	灰色	①	
	109	5	72	須恵部	高坏	受部	1/2	外① 内①	-	(11.8)	(8.0)	灰白色	①	

SD-1

第12節 金属器・ガラス製品

遺構	図版番号	写真図番号	種類	器種	部位	残存率	調査・技法・文様など	口径	底径	器高	色調	胎土	備考			
SD-1	109	6	83	①	瓶蓋部	高坪	脚部		外)⑤ 内)⑤	-	-	[7.6]	灰白色 内)灰白色	②		
	109	7	83	①	瓶蓋部	高坪	脚部		外)⑤(沈線1条) 内)⑤	-	(10.8)	[3.4]	外)緑灰色 内)黄灰色	①		
	109	8	82	②	瓶蓋部	高坪	受部	1/2 ?		18.3	-	(2.3)	灰白色 内)灰白色	①		
	109	9	82	②	瓶蓋部	高坪	受部	?	外)⑤ 内)⑤	-	(19.8)	-	[2.5]	灰白色	①	
	109	10	83	①	瓶蓋部	高坪	脚部		外)⑤ 内)⑤	-	(12.0)	[13.0]	灰白色	①		
	109	11	83	①	瓶蓋部	高坪	脚部		外)⑤ 内)⑤	-	-	[13.0]	灰白色	②		
	109	12	83	①	瓶蓋部	高坪	脚部		外)⑤ 内)⑤	-	-	[3.3]	灰白色	①		
	109	13	83	①	瓶蓋部	高坪	脚部		外)⑤ 内)⑤	-	(11.0)	[7.4]	灰白色	①		
	110	1	82	②	瓶蓋部	鉢	口縁部 肩部	1/12	外)⑤ 内)⑤	(26.0)	-	[5.5]	外)灰色 内)灰白色	①		
	110	2	73	瓶蓋部	鉢		1/12	外)⑤ 内)⑤	(17.4)	(9.0)	9.9	灰白色	①			
	110	3	72	瓶蓋部	鉢		1/12	外)⑤ 内)⑤	-	8.8	[7.0]	灰白色	①			
	110	4	82	②	瓶蓋部	鉢	口縁部 肩部	1/12	外)⑤ 内)⑤	(23.0)	-	[4.2]	外)灰色 内)灰白色	①		
	110	5	83	①	瓶蓋部	鉢	底部		外)⑤ 内)⑤	-	(10.4)	[3.0]	灰白色	①		
	110	6	79	②	瓶蓋部	浅鉢?	口縁欠失		外)⑤ 内)⑤	-	(12.0)	[8.1]	?	③		
	110	7	82	②	瓶蓋部	鉢	口縁部 脚部	1/3	外)⑤ 内)⑤	13.4	-	[7.8]	灰色	①	読み大	
	110	8	82	②	瓶蓋部	鉢	口縁部	?	外)⑤ 内)⑤	(19.2)	-	[5.7]	外)灰キリーブ色 内)灰色	①③		
	110	9	82	②	瓶蓋部	鉢	口縁部 肩部	1/12	外)⑤ 内)⑤	(19.6)	-	[5.3]	外)灰色 内)灰白色	①		
	110	10	82	②	瓶蓋部	鉢	底部		外)⑤ 内)⑤	-	(8.8)	[7.2]	外)灰白色 内)灰色	①		
	110	11	83	②	瓶蓋部	鉢	底部		外)⑤ 内)⑤	-	(8.2)	[3.6]	灰白色	①		
	110	12	76	①	瓶蓋部	鉢	底部		外)⑤ 内)⑤	-	(12.0)	[4.0]	灰色	①		
	110	13	79	②	瓶蓋部	鉢	底部		外)⑤⑥ 内)⑤	-	(15.2)	[7.2]	黄灰色	①		
	111	1	83	①	瓶蓋部	平瓶	脚部		外)? 沈線1条 内)?	-	-	[5.6]	外)黄灰色 内)灰白色	①		
	111	2	83	①	瓶蓋部	平瓶	脚部		外)⑤ 内)⑤	-	-	[6.8]	外)浅黄灰色 内)灰白色	②		
	111	3	83	②	瓶蓋部	平瓶?	底部		外)⑤ 内)⑤	-	(12.0)	[4.1]	外)灰色 内)灰白色	③		
	111	4	72	瓶蓋部	横瓶	口縁欠失		外)胴-① 胴部-ホキメ 内)⑤	-	(10.0)	[17.1]	外)黄灰色 内)灰白色	①			
	111	5	73	瓶蓋部	横瓶	口縁部 体部	1/4	外)口縁-① 胴部-ホキメ 内)口縁-① 体部-①	(14.8)	-	[22.4]	外)黄灰色 内)キリーブ灰色	①③			
	111	6	72	瓶蓋部	短頸壺		1/3	外)⑤ 内)⑤	8.0	7.2	7.5	外)灰色 内)灰白色	①	(横)		
	111	7	83	①	瓶蓋部	壺	口縁部	1/2	外)⑤ 内)⑤	(7.3)	-	[3.4]	灰色	①③		
	111	8	73	瓶蓋部	壺	口縁部 肩部		外)⑤ 内)⑤	-	-	[11.3]	外)灰白色 内)灰色	②			
	111	9	83	②	瓶蓋部	瓶	脚部		外)⑤ 内)⑤	-	(9.1)	[6.5]	外)黄灰色 内)黄灰色	①③		
	111	10	83	①	瓶蓋部	壺	口縁部	1/6	外)⑤ 内)⑤	(10.2)	-	[8.9]	黄灰色	①		
	111	11	71	瓶蓋部	壺	脚部		外)⑤ 内)⑤	-	9.9	[11.2]	外)黄灰色 内)灰白色	①			
111	12	82	②	瓶蓋部	瓶	底部		外)⑤ 内)⑤	-	7.7	[6.6]	灰色	①			
111	13	79	①	瓶蓋部	壺	底部		外)⑤ 内)⑤	-	(9.0)	[1.6]	外)灰色 内)灰白色	①			
111	14	78	②	瓶蓋部	壺	底部		外)⑤ 内)⑤	-	(9.0)	[2.9]	灰白色	②			
112	1	83	①	瓶蓋部	壺	口縁部	1/6	外)⑤ 内)⑤	(11.8)	-	[3.9]	外)キリーブ灰色 内)灰色	①			
112	2	72	瓶蓋部	壺	体部		外)胴-①② 内)⑤	-	10.8	[20.1]	外)灰色 内)キリーブ色	②				
112	3	73	瓶蓋部	広口壺	体部		外)口縁部①② 内)⑤	-	(8.6)	[10.7]	灰色	①	内)修付着?			
112	4	72	瓶蓋部	三耳壺	口縁部 脚部	1/4	外)⑤ 内)⑤	8.3	-	[26.4]	灰色	①				
112	5	83	①	瓶蓋部	壺	口縁部 脚部	12/12	外)⑤ 内)⑤	6.2	-	[3.2]	緑灰色	①			
112	6	71	瓶蓋部	壺	口縁部 脚部	1/6	外)⑤ 内)口縁-①脚部-不明	(8.5)	-	[18.6]	灰色	②	ヘラ記号			
112	7	83	②	瓶蓋部	壺	底部		外)⑤ 内)⑤	-	(11.0)	[5.7]	灰色	①			
112	8	72	瓶蓋部	短頸壺	脚部		外)ホキメ⑤ 内)⑤	-	-	[18.2]	外)灰色 内)緑灰色	①				

第5章 山腰遺跡

遺構	図版番号	写真図番	種類	部材	部位	残存率	調査・技法・文様など	口縁	底縁	器高	色調	胎土	備考
SD-1	112	9	84	①	須恵器	瓶	胴部 底部						
							外)①武輪2条3段 内)①	-	(13.6)	[19.4]	外)黄灰色 内)灰白色	①	
	113	1	73		須恵器	短頸壺		1/6					
							外)①底一階埋込入 胴一不明 内)①	(12.8)	8.0	9.7	外)灰色 内)灰白色	②③	
	112	2	83	②	須恵器	鉢?	底部						
							外)① 内)①	-	(10.2)	[3.5]	灰白色	③	
	113	3	97	①	須恵器	短頸壺	口縁部 胴部						
							外)①武輪2条2段 内)①	(22.4)	-	[10.8]	外)オリーブ色 内)緑灰色	①	
	113	4	73		須恵器	壺	底部						
							外)①武輪4条 内)①	-	(9.7)	[3.2]	灰色	③④	
	113	5	73		須恵器	短頸壺		1/2					
							外)① 内)①	14.5	13.0	23.2	灰色	③	
	112	6	84	①	須恵器	壺	口縁部 胴部	1/12					
							外)口縁一① 胴一ハケ 内)口縁一① 胴一ハケ	(13.4)	-	[8.6]	外)灰白色 内)灰色	①②③	
	112	7	73		須恵器	短頸壺		?					
							外)① 内)①	(7.6)	9.0	11.8	外)青灰色 内)灰色	③	
	112	8	74		須恵器	短頸壺	口縁部 胴部	1/4					
							外)口縁一① 胴一② 内)口縁一① 胴一②	10.6	-	[20.0]	灰白色	①	
	112	9	73		須恵器	短頸壺		?					
							外)①オキメ 内)①器底凹痕	(9.7)	(10.0)	22.3	外)灰色 内)青灰色	③④	
	114	1	74		須恵器	壺	口縁部 胴部	1/2					
							外)口縁一① 胴一② 内)口縁一① 胴一②	(19.0)	-	[39.0]	外)灰色 内)緑灰色	①	
	114	2	84	①	須恵器	壺	底部						
						外)① 内)①	-	-	[20.6]	灰白色	②		
115	1	84	②	須恵器	壺	口縁部 胴部	1/6						
						外)口縁一① 肩一② 内)口縁一① 肩一②	(24.2)	-	[12.7]	灰色	①		
115	2	74		須恵器	壺		1/6						
						外)口縁一① 胴一② 内)口縁一① 胴一②	(17.0)	-	41.3	灰色	①④		
116	1	84	①	須恵器	壺	口縁部 胴部	1/8						
						外)口縁一① 胴一①オキメ 内)①	(32.0)	-	[10.6]	灰色	①③		
116	2	74		須恵器	壺	胴部							
						外)① 内)①	-	-	[42.5]	外)にぶい黄色 内)灰黄色	②		
117	1	74		須恵器	壺	口縁部	2/3						
						外)口縁一① 肩一①オキメ 内)不明	(24.0)	-	[13.0]	外)灰色 内)緑オリーブ色	②	器み大 継ぎ柄	
117	2	82	①	須恵器	壺	口縁部	1/3						
						外)① 内)①	(19.0)	-	[3.4]	外)緑灰色 内)オリーブ灰色	①③		
117	3	82	①	須恵器	壺	口縁部 胴部							
						外)口縁一① 肩一①オキメ 内)①			[6.5]	青灰色	①		
117	4	74		須恵器	壺		2/3						
						外)口縁一① 胴一② 内)口縁一① 胴一②	(17.8)	-	[37.2]	外)灰白色 内)灰色	①③		
118	1	84	①	須恵器	壺	口縁部	1/8						
						外)口縁一① 胴一① 内)①	(46.0)	-	[13.0]	灰色	①③		
SD-1 SD-2-3	118	2	84	①	須恵器	壺	口縁部	1/12					
						外)口縁一① 胴一① 内)①	(37.0)	-	[5.4]	灰色	①③		
SD-1	119	1	84	②	土師器	壺	口縁部 胴部	1/12					
						外)① 内)①	(27.8)	-	[9.1]	浅褐色	①		
	119	2	84	②	土師器	壺	胴部						
						外)① 内)①	-	-	[6.0]	外)灰白色 内)にぶい黄褐色	③		
SD-2	123	1	85		須恵器	無台坏		1/4					
						外)① 内)①	13.0	8.0	3.7	灰白色	③	器蓋	
	123	2	90	①	須恵器	無台坏	口縁部	1/6					
						外)① 内)①	(13.0)	-	[3.2]	灰白色	①		
	123	3	90	①	須恵器	無台坏	口縁部	1/12					
						外)不明 内)不明	(14.0)	-	[3.3]	灰白色	①		
	123	4	85		須恵器	無台坏		3/4					
						外)① 内)①	12.3	9.0	3.4	灰色	①		
	123	5	85		須恵器	無台坏		11/12					
						外)① 内)①	12.0	9.5	3.7	灰色	③④		
	123	6	90	②	須恵器	無台坏		1/6					
						外)① 内)①	(12.8)	(8.3)	[3.6]	外)青灰色 内)緑灰色	①		
	123	7	85		須恵器	無台坏		3/4					
						外)① 内)①	12.5	9.5	3.2	青灰色	①		
	123	8	90	②	須恵器	無台坏		1/4					
						外)不明 内)①	(12.9)	(8.1)	4.0	明オリーブ灰色	①		
	123	9	90	①	須恵器	無台坏		1/6					
						外)① 内)①	12.1	9.0	2.9	灰色	③		
	123	10	90	①	須恵器	無台坏		1/4					
						外)① 内)①	(12.8)	9.0	[3.3]	オリーブ灰色	③		
123	11	92	①	須恵器	無台坏	底部							
					外) ? 内) ?	-	(6.0)	[1.6]	外)灰色 内)灰白色	①	器蓋		
123	12	90	②	須恵器	無台坏		1/12						
					外)① 内)①	(14.0)	(8.4)	3.4	灰白色	①			
123	13	85		須恵器	無台坏		1/4						
					外)① 内)①	(14.2)	9.0	3.8	外)灰白色 内)灰色	①			
123	14	85		須恵器	無台坏		1/4						
					外)① 内)①	(12.8)	8.3	4.0	灰色	① (小)			
123	15	92	①	須恵器	無台坏	底部							
					外)① 内)①	-	(9.7)	[2.7]	外)青灰色 内)緑灰色	②			
123	16	90	①	須恵器	無台坏	底部							
					外)① 内)①	-	(9.6)	[2.6]	灰色	①			
123	17	90	①	須恵器	無台坏	底部							
					外)① 内)①	-	(9.8)	[1.3]	外)オリーブ灰色 内)青灰色	①			
123	18	92	①	須恵器	無台坏	底部							
					外)① 内)①	-	(11.0)	[1.8]	明青灰色	①			
123	19	92	①	須恵器	無台坏	底部							
					外)① 内)①	-	(10.5)	[3.3]	灰色	①			

第12節 金属器・ガラス製品

通称	図版番号	写真回数	種別	器種	部位	残存率	測定・技法・文様など	口径	底径	器高	色調	胎土	備考		
	123	20	92	①	須恵部	無台坏	底部	外)① 内)①	-	(19.6)	[2.7]	外)灰オリーブ色 内)緑灰色	①②		
	123	21	85	①	須恵部	無台坏		外)①スコロ状圧痕 内)①	1.2	13.0	8.0	3.0	灰白色	①	器書(小)
	123	22	90	②	須恵部	無台坏		外)① 内)①	1/12	(14.8)	(8.0)	3.4	オリーブ灰色	②	(小)
	123	23	90	②	須恵部	無台坏		外)① 内)①	1/6	(15.0)	(10.4)	3.5	灰白色	①	
	123	24	85	①	須恵部	無台坏		外)① 内)①	1/12	(13.2)	(9.0)	3.6	灰色	①	(小)
	123	25	90	②	須恵部	無台坏		外)① 内)①	1/4	(14.0)	9.0	3.2	外)灰白色 内)灰白色	①	
	123	26	90	②	須恵部	無台坏		外)① 内)①	1/2	(12.6)	(7.0)	3.2	明オリーブ灰色	①	
	123	27	90	②	須恵部	無台坏		外)① 内)①	1/6	(13.1)	(7.2)	[3.5]	灰色	①	
	123	28	90	①	須恵部	無台坏		外)① 内)①	1/6	(11.9)	6.5	3.2	明オリーブ色	①	
	123	29	90	②	須恵部	無台坏	底部	外)① 内)①	-	(7.2)	[1.7]	灰色	①		
	124	1	85	①	須恵部	無台坏		外)① 内)①	2/3	(8.8)	3.4	灰白色	①	器書	
	124	2	92	①	須恵部	無台坏	底部	外)① 内)①	-	(10.1)	[1.2]	灰オリーブ色	①		
	124	3	85	①	須恵部	無台坏		外)① 内)①	1/12	(12.9)	6.5	3.2	灰色	①	(小)
	124	4	90	①	須恵部	無台坏	底部	外)① 内)①	-	(10.2)	[2.9]	外)明オリーブ灰色 内)オリーブ灰色	①		
	124	5	85	①	須恵部	無台坏		外)① 内)①	1/4	(11.9)	(7.2)	[3.7]	黄灰色	①	
	124	6	85	①	須恵部	無台坏		外)① 内)①	3/4	13.0	6.6	3.1	灰色	①	器書(小)
	124	7	85	①	須恵部	無台坏		外)① 内)①	1/6	(13.8)	(5.6)	3.7	黄灰色	①	
	124	8	85	①	須恵部	無台坏		外)① 内)①	1/2	(13.0)	(7.6)	3.4	外)明オリーブ色 内)灰白色	①	
	124	9	85	①	須恵部	無台坏		外)① 内)①	1/3	(13.6)	(7.6)	3.3	灰色	①	(小)
	124	10	90	①	須恵部	無台坏		外)① 内)①	1/8	(14.8)	(8.2)	3.0	オリーブ灰色	②	(小)
	124	11	90	②	須恵部	無台坏		外)①スコロ状圧痕 内)①	1/6	(12.8)	10.1	2.9	明オリーブ灰色	①	
	124	12	90	②	須恵部	無台坏		外)① 内)①	1/12	(13.9)	(8.2)	3.0	外)灰白色 内)明オリーブ灰色	②	(小)
	124	13	90	②	須恵部	無台坏		外)① 内)①	1/3	(15.0)	(9.6)	2.7	灰白色	②	(小)
	124	14	85	①	須恵部	無台坏	底部	外)①スコロ状圧痕 内)①	(13.8)	6.6	4.0	灰色	③	器書(大)	
	125	1	86	①	須恵部	無台坏		外)① 内)①	1/6	(15.6)	(8.5)	4.4	灰色	①②	
	125	2	86	①	須恵部	皿		外)① 内)①	1/3	(17.2)	(14.6)	2.3	灰色	①②	
	125	3	86	①	須恵部	無台坏		外)① 内)①	2/3	(14.8)	(9.4)	4.0	灰白色	①	
	125	4	86	①	須恵部	無台坏		外)① 内)①	1/4	(12.8)	(9.6)	3.8	灰白色	①	
	125	5	90	①	須恵部	無台坏		外)① 内)①	1/6	(12.4)	(9.0)	3.5	灰色	①	
	125	6	94	①	須恵部	無台坏	底部	外)① 内)①	-	(4.5)	[1.9]	灰白色	①		
	125	7	94	①	須恵部	鉢?	底部	外)① 内)①	-	(5.8)	[2.2]	灰色	①		
	125	8	90	①	須恵部	無台坏	底部	外)① 内)①	-	(9.0)	[1.5]	灰色	①		
	125	9	86	①	須恵部	無台坏		外)① 内)①	1/6	(12.5)	9.8	3.0	黄灰色	①	
	125	10	90	②	須恵部	無台坏		外)① 内)①	1/4	(11.6)	(8.2)	5.6	黄灰色	①	
	125	11	86	①	須恵部	無台坏		外)① 内)①	1/12	(11.8)	8.4	4.6	灰色	①	
	125	12	86	①	須恵部	無台坏		外)① 内)①	1/2	(8.6)	5.8	3.8	外)灰白色 内)オリーブ灰色	①	
	125	13	86	①	須恵部	無台坏		口縁欠損 外)① 内)①	7.4	4.6	2.5	外)灰白色 内)灰白色	③		
	126	1	86	①	須恵部	高台坏		外)① 内)①	15.7	12.2	5.9	外)灰色 内)灰白色	①	分析	
	126	2	92	②	須恵部	高台坏		外)① 内)①	(15.8)	(11.7)	5.6	灰色	①		
	126	3	86	①	須恵部	高台坏	口縁欠失	外)① 内)①	-	13.7	[3.5]	外)緑灰色 内)灰色	①②		
	126	4	91	②	須恵部	高台坏		外)① 内)①	15.8	12.3	4.8	黄褐色	①	分析	
	126	5	86	①	須恵部	高台坏		外)① 内)①	(15.8)	11.2	4.0	外)灰色 内)オリーブ灰色	①		
	126	6	91	①	須恵部	高台坏	口縁欠失	外)① 内)①	-	(11.2)	[3.8]	外)緑灰色 内)黄褐色	①		
	126	7	91	①	須恵部	高台坏		外)① 内)①	(15.4)	(10.8)	5.5	灰色	①②		
	126	8	91	②	須恵部	高台坏	底部	外)① 内)①	-	10.2	[2.5]	オリーブ灰色	①②		
	126	9	91	②	須恵部	高台坏	底部	外)① 内)①	-	(14.1)	[2.2]	灰白色	①		
	126	10	91	①	須恵部	高台坏		外)① 内)①	(13.2)	(8.9)	3.7	灰色	①		
	126	11	91	①	須恵部	高台坏		外)① 内)①	(13.2)	(10.2)	4.4	灰色	①②	(標)	
	126	12	91	①	須恵部	高台坏		外)①② 内)①	(14.0)	9.2	3.7	外)緑灰色 外)灰色	①		
	126	13	91	②	須恵部	高台坏		外)① 内)①	(14.0)	(9.2)	4.0	灰色	①②	器書(大)	

SD-2

第5章 山腰遺跡

遺構	図取番号	瓦葺回数	種類	部材	部位	残存率	調査・技法・文様など	口排	底排	部高	色調	土土	備考
	126	14	91	①	須恵部	高台坪	1/6	外① 内①	(14.8)	9.0	3.4	灰色	①②
	126	15	86		須恵部	高台坪	1/6	外① 内①	(13.2)	9.4	3.6	外①灰色 内①黄灰色	①
	126	16	91	①	須恵部	高台坪	底部	外① 内①	-	(9.6)	[2.0]	灰色	①②
	126	17	91	②	須恵部	高台坪	底部	外① 内①	-	(11.2)	[1.5]	灰色	①
	126	18	90	①	須恵部	高台坪	底部	外① 内①	-	(11.2)	[2.3]	明緑灰色	①
	126	19	93	①	須恵部	高台坪	底部	外① 内①	-	(11.8)	[1.3]	灰色	①
	126	20	90	①	須恵部	高台坪	底部	外① 内①	-	(10.6)	[3.6]	灰色	①
	126	21	91	①	須恵部	高台坪	底部	外①②③ 内①	-	11.4	[3.2]	外①灰色 内①灰白色	①
	126	22	86		須恵部	高台坪	1/2	外① 内①	(10.8)	6.8	3.9	灰白色	① 分析
	126	23	86		須恵部	高台坪	1/6	外① 内①	(11.4)	7.4	3.8	灰色	①②
	126	24	91	②	須恵部	高台坪	?	外① 内①	(11.2)	7.4	4.5	灰色	①
	126	25	86		須恵部	高台坪	1/4	外① 内①	(11.4)	(7.2)	3.7	外①灰色 内①明黄灰色	①
	126	26	90	①	須恵部	高台坪	口排欠失	外① 内①	-	(7.8)	[3.5]	外①灰色 内①灰白色	②
	126	27	86		須恵部	高台坪	3/4	外① 内①	11.2	7.2	3.9	灰白色	① 分析
	126	28	91	②	須恵部	高台坪	1/6	外① 内①	(11.9)	(7.4)	3.9	黄灰色	①
	126	29	93	①	須恵部	高台坪	底部	外① 内①	-	(9.2)	[1.5]	灰色	①②
	126	30	91	②	須恵部	高台坪	底部	外① 内①	-	(9.2)	[2.2]	灰色	①
	126	31	93	①	須恵部	高台坪	底部	外① 内①	-	(8.6)	[2.2]	灰白色	①
	126	32	91	②	須恵部	高台坪	底部	外① 内①	-	(9.2)	[2.3]	灰白色	② 転用瓦?
	126	33	90	①	須恵部	高台坪	底部	外① 内①	-	(9.0)	[1.1]	ブルー灰色	①
	127	1	87		須恵部	蓋	1/2	外①②③ 内①	19.4	-	4.4	外①灰白色 内①灰色	①
	127	2	86		須恵部	蓋	1/3	外①②③ 内①	17.0	-	3.8	灰色	①
	127	3	93	②	須恵部	蓋	つまみ欠失	外①②③ 内①	17.0	-	3.0	灰色	①
	127	4	87		須恵部	蓋	1/2	外①②③ 内①	15.0	-	1.7	灰色	①
	127	5	93	②	須恵部	蓋	つまみ欠失	外①②③ 内①	16.8	-	1.4	灰白色	① 外)墨板
	127	6	93	②	須恵部	蓋	つまみ	外①②③ 内①	-	-	[3.8]	灰白色	①
	127	7	90	②	須恵部	蓋	つまみ	外①②③ 内①	-	-	[1.7]	外①黄灰色 内①灰色	①
	127	8	93	②	須恵部	蓋	つまみ欠失	外①②③ 内①	12.4	-	(1.6)	灰白色	①
	127	9	87		須恵部	蓋	2/3	外①②③ 内①	13.4	-	3.1	灰白色	①
	127	10	87		須恵部	蓋	2/3	外① 内①	15.6	-	1.1	灰白色	①
	127	11	93	②	須恵部	蓋	1/3	外①②③ 内①	(15.0)	-	3.1	外①灰色 内①灰白色	② 分析
	127	12	93	②	須恵部	蓋	1/12	外①②③ 内①	12.8	-	2.9	灰白色	①
	127	13	93	②	須恵部	蓋	1/3	外①②③ 内①	(13.8)	-	3.3	灰白色	② 分析
	127	14	86		須恵部	蓋	1/2	外①②③ 内①	13.4	-	3.5	灰白色	①
	127	15	93	②	須恵部	蓋	1/12	外①②③ 内①	15.0	-	2.7	灰白色	①
	128	1	87		須恵部	高台坪	1/6	外① 内①	(19.0)	14.2	3.1	灰色	①
	128	2	91	②	須恵部	高台坪	1/6	外① 内①	(18.6)	(14.2)	3.6	灰色	①
	128	3	91	①	須恵部	高台坪	1/4	外① 内①	(18.2)	(13.9)	3.4	外①灰色 内①灰白色	①②
	128	4	87		須恵部	皿	1/6	外① 内①	(16.4)	13.4	3.0	灰色	①
	128	5	92	①	須恵部	皿	1/4	外① 内①	(17.0)	(14.0)	2.3	灰白色	①
	128	6	92	①	須恵部	皿	?	外① 内①	(15.4)	12.2	2.9	灰色	①
	128	7	87		須恵部	皿	1/6	外① 内①	16.8	13.4	2.7	灰色	①
	128	8	87		須恵部	皿	1/4	外① 内①	(16.4)	(12.6)	2.4	灰色	①
	128	9	92	①	須恵部	皿	1/4	外① 内①	(16.4)	(11.6)	3.7	灰色	②
	128	10	87		須恵部	皿	1/4	外① 内①	(15.8)	(13.0)	2.2	灰色	①
	128	11	87		須恵部	皿	1/3	外①②③ノコ取(底面 内①)	(16.0)	(12.0)	2.3	灰色	①
	128	12	92	①	須恵部	皿	?	外① 内①	(16.6)	13.8	2.2	灰色	①
	128	13	90	①	須恵部	皿	1/3	外① 内①	(14.8)	(11.2)	2.3	灰白色	②
	128	14	93	②	須恵部	皿	1/4	外① 内①	15.0	10.2	[2.2]	灰色	① (小)
	128	15	90	①	須恵部	皿	1/12	外①②③ノコ取(底面 内①)	(14.8)	(11.6)	2.7	灰白色	①
	128	16	87		須恵部	皿	1/4	外① 内①	(14.8)	(11.4)	2.5	灰色	②
	128	17	87		須恵部	皿	1/2	外① 内①	(16.0)	(11.8)	2.4	灰色	①
	128	18	90	①	須恵部	皿	1/6	外① 内①	(16.0)	(13.2)	2.3	明黄灰色	②

SD-2

第12節 金属器・ガラス製品

通称	国産番号	万長四角番	種別	部材	部位	残存率	調査・技法・文様など	口径	底径	器高	色調	胎土	備考	
SD-2	128	19 87	煎茶器	皿		1/3	外① 内①	(15.0)	(11.8)	2.1	灰色	①		
	128	20 90 ①	煎茶器	皿		1/8	外①不明 内①不明	(14.8)	(12.6)	1.9	灰白色	①		
	128	21 87	煎茶器	皿		1/2	外① 内①	15.4	12.6	2.4	灰色	①		
	128	22 90 ①	煎茶器	皿		?	外① 内①	(15.0)	(12.0)	2.4	灰白色	①		
	128	23 90 ①	煎茶器	皿		1/12	外① 内①	(15.0)	(11.4)	2.7	灰白色	①		
	128	24 92 ①	煎茶器	皿		1/4	外① 内①	(15.0)	(12.0)	2.5	灰色	①		
	128	25 92 ①	煎茶器	皿		1/2	外①スコッチ紋 内①	(14.8)	(11.6)	1.9	灰色	②		
	128	26 92 ①	煎茶器	皿		1/4	外① 内①	(14.4)	(11.0)	1.8	灰色	①		
	128	27 87	煎茶器	皿		1/2	外① 内①	(14.8)	(10.8)	2.1	オリーブ灰色	①		
	128	28 87	煎茶器	皿		3/4	外① 内①	(13.8)	(10.2)	2.0	黄灰色	①②		
	128	29 90 ①	煎茶器	皿		?	外① 内①	(15.0)	(10.0)	1.7	灰白色	②		
	128	30 90 ①	煎茶器	皿		?	外① 内①	(15.0)	(10.4)	1.7	灰白色	①		
	129	1 88	煎茶器	碗		1/4	外① 内①	(17.4)	(9.9)	7.0	灰色	①	器書(小)	
	129	2 92 ②	煎茶器	碗	底部		外① 内①	-	-	[4.5]	灰色	①		
	129	3 92 ②	煎茶器	碗		1/12	外① 内①	(16.7)	(9.2)	5.6	外①灰色 内①黄灰色	①		
	129	4 87	煎茶器	碗		1/4	外① 内①	(18.0)	(9.3)	6.6	灰色	②③		
	129	5 92 ②	煎茶器	碗	口縁部	1/6	外① 内①	(17.9)	-	[5.2]	黄灰色	①②		
	129	6 92 ②	煎茶器	碗	口縁部	1/6	外① 内①	(16.8)	-	[1.9]	灰白色	①		
	129	7 92 ②	煎茶器	碗	口縁部	1/6	外① 内①	(14.9)	-	[3.7]	にがい黄褐色	①		
	SD-2 SD-1	129	8 93 ①	煎茶器	碗	底部		外① 内①	-	9.0	[4.0]	灰白色	①	
129		9 92 ②	煎茶器	碗		?	外① 内①	(15.6)	(9.0)	6.0	灰色	①②		
129		10 87	煎茶器	碗		1/3	外① 内①	(15.6)	(7.0)	5.7	灰色	①	(小)	
129		11 88	煎茶器	碗			外① 内①	(15.6)	(9.3)	5.0	灰色	①		
129		12 89	煎茶器	碗		1/3	外① 内①	(16.0)	(8.8)	5.9	灰色	①		
129		13 88	煎茶器	碗		5/6	外① 内①	14.4	6.7	[5.3]	灰色	①	器書(小)	
129		14 88	煎茶器	碗		山口文様	外①② 内①②	(15.8)	8.4	6.0	灰色	①	器書(大)	
129		15 93 ①	煎茶器	碗	底部		外① 内①	-	9.0	[3.7]	灰白色	①		
129		16 88	煎茶器	碗		1/2	外①② 内①②	(13.0)	(6.5)	4.6	灰色	①		
129		17 88	煎茶器	碗		1/2	外① 内①	12.7	7.1	4.0	灰色	①		
SD-2	129	18 92 ②	煎茶器	高台杯		1/12	外① 内①	(13.0)	(7.0)	3.8	外①黄灰色 内①灰色	①		
	129	19 93 ①	煎茶器	碗		?	外① 内①	(13.0)	(7.4)	4.8	灰色	①		
	129	20 93 ①	煎茶器	碗	底部		外① 内①	-	(7.2)	[3.0]	灰白色	①		
	129	21 93 ①	煎茶器	碗	底部		外① 内①	-	(7.2)	[2.7]	灰色	②		
	129	22 93 ①	煎茶器	碗	底部		外① 内①	-	(7.2)	[1.9]	灰白色	①		
	129	23 92 ②	煎茶器	碗		?	外① 内①	(14.0)	(8.9)	4.1	灰色	①③		
	129	24 93 ①	煎茶器	碗	底部		外① 内①	-	(3.4)	[1.7]	灰色	①		
	129	25 93 ①	煎茶器	碗	底部		外① 内①	-	(6.2)	[2.1]	外①灰色 内①灰白色	①		
	129	26 92 ②	煎茶器	碗	底部		外① 内①	-	(8.8)	[2.9]	灰色	①③		
	129	27 93 ①	煎茶器	碗	底部		外① 内①	-	(7.2)	[2.0]	灰白色	①		
	129	28 92 ②	煎茶器	碗	底部		外① 内①	-	(7.6)	[3.7]	灰色	①③		
	129	29 93 ①	煎茶器	碗	口縁欠失		外① 内①	-	(8.8)	[4.3]	外①灰色 内①灰白色	②		
	SD-2 SD-1	130	1 89	煎茶器	壺	口縁欠失	1/6	外① 内①	(9.8)	10.2	[23.5]	外①オリーブ灰色 内①灰色	①③	(標)
	SD-2	130	2 94 ①	煎茶器	壺	口縁部	1/12	外①? 内①?	(6.0)	-	[6.2]	灰色	②	
		130	3 92 ①	煎茶器	壺	底部		外①? 内①?	-	-	[1.0]	灰白色	①	器書
130		4 94 ①	煎茶器	把手			外①② 内①?	-	-	(8.0)	灰色	①		
130		5 94 ①	煎茶器	煎茶	口縁部 胴部	1/12	外① 内①	(17.6)	-	(9.9)	灰色	①		
130		6 89	煎茶器	短脚壺			外① 内①	8.0	(9.0)	[13.6]	外①黄灰色 内①黄灰色	①	器書併	
131		1 89	煎茶器	洗鉢		1/6	外① 内①	(26.1)	(14.7)	(9.1)	灰色	①③		
131		2 79 ②	煎茶器	鉢	底部		外① 内①キキ	-	(15.0)	[6.4]	灰色	①		
131		3 89	煎茶器	鉢		1/12	外① 内①	18.0	10.0	9.8	灰白色	①		
131		4 89	煎茶器	鉢		1/3	外① 内①	15.9	8.1	10.4	灰白色	①		
131		5 89	煎茶器	鉢		1/6	外① 内①	16.0	9.6	8.0	灰白色	①		
131	6 94 ①	煎茶器	鉢	口縁部	1/12	外① 内①	18.0	-	[4.0]	灰色	①			

第5章 山腰遺跡

遺構	図版番号	写真図番	種類	部材	部位	残存率	調査・技法・文様など	口径	底径	器高	色調	胎土	備考		
SD-2	132	1	94	②	須恵器	短頸壺	肩部	1/2	外)③ 内)⑤	-	-	[8.0]	外)灰色 内)黄褐色	①	
	132	2	94	②	須恵器	横瓶	胴部	1/3	外)オキナ① 内)⑤①	-	-	[8.3]	灰色	②	
	132	3	88		須恵器	横瓶	胴部		外)③ 内)⑤	-	8.0	[8.6]	灰色	②	
	132	4	94	①	須恵器	瓶	把手		外) ? 内)⑤	-	-	[3.9]	灰色	①	
	132	5	91	②	須恵器	壺	底部		外)③ 内)⑤	-	(15.8)	[3.7]	灰色	②	
	132	6	92	②	須恵器	瓶	底部		外)③ 内)⑤	-	(9.6)	[3.5]	灰色	①③	
	132	7	94	①	須恵器	高坏	胴部		外)③? 内)③?	-	-	[8.0]	灰色	①	
	132	8	94	①	須恵器	高坏	胴部		外)③? 内)③?	-	-	[3.4]	灰色	①	
	132	9	94	①	須恵器	壺	底部		外)③ 内)⑤	-	(8.2)	[3.5]	灰白色	①	
	132	10	94	①	須恵器	短頸壺	口縁部 肩部	?	外)③ 内)⑤	(9.3)	-	[3.8]	灰白色	①	
	132	11	88		須恵器	平瓶		1/3	外)③⑤ 内)⑤	(7.8)	(10.0)	7.4	灰色	①	
	132	12	94	①	須恵器	壺?	底部		外)③ 内)⑤	-	(8.7)	[2.6]	黄褐色	①	
	132	13	93	①	須恵器	壺	底部		外)③ 内)⑤	-	(8.0)	[2.2]	灰白色	②	
	132	14	93	①	須恵器	壺	底部		外)③ 内)⑤	-	(7.6)	[2.1]	灰色	②	
	132	15	94	①	須恵器	壺	底部		外)③ 内)⑤	-	7.8	[3.7]	灰色	①	
	132	16	88		須恵器	壺	胴部?		外)③? 内)③?	-	-	[6.9]	灰色	①	
	132	17	94	②	須恵器	瓶	底部		外)③ 内)⑤	-	(10.6)	[6.0]	外)灰色 内)黄褐色	①③	
	132	18	88		須恵器	瓶	底部		外)③ 内)⑤	-	-	[3.6]	灰白色	①	
	133	1	94	②	須恵器	壺	口縁部 肩部	1/6	外)口縁-① 肩-② 内)口縁-① 肩-②	(25.0)	-	[7.6]	外)黄褐色 内)灰黄色	①	
	133	2	89		須恵器	壺	口縁部	3/4	外)③ 内)⑤	21.0	-	[6.2]	灰色	③④	
133	3	94	②	須恵器	壺	口縁部	1/12	外)③(破片文 内)⑤	(21.0)	-	[3.2]	灰白色	①		
133	4	94	②	須恵器	壺	肩部		外)口縁-① 肩-② 内)口縁-① 肩-②	-	-	[8.1]	外)灰色 内)オリーブ色	①		
133	5	94	②	須恵器	壺	口縁部	1/6	外)③ 内)⑤	(22.0)	-	[7.8]	灰色	①③		
133	6	94	①	須恵器	壺	口縁部	1/12	外)③ 内)⑤	(23.9)	-	[3.0]	灰色	①		
133	7	94	①	須恵器	壺	口縁部	1/4	外)③ 内)⑤	(22.0)	-	[7.4]	灰白色	①		
133	8	94	①	須恵器	壺	口縁部	1/12	外)③ 内)⑤	-	(18.0)	[3.2]	灰色	①		
134	1	94	①	土師器	壺	口縁部	1/12	外)不明 内)不明	(22.0)	-	[3.2]	灰い赤褐色	①		
134	2	94	①	土師器	壺	胴部		外)不明 内)不明	-	-	[8.9]	外)に灰い褐色 内)褐色	①		
134	3	94	①	土師器	無台坏		?	外)③⑤ 内)⑤	14.0	7.4	[3.0]	外)に灰い黄褐色 内)灰白色	①		
SD-3	135	1	96	①	須恵器	無台坏		1/4	外)③ 内)⑤	(12.6)	(9.0)	3.2	灰白色	①	
SD-3 SD-1	135	2	95		須恵器	高台坏		1/12	外)③ 内)⑤	(13.6)	(9.6)	4.3	灰色	①	
SD-3	135	3	96	①	須恵器	高台坏	底部		外)③ 内)⑤	-	(9.4)	[2.9]	灰色	①	
	135	4	96	①	須恵器	高台坏	底部		外)③ 内)⑤	-	(11.9)	[3.0]	灰色	①	
	135	5	96	①	須恵器	瓶		1/12	外)不明 内)不明	(17.0)	(13.0)	2.5	明オリーブ灰色	②	
	135	6	96	①	須恵器	埴	底部		外)③ 内)⑤	-	(10.0)	[4.1]	灰色	①③	
SD-3 SD-2	135	7	96	①	須恵器	鉢	底部		外)③ 内)⑤	-	(5.0)	[1.8]	灰色	①	
SD-3	135	8	96	①	須恵器	高台坏	底部		外)③ 内)⑤	-	(10.0)	[1.0]	外)灰色 内)灰黄色	①③	器書
	135	9	96	①	須恵器	壺	底部		外) ? 内) ?	-	-	[3.3]	灰色	①	
	135	10	96	①	須恵器	鉢	口縁部 体部	1/12	外)③ 内)⑤	(16.8)	-	[2.2]	外)灰色 外)灰白色	①	
	135	11	96	①	須恵器	鉢	口縁部 体部	1/12	外)③ 内)⑤	(12.0)	-	[4.7]	灰色	①	
	135	12	96	①	須恵器	無台坏		1/12	外)③ 内)⑤	(11.8)	(7.6)	3.4	灰色	①③	
	135	13	96	①	須恵器	無台坏	底部		外)③ 内)⑤	-	(9.0)	[1.0]	灰色	①	器書
135	14	95		須恵器	埴		1/2	外)③ 内)⑤	(18.6)	(11.0)	6.6	灰色	①③④		
SD-3 SD-1	135	15	95		須恵器	埴		1/6	外)③ 内)⑤	(17.2)	(10.8)	5.8	灰色	①③	
SD-3 SD-2	135	16	98		須恵器	壺		1/6	外)口縁-① 胴部-①オキナ 内)口縁-① 胴部-①	(21.2)	1.5	52.0	灰色	③	器大
SD-4	136	1	95		須恵器	無台坏		1/2	外)③ 内)⑤	(12.0)	(8.4)	2.9	灰色	①①	器小
SD-4 SD-2	136	2	95		須恵器	無台坏		2/3	外)③ 内)⑤	(14.6)	(9.6)	3.8	灰色	②	器小
SD-4	136	3	96	②	須恵器	無台坏	底部		外)③ 内)⑤	-	(8.9)	[2.2]	灰色	①	

第12節 金属器・ガラス製品

通称	図取番号	写真図番	種類	器種	部位	残存率	調査・技法・文様など	口径	底径	器高	色調	胎土	備考	
SD-4 SD-2	136 4	95	②	瓶蓋部	皿		外)① 内)①	(14.5)	(11.5)	大2.2 小1.7	灰色	①	器み大(小)	
SD-4	136 5	96	②	瓶蓋部	高台环	底部	外)② 内)①	-	11.5	[2.7]	赭灰色	①②		
	136 6	101	②	瓶蓋部	瓶	底部	外)① 内)①	-	(6.2)	[3.5]	灰色	①②		
	136 7	96	②	瓶蓋部	高台环	?	外)② 内)①	(14.3)	(10.4)	3.5	明緑灰色	①		
	136 8	96	②	瓶蓋部	高台环	1/12	外)① 内)①	(12.6)	9.0	3.5	外)緑灰色 内)黄灰色	①	分析	
SD-4 SD-2	136 9	96	②	瓶蓋部	高台环	1/12	外)① 内)①	(13.0)	11.2	[4.3]	外)灰色 内)黄灰色	①		
SD-4	136 10	96	②	瓶蓋部	高台环	底部	外)① 内)①	-	9.8	(11.7)	外)黄灰色 内)黄灰色	①②		
	136 11	96	②	瓶蓋部	蓋	犬身部	外)②③ 内)①	-	-	[2.3]	明黄灰色	①②③		
	136 12	102	②	瓶蓋部	壺	口縁部 体部	1/12	外)① 内)①	(12.0)	-	[2.8]	外)灰色 内)灰オリーブ色	①	
SD-4 SD-2	136 13	96	②	瓶蓋部	高台环	1/8	外)?	内)①?	(16.0)	(11.6)	3.7	黄灰色	①	
SD-4	136 14	96	②	瓶蓋部	瓶	口縁部 体部	1/6	外)① 内)①	(16.2)	-	[4.9]	外)緑灰色 内)黄灰色	①②	
	136 15	95	②	瓶蓋部	瓶	1/2	外)① 内)①	13.4	7.0	5.1	外)灰色 内)緑灰色	①②	器み小	
	136 16	96	②	瓶蓋部	瓶	底部	外)① 内)①	-	6.2	[2.5]	黄灰色	①		
	136 17	102	②	瓶蓋部	瓶	胴部	外)① 内)①	-	-	[5.0]	灰白色	②		
SD-4 SD-1	136 18	95	②	瓶蓋部	壺	底部	外)② 内)①	-	(11.2)	[7.2]	灰白色	②		
SD-4 SD-2	136 19	98	②	瓶蓋部	壺	体部 底部	外)① 内)①	-	9.2	[17.3]	外)灰色 内)灰白色	②③		
SD-4 SD-1	136 20	84	①	瓶蓋部	壺	口縁部 体部	1/6	外)②③ 内)①②③	(14.4)	-	[14.4]	灰色	②③	
	136 21	98	②	瓶蓋部	三耳壺	?	外)① 内)①	(7.8)	(11.8)	[30.6]	外)オリーブ灰色 内)灰色	②③		
SD-5	137 1	95	②	瓶蓋部	無台环	1/2	外)① 内)①	11.7	7.4	3.2	外)オリーブ灰色 内)灰色	①	内)継付着	
	137 2	96	①	瓶蓋部	無台环	1/6	外)① 内)①	(12.0)	(8.0)	3.3	外)灰色 内)灰白色	①		
SD-5 SD-1	137 3	96	②	瓶蓋部	無台环	1/12	外)② 内)①	(12.0)	(9.2)	3.1	灰白色	①		
SD-5	137 4	96	②	瓶蓋部	高台环	1/4	外)① 内)①	(13.6)	(10.0)	3.8	灰色	②		
	137 5	96	②	瓶蓋部	高台环	底部	外)① 内)①	-	(8.0)	[2.4]	灰白色	②		
	137 6	96	②	瓶蓋部	瓶	底部	外)① 内)不明	-	(9.0)	[1.8]	灰白色	②		
	137 7	96	②	瓶蓋部	瓶	底部	外)① 内)①	-	(9.6)	[4.0]	灰白色	②		
	137 8	96	②	瓶蓋部	瓶	1/3	外)① 内)①	(16.8)	(9.0)	6.8	外)灰色 内)灰白色	①	(小)	
SD-5 SD-2 SD-4	137 9	98	②	瓶蓋部	壺	?	外)口縁-① 胴部-①②③④ 内)口縁-① 胴部-①②	(19.2)	4.5	[42.2]	灰色	①		
SD-2 と5の 切りあ い部分	138 1	95	②	瓶蓋部	皿	1/6	外)① 内)①	(17.2)	(14.8)	3.0	灰白色	②		
	138 2	95	②	瓶蓋部	双耳壺	胴部	外)① 内)①	-	-	[20.0]	外)灰色 内)灰白色	①		
	138 3	96	②	瓶蓋部	瓶	口縁部 体部	1/8	外)① 内)①	(13.8)	-	[2.3]	灰白色	①	
	138 4	102	②	瓶蓋部	瓶	胴部	外)① 内)①	-	(10.0)	[11.7]	外)灰色 内)灰白色	②		
	138 5	102	②	瓶蓋部	鉢	底部	外)底部-割裂痕①② 内)①	-	(12.0)	[6.1]	外)灰色 内)灰オリーブ	①		
	138 6	98	②	瓶蓋部	壺	底部	外)① 内)①	-	1.0	[27.0]	外)灰色 内)灰白色	①	器み大	
瓶蓋部	139 1	99	②	瓶蓋部	無台环	1/2	外)① 内)①	14.8	9.0	4.1	灰白色	①		
	139 2	101	②	瓶蓋部	無台环	?	外)① 内)①	(12.0)	(8.0)	3.4	灰色	①		
	139 3	99	②	瓶蓋部	無台环	1/12	外)① 内)①	(11.8)	(8.8)	3.2	外)オリーブ灰色 内)灰白色	②		
	139 4	101	②	瓶蓋部	無台环	?	外)① 内)①	(12.6)	8.9	3.1	外)灰白色 内)灰色	①		
	139 5	101	②	瓶蓋部	無台环	1/3	外)① 内)①	(13.5)	(6.9)	3.0	灰色	①	(小)	
	139 6	99	②	土師器	無台环	2/3	外)① 内)①	12.8	8.0	[3.1]	外)浅黄褐色 内)濃い黄褐色	①	生焼け	
	139 7	101	②	瓶蓋部	無台环	?	外)① 内)①	(13.8)	7.2	2.8	灰色	①②	(小)	
	139 8	101	②	瓶蓋部	無台环	?	外)① 内)①	(13.8)	(7.5)	2.8	黄灰色	①	(小)	
139 9	101	②	瓶蓋部	無台环	底部	外)① 内)①	-	8.5	[2.4]	外)灰色 内)黄灰色	①			

第5章 山腰遺跡

遺構	図版番号	写真図番号	種類	部材	部位	残存率	調査・技法・文様など	口縁	底縁	器高	色調	胎土	備考	
139	10	97	②	須恵器	胎台環	底部	外)② 内)①	-	(8.2)	[2.1]	灰白色 内)灰白色	①		
139	11	101	②	須恵器	胎台環	底部	外)② 内)①	-	10.0	[1.7]	明緑灰色	①		
139	12	101	①	須恵器	埴	底部	外)② 内)①	-	19.4	[2.8]	灰色	①		
139	13	101	①	須恵器	埴	底部	外)② 内)①	-	(18.0)	[3.0]	外)灰色 内)灰白色	①		
139	14	101	①	須恵器	埴	底部	外)② 内)①	-	(9.0)	[3.3]	緑灰色	①		
139	15	100	②	須恵器	皿	1/6	外)② 内)①	(13.8)	(9.6)	1.7	明緑灰色	①		
139	16	100	②	須恵器	皿	1/4	外)② 内)①	(14.5)	(11.0)	1.8	黄褐色	①		
139	17	100	②	須恵器	皿	1/6	外)不明 内)不明	(14.0)	(10.2)	2.1	灰白色	①		
139	18	101	②	須恵器	胎台環	1/6	外)② 内)①	(12.9)	(7.6)	4.3	緑灰色	①		
139	19	97	②	須恵器	胎台環	1/6	外)②③ 内)①	(12.0)	-	(3.8)	外)緑灰色 内)明緑灰色	①		
139	20	101	②	須恵器	胎台環	?	外)② 内)①	(13.7)	6.3	4.5	オリーブ灰色	①		
139	21	101	②	須恵器	胎台環	口縁部	1/4	外)② 内)①	(12.2)	-	[2.7]	灰色	①	
139	22	101	②	須恵器	胎台環	?	外)② 内)①	(9.6)	(6.2)	3.1	明オリーブ灰色	①	内縁/灯芯線痕	
139	23	101	②	須恵器	胎台環	底部	外)②スコ状圧痕 内)①	-	8.2	[2.0]	外)灰色 内)緑灰色	①		
139	24	101	②	須恵器	胎台環	底部	外)② 内)①	-	6.6	[1.2]	緑灰色	①		
139	25	97	②	須恵器	胎台環	底部	外)② 内)①	-	9.8	[1.4]	灰色	①		
139	26	97	②	須恵器	胎台環	底部	外)② 内)①	-	-	(0.5)	灰白色	②	器蓋	
139	27	100	①	須恵器	胎台環	底部	外)② 内)①	-	-	(0.7)	外)黄褐色 内)灰白色	①	器蓋	
139	28	100	①	須恵器	胎台環	底部	外)② 内)①	-	-	(0.5)	明緑灰色	①	器蓋	
139	29	101	①	須恵器	埴	底部	外)② 内)①	-	(6.3)	[1.9]	外)青灰色 内)緑灰色	①		
139	30	101	①	須恵器	埴	底部	外)② 内)①	-	(7.7)	[2.2]	黄灰色	①		
139	31	101	①	須恵器	埴	底部	外)② 内)①	-	(6.1)	[1.8]	外)明緑灰色 内)灰色	①②		
139	32	101	①	須恵器	埴	底部	外)② 内)①	-	(7.2)	[2.2]	外)緑灰色 内)黄褐色	①		
139	33	101	①	須恵器	埴	底部	外)② 内)①	-	(6.8)	[2.6]	緑灰色	①		
139	34	101	②	須恵器	皿	?	外)② 内)①	(17.2)	(13.9)	2.8	外)灰色 内)黄褐色	①		
139	35	100	②	須恵器	皿	1/12	外)② 内)①	(16.4)	(12.8)	2.3	灰白色	①		
139	36	100	②	須恵器	皿	1/12	外)② 内)①	(13.8)	(10.3)	2.9	外)灰色 内)オリーブ灰色	①②		
139	37	100	②	須恵器	皿	1/12	外)② 内)①	(16.2)	(13.2)	2.2	灰白色	①		
139	38	100	②	須恵器	胎台環	1/12	外)② 内)①	(16.8)	(8.0)	2.5	灰白色	①		
139	39	97	②	須恵器	埴	口縁部	1/6	外)② 内)①	(14.8)	-	[4.0]	外)灰白色 内)明オリーブ灰色	①	
139	40	99	②	須恵器	胎台環	1/12	外)②スコ状圧痕 内)①	(14.5)	4.7	4.0	灰色	①		
139	41	100	②	須恵器	皿	1/6	外)② 内)①	(14.9)	(11.8)	2.6	外)灰色 内)緑灰色	①		
139	42	101	②	須恵器	胎台環	底部	外)② 内)①	-	(7.1)	[1.6]	外)灰色 内)明緑灰色	①		
139	43	100	②	須恵器	皿	底部	外)② 内)①	-	16.9	[2.1]	?	①②		
139	44	101	②	須恵器	埴	底部	外)② 内)①	-	(9.2)	[2.6]	黄灰色	①②		
139	45	101	①	須恵器	埴	底部	外)② 内)①	-	(7.5)	[2.1]	灰色	①		
139	46	101	①	須恵器	埴	底部	外)② 内)①	-	(6.0)	[2.2]	灰色	①②		
139	47	101	①	須恵器	埴	底部	外)② 内)①	-	(8.9)	[2.4]	外)オリーブ灰色 内)黄褐色	①		
139	48	101	①	須恵器	埴	底部	外)② 内)①	-	(7.6)	[2.6]	灰色	①		
140	1	99	②	須恵器	胎台環	?	外)② 内)①	(15.4)	10.8	3.4	外)灰色 内)緑灰色	①②		
140	2	101	①	須恵器	胎台環	1/6	外)② 内)①	(16.4)	(11.3)	6.0	黄褐色	①②		
140	3	99	②	須恵器	胎台環	?	外)② 内)①	(16.7)	13.0	5.5	灰色	①		
140	4	101	①	須恵器	胎台環	底部	外)② 内)①	-	13.0	[3.0]	灰白色	①		
140	5	101	①	須恵器	胎台環	底部	外)② 内)①	-	(13.2)	[1.9]	灰白色	②		
140	6	101	①	須恵器	胎台環	底部	外)② 内)①	-	(12.4)	[2.4]	外)灰色 内)灰白色	①		
140	7	101	①	須恵器	埴	1/3	外)② 内)①	(14.8)	(8.7)	4.7	外)灰色 内)灰白色	①		
140	8	101	①	須恵器	胎台環	口縁欠失	外)② 内)①	-	(7.9)	[3.3]	外)緑灰色 内)明緑灰色	①		

報告書

第12節 金属器・ガラス製品

通称	国産番号	互換国産番	種類	部材	部位	残存率	調査・技法・文様など	口径	底径	器高	色調	胎土	備考
	140	9	101	①	煎茶器	高台杯	底部	外)③ 内)④	-	(10.2)	(2.8)	灰白色 内)灰白色	①
	140	10	101	①	煎茶器	高台杯	底部	外)③ 内)④	-	(10.4)	(2.7)	灰白色 内)灰白色	②
	140	11	97	①	煎茶器	高台杯	底部	外)③ 内)④	-	(13.2)	(3.5)	灰色	③
	140	12	101	①	煎茶器	高台杯	底部	外)③ 内)④	-	(13.2)	(3.5)	灰白色 内)灰白色	④
	140	13	101	①	煎茶器	高台杯		1/12 外)③ 内)④	(21.8)	(7.4)	3.7	外)青灰色 内)黄灰色	⑤
	140	14	101	①	煎茶器	高台杯	口縁欠失	外)③ 内)④	-	(8.2)	(3.0)	灰色	⑥
	140	15	101	①	煎茶器	高台杯		1/4 外)③ 内)④	(14.8)	(10.6)	3.7	青灰色	⑦
	140	16	99		煎茶器	高台杯		1/6 外)③ 内)④	(13.0)	9.8	3.5	灰色	⑧ (覆)
	140	17	101	①	煎茶器	高台杯		? 外)③ 内)④	(12.3)	(8.8)	4.4	外)オリーブ灰色 内)青灰色	⑨
	140	18	99		煎茶器	高台杯		1/3 外)③ 内)④	(12.8)	(9.6)	4.0	青灰色	⑩⑪
	140	19	101	①	煎茶器	高台杯		1/4 外)③ 内)④	(13.5)	(10.2)	4.3	灰色	⑫ 分析
	140	20	101	③	煎茶器	高台杯	底部	外)③ 内)④	-	10.0	[1.6]	灰白色 内)灰白色	⑬
	140	21	101	①	煎茶器	高台杯	底部	外)③ 内)④	-	(7.3)	(2.7)	緑灰色	⑭
	140	22	101	①	煎茶器	高台杯	底部	外)③ 内)④	-	(7.8)	[4.1]	灰色	⑮⑯
	140	23	97	①	煎茶器	高台杯	底部	外)③ 内)④	-	(10.0)	(3.5)	灰白色 内)灰白色	⑰
	140	24	101	①	煎茶器	高台杯	底部	外)③ 内)④	-	7.0	(3.4)	灰白色 内)緑灰色	⑱
	140	25	101	①	煎茶器	高台杯	底部	外)③ 内)④	-	(8.1)	(2.7)	緑灰色	⑲
	140	26	101	①	煎茶器	高台杯	底部	外)③ 内)④	-	(7.2)	(2.6)	灰色	⑳
	140	27	101	③	煎茶器	高台杯		1/6 外)③ 内)④	(13.0)	(8.0)	3.0	灰白色 内)灰白色	㉑
	140	28	101	①	煎茶器	高台杯		? 外)③ 内)④	(13.1)	(8.8)	3.4	外)オリーブ灰色 内)青灰色	㉒
	140	29	101	①	煎茶器	高台杯		1/6 外)③ 内)④	(13.8)	(5.1)	3.8	青灰色	㉓
	140	30	101	①	煎茶器	高台杯		? 外)③ 内)④	(13.1)	(10.1)	3.7	外)緑灰色 内)青灰色	㉔
	140	31	101	③	煎茶器	高台杯		1/2 外)③ 内)④	(13.0)	(10.5)	3.9	灰白色	㉕
	140	32	101	③	煎茶器	高台杯		1/12 外)③ 内)④	13.0	9.0	4.1	灰色	㉖
	140	33	101	①	煎茶器	高台杯	底部	外)③ 内)④	-	(9.2)	(3.1)	灰白色 内)オリーブ灰色	㉗
	140	34	101	①	煎茶器	高台杯		? 外)③ 内)④	(13.0)	(9.0)	4.0	灰白色 内)青灰色	㉘⑲
	140	35	101	③	煎茶器	高台杯	底部	外)③ 内)④	-	(10.2)	(2.2)	灰白色 内)灰白色	㉙
	140	36	101	③	煎茶器	高台杯	底部	外)③ 内)④	-	(8.4)	(1.7)	灰白色	㉚
	140	37	101	③	煎茶器	高台杯	底部	外)③ 内)④	-	8.8	(1.3)	灰色	㉛
	140	38	101	③	煎茶器	高台杯	底部	外)③ 内)④	-	(7.8)	(2.5)	灰色	㉜
	140	39	101	①	煎茶器	高台杯	底部	外)③ 内)④	-	(9.2)	(1.1)	外)青灰色 内)緑灰色	㉝
	140	40	101	①	煎茶器	高台杯	底部	外)③ 内)④	-	(8.0)	(1.3)	灰色	㉞
	140	41	101	①	煎茶器	高台杯	底部	外)③ 内)④	-	(9.2)	(2.3)	灰白色	㉟
	140	42	101	①	煎茶器	高台杯	底部	外)③ 内)④	-	(10.4)	(2.1)	灰白色	㊱
	141	1	100	③	煎茶器	蓋		1/12 外)③④ 内)④	(15.0)	-	2.9	灰白色	①
	141	2	100	③	煎茶器	蓋		1/12 外)③④ 内)④	(15.3)	-	3.1	灰白色	②
	141	3	100	③	煎茶器	蓋	つまみ欠失	1/4 外)③④ 内)④	(17.7)	-	(1.9)	灰白色	③
	141	4	100	③	煎茶器	蓋	つまみ欠失	1/12 外)③④ 内)④	(18.0)	-	(2.8)	灰色	④
	141	5	100	③	煎茶器	蓋	つまみ欠失	1/4 外)③ 内)④	17.0	-	(2.5)	外)灰白色 内)灰色	⑤
	141	6	100	③	煎茶器	蓋	つまみ欠失	1/6 外)③④ 内)④	13.6	-	(3.2)	灰白色	⑥
	141	7	100	③	煎茶器	蓋		1/12 外)③④ 内)④	13.0	-	2.6	灰白色	⑦
	141	8	100	③	煎茶器	蓋		1/12 外)③ 内)④	(9.5)	-	3.9	灰白色	⑧
	141	9	100	③	煎茶器	蓋		1/12 外)③④ 内)④	(12.0)	-	2.3	灰白色	⑨
	141	10	100	③	煎茶器	蓋	天寿部	外)③ 内)④	-	-	(2.7)	灰色	⑩
	141	11	100	③	煎茶器	蓋		1/4 外)不明 内)④	(12.0)	-	2.5	灰白色	⑪
	141	12	100	③	煎茶器	蓋	つまみ	外)③ 内)④	-	-	(2.9)	灰白色	⑫
	141	13	100	③	煎茶器	蓋	つまみ	外)③④ 内)④	-	-	(2.1)	灰白色	⑬
	141	14	100	③	煎茶器	蓋	つまみ	外)③④ 内)④	-	-	(2.5)	外)灰色 内)灰白色	⑭

第5章 山腰遺跡

遺構	図版番号	方向	種類	部材	部位	残存率	調査・技法・文様など	口排	底排	部高	色調	粘土	備考		
瓦葺	141	15	100	①	瓦葺部	蓋	つまみ	外)①② 内)①	-	-	[1.4]	①			
	141	16	100	①	瓦葺部	蓋		外)①② 内)①	12.8	-	2.6	灰白色	①		
	141	17	99		瓦葺部	蓋	山石完成	外)①② 内)①	[14.2]	-	1.8	外)灰オリーブ色 内)灰白色	①	転用履 雲み大	
	142	1	100	①	瓦葺部	蓋	口縁部 短部	外)①② 内)①	[13.0]	-	[12.9]	灰白色	①		
	142	2	97	①	瓦葺部	短部	口縁部 短部	外)① 内)①	[12.6]	-	[4.1]	外)灰オリーブ色 内)灰色	①		
	142	3	84	①	瓦葺部	瓶	胴部	外)①② 内)①	-	-	[12.5]	外)灰白色 内)灰色	②		
	142	4	100	①	瓦葺部	蓋	胴部	外)① 内)①	-	-	[14.1]	外)オリーブ茶色 内)灰白色	②		
	142	5	99		瓦葺部	蓋	胴部 胴部	外)① 内)①	-	-	[10.9]	緑灰色	①		
	142	6	97	②	瓦葺部	小皿	胴部 底部	外)① 内)①	-	[5.3]	[4.8]	外)オリーブ灰色 内)灰オリーブ灰色	①		
	142	7	97	②	瓦葺部	蓋	底部	外)① 内)①	-	[7.0]	[2.1]	外)オリーブ灰色 内)緑灰色	①		
	142	8	97	②	瓦葺部	鉢	底部	外)① 内)①	-	3.8	[2.5]	外)緑灰色 内)黄灰色	①		
	142	9	100	①	瓦葺部	蓋	口縁部	?	外)① 内)①	[14.4]	-	[4.7]	にんい黄色	③①	生焼け
	142	10	100	①	瓦葺部	鉢	口縁部	1/12	外)①② 内)①	[14.0]	-	[3.5]	外)黄灰色 内)青灰色	②	
	142	11	100	①	瓦葺部	鉢	口縁部	1/12	外)① 内)①	[13.2]	-	[3.6]	灰色	②	
	142	12	100	①	瓦葺部	瓶	胴部	外)①② 内)①	-	-	[5.4]	外)黄灰色 内)灰白色	①		
	142	13	97	②	瓦葺部	鉢	口縁部	1/12	外)① 内)①	[13.8]	-	[2.1]	黄灰色	②	
	142	14	97	②	瓦葺部	鉢	底部	1/12	外)① 内)①	[11.7]	[6.6]	[6.9]	黄灰色	①	
	142	15	100	①	瓦葺部	瓶	底部	外)① 内)不明	-	[11.2]	[1.3]	灰白色	①	継ぎ板	
	142	16	97	①	瓦葺部	鉢	底部	外)① 内)不明	-	[8.0]	[1.9]	灰色	①		
	142	17	97	①	瓦葺部	鉢	底部	外)①② 内)オキメ	-	[12.2]	[3.9]	灰色	③		
	142	18	97	②	瓦葺部	蓋	底部	外)① 内)①	-	[7.2]	[4.8]	外)オリーブ灰色 内)灰色	①		
	142	19	97	②	瓦葺部	蓋	底部	外)① 内)①	-	[8.4]	[4.5]	灰色	②		
	142	20	97	①	瓦葺部	蓋	底部	外)① 内)不明	-	-	[2.7]	外)灰色 内)オリーブ茶色	②		
	142	21	97	②	瓦葺部	蓋	胴部	外)① 内)①	-	-	[4.7]	黄灰色	②		
	142	22	97	②	瓦葺部	蓋	胴部	外)① 内)①	-	-	[5.8]	外)緑灰色 内)黄灰色	①		
	142	23	97	①	瓦葺部	蓋	底部	外)① 内)不明	-	[9.0]	[3.3]	外)灰白色 内)オリーブ茶色	②		
	142	24	97	②	瓦葺部	鉢	口縁部	外)① 内)①	[17.6]	-	[2.0]	外)緑灰色 内)黄灰色	①		
	142	25	97	①	瓦葺部	瓶	胴部	外)①② 内)①	-	-	[4.6]	外)オリーブ色 内)灰色	①		
	142	26	97	①	瓦葺部	蓋?	底部	外)① 内)①	-	[14.4]	[3.7]	外)緑黄色 内)灰白色	①		
	142	27	99		瓦葺部	蓋	底部	外)①②③ 内)①	-	[13.2]	[7.5]	灰白色	①		
	143	1	100	①	瓦葺部	高坏	脚部	外)①? 内)?	-	-	[9.0]	灰白色	①		
	143	2	100	①	瓦葺部	高坏	脚部	外)① 内)①	-	-	[10.5]	灰色	①		
	143	3	97	②	瓦葺部	高坏	脚部	外)① 内)①	-	[9.2]	[3.5]	黄灰色	②		
	143	4	100	①	瓦葺部	高坏	脚部	外)① 内)①	-	-	[6.9]	外)オリーブ灰色 内)灰色	①		
	143	5	100	①	瓦葺部	高坏	脚部	外)① 内)①	-	-	[4.7]	灰色	①		
	143	6	100	①	瓦葺部	高坏	脚部	?	-	-	[4.2]	灰白色	①		
	143	7	97	①	瓦葺部	甕	口縁部	1/8	外)① 内)①	[24.0]	-	[3.5]	灰色	②	
	143	8	97	①	瓦葺部	甕	口縁部	1/12	外)① 内)①	[19.6]	-	[3.2]	外)黄褐色 内)黄灰色	①	
	143	9	100	①	瓦葺部	鉢	口縁部	1/12	外)① 内)①	[28.4]	[16.4]	6.7	灰色	②	
	143	10	100	①	瓦葺部	鉢	口縁部	1/12	外)① 内)①	[34.8]	-	[10.0]	黄灰色	③	
	143	11	100	①	瓦葺部	?	底部	外)① 内)不明	-	-	[4.5]	外)灰色 内)灰白色	①		
	143	12	100	①	瓦葺部	?	底部	外)①② 内)突板	内)①	-	[8.8]	[2.6]	灰色	①	
	143	13	100	①	瓦葺部	蓋	胴部	外)① 内)①	-	-	[7.3]	灰白色	②		
	143	14	100	①	瓦葺部	蓋	胴部	外)①② 内)オキメ?	内)①	-	[14.0]	灰色	①		
144	1	100	①	瓦葺部	蓋	口縁部	1/8	外)① 内)①	[30.8]	-	[3.1]	灰白色	①		

第12節 金属器・ガラス製品

遺構	図版番号	写真図番号	種類	部種	部位	残存率	測定・技法・文様など	口径	底径	器高	色調	胎土	備考		
Ⅲa層	144	2	88	煎茶器	蓋	口縁部 胴部	1/4	外口縁① 胴一① 内口縁① 胴一①	(27.0)	—	(36.8)	灰色	①		
	145	1	100	①	煎茶器	蓋	口縁部	1/12	外①② 内①②	(27.0)	—	(2.0)	灰白色	①	
	145	2	100	①	煎茶器	蓋	口縁部	1/12	外①② 内①②	(28.2)	—	(2.8)	灰白色	①	
	145	3	100	①	煎茶器	蓋	口縁部	1/12	外①② 内①②	—	—	(3.6)	灰白色	①	
	145	4	98	煎茶器	蓋	胴部		外①② 内①②	—	—	(20.7)	灰色	①		
	146	1	100	①	煎茶器	蓋	口縁部	1/12	外①② 内①②	—	—	(3.5)	灰白色	①	
	146	2	100	①	煎茶器	蓋	口縁部	1/12	外①② 内①②	—	—	(4.1)	灰白色	①	
	146	3	100	①	煎茶器	蓋	口縁部	1/12	外①② 内①②	—	—	(2.0)	灰白色	①	
	146	4	89	煎茶器	蓋	胴部	?	外口縁① 胴一① 内口縁① 胴一①	(35.4)	—	(15.7)	灰黄色	①		
	147	1	100	①	土師器	蓋	口縁部	?	外①②ハケ 内①②	(19.5)	—	(2.4)	灰白色	②	
	147	2	99	土師器	蓋	体部		外口縁・胴・肩ハケ 内口縁ハケ	—	(5.0)	(27.8)	灰黄色	①	復元書	
	148	1	102	①	灰陶器	蓋	口縁部	1/12	外①② 内①②	(26.0)	—	(2.2)	灰白色	②やヤ黄	
	SD-1	148	2	99	灰陶器	胴		1/6	外①② 内①②	(15.2)	(4.7)	5.0	灰白色	①黄	
		148	3	102	①	灰陶器	胴	口縁部	1/12	外①② 内①②	(15.0)	—	(3.5)	灰白色	①黄
Ⅲb層	148	4	102	①	灰陶器	胴	口縁部	1/12	外①② 内①②	(15.8)	—	(3.0)	灰白色	①黄	
	148	5	102	①	灰陶器	胴?	口縁部	1/12	外①② 内①②	(14.2)	—	(3.6)	灰白色	①黄	
	148	6	102	①	灰陶器	胴?	底部		外①② 内①②	—	(8.6)	(2.6)	灰白色	②やヤ黄	
	148	7	102	①	灰陶器	胴	底部		外①②③ 内①②	—	(7.8)	(3.1)	灰白色	①黄	
	148	8	102	①	灰陶器	胴	底部		外①②③ 内①②	—	(9.0)	(2.5)	灰白色	①黄	
	148	9	102	①	灰陶器	胴	底部		外①② 内①②	—	(7.0)	(2.1)	灰白色	②やヤ黄	
	148	10	102	①	灰陶器	胴	口縁部	1/8	外①② 内①②	(13.8)	—	(3.6)	灰白色	①黄	
	148	11	102	①	灰陶器	胴	口縁部	1/4	外①② 内①②	(11.8)	—	(3.3)	灰白色	①黄	
	148	12	102	①	灰陶器	胴	底部		外①② 内①②	—	(8.4)	(2.8)	灰白色	①黄	
	148	13	102	①	灰陶器	胴	底部		外①② 内①②	—	(8.4)	(2.4)	灰白色	②やヤ黄	
	148	14	102	①	灰陶器	胴	底部		外①② 内①②	—	(6.0)	(2.5)	灰白色	①黄	
	148	15	102	①	灰陶器	胴?	底部		外①② 内①②	—	(8.2)	(2.0)	灰白色	①黄	
	148	16	102	①	灰陶器	胴	底部		外①② 内①②	—	(7.4)	(2.5)	灰白色	②やヤ黄	
	148	17	102	①	灰陶器	胴?	底部		外①② 内①②	—	(10.0)	(4.0)	灰白色	②やヤ黄	
	SD-2	148	18	99	灰陶器	胴		1/4	外①② 内①②	(14.4)	(8.7)	2.5	灰白色	①黄	
	Ⅲc層	148	19	102	①	灰陶器	蓋	底部		外①②③ 内①②	—	(6.4)	(2.3)	灰白色	①黄
148		20	102	①	灰陶器	胴?	底部		外①② 内①②	—	(4.2)	(2.0)	灰白色	?	
148		21	102	①	灰陶器	胴	口縁部	1/8	外①② 内①②	(11.6)	—	(1.4)	灰白色	①黄	
148		22	102	①	灰陶器	胴?	底部		外①② 内①②	—	(7.2)	(1.3)	灰白色	①黄	
SD-2	148	23	102	①	灰陶器	胴	底部		外①② 内①②	—	(7.0)	(1.6)	灰白色	①黄	
Ⅲd層	148	24	102	①	灰陶器	胴?	底部		外①② 内①②	—	(6.0)	(1.4)	灰白色	②やヤ黄	
	148	25	102	①	灰陶器	胴?	底部		外①② 内①②	—	(8.0)	(1.5)	灰白色	②やヤ黄 内口縁部?	
	148	26	102	①	灰陶器	胴?	底部		外①② 内①②	—	(8.6)	(1.6)	灰白色	①黄	
	148	27	102	①	灰陶器	胴	底部		外①② 内①②	—	(8.2)	(1.5)	灰白色	②やヤ黄	
Ⅲe層	148	28	102	①	緑陶器	胴	胴部		外①② 内①②	—	—	(3.4)	濃い緑色	①黄	
	148	8	102	①	煎茶器	把手		外①不明 内①ハケ	—	—	(6.2)	灰白色	②	生焼け	
	149	9	102	①	煎茶器	取耳部	耳部		外①?	内①キキメ①	—	—	—	灰色	②
	Ⅲf層	152	1		青磁	胴	口縁部	1/12	?	(16.0)	—	(3.8)	?	?	
152		2		青磁	胴	口縁部	1/12	?	(16.0)	—	(4.0)	?	?		
152		3		青磁	胴	胴部	?	?	—	—	(1.6)	?	?		
152		4		青磁	胴	口縁部	1/12	?	(13.0)	—	(3.1)	?	?		
152		5		青磁	胴	口縁部	1/12	?	(12.0)	—	(2.3)	?	?		
152		6		青磁	杯	口縁部	1/12	?	(9.6)	—	(1.8)	?	?		
152		7		青磁	胴	底部	?	?	—	(5.0)	(2.4)	?	?		
152		8		青磁	胴	底部	?	?	—	—	(0.9)	?	?		
152		9		青磁	緑花皿	口縁部	1/12	?	(15.0)	—	(1.7)	?	?		
152		10		青磁	胴	口縁部	1/12	?	(15.0)	—	(2.7)	?	?		
152		11		染付	高台杯	底部	?	?	—	(3.2)	(1.6)	?	?		
152		12	104	①	磁器焼	胴鉢	口縁部	1/12	外①② 内①②	(33.4)	—	(5.3)	クリーム黄色	①	
152		13		染付	杯	口縁部 胴部	1/12	?	(9.0)	—	(1.3)	?	?		

第15表 山腰遺跡出土土瓦觀察表

遺構	図版番号	写真図版番号	種類	縦長(cm)	横長(cm)	厚さ(cm)	内面調整	外面調整	粘土	焼成	色調		
瓦割	7	8	36	②	平瓦	(6.8)	(6.4)	1.1	春日原	ケズリ	①	良	灰色
SD-5	150	1	103	①	平瓦(柳)	(8.2)	(9.4)	1.8	春日原	ケズリ	①	不良	淡褐色
SD-2	150	2	103	①	平瓦(柳)	(6.2)	(11.0)	1.5	春日原	ケズリ	①	良	灰色
包含層	150	3	102	②	平瓦(柳)	(9.6)	(6.2)	1.9	春日原	ケズリ	①	不良	淡褐色
SD-1	150	4	103	①	平瓦(柳)	(6.9)	(10.4)	1.4	春日原	磨滅	①	不良	灰色
包含層	150	5	103	①	平瓦(柳)	(2.6)	(3.6)	2.0	春日原	ケズリ	①	不良	淡褐色
包含層	150	6	103	①	平瓦(柳)	(5.4)	(5.4)	1.5	春日原	ケズリ	①	不良	淡褐色
SS-1	150	7	103	①	平瓦(柳)	(9.3)	(7.0)	1.4	春日原	磨滅	①	不良	淡褐色
包含層	150	8	103	①	平瓦(柳)	(5.4)	(6.0)	1.5	春日原	ケズリ	①	不良	淡褐色
包含層	150	9	103	①	平瓦	(3.4)	(5.2)	1.7	春日原	ケズリ	①	不良	淡褐色
包含層	150	10	103	①	平瓦(柳)	(5.3)	(5.1)	1.4	春日原	磨滅	①	不良	淡褐色
SD-2	150	11	103	①	平瓦(柳)	(5.0)	(3.8)	2.4	春日原	ケズリ	①	不良	淡褐色
包含層	150	12	103	①	平瓦	(2.1)	(4.6)	1.5	春日原	磨滅	①	不良	淡褐色
包含層	151	1	103	②	平瓦(柳)	(8.0)	(11.0)	1.8	春日原	ケズリ	①	不良	淡褐色
SD-2	151	2	103	②	平瓦	(8.7)	(12.0)	2.4	春日原	ケズリ	①	不良	淡褐色
SD-1	151	3	103	②	平瓦(柳)	(6.6)	(9.1)	1.9	春日原	ケズリ	①	良	灰色
SS-1	151	4	103	②	平瓦(柳)	(10.5)	(13.2)	2.0	春日原	ケズリ	①	不良	淡褐色
包含層	151	5	103	②	平瓦	(5.1)	(4.9)	1.0	春日原	磨滅	①	不良	淡褐色
包含層	151	6	103	②	平瓦(柳)	(4.5)	(4.2)	1.3	春日原	磨滅	①	不良	淡褐色
SD-1-2	151	7	103	②	平瓦	(10.5)	(3.5)	1.7	春日原	ケズリ	①	不良	淡褐色
包含層	151	8	103	②	平瓦	(2.9)	(3.7)	1.4	春日原	磨滅	①	不良	淡褐色
包含層	151	9	103	②	平瓦	(3.3)	(4.3)	1.3	春日原	磨滅	①	不良	淡褐色

第16表 大塚向山遺跡・山腰遺跡出土土師・土鈴・石製品観察表

遺跡名	遺構	図版番号	写真図版番号	種類	器種	遺存状況	直径(cm)	口径(cm)	長さ(cm)	重量(g)	備考	
大塚向山遺跡	包含層	48	1	102	③	土師器	土鈴	頭部一部欠	3.0	—	17.80	内出土玉
	包含層	48	2	102	③	須恵器	土師	完存	2.4	0.6	4.5	26.94
山腰遺跡	SD-2	149	1	102	③	須恵器	土師	一方欠	2.1	0.7	(6.0)	25.75
	SD-1	149	2	102	③	須恵器	土師	一方欠	2.3	0.8	(5.6)	26.37
	SD-1	149	3	102	③	須恵器	土師	完存	1.5	0.4	5.1	12.15
	包含層	149	4	102	③	須恵器	土師	完存	1.7	0.6	4.5	11.85
	包含層	149	5	102	③	須恵器	土師	完存	1.6	0.5	4.0	13.05
	包含層	149	6	102	③	土師器	土師	一方欠	2.0	0.6	3.3	7.65
	SD-2	149	7	102	③	土師器?	土師	一方欠	1.3	0.4	(3.4)	4.41
	包含層	149	10	102	③	石製品	円石	完存	3.4	3.3	1.4	27.20

第17表 大塚向山遺跡・山腰遺跡出土金属器観察表

遺跡名・地区	遺構	図版番号	写真番号	種類	器種	遺存状況	最大径(cm)	最小径(cm)	長さ/厚さ(cm)	重量(g)			
山腰遺跡	包含層	153	1	104	①	銅製品	板杖	頭部欠	(3.7)	1.8	0.2	8.58	
		153	2	104	①	銅製品	不明(金具?)	一端欠	(2.6)	(2.4)	0.5	7.60	
		153	3	104	①	銅製品	不明(金具?)	一端欠	(1.3)	(1.3)	0.4	1.06	
向山	N	SK-3	153	4	104	①	鉄製品	鉄釘	頭部欠	0.9	0.3	4.4	2.82
	G	包含層	153	5	104	①	鉄製品	鉄釘	完存	1.4	0.6	3.9	3.71
山腰遺跡	包含層	153	6	104	①	鉄製品	鉄釵	完存	4.8	4.4	0.5	4.78	
		153	7	104	①	鉄洋	鉄洋	一部欠	4.8	4.8	1.7	52.89	
		153	8	104	①	鉄洋	鉄洋	完存	6.3	5.1	1.6	56.38	
		153	9	104	①	ガラス玉	ガラス玉	半分残	1.7	(1.6)	—	6.06	
		153	10	104	②	古銭	開元通宝	良好	2.4	2.4	0.1	2.27	
向山	O	SK-3	153	11	104	②	古銭	祥符元宝	やや不良	2.4	2.2	0.1	1.53
	O	SK-3	153	12	104	②	古銭	皇?開宝	不良	2.3	2.2	0.1	1.46
山腰遺跡	包含層	153	13	104	②	古銭	7.7?宝	不良	2.4	2.3	0.1	1.78	
向山	G	SP-5	153	14	104	②	古銭	開元通宝	やや不良	(2.1)	(2.1)	0.1	1.34
山腰遺跡	包含層	153	15	104	②	古銭	銭種不明	不良	2.4	2.3	0.1	2.57	
向山	G	包含層	153	16	104	②	古銭	銭種不明	不良	2.4	2.4	0.1	2.16
	G	包含層	153	17	104	②	古銭	開元通宝	良好	2.3	2.2	0.1	2.07
山腰遺跡	包含層	153	18	104	③	古銭	開元通宝	良好	2.3	2.3	0.1	1.13	
向山	G	包含層	153	19	104	③	古銭	開元通宝	良好	2.4	2.4	0.1	2.29
	G	包含層	153	20	104	③	古銭	開元通宝	良好	2.3	2.3	0.1	2.23
山腰遺跡	包含層	153	21	104	③	古銭	開元通宝	良好	2.4	2.4	0.1	2.27	
		153	22	104	③	古銭	開元通宝	良好	2.2	2.2	0.1	1.85	
		153	23	104	③	古銭	開元通宝	良好	2.3	2.3	0.1	2.11	

第6章 大塩向山遺跡・山腰遺跡出土の縄文時代の遺物

大塩向山遺跡と山腰遺跡は古代の遺物が中心ではあるが、数は少ないながらも縄文時代の遺物として土器と石器が出土している。これは既に報告している大塩向山遺跡E地区では抽出できなかったが、今回の調査区に含めて報告したい。

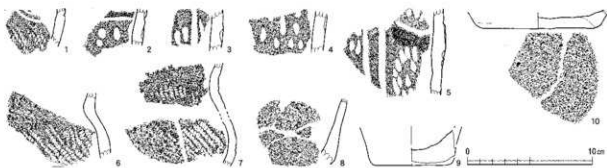
第1節 縄文時代の土器（第154図）

今回の調査で出土した縄文土器は、遺構に伴わず、出土量も少ないため、一括して扱うこととする。

出土遺跡・地区は、試掘調査時の大塩向山遺跡E地区（第154図2～5）、同じくL地区（第154図6・10）、同じくG地区（第154図9）、同じくC地区（第154図8）、そして山腰遺跡（第154図7）である。いずれも包含層からの出土で遺構に伴うものではない。注記が不明確で出土が不明なものが1点ある（第154図1）。以下、各個に説明する。

（第154図1）は深鉢の口頸部片である。半裁竹管状工具による弧線文を配す。地文には節が荒く斜行する縄文RLを施す。（第154図2～5）は深鉢胴部片であり、（4・5）は同一個体である。2条一対の垂下沈線（5・4）や微隆帯（2・5）による直線的・曲線の区画文を有す。区画内部には棒状工具による刺突文を充墳的に施す。（第154図6・7）は深鉢頸部片であり、同一個体の可能性がある。赤褐色を呈し、乳白色を呈す鉱物とともに微細な砂粒を多く含む。器面の剥離が著しい。地文には縄文RLを施す。（第154図8）は深鉢胴部片で底部付近である。外面はナデ調整である。二次焼成による赤色化が顕著であり、微細な砂粒を多量に含む。（第154図9・10）は底部片である。（8）は底面を剥離することから、厚底の可能性がある。平面形は楕円形を呈す。（9）は底面をナデ調整する。器面の剥離や胎土の特徴は6・10と類似する。

以上の特徴から、（1）は中期中葉の里木Ⅱ式に比定できる。（2～5）は中期後葉の大杉谷式に比定される。（6～10）については、時間的位置づけが困難であり保留する。（山本孝一）



第154図 大塩向山遺跡・山腰遺跡出土縄文土器（縮尺1/3）

第2節 縄文時代の石器（第155～157図）

1. 構成と分布

石器の構成を第1表に示す。大塩向山遺跡では、道具類に狩猟具や漁撈具・工具有り、僅かに土掘具もある。凹石等の調理具は出土していない。石質は、チャートが9割強で、安山岩や砂岩等もある。器種別では、石鏃等の剥片石器はチャート主体である。削器や剥片で、安山岩が僅かにみられる。石鏃や石斧類は安山岩を主とし、砂岩も用いられる。

大塩向山遺跡は、尾根単位に区分けされており、地区ごとに記す。C・P地区は、尾根の狭い平坦面

で、剥片等が僅かに散在した。G・N地区は、山裾の平坦面から西斜面にかけ、道具類中心に剥片も少量出土した。G地区は、I地区からの流れ込みが混在すると考えられる。I地区は、尾根の狭い平坦面から東斜面にかけて出土した。全体の2/3を占め、中心的な地区である。道具類もあるが、石核や剥片・砕片等の石器製作による残滓が多い。O地区は、斜面で主に道具類が僅かに散在した。いずれの地区も、斜面では崩落土から出土している。

山腰遺跡では、剥片等が少量出土した。石質はチャート主体である。いずれも水磨が著しく、散在した。西側の高所から流れ込んだと考えられる。

第18表 石器組成表1

大塚向山遺跡

石核	石鏃	刮削	P.S.	東下	西下	石核	剥片	砕片	石鏃	打片	磨片	砥石	計
C-h	0	2	1	3	3	6	176	13	2	1	2	216	2
S-a									2			2	2
A-h		1					3		6	1	2	13	3
S-u												1	1
F	9	3	1	4	3	6	129	13	8	1	3	3	225

山腰遺跡

石核	剥片	砥石	計
C-h	10	2	12
S-a	10	2	12

第19表 石器組成表2

地区	石核	石鏃	刮削	P.S.	東下	西下	石核	剥片	砕片	石鏃	打片	磨片	砥石	計
G	C-h						6							6
	C-h	3					19	1						23
	S-a								1				1	2
	A-h									2	1			3
	S-u													1
I	C-h	1	1	1	3		6	121	13					146
	S-a									1				1
	A-h							1		4				5
	C-h	3	1		1	1		23					2	29
	S-a											1		1
N	C-h													
	S-a											1		1
	A-h											2		2
	C-h	2	1											3
	S-a													0
O	C-h					2		1						1
	S-a													0
	A-h													0
	S-a													0
	C-h													0
F	A-h													0
	C-h													0

2. 石器の形態

石鏃(第155図1~9) いずれも両面に調整されるが、基部と全体の形状から以下のように類別した。

1類(第155図1~7) 凹基無茎鏃。基部に抉入をもち、基部は尖鋭に作出される。三角形を呈す。2~5は、基端の突出が左右で異なる。6は基部が大きく抉入する。また、2と3は裏面、7は表面に素材面を残す。

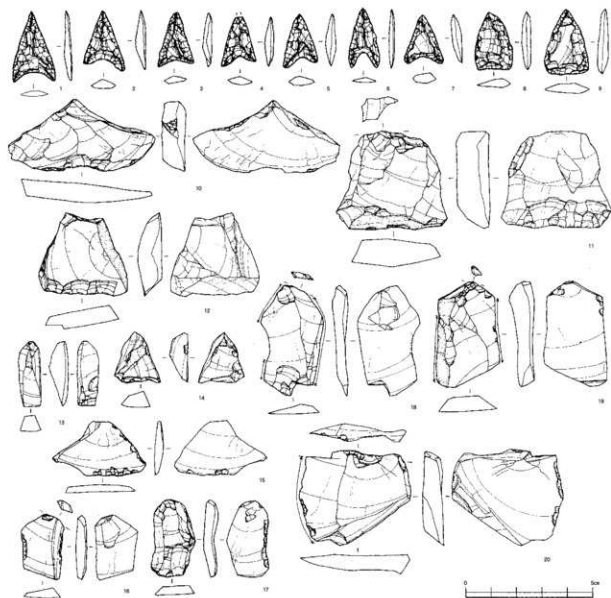
2類(第155図8、9) 平基無茎鏃。基部が平らに作出され、側縁は緩く湾曲する。ずんぐりした形状を呈す。

削器(第155図10~12) 10は安山岩製の横長剥片、11と12は寸詰まりな剥片が素材。10は、表面下端と右側縁一部に調整される。11は、表面下端に礫面を残し、裏面下端に調整される。12は、素材の裏面を石器の表面に設定し、表面の上下端に調整される。

楔形石器(第155図13) 両極打法により作出される。上下にバルブをもつ両極剥離はみられないが、表面上端と裏面下端に向向する複数の剥離面がある。また、上端に点状、下端には線状の潰れが形成される。

二次加工のある剥片(第155図14~17) 14と15は、三角形を呈す。14は、右半が折断され、表面下端と左側縁の裏面に調整される。15は、素材の裏面を石器の表面に設定し、右側縁と下端に調整される。また、14は上端、15は右端を先端とする石鏃未製品とも考えられる。16は両側縁一部、17は左側縁の裏面に調整される。また17は、右側縁上半に刃こぼれがみられる。

使用痕のある剥片(第155図18~20) 18と19は、共に刃器状剥片が素材で、両側縁に刃こぼれがみられる。また、下端は折れ面である。20は、寸詰まりな剥片が素材で、左側縁に刃こぼれがみられる。



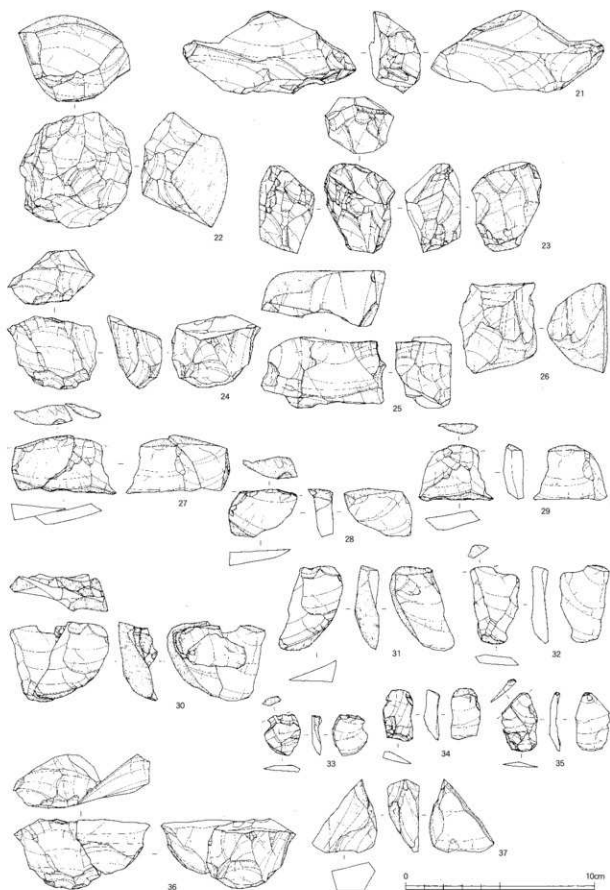
第155図 大塚向山遺跡・山腰遺跡出土石器(縮尺1/2)

石核(第156図21~26) 21は、表裏を作業面とし、上下両端から剥片剥離される。裏面から表面へ剥離作業が進行している。また、左端に稜面を残す。22~24は、上端の剥離面と下端の稜面を打面に設定する。22は表面、23と24は表裏を作業面とし、剥片剥離される。また23は、上設打面が調整され、表面の作業面も左端から調整されている。24は、右側からの剥離後に90度打面転位される。25は、上端の剥離面と左右両端の稜面を打面に設定する。表面と右側面を作業面とし、剥片剥離されている。また、左端から上端、右端の順で、90度打面転位しながら剥離作業が進行している。26は、裏面の稜面を打面に設定する。表面を作業面とし、中央へ向け剥片剥離されている。

接合資料1(第156図27~29) 27は、剥片2点の接合図。28と29は、寸詰まりな剥片で、打面や表面下端に稜面を残す。28、29の順で剥離される。

接合資料2(第156図30~35) 30は、剥片5点の接合図。いずれも縦長剥片で、打面や側面等に稜面を残す。剥離作業は、まず上方から31、32、33、次に右端へ90度打面転位し、34、35の順で剥離される。

接合資料3(第156図36、37) 36は、石核(24)と剥片1点の接合図。右側から37が剥離され、上下



第156図 大塚向山遺跡・山腰遺跡出土石器（縮尺1/2）

両端に90度打面転位して剥片剥離されている。また、37の右端と24の下設打面に残る礫面から復元すると、拳大の垂円礫が素材と考えられる。

石錘（第157図38～45） 38～41は切目石錘。38～40は小形、41は扁平な楕円礫が素材。上下端に切目を出す。42～45は打欠石錘。42～44は小形で扁平、45はやや大形の楕円礫が素材。表裏の上下端を調整する。

打製石斧（第157図46） 基部から刃部へ緩く開き、撥形を呈す。板状剥片が素材で、周辺に調整される。また、裏面の刃部に、左上方へ斜行する擦痕がみられる。

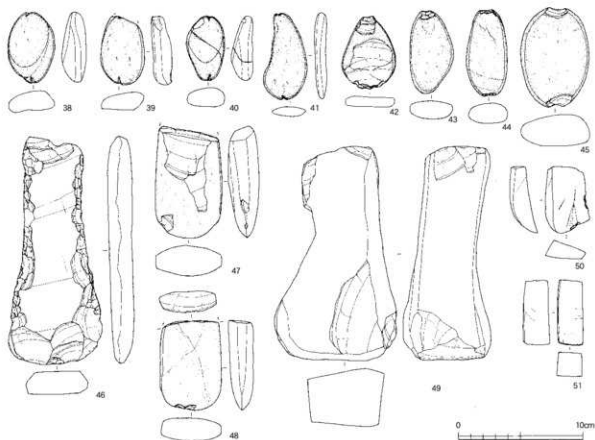
磨製石斧（第157図47、48） 側辺にはほぼ平行する面が作出され、断面は扁平な形状を呈す。共に敲打と研磨により作出されるが、48は、裏面左半と左側面に敲打痕が残る。

砥石（第157図49～51） 石質から、49は中砥、50と51は仕上砥と考えられる。49は、厚手の角形を呈す。側辺が湾曲し、器体が大きく反る。50は、扁平な板状を呈し、側辺が湾曲して反る。表面と左側面が砥面。51は、小形の角柱形を呈す。上下端以外が砥面となる。

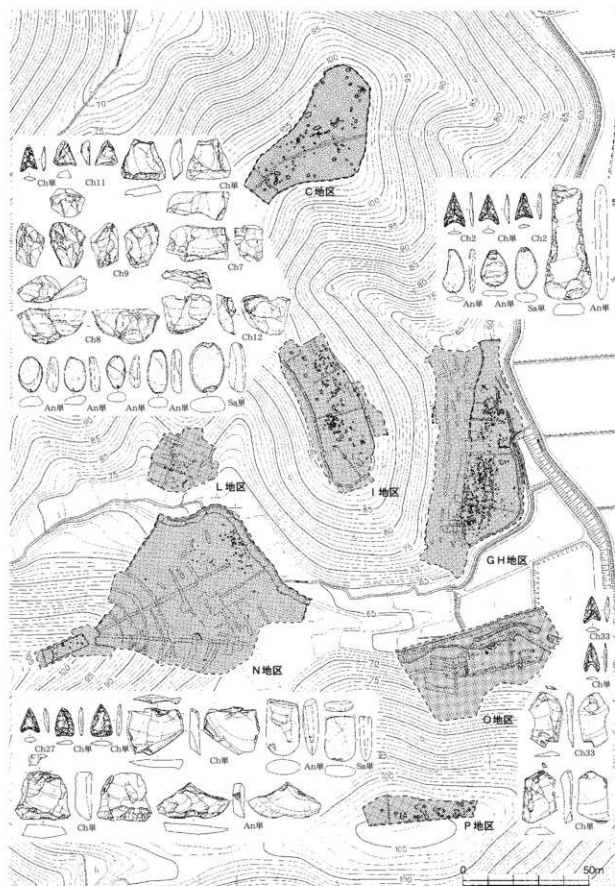
3. 大塩向山遺跡における石器の製作技術と組合せ

(1) 石器の形態と製作技術

石鏃は、凹基無茎鏃と平基無茎鏃に細分される。凹基無茎鏃は、基部に抉入をもち、基端が尖鋭に作出される。平基無茎鏃は、基部が平らに作出され、側縁が緩く湾曲してずんぐりした形状を呈す。共に薄手の剥片が素材。二次加工のある剥片の一部は、石鏃未製品とも考えられるが、積極的に認定できない



第157図 大塩向山遺跡・山腰遺跡出土石器（縮尺1/2）



第158図 大塚向山遺跡各地区における石器の組み合わせ図 (縮尺 1/1,500)

第20表 個体別資料組成表

地区	個体	類型	石器	石核	剥片	砕片	計	備考
C	C h 1	2			4	4		
	C h 準 3				2	2		
	C h 2	2	2		4	6	石鏃 2	
G	C h 3	2			5	1	6	
	C h 4	2			6	6		
	C h 5	3			2	2		
	C h 6	3			2	2		
	C h 準 3	1				1	石鏃 1	
	C h 7	1		1	8	1	10	
I	C h 8	1		3	4	1	8	
	C h 9	1		1	3	4		
	C h 10	1		1	2	3		
	C h 11	2	1		23	1	25	R F 1
	C h 12	2	1		9	1	11	P S 1
	C h 13	2	1		6	1	8	R F 1
	C h 14	2	1		5	6	11	R F 1
	C h 15	2			13	13		
	C h 16	2			12	1	13	
	C h 17	2			7	2	9	
	C h 18	2			5	5		
	C h 19	2			4	1	5	
C h 20	2			4	1	5		
C h 21	2			3	1	4		
I	C h 22	2				3	3	
	C h 23	2				2	1	3
	C h 24	2				3	3	
	C h 25	2				1	1	2
	C h 26	3				2	2	
	C h 準 3	2	2			2	4	石鏃 1・削器 1
	A 準 3	3				1	1	
	C h 27	2	1		4	4	5	石鏃 1
	C h 28	2	1		4	4	5	R F 1
	C h 29	2				6	6	
N	C h 30	2				4	4	
	C h 31	2				3	3	
	C h 32	3				2	2	
	C h 準 3	4				4	4	石鏃 2・削器 1・U F 1
	A 準 3	1				1	2	削器 1
	C h 33	3	2			2	2	石鏃 1・U F 1
O	C h 準 3	2				1	3	石鏃 1・U F 1
	A 準 3	3				1	1	
	C h 34	2				3	1	2
P	C h 35	3				2	2	
	C h 36	3				2	2	
C h 準 3	3					1	1	

い。素材の剥片から石鏃へ至る調整の工程は不詳である。削器等は、寸詰まりな厚手の剥片が素材。

I 地区では、石核や剥片・良好な接合資料が多く得られた。剥片剥離技術について記す。原石は、チャートで準大の亜円礫である。チャートは、日野川水系の上流域など遺跡周辺で採取できる。上下端や側端を打面とするが、多くは礫面のままであり、作業の進行により剥離面となる。表面や裏面を作業面とし、90度や180度に打面転位しながら剥片剥離される。打面と作業面は殆ど調整されず、位置関係も固定的不是な。剥片剥離により、寸詰まりな厚手の剥片、寸詰まりや縦長で薄手の剥片、他に多くの不定形な剥片や砕片が作出される。これらから各器種の素材を適宜選択して用いたと考えられる。

(2) 各地区における石器の組合せ

石器群はチャート主体で、石質による個体識別が容易であった。個体に分類し、各地区の構成を第1表に示した。石器群は、チャート51個体と安山岩4個体で、計55個体からなる。個体数は多いが、大半の個体は少量である。また、組成の違いから個体を3類別した。1類は、石核と剥片・砕片をもつ4個体。2類は、剥片と砕片をもつ25個体。3類は、砕片がなく、道具類や剥片の単独個体で26個体。石鏃や石斧等は全て単独個体である。

- 次に、類別した個体の構成を基に、組成の形成過程や性格について検討し、各地区を群別した(第158図)。
- I 群 I 地区で、1～3類がある。原石や石核が地区外から搬入される。ややまとまって剥片剥離され、石核や剥片・砕片が廃棄される。調整作業は殆どされない。作出された素材は、搬出されたとも考えられる。また、道具類も搬入され、周辺で使用・廃棄される。剥片剥離作業中心の場である。
- II 群 G と N 地区で、2・3類がある。原石や石核が地区外から搬入される。僅かに剥片剥離され、剥片や砕片が廃棄される。また、道具類がまとまって搬入され、周辺で使用・廃棄される。両地区に狩猟具があり、N 地区は石鏃の形態が他地区と異なる。他、G 地区は漁撈具と土掘具、N 地区は工具がある。剥片剥離作業よりも石器の使用・廃棄の場である。
- III 群 O 地区で、3類がある。剥片剥離はされていない。道具類が地区外から搬入され、周辺で使用・廃棄される。狩猟具と工具があり、石器の使用・廃棄の場である。
- IV 群 C と P 地区で、2・3類がある。剥片が搬入され、廃棄される。石器の製作・使用とも顕著でない。

第21表 石器観察表

番号	器種	地区	地点	形態	石質	個体	器長	器幅	器厚
-1	石鐮	G	E3 544		C h	C h 2	2.8	1.7	0.4
-2	石鐮	G	S F 11	基部左側が折れ。	C h	C h 9	2.4	1.7	0.5
-3	石鐮	G	E3 543	器体が反る。	C h	C h 2	2.2	1.5	0.4
-4	石鐮	I	H7 145	先端欠。	C h	C h 9	2.0	1.4	0.4
-5	石鐮	O	B3 3		C h	C h 33	2.1	1.4	0.5
-6	石鐮	O	B4 16	磨手に付着される。	C h	C h 9	2.4	1.3	0.3
-7	石鐮	N	山付1ト		C h	C h 27	2.0	1.6	0.5
-8	石鐮	N	B3 582	石質は白色のチャート。裏面に素材面を残す。	C h	C h 9	2.3	1.5	0.5
-9	石鐮	N	C 6 310	裏面に素材面を残す。	C h	C h 9	2.6	1.8	0.6
-10	刮削	N	B3 1474	素材割片は剥離面打面。	A n	A n 9	3.8	7.8	1.4
-11	刮削	N	F 4 1169	石質が軽い。素材割片は剥離面打面。	C h	C h 9	3.9	4.4	1.5
-12	刮削	I	1	素材割片は剥離面打面。	C h	C h 9	3.3	3.5	1.1
-13	F S	I	H9 202	表面一部に磨面を残す。	C h	C h 14	2.6	0.9	0.8
-14	F F	I	G 8 219	表面一部に磨面を残す。	C h	C h 11	2.0	2.0	0.8
-15	F F	I	I 8 194		C h	C h 10	2.2	3.7	0.5
-16	F F	I	H 8 208	素材割片は剥離面打面。	C h	C h 17	2.5	1.7	0.6
-17	F F	N	E3 1620	素材割片は剥離面打面。	C h	C h 28	3.1	1.8	0.6
-18	F F	O	C 5 17	素材割片は剥離面打面。	C h	C h 32	4.1	2.5	0.7
-19	F F	O	B5 10	素材割片は剥離面打面。表面一部に磨面を残す。	C h	C h 9	4.2	2.6	1.1
-20	F F	N	D 4 1143	素材割片は剥離面打面。	C h	C h 9	3.8	4.4	1.0
-21	石核	I	G 8 220	石質が軽い。	C h	C h 8	4.4	9.2	2.8
-22	石核	I	H 9 23	傘大の傘円縁が素材。	C h	C h 10	6.2	6.0	4.6
-23	石核	I	I 8 200	表面に磨面を残す。	C h	C h 9	4.8	3.8	3.1
-24	石核	I	J 8 S 3	石質が軽い。	C h	C h 8	3.9	4.7	3.0
-25	石核	I	H 9 203	傘大の傘円縁が素材。表面に磨面。	C h	C h 7	3.8	6.6	3.0
-26	石核	I	I 7 表土	傘大の傘円縁が素材。表面に磨面。	C h	C h 8	4.8	4.1	3.3
-27	接合資料 1	I		調片 (28) → 調片 (29)	C h	C h 17	3.2	5.6	1.1
-28	調片	I	H 8 13		C h	C h 17	2.6	3.7	1.4
-29	調片	I	H 10 69		C h	C h 17	3.0	4.0	1.2
-30	接合資料 2	I		調片 (31) → 調片 (32) → 調片 (33) → 調片 (34) → 調片 (35)	C h	C h 12	4.2	5.3	2.1
-31	調片	I	H 9 189		C h	C h 12	4.5	3.5	1.4
-32	調片	I	H 9 91		C h	C h 12	4.2	2.6	1.0
-33	調片	I	G 9 82		C h	C h 12	2.2	2.0	0.6
-34	調片	I	H 9 68		C h	C h 12	2.7	1.6	0.9
-35	調片	I	H 9 65		C h	C h 12	3.2	1.9	0.7
-36	接合資料 3	I		調片 (37) → 石核 (24)	C h	C h 8	3.8	7.3	2.9
-37	調片	I	G 7 132	石質が軽い。	C h	C h 8	3.9	3.4	1.8
-38	石錐	I	H 8 97	知目石錐。	A n	A n 9	5.7	3.7	2.0
-39	石錐	I	H 8 222	知目石錐。表面上半欠。	A n	A n 9	5.5	3.5	1.7
-40	石錐	I	H 8 188	知目石錐。表面一部欠。	A n	A n 9	5.2	3.1	1.8
-41	石錐	G	F 3 1006	知目石錐。	A n	A n 9	6.9	3.5	1.1
-42	石錐	G	I 200	打欠石錐。表面下半が未調整。	A n	A n 9	5.8	4.3	1.2
-43	石錐	G	I 208	打欠石錐。表面下半が未調整。表面一部欠。	S a	S a 9	6.6	3.5	1.8
-44	石錐	I	G 8 154	打欠石錐。表面一部欠。	A n	A n 9	6.9	3.3	1.8
-45	石錐	I	H 7 141	打欠石錐。	S a	S a 9	7.9	5.5	2.8
-46	打製石斧	G	C 5 490	両側面中程に溝れ。刃部磨風。	A n	A n 9	18.1	7.5	2.1
-47	打製石斧	N	D 4 236	基部欠。	A n	A n 9	9.0	5.3	2.6
-48	打製石斧	N	B 3 表土	刃部左側に溝れ。基部欠。	S a	S a 9	7.1	4.9	2.1
-49	砥石	O	表探	上下端以外が砥面。	S a	S a 9	17.1	9.8	7.1
-50	砥石	G	S P 157	砥面に磨行する磨痕。	T u	T u 9	5.4	3.6	2.3

(3) 時期と性格

土器や石器の形態・組成からみて、縄文時代中期後葉と考えられる。各地区は、尾根の狭い平坦面や山裾に立地し、住居跡等は検出されていない。重量のある調理具もなく、定住性の低さを指摘できる。また、地区ごとで組成の形成過程や作業内容が異なり、生業活動の違いを看取できる。大塚山遺跡の各地区は、狩猟や漁撈等を契機に営まれた短期的な集落と考えられる。

周辺で該期の例に上平吹遺跡がある。石鐮や剥片等の他に石皿や大形石棒もあり、集落の性格が大塚山と異なると推察される。また、日野川や足羽川水系の上流域では、大塚山や上平吹のようにチャート主体の石器群をもつ例が該期にみられる。九頭竜川水系は、安山岩主体の例が多く、対照的である。

(田中勝之)

第7章 まとめ

遺跡の確認と遺跡名の変更について

1 遺跡として確認するまで

大塩向山遺跡について、当初は（仮称）王子保山城跡として呼称して試掘調査から本調査まで対応してきた。対象となる尾根の西側山麓部には、本県でも有数の規模を誇る王子保窟跡群が展開し、試掘調査段階でも、当初想定した山城から須恵器窟跡を想定して行った。その結果、須恵器窟跡は確認されず、その性格は山岳祭祀（用語には問題があるが）に伴う遺跡であるとの結論に至ったことは、すでに刊行した報告書のまとめにおいて簡単に述べた（福井県埋蔵文化財調査報告 第87集 『大塩向山遺跡・山腰遺跡』一 国営日野川農業用水利事業に伴う発掘調査— 2005）。また少なくとも調査区内には須恵器窟も存在しないことも、今回の調査ではほぼ確定できたと考えている。同じ尾根の西側には大規模に須恵器窟跡群（王子保窟跡群）が展開するのに、東側（大塩向山遺跡）には窟跡が築造されなかったか。これについては十分な説明がつかない。地形の問題や原料の粘土、燃料となる森林（短期間の操業に限ればかもしれない）などについては尾根の東側と西側とも同じ条件である。むしろ製品の搬出を考えれば、西側には顕著な河川がなく、東側には日野川へつながる大塩谷川があって、その水運を利用すれば国府の推定地である現在の武生市街地への交通は利便性の高い位置にある。しかも王子保窟跡群、もしくは同時期の窟跡群も、王子保窟跡群からさらに西側に移動し、古代後半には旧朝日町・旧宮崎村の丹生窟跡群へ移り、最終的には旧宮崎村・旧織田町の小曾原周辺で日本六古窯の一つに数えられる越前焼生産地を展開して中世となる。つまり須恵器生産以降の古代・中世の窯業は日野川本流の水運に頼ることはなかったとも言える。ここでは発掘調査で検出されなかった須恵器窟跡について、これ以上の論及はしないが、このような窟跡群の移動の問題は十分に説明されていないし、問題は大きいといえることだけ触れておく。

さてこれまでも調査の経過や概要などでも述べてきたように、何度か発掘調査中に須恵器窟跡が見つかるものとして調査に臨み、上原真人先生（京都大学）や菱田哲郎先生（京都府立大学）のお二人にも、現地にお出でいただきご検討いただいた。また望月精司氏（石川県小松市教育委員会）や出越茂和氏（金沢市埋蔵文化財センター）にも状況をお話してご意見を伺った。いずれも須恵器の窟跡ではなく、山間寺院、もしくはその修行などの行為に相当するものであろうとのご意見であった。

今回の報告ではこのような皆様のご意見を参考に、遺跡の性格は山間寺院に関連するものとしてこの二遺跡を扱うこととした。

2 仮称王子保山城跡から大塩向山遺跡へ

さて現地踏査、もしくは試掘の当初段階で山城が存在する可能性があり、調査の着手段階で仮にはあるが遺跡名称となった王子保山城跡については、発掘調査の結果、少なくとも調査区内には山城の遺構は明確ではなかったことも、ある意味では問題である。しかし今回の発掘調査対象範囲には含まれない尾根頂部に二重の堀切があることは確認したが、それ以外の周辺にも山城として顕著な遺構は確認できず、この堀切以外に山城として顕著な遺構が確認されていないのも事実である。以下ここでは武生市街地を望む尾根でありながら、なぜ故に明確、もしくは堀切を数本でも廻らす山城が築城されることがなかったのかを、周辺の山城の状況を概観することによって検討したい。

中世の越前市は古代から越前の政治の中心地である。その後半の戦国時代になって、武生から離れた

一乗谷に朝倉氏が本拠地を構えても、朝倉氏が奉行人を置くなど（府中奉行人）、その意義は重要である。この武生の南部に位置することは越前の中心部から敦賀へ、または敦賀を迂回して近江へ行くには避けて通れない主要道である。近くには北国街道が南北に走るなど地域的にはかなり重要な位置を占めていたはずであるのに、この尾根筋に曲輪を巡らす山城を築く必要性がなかったかを考えておきたい。

まず大塩向山遺跡のある尾根が南越盆地周辺で占める位置を、現地に立って交通路の視点から検討してみる。武生は福井平野の南部に位置し、北は日野川などの河川を通じて福井平野の中心部となら福井、さらには九頭竜川以北の坂井平野へと続く。西は丹生山地を挟んで日本海となるが、朝倉氏の時代に整備されたと伝えられ武生市の史跡にも指定されている「馬借街道」で河野浦とつながる。東は越美山地からの峠越えとなって美濃と接する。しかし王子保地区に関係するのは南の敦賀、もしくは今庄経由での近江北部からの交通路である。越前の西部となる敦賀であるが、その間には標高760mほどの木ノ芽山嶺があって、気候的にもこれを境として大きく異なる。敦賀から入るには海沿いに近い山中峠を越えるルートと、木ノ芽峠を越えるルートの二つがある。また近江北部から敦賀を経由しないで、栃ノ木峠を越えて今庄・南条と日野川沿いに下ってくるルートがあるが、このルートは途中の今庄で敦賀から木ノ芽峠を越えるルートと合流する。上記いずれのルートとも王子保地区を通過するが、山中峠越えのルートは大塩向山遺跡からの見通しは悪い。また木ノ芽峠・栃ノ木峠越えは王子保付近では旧北国街道として知られるが、大塩向山遺跡からは正面に見据えることができるものの、街道筋の奥、つまり越前の入り口である敦賀・近江方面への視界が利かないばかりか、大塩村に隣接する藤本（旧南条町）さえも見えない。つまり北国街道を遠くまで見渡せることはできないほど平野部の片隅に引込んだ位置に大塩向山遺跡が立地する。つまり街道筋を眼下に見下ろしたり、遮るような立地の尾根ではなく、街道筋を抑えるには全く適さない場所であると言える。

中世城郭の立地に周辺がどのように見渡すことができるかが、防御に関する急峻な尾根であるなどの条件とともに、たんなる地図上だけの立地だけではなく、実際に交通路などが視認できることが山城にとって重要であろう。これを端的に示しているのが大塩向山遺跡の南にある柚山城跡である。柚山は新田義貞が、後醍醐天皇の南朝方として足利尊氏側の北朝方に対抗して立て籠もった城として著名であるが、その城域は標高492mの頂部の周辺に限られ、西に大きく日野川に突き出た尾根には及んでいない。日野川に沿ってある北国街道を眼下にするならこの尾根についても城域に含まれるか、こちらに城を築くべきところである。しかしこちらまで城域が及んでいないのには、その必要がないか、築城の目的が違うところがあったと考えられる。実はこの日野川を眼下に望む尾根では日野山から伸びる尾根が邪魔して、武生市の市街地が見えない。柚山城跡に立て籠もった新田義貞の当面の敵対勢力は古代以来の越前の中心地に拠点を構える北朝方の足利（斯波）高経であって、その陣を構えたと考えられる新善光寺城が見えなくては意味のないことである。つまり山城の選地にあたっては一定の高さと防御に適した山の形状に加え、周辺のどの地域を見渡すことができるかが重要事項であると言えよう。つまり高さとの山の形状の問題はともかく、戦略的に必要などを見渡すことのできない「向山」の位置には改めて山城を築く必要がなかったと想定されるのである。もしかりに確認された二重の堀切が山城の存在を示すものとすれば、それはこの二重堀切の南側の頂部がこの尾根では最高所で、ここから見渡すことのできる範囲が必要となって、この部分に見張り台程度を置いたために設けられたものと考えられる。またこの逆の意味で必要なのは大塩向山遺跡の南の尾根にある矢谷山城跡である。この城は旧南条町と武生市の境の標高224mの尾根頂部に位置し、三方向へ伸びる尾根をそれぞれ堀切で切断し、頂部に小さい

ながらも曲輪を設ける。この南は急斜面で、大塩八幡神社へ至る北へ伸びる尾根は、かなりはなれてはいるがその先端を大きな堀切がある。また日野川に沿って北へ伸びるもう1本の尾根には、自然地形を利用したと思われる大きな平坦地が三つほどあるが、堀切などの明確な構造物はない。つまり北国街道など日野川沿いに下るルートを眼下にすることができて、「向山」などの立地よりはるかに戦略的な価値は高い。

以上、「向山」が仮称王子保山城跡ではなく、大塩向山遺跡として城郭に関する遺跡ではないことが周辺のことから言えよう。

3 古代の大塩向山遺跡と山腰遺跡の評価

これまで各遺跡の事実記載にさいして、遺構・遺物ともに概要を述べてきた。

ここで繰り返されることもあるが、いくつかの事項について取り上げて再度確認し、両遺跡の意義付けを行いたい。

遺構としては立地や地形などから、尾根筋のC・I・P地区から焼土坑が検出され、G地区からは建物が想定されるピット群と竪穴が、N地区では掘立柱建物が検出されている。このことから前者の尾根筋の地区は火を盛んに燃やす行為が行われ、G・N地区はその行為を補助する地区と考えた。しかし後者について、N地区については建物が平野から見えない位置にあり、多くの遺物は別地点から出土している。G地区については平坦面全体が平野部に面し、ピット群周辺で多くの遺物が出土していることなど、遺構などから違う点が指摘できる。さらに出土遺物についても、N地区では煤が付着した土器が多く、灯明具とされる器種が目立つ。しかしG地区についてそれらはなく、灰軸陶器が目立つなど、遺物からも違いを指摘できるが、このG地区とN地区の性格の違いについては、現在のところ説明できない。

これまで越前で確認されている須恵器の様相とは大きく異なり、明らかに特殊な器種と考えられるものから、判断に迷うものまであって、本文中では器種分類が十分に行えなかった。大塩向山遺跡と山腰遺跡全体について、以下の点が指摘できよう。

- ①墨書土器は拾数点あるものの、特殊なものが多い。特に集落遺跡で多い吉祥句と判断できるものがない。
- ②硯などは1点もないが、蓋などを転用した「転用硯」はかなり認めることができる。
- ③供膳具である坏・埴・皿類は大量にあるものの、煮沸具である土師器の壺が非常に少ない。つまり俗な表現であるが、生活のにおいがしない。
- ④鉄鉢が多く、底部をケズルなど、金属器模倣の志向が強い土師器や、仏具系の須恵器の存在が非常に目立つ。
- ⑤また④とも関連するが、皿などの底部を丁寧にケズルものや、平底の壺（第45図2）など東海地方との交流も検討しなくてはならない。

これらの視点から、大塩向山遺跡は全体が祭祀場を含む寺と考えられる。それはN地区からまさしく「寺」の墨書土器が出土していることから、問題ないであろう。

山腰遺跡についてはやはり特殊な土器は多いものの、大塩向山遺跡の各地区のように特徴は見出せない。須恵器の土器量に対して、土師器、特に煮沸具が皆無に等しいと言える状況をどのように考えるかは、「国府」の墨書土器にそのヒントがあるように思われる。また煮沸具である土師器の長胴壺が極端に少ないのも、逆に国府に直接関連する遺跡で煮沸具に既に鉄鍋が導入されていた可能性を指摘できる。

以上、十分ではないが最後のまとめとしたい。

(赤澤徳明)

第8章 附編 大塩向山遺跡・山腰遺跡出土須恵器の胎土分析

調査の経緯などでの各所で大塩向山遺跡・山腰遺跡のある王子保地区は古代において須恵器生産が盛んであることを述べてきた。今回の調査では当初に須恵器窯跡を想定していたが、山岳祭祀関連の遺跡であるとの結論になった。越前では7・8世紀の王子保窯跡群から8世紀から9世紀には現在の丹生窯跡群へ移動すると想定されている。今回の報告にあって、越前市教育委員会から王子保窯跡の発掘資料を、越前町教育委員会から標津をはじめ小曾原窯跡などの表採資料と提供いただき、今回の調査で出土した大塩向山遺跡・山腰遺跡の資料を加えて、須恵器胎土の化学分析を行ったので、以下に報告していただく。なお大塩向山遺跡・山腰遺跡の本文中の図版との対比は下記の一覧を参考にされたい。

(赤澤徳明)

第22表 分析須恵器一覧表

発掘回次番号	原古書回次番号	発掘回次番号	原古書回次番号	発掘回次番号	原古書回次番号	発掘回次番号	原古書回次番号
上段	山腰8 第12801	上段	山腰27 第101185	上段	向山G64 第341031	上段	王子保9号
	山腰7 第103285		山腰26 第126822		向山G66 第330119		王子保9号
	山腰6 第103281		山腰25 第126827		向山G77 第380106		王子保9号
	山腰5 第103258		山腰20 第1400519		向山G129 第372105		王子保9号
	山腰10 第128284		向山N6 第711814		向山G130 第372109		標津K2-1
	山腰11 第107704		向山N10 第74181		向山G139 第321811		標津K2-2
	山腰12 第106926		向山N24 第731825		向山G151 第330812		標津K2-3
	山腰13 第105918		向山N33 第731828		王子保3号130		標津K2-4
	山腰14 第1271813		向山N43 第75182		王子保3号131		標津K2-5
	山腰15 第103929		向山N53 第711826		王子保3号136		標津K2-6
	山腰16 第1277930		向山N65 第75186		王子保3号137		標津K2-7
	山腰17 第103011		向山N87 第761812		王子保9号A30		標津K2-8
山腰18 第1031910	向山N92 第72185	王子保9号A40	標津K2-9				
山腰19 第103192	向山N35 第72181	王子保9号A41	標津K2-10				
山腰20 第982930	向山161 第331828	王子保9号K34	標津K2-11				
山腰21 第971919	向山G4 第341812	王子保9号K36	小曾原O2-1				
山腰22 第971933	向山G7 第371832	王子保9号K35	小曾原O2-2				
山腰23 第971923	向山G14 第371837	王子保9号K37	小曾原O2-3				
山腰24 第982914	向山12 第371832	王子保9号O47	小曾原O2-4				
山腰25 第105285	向山G29 第360519	王子保9号O48	小曾原O2-5				
山腰26 第1013223	向山G83 第341934	王子保9号O50	小曾原O2-6				

竹原弘展 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

大塩向山遺跡・山腰遺跡より出土した須恵器について蛍光X線分析装置による元素分析を行い、これら遺物の化学組成からみる材料的特徴を検討した。

2. 分析試料

分析対象遺物は、大塩向山遺跡出土須恵器24点、山腰遺跡出土須恵器25点の計49点である。また、比較対象として、王子保3号窯出土須恵器4点、同9号窯出土須恵器24点、標津出土須恵器11点、小曾原出土須恵器8点、神明ヶ谷出土須恵器13点、金比羅山登り口出土須恵器8点の各窯跡出土遺物も同時に分析を行った。なお、神明ヶ谷出土須恵器13点のうち、7点は焼成中に複数点が溶着してしまったと思われるSM1(図版6)より採取している。時期は考古学的編年により、山腰遺跡が8世紀から10世紀初め、向山遺跡が8世紀から9世紀、王子保が7世紀から8世紀前半、標津が8世紀後半、小曾原が9世紀後半から末期、神明ヶ谷が10世紀初めから前半、金比羅山登り口が10世紀前半から中頃に比定されている。

3. 分析方法

胎土分析には各遺物よりガラスビードを作成し、それを分析試料とするガラスビード法を用いた。

まず必要量を各遺物より岩石カッターで切り取り、表面の自然釉や付着土壌などの影響を排除するた

め、岩石カッターで表面を十分に削り取った後、精製水にて超音波洗浄を行った。乾燥後、セラミック乳鉢で粉末にして、電気炉で750℃、6時間焼成した後、デシケータ内で放冷し、1.8000g秤量した。これを、無水四ホウ酸リチウム $Li_2B_4O_7$ と、リチウムメタボレイド $LiBO_2$ を8:2の割合で調整した融剤3.6000gと十分に混合し、白金製のつばに入れ、ビードサンプラー（NT-2000型；株式会社科学製）にて約750℃で250秒間予備加熱し、約1100℃で150秒間溶解させ、約1100℃で450秒間揺動加熱してガラスビードを作成した。

分析はフィリップス社製波長分散型蛍光X線分析装置MagiX（PW2424型、ターゲットはロジウムRh）にて、独立行政法人産業技術総合研究所地質調査総合センターおよび米国標準技術研究所（NIST）の岩石標準試料計16種類を用いた検量線法による定量分析を行った。定量元素は、酸化ナトリウム Na_2O 、酸化マグネシウム MgO 、酸化アルミニウム Al_2O_3 、酸化ケイ素 SiO_2 、酸化リン P_2O_5 、酸化カリウム K_2O 、酸化カルシウム CaO 、酸化チタン TiO_2 、酸化マンガン MnO 、酸化鉄 Fe_2O_3 、ルビジウムRb、ストロンチウムSrである。

4. 分析結果

分析の結果、 SiO_2 が63.1~76.7%、 Al_2O_3 が15.5~27.8%と多く、定量元素の90%前後を占める。続いて、 Fe_2O_3 が2.48~6.18%、 K_2O が0.93~3.06%、 TiO_2 が0.82~1.36%、 MgO が0.64~1.40%、 Na_2O が0.07~0.97%、 CaO が0.11~0.45%、 P_2O_5 が0.020~0.390%、 MnO が0.011~0.088%、Rbが46~141ppm、Srが36~97ppmであった。分析結果を表1、表2に示す。

5. 考察

最初に生産地遺跡である、王子保、樫津、小曽原、神明ヶ谷、金比羅山登山口の各窯跡出土試料を相互比較し、それぞれの化学組成上の特徴について述べる。

まず図1に Al_2O_3 - SiO_2 の分布図を見ると、すべての試料が Al_2O_3 、 SiO_2 の含有量の合計90%前後で直線的に分布している様子が見て取れる。そして、王子保はいずれも SiO_2 が70%以上で図の右下に集まり、小曽原、神明ヶ谷、金比羅山登山口は1点の例外（OZ1）はあるものの殆どが SiO_2 が70%未満と少なく図の左上に集まる。樫津は SiO_2 68.4~75.6%と広く分布しているが、一部（KZ7、KZ8）を除き殆どはちょうど両者の中間辺りに分布する。このことは各窯跡出土須恵器胎土の特徴的差異といえよう。さらに、小村・藤根（2001）は、中世東海地方の山茶碗の材料的な検討において、粘土の化学組成は Al_2O_3 が比較的多く砂粒は SiO_2 が多いため、 Al_2O_3 と SiO_2 の組成比の直線の変化は、同一材料の粘土と砂粒の混合比の変化を表しているとしている。これを適用すると、土器材料の粘土と混和材（砂粒）の混合において、王子保は砂粒成分の量が多く、小曽原、神明ヶ谷、金比羅山登山口は砂粒成分の量が少ないということになる。さらに、7世紀から8世紀前半の王子保から8世紀後半の樫津を経て、9世紀後半から10世紀中頃の小曽原、神明ヶ谷、金比羅山登山口へと、土器材料の混和材の混合比の推移を示している可能性も考え得るが、少なくとも肉眼で観察出来る範囲においては砂粒の存在比は各窯跡間にそこまで変化は見受けられなかったため、これについては今後とも検討を重ねていく必要があろう。いずれにせよ、 Al_2O_3 、 SiO_2 の比率が、少なくとも王子保の試料と小曽原、神明ヶ谷、金比羅山登山口らの試料との間に明確な差異が見られた事は事実である。

Al_2O_3 、 SiO_2 以外の各元素の含有量を見てみる（図2~4）。王子保は、 MgO 、 CaO 、 Sr において他の窯跡より含有量が多い傾向にある。なお、3号窯と9号窯の間には差異は見られなかった。樫津は全体的に分布範囲が広い傾向にあるが、 K_2O とRbが他より含有量が少ないのが特徴的である。

小曾原、神明ヶ谷、金比羅山登り口は、比較的良く似た組成をしていたが、S rにおいて神明ヶ谷がやや含有量が多い傾向が見られた。しかし、総じて見ると、窯跡間でいずれかが重複した組成となることが多く、明確な差異は見出し難かった。

また各窯跡の化学組成は、ある程度の窯跡特有の傾向は見られるものの完全に窯跡内で一致しているわけではないが、その中において、溶着した資料からの採取であり、きわめて同時性が高いと考えられる神明ヶ谷のSM1-1～SM1-7の場合は、Na₂Oなど一部を除いて非常によく似た組成を示した。このことは同一窯跡出土遺物の化学組成のばらつきは、分析装置の測定誤差や、遺物からの試料採取量や採取位置の違いによるもの（すなわち土器一個体の不均一性）などではなく、同一窯跡出土各資料の材料にある程度ばらつきがあったことを示していることに他ならない。そのばらつきは、工人単位での土器材料の調製割合の個性に由来するのか、或いは粘土などの材料自体の化学組成のばらつきによるものなのか、そして極めて良く似た組成を示す一群の単位がどれくらいの量になるのか、今後の課題として、ひとつの窯跡について詳細に検討してみるのも、価値があると思われる。

続いて、上述の各窯跡の化学組成上の特徴と比較して、大塩向山、山腰両遺跡出土試料を見ていくと、まず大塩向山のN6、N8、N10、山腰のNo4、No9、No11、No17が樫津の組成に比較的近く、大塩向山のG8が王子保窯の組成に比較的近い傾向がそれぞれ見られた。但し、これら消費地遺跡出土遺物はそれぞれの窯跡のデータに完全に一致しているわけではなく、必ずしも当分析で測定した各窯跡のいずれかの生産によるとは限らないことは、当然考慮しなければならず、今後とも分析事例を増やしていく必要がある。また、山腰のNo10、No15、No19は非常に良く似た化学組成をしており、ちょうど上述の神明ヶ谷のSM1-1～1-7の関係に極めて近いと思われるが、各窯跡の重複領域の値を示すことが多く、特別どの窯跡の試料の化学組成に近いという結果は見られなかった。

6. 終わりに

大塩向山遺跡、山腰遺跡ならびに王子保、樫津、小曾原、神明ヶ谷、金比羅山登り口の窯跡出土の須恵器胎土分析を行い、以下の結果を得た。

- ・A₂O₃・SiO₂の分布図において、SiO₂約70%を境界に、王子保窯の試料と、小曾原、神明ヶ谷、金比羅山登り口らの試料との間に明確な差異が見られた。樫津は両者の中間に広く分布した。
- ・A₂O₃、SiO₂以外の各元素の含有量は、各窯跡間で多少の差異は見られるものの、全体的には窯跡間でいずれかが重複した組成となることが多く、明確な差異は見出し難かった。
- ・神明ヶ谷のSM1-1～SM1-7は、非常によく似た組成を示しており、一窯跡内でもある程度の単位ごとのばらつきがあることが示された。今後、ひとつの窯跡について詳細に検討してみる価値があると思われる。
- ・大塩向山、山腰遺跡出土須恵器については、山腰遺跡内において互いに非常に良く似た化学組成を示したものはあったものの、分析比較対象となった各窯跡の化学組成と比較的近い組成は見せるものの、完全に一致するものは見出せず、産地を決定させるには至らなかった。

引用・参考文献

- 小村美代子・藤根久 (2001) 須恵質土器胎土中の砂粒分の化学的評価, 日本文化財科学会第18回大会研究発表要旨集, 114 - 115, 日本文化財科学会
- 小村美代子・藤根久 (2002) 山薬碗胎土の化学的評価, 日本文化財科学会第19回大会研究発表要旨集, 60 - 61, 日本文化財科学会

第23表 胎土分析結果(1)

道 路 名	産物 No	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	Total	Rb	Se	産物 No	
		(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(ppm)	(ppm)		
大 塚 向 山 道 路	N地区	N1	0.74	0.72	23.7	67.8	0.023	2.91	0.21	0.84	0.018	4.45	101.3	128	66	N1
		N2	0.56	1.15	18.1	72.8	0.020	2.22	0.25	1.04	0.031	3.64	99.9	122	97	N2
		N3	0.56	1.20	18.9	71.4	0.044	2.17	0.23	1.20	0.029	4.30	101.1	118	87	N3
		N4	0.14	0.81	18.0	75.2	0.025	1.98	0.17	1.04	0.016	3.50	100.9	110	56	N4
		N5	0.16	0.89	22.4	69.1	0.040	0.93	0.11	1.31	0.021	5.46	100.4	46	37	N5
		N6	0.32	1.13	28.2	65.1	0.056	1.48	0.16	1.32	0.033	4.98	100.8	90	55	N6
		N7	0.74	1.40	21.2	68.8	0.025	2.32	0.35	1.13	0.033	4.79	100.8	129	93	N7
		N8	0.32	1.28	21.8	68.9	0.048	1.77	0.25	1.15	0.031	4.76	100.3	100	68	N8
		N9	0.32	1.19	20.7	70.0	0.043	1.86	0.21	1.15	0.027	4.61	100.1	100	70	N9
		N10	0.45	0.98	18.5	73.4	0.027	1.84	0.24	1.36	0.027	4.36	101.1	103	63	N10
大 塚 向 山 道 路	G地区	G1	0.51	0.73	23.7	67.0	0.070	2.48	0.14	0.89	0.015	5.13	100.6	112	59	G1
		G2	0.73	1.11	18.6	71.1	0.059	2.13	0.21	1.11	0.033	4.97	100.0	108	76	G2
		G3	0.50	0.90	27.3	63.1	0.067	2.16	0.25	0.98	0.015	5.19	100.6	104	67	G3
		G4	0.45	1.21	21.5	69.9	0.045	2.05	0.25	1.21	0.027	4.04	100.7	118	75	G4
		G5	0.65	0.78	24.8	64.0	0.082	2.53	0.18	0.97	0.014	6.18	100.1	122	69	G5
		G6	0.51	1.19	18.4	71.8	0.063	1.99	0.20	1.27	0.037	5.25	100.7	108	82	G6
		G7	0.64	1.21	22.6	67.1	0.046	2.45	0.18	1.05	0.028	5.80	101.1	137	66	G7
		G8	0.61	1.05	21.7	72.5	0.025	2.40	0.35	1.28	0.028	4.03	101.4	131	83	G8
		G9	0.15	0.98	19.5	71.9	0.027	1.86	0.16	1.05	0.015	4.44	100.1	102	47	G9
		G10	0.64	1.14	19.8	70.2	0.043	2.16	0.30	1.03	0.027	3.98	99.3	119	77	G10
		G11	0.07	0.87	17.5	74.7	0.145	1.67	0.12	1.10	0.011	4.30	100.4	86	36	G11
		G12	0.14	1.14	21.1	68.7	0.066	2.10	0.19	1.11	0.019	5.13	99.7	119	50	G12
		G13	0.30	1.28	22.0	69.6	0.112	2.19	0.17	1.15	0.033	4.06	101.0	115	73	G13
		G14	0.31	1.14	20.9	70.6	0.043	2.03	0.22	1.19	0.020	4.62	101.1	112	63	G14
山 崎 道 路	1	0.20	0.97	20.5	71.6	0.187	1.88	0.16	1.27	0.025	4.54	101.3	108	54	1	
	2	0.61	1.30	21.9	70.2	0.109	2.08	0.25	1.22	0.031	3.86	101.6	116	78	2	
	3	0.42	1.16	20.7	70.0	0.154	2.17	0.19	1.11	0.036	3.81	99.7	119	70	3	
	4	0.52	1.06	21.8	67.4	0.244	1.34	0.25	1.28	0.088	4.26	100.2	73	67	4	
	5	0.26	1.11	20.9	69.8	0.198	2.08	0.14	1.05	0.033	4.16	99.8	119	62	5	
	6	0.51	1.26	21.8	67.8	0.067	2.30	0.28	1.09	0.036	6.13	101.3	127	83	6	
	7	0.56	1.10	20.4	71.6	0.056	2.40	0.11	1.23	0.031	3.95	101.4	132	70	7	
	8	0.50	1.12	20.1	71.8	0.057	2.19	0.25	1.13	0.029	4.22	101.3	120	77	8	
	9	0.30	1.02	20.7	66.2	0.395	1.32	0.17	1.35	0.022	4.04	101.5	75	53	9	
	10	0.23	0.90	18.4	72.7	0.028	2.17	0.30	1.05	0.015	3.26	100.0	122	70	10	
	11	0.41	1.06	25.8	67.1	0.148	1.56	0.19	1.30	0.020	4.04	101.6	88	56	11	
	12	0.63	1.21	21.0	69.6	0.129	2.15	0.28	1.13	0.030	3.73	99.8	117	85	12	
	13	0.51	1.15	20.2	71.6	0.054	2.23	0.19	1.18	0.028	4.07	101.2	123	72	13	
	14	0.82	1.24	21.2	70.3	0.044	2.18	0.29	1.14	0.031	3.60	100.9	118	79	14	
	15	0.21	0.85	17.9	74.7	0.161	2.16	0.27	1.00	0.016	3.22	100.5	113	73	15	
	16	0.52	1.19	20.3	70.5	0.170	2.02	0.23	1.17	0.030	3.91	100.1	108	77	16	
	17	0.34	1.04	25.3	66.7	0.175	1.07	0.18	1.35	0.065	4.68	100.8	39	53	17	
	18	0.90	1.25	20.2	69.0	0.261	2.38	0.16	1.11	0.046	5.80	101.2	112	69	18	
	19	0.24	0.91	18.3	74.1	0.023	2.20	0.30	1.05	0.014	3.27	100.4	119	71	19	
	20	0.30	1.04	18.9	72.5	0.109	2.08	0.23	1.09	0.023	3.50	99.9	113	72	20	
	21	0.49	0.78	21.4	70.1	0.057	2.78	0.14	0.90	0.013	2.67	101.4	135	61	21	
	22	0.67	1.16	22.0	68.1	0.072	2.27	0.27	1.00	0.020	4.51	100.1	120	80	22	
	23	0.93	1.28	20.5	71.1	0.059	2.30	0.27	1.12	0.029	4.11	101.7	124	88	23	
	24	0.57	1.18	21.0	69.8	0.043	2.30	0.24	1.03	0.020	4.53	100.7	124	77	24	
	25	0.51	1.06	20.1	71.2	0.107	2.28	0.27	1.17	0.021	5.22	101.9	134	77	25	

第8章 附編 大塚向山遺跡・山腰遺跡出土須恵器の胎土分析

第24表 胎土分析結果(2)

遺跡名	遺物 No	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	Total	Rb	Sr	遺物 No
		(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(ppm)	
王子塚 9号塚	1	0.61	1.03	18.2	70.5	0.020	2.13	0.45	0.98	0.021	3.32	97.1	121	92	1
	2	0.48	1.05	15.5	75.8	0.023	1.54	0.32	1.14	0.016	3.10	99.0	82	74	2
	3	0.52	1.04	16.9	74.9	0.024	2.00	0.36	1.02	0.016	2.78	99.6	108	81	3
	4	0.61	1.02	15.6	76.7	0.023	1.87	0.36	1.07	0.016	2.90	100.1	103	81	4
	1	0.61	0.94	17.4	75.0	0.023	2.05	0.38	0.98	0.019	2.91	100.3	114	85	1
	2	0.63	1.02	18.5	73.7	0.023	2.20	0.41	1.00	0.016	2.91	100.3	119	90	2
	3	0.61	0.99	18.2	73.1	0.022	2.11	0.40	0.94	0.016	2.91	99.2	117	86	3
	4	0.57	0.99	18.5	74.3	0.022	2.23	0.38	0.95	0.014	2.81	100.8	116	86	4
	5	0.63	1.01	18.5	73.4	0.022	2.17	0.41	1.00	0.016	2.92	100.3	119	90	5
	6	0.60	1.00	18.2	74.4	0.022	2.21	0.41	0.96	0.015	2.95	100.9	120	89	6
	7	0.60	1.04	18.7	72.9	0.023	2.32	0.42	0.96	0.016	3.15	100.2	121	93	7
	8	0.58	1.00	18.6	74.3	0.022	2.01	0.36	1.00	0.014	2.83	100.7	113	86	8
	9	0.75	1.09	19.3	71.0	0.037	2.33	0.33	1.11	0.021	4.54	100.4	123	84	9
	10	0.73	1.10	19.5	71.3	0.038	2.26	0.33	1.14	0.021	4.76	101.2	123	84	10
11	0.60	0.94	17.4	75.2	0.022	1.85	0.34	1.01	0.014	2.62	100.0	99	82	11	
12	0.63	1.05	18.4	74.2	0.024	2.29	0.44	1.04	0.017	3.02	101.2	124	94	12	
13	0.54	0.99	18.4	73.9	0.022	1.94	0.37	0.99	0.015	3.03	100.1	104	83	13	
14	0.62	1.07	19.3	73.5	0.023	2.25	0.41	1.00	0.015	3.07	101.2	127	93	14	
櫻井	KZ 1	0.40	0.91	21.1	70.7	0.058	1.46	0.26	1.27	0.030	4.79	101.0	70	63	KZ 1
	KZ 2	0.55	0.93	22.7	70.8	0.054	1.73	0.26	1.25	0.016	3.36	101.6	86	78	KZ 2
	KZ 3	0.52	0.97	22.4	70.0	0.041	1.78	0.23	1.23	0.016	3.58	100.8	96	77	KZ 3
	KZ 4	0.45	0.81	21.0	71.9	0.046	1.63	0.19	1.26	0.017	4.21	101.5	82	63	KZ 4
	KZ 5	0.42	0.80	21.3	70.7	0.047	1.59	0.19	1.25	0.016	4.35	100.6	84	62	KZ 5
	KZ 6	0.50	1.07	23.7	68.7	0.063	1.81	0.33	1.17	0.019	3.88	101.3	99	76	KZ 6
	KZ 7	0.66	0.89	19.7	72.7	0.024	1.77	0.40	0.86	0.016	2.86	99.9	94	95	KZ 7
	KZ 8	0.63	0.71	18.6	75.6	0.023	1.82	0.24	0.90	0.012	4.28	101.1	101	71	KZ 8
	KZ 9	0.41	1.01	23.1	68.4	0.051	1.55	0.33	1.23	0.023	4.27	100.3	85	80	KZ 9
	KZ 10	0.55	1.02	23.7	68.4	0.050	1.69	0.33	1.19	0.021	4.56	101.5	91	82	KZ 10
小曾塚	KZ 11	0.29	1.06	22.5	68.5	0.054	1.18	0.21	1.36	0.020	5.96	100.7	66	58	KZ 11
	OZ 1	0.73	0.73	18.3	73.9	0.028	2.37	0.28	1.06	0.016	3.19	100.6	121	86	OZ 1
	OZ 2	0.47	0.86	24.8	67.0	0.051	2.45	0.20	0.95	0.014	3.35	100.4	118	73	OZ 2
	OZ 3	0.45	0.89	26.1	66.9	0.041	2.24	0.19	0.96	0.013	3.02	100.8	107	64	OZ 3
	OZ 4	0.68	0.68	25.6	66.1	0.046	2.64	0.20	0.92	0.014	4.75	100.6	126	70	OZ 4
	OZ 5	0.67	0.65	27.8	65.2	0.034	2.47	0.18	0.98	0.012	4.42	101.7	126	67	OZ 5
	OZ 6	0.67	0.66	25.1	65.4	0.041	2.62	0.17	0.91	0.014	5.45	101.0	120	63	OZ 6
	OZ 7	0.70	0.82	25.0	66.5	0.028	2.52	0.22	0.94	0.017	4.47	101.2	120	69	OZ 7
OZ 8	0.76	0.67	23.6	65.7	0.066	2.79	0.22	0.91	0.015	6.01	100.7	124	73	OZ 8	
神明ヶ谷	SM 1	0.80	0.79	24.7	66.4	0.041	2.69	0.28	0.90	0.015	4.63	101.3	129	79	1
	2	0.78	0.80	24.7	66.0	0.042	2.66	0.27	0.90	0.016	4.72	100.8	127	75	2
	3	0.77	0.80	24.8	66.1	0.042	2.68	0.27	0.91	0.016	4.90	101.3	132	81	3
	4	0.80	0.80	24.5	65.9	0.041	2.66	0.28	0.88	0.016	4.59	100.5	129	80	4
	5	0.80	0.80	24.9	66.6	0.042	2.72	0.27	0.91	0.016	4.61	101.6	134	78	5
	6	0.86	0.79	24.7	65.9	0.042	2.61	0.31	0.88	0.018	4.67	100.7	127	80	6
	7	0.97	0.82	24.7	66.6	0.042	2.63	0.32	0.89	0.017	4.49	101.5	131	81	7
	SM 2	0.55	0.88	24.9	66.8	0.040	2.49	0.21	0.91	0.018	3.26	100.0	121	71	SM 2
	SM 3	0.52	0.83	27.4	64.7	0.031	2.74	0.13	0.93	0.013	4.64	102.0	133	59	SM 3
	SM 4	0.82	0.64	22.4	68.4	0.051	3.06	0.24	0.82	0.018	4.02	100.5	128	75	SM 4
	SM 5	0.85	0.77	23.3	69.3	0.029	2.85	0.21	0.89	0.014	3.36	101.6	128	75	SM 5
	SM 6	0.61	0.75	24.2	66.4	0.034	2.76	0.29	0.90	0.013	4.44	100.4	120	75	SM 6
	SM 7	0.62	0.80	25.2	67.2	0.027	2.51	0.43	1.02	0.011	3.44	101.4	112	90	SM 7
新比羅山遺跡	KP 1	0.47	0.75	25.1	66.3	0.037	2.71	0.15	0.94	0.014	4.51	101.0	129	58	KP 1
	KP 2	0.80	0.90	23.4	66.9	0.049	2.82	0.30	0.92	0.016	4.18	100.3	137	67	KP 2
	KP 3	0.58	0.73	25.2	67.3	0.029	2.76	0.18	0.89	0.014	4.67	101.6	132	65	KP 3
	KP 4	0.56	1.15	26.6	64.7	0.048	2.47	0.25	0.91	0.023	4.00	100.8	141	68	KP 4
	KP 5	0.68	0.65	23.2	68.1	0.028	2.71	0.19	0.94	0.014	4.50	101.1	117	69	KP 5
	KP 6	0.55	0.75	25.0	66.7	0.030	2.74	0.18	0.90	0.012	3.87	100.8	128	67	KP 6
	KP 7	0.65	0.83	24.4	67.8	0.030	2.67	0.23	0.85	0.017	3.49	101.2	127	72	KP 7
	KP 8	0.30	0.71	25.0	66.0	0.031	2.57	0.16	0.98	0.013	4.36	100.3	120	62	KP 8
最大値	0.97	1.28	27.8	76.7	0.109	3.06	0.45	1.36	0.030	6.01	102.0	141	95	最大	
最小値	0.24	0.64	15.5	64.7	0.020	1.18	0.13	0.82	0.011	2.48	97.1	66	58	最小	

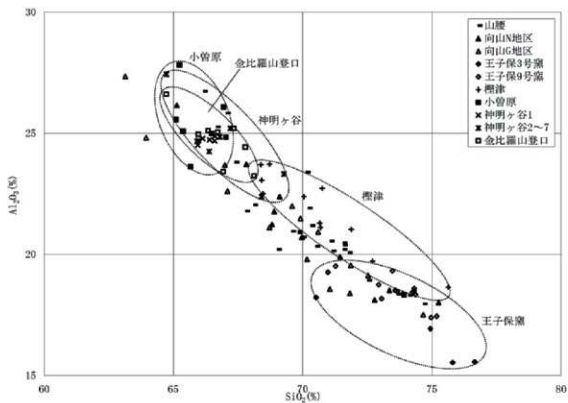


図1 Al_2O_3 - SiO_2 分布図

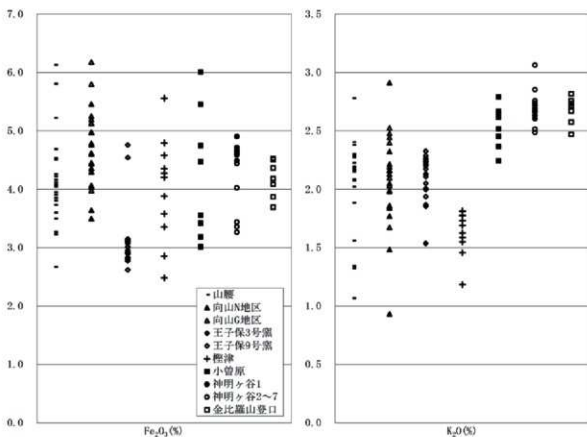


図2 各元素含有量 (1)

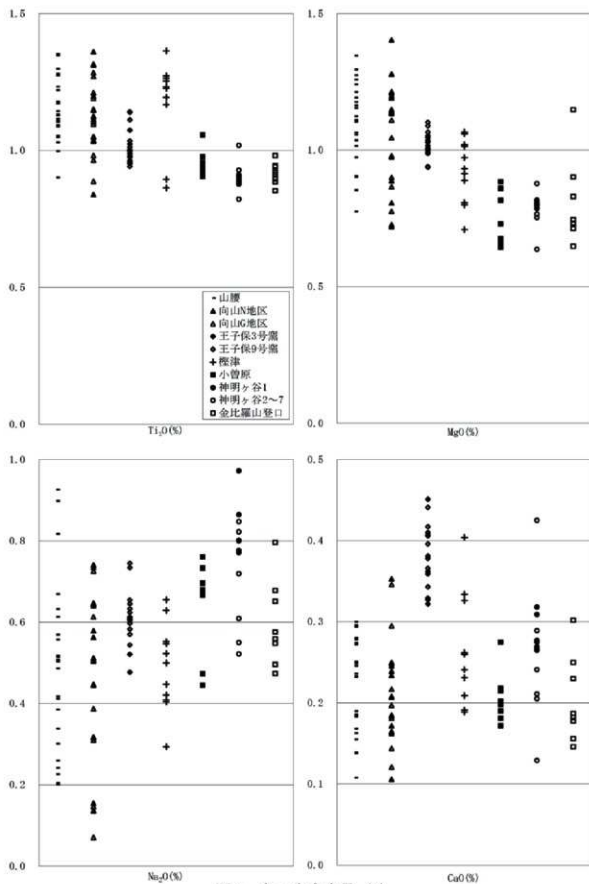


図3 各元素含有量 (2)

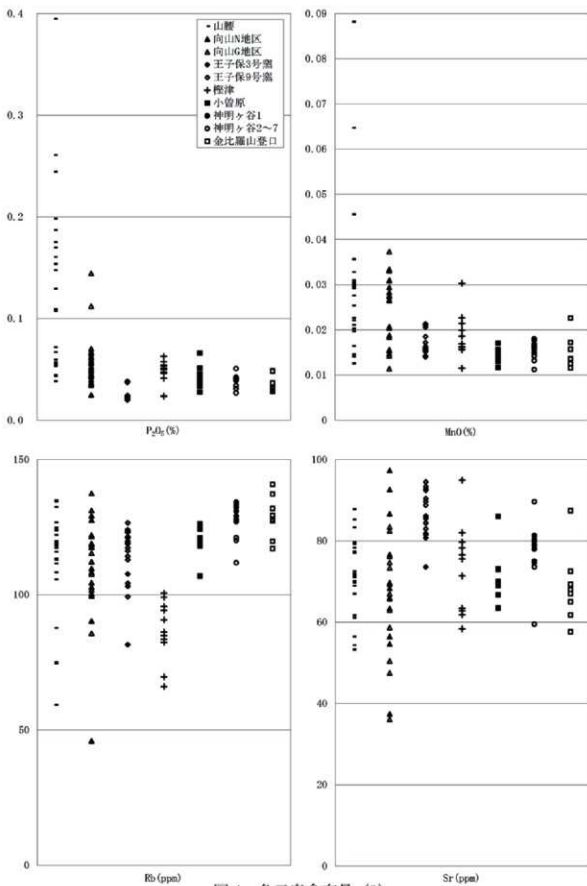
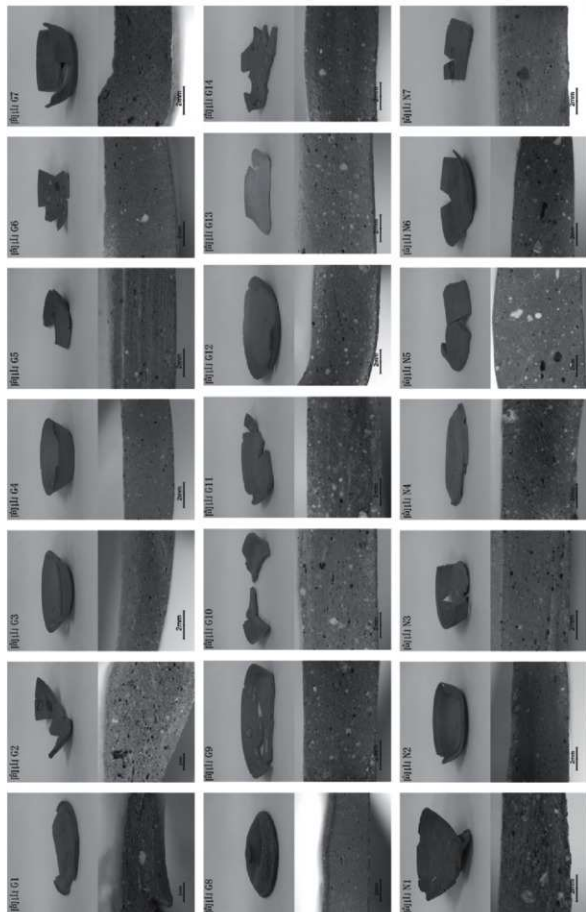
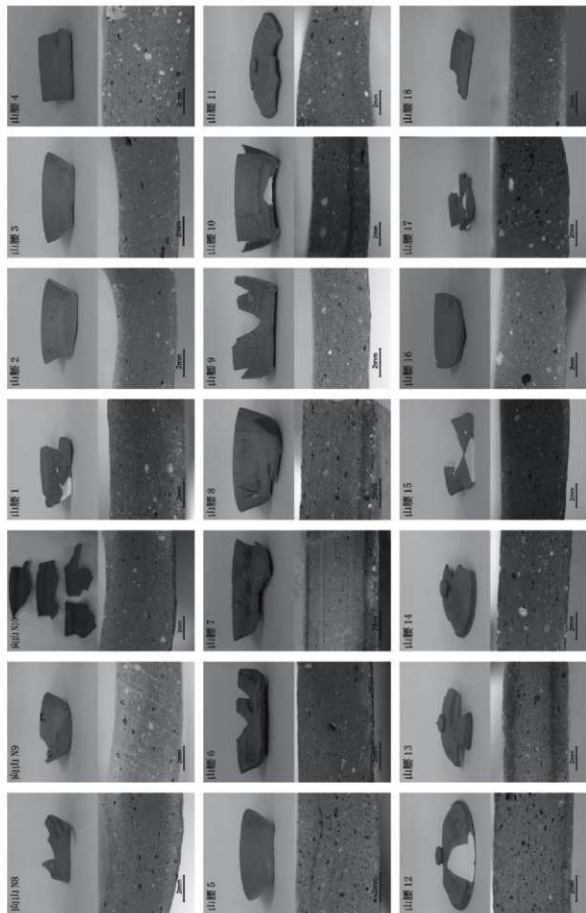


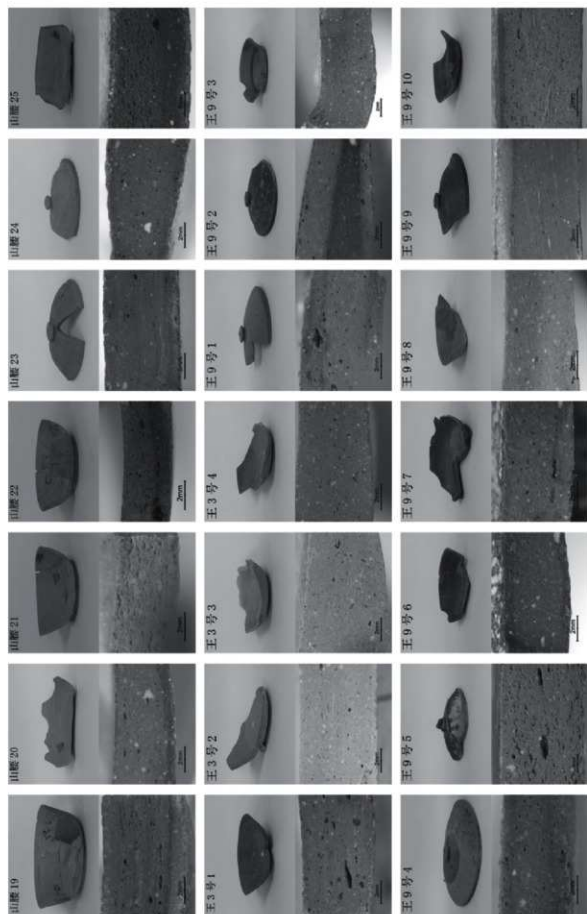
图4 各元素含有量 (3)



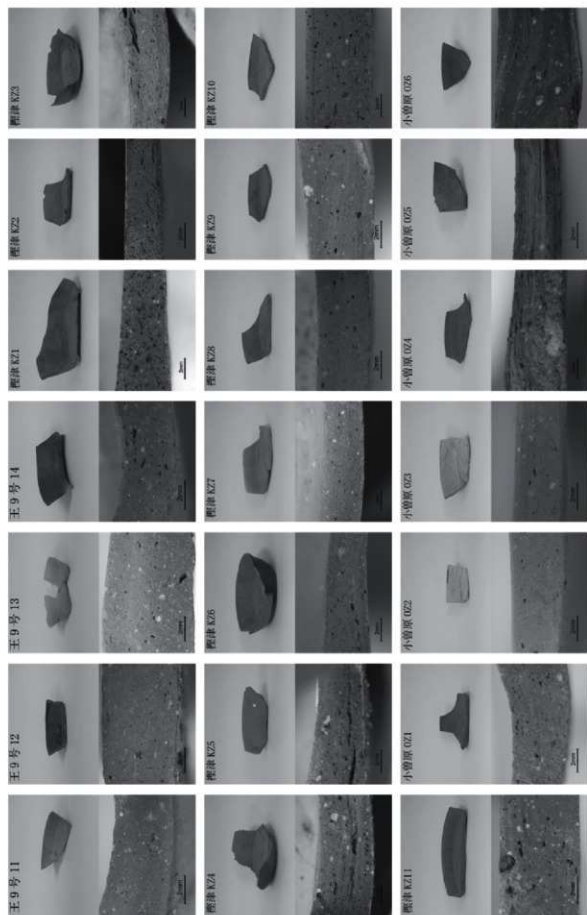
図版1 分析対象遺物(1)



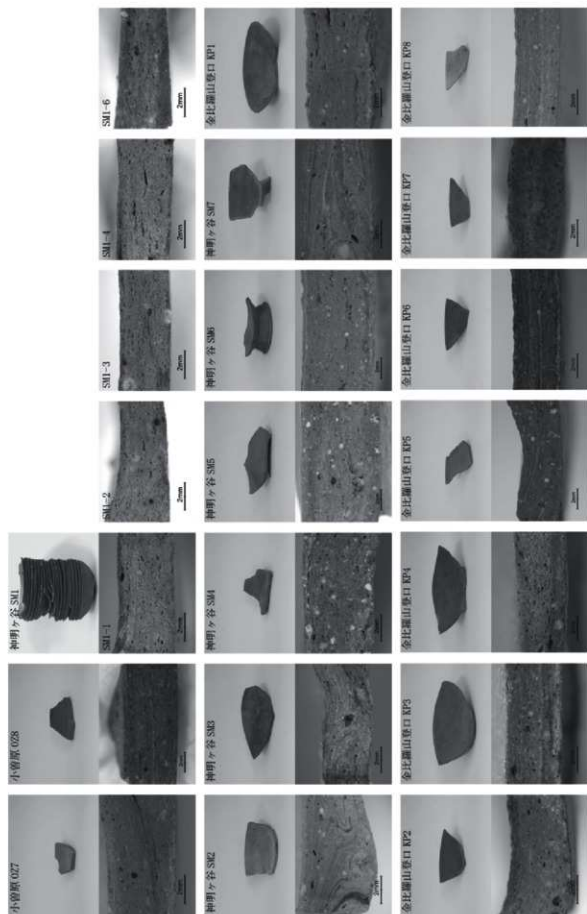
图版 2 分析对象遗物 (2)



図版3 分析対象遺物(3)



图版4 分析对象遗物(4)



図版 5 分析対象遺物 (5)

あとがき

あるべきところに、あるべきものがないのは困る。ないはずのところに、ないはずのものがあるのはさらに困る。山腰遺跡はともかく、大塩向山遺跡については先の両者ともに当てはまるのではないであろうか。立地や表採資料などから須恵器の窯跡についての視点ではその前者に当てはまる。その代りにあったのが、建物がありそうでないところで確認された建物（N地区の掘立柱建物）や、尾根の先端の焼土坑などである。これまでも調査の経過などで述べてきたが、試掘から本調査の間の常時、調査区はどこからか須恵器窯跡がいつどのような状態で発見されるのか不安な状態であった。調査が終了した地区から、開発部局に引渡し、工事が行われるのを見ながらの調査であったが、工事されているなかでは新たな遺跡（須恵器窯跡）は確認されていない。やはり須恵器窯跡は今回の調査区には存在しないのである。今回は須恵器窯跡の調査ではないので、須恵器の時期や編年作業は行っていない。土器の図面と写真の記録に加えて、窯跡の資料と比較した胎土の化学分析など、たんにこの特異な事実報告に追われる作業であった。今後これらの記録を使って、さらなる検討を行うとともに、様々な方々にご利用いただき、武生（ここではあえて）の象徴でもある日野山を取り巻く歴史について、明らかになることを期待して文末とする。



山腰遺跡の調査地

工事が完了した大塩向山遺跡と手前の山腰遺跡

報告書抄録

ふりがな	おおしおむかいやまいせき(かしょう おおしおやまじろあと)・やまこしいせき							
書名	大塩向山遺跡(仮称 王子保山城跡)・山腰遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	福井県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第96集							
編著者名	赤澤徳明							
編集機関	福井県教育庁埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒910-2152 福井県福井市安波賀町4-10 TEL 0776-41-3644							
発行年月日	西暦2007年3月30日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
大塩向山遺跡 (仮称 王子保山城跡)	福井県越前市大塩	18322	15042	35° 51′ 22″ ~ 30″	136° 9′ 49″ ~ 55″	20020408 ~ 20031120	C地区(1,597m ²) G地区(3,006m ²) I地区(1,566m ²) L地区(663m ²) N地区(3,697m ²) O地区(1,597m ²) P地区(401m ²)	日野川地区水道用水供給事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
大塩向山遺跡(仮称 王子保山城跡)	古代の祭祀関連	縄文時代・古代・中近世	掘立柱建物1棟ほか(N地区)・堅穴2棟ほか(G地区)・焼土坑ほか(C・I・P地区)・ピットなど(L・O地区)	供膳具を中心とする須恵器が中心で、内面に煤付着(灯心痕)のものが多く見られる。仏具系の器種が目立つ。		大塩向山遺跡の東側沖積地に山腰遺跡が隣接し、両遺跡ともに古代(8~10世紀)を中心とする。出土する土器も特殊なものが多い。白山信仰に伴う越前五山の日野山を正面に見る山岳祭祀に伴う遺跡と想定される。		
山腰遺跡	古代の集落	縄文時代・古代・中近世	掘立柱建物1棟・溝5条	大塩向山遺跡と同様な器種の須恵器に加え、さらに特異な中型の器種が目立つ。				